



Title	周堤墓の出現に関する考古学的研究
Author(s)	坂口, 隆
Description	平成29年度～令和元年度 科学研究費助成事業 (基盤研究(C)) 研究成果報告書 課題番号17K03201
Issue Date	2020-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76982
Type	research report
File Information	S-T-20200320.pdf



周堤墓の出現に関する考古学的研究

平成29年度～令和元年度 科学研究費助成事業

(基盤研究(C)) 研究成果報告書

課題番号 17K03201

坂口 隆

2020年3月

序文

本報告書は、平成29年度～令和元年度 科学研究費助成事業「周堤墓の出現に関する考古学的研究」（基盤研究(C)）の研究成果報告書である。

1. 研究組織

研究代表者 坂口隆（北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員）

2. 交付決定額（円）

平成29年度	直接経費	800000	間接経費	240000
平成30年度	直接経費	1000000	間接経費	300000
令和元年度	直接経費	1100000	間接経費	330000
	合計	2900000	合計	870000

3. 研究発表

1) 学会誌

坂口隆 2018 「周堤墓形成期の土器研究：北海道中央部を中心とする縄文時代後期中葉後半期～晩期初頭の編年再構築とその意義」『考古学雑誌』100(2)：28-74 頁

2) 口頭発表

Sakaguchi, T., 2018. Regional Sociopolitical Transformations Among Complex Hunter-gatherers: A Macroregional Approach to the Late Jomon of Central Hokkaido. Paper presented at the 83rd Annual Meeting Society for American Archaeology, Washington DC.

Sakaguchi, T., 2019. Evolution of feasting among Jomon societies focused on prestige wooden food-serving technologies. Poster presented at the 84th Annual Meeting Society for American Archaeology, Albuquerque.

4. 謝辞

本研究につきまして、下記の諸氏・機関からは多くのご教示をいただくとともに、資料見学、文献収集につきまして大変お世話になりました（敬称略・五十音順）。特に、第Ⅰ・Ⅱ章における土器研究につきましては、小林圭一・中村大・中門亮太氏から多くのご教示をいただきました。末筆ながら御礼申し上げます。赤石慎三、阿部明義、乾芳宏、石神敏、岩波連、上屋真一、小川直章、加藤博文、金子昭彦、木村英明、倉橋直孝、小杉康、斉藤大朋、坂本尚史、佐藤剛、澤田憲且、澤村寛、菅原直、鈴木将太、鈴木琢也、高倉純、高瀬克典、田口尚、高橋理、高橋龍三郎、長町章弘、長谷山隆博、平河内毅、平原信崇、藤井浩、藤原秀樹、松田功、村本周三、山戸大知、和田由希絵、芦別市教育委員会、足寄動物

化石博物館、恵庭市教育委員会、小樽市教育委員会、小樽市総合博物館運河館、札幌大学埋蔵文化財展示室、斜里町立知床博物館、新ひだか町静内郷土館、千歳市埋蔵文化財センター、手稲記念館、苫小牧市美術博物館、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、北海道大学北方文化論講座、北海道博物館、北海道埋蔵文化財センター、山形県埋蔵文化財センター、由仁町教育委員会、よいち水産博物館

序	3
第Ⅰ章 周堤墓形成期の土器研究:北海道中央部を中心とする縄文時代後期中葉後半期～ 晩期初頭の編年再構築とその意義.....	5
1. 序	5
2. 北海道中央部における縄文時代後期中葉終末期.....	6
(1) 忍路土場遺跡Ⅳ層～Ⅱb層出土品の概要	6
(2) 北海道中央部における縄文時代後期中葉後半期編年の再構築.....	9
3. 堂林式	14
(1) 堂林1式	15
(2) 堂林2式	16
(3) 堂林3式	17
(4) 堂林式編年に関する先行研究との対比.....	18
4. 瘤付土器第Ⅲ段階並行期.....	19
(1) 当該期の一括資料とその特徴.....	19
(2) 瘤付土器第Ⅲ段階並行期の堂林式深鉢.....	21
(3) 遺跡による文様・構図に関する変異.....	22
5. 瘤付土器第Ⅳ段階並行期.....	23
(1) 当該期の一括資料とその特徴.....	23
(2) 瘤付土器第Ⅳ段階並行期の組成と特徴.....	25
(3) 先行研究との編年対比と遺跡による文様・構図に関する変異.....	26
6. 大洞B式並行期.....	26
(1) 当該期の一括資料とその特徴.....	26
(2) 先行研究との編年対比と遺跡による文様・構図に関する変異.....	28
7. 編年に関する諸説と検討.....	28
(1) 三ツ谷式	29
(2) 御殿山式	30
(3) 美々4式.....	31
(4) 柏原Ⅰ～Ⅳ式.....	32
(5) 東三川Ⅰ式.....	32
8. 結語	33
第Ⅱ章 周堤墓形成期の墓と副葬・供献品の編年と変遷.....	37
1. 前章の補遺	37
(1) 土器の副葬・供献品から時期比定できる墓.....	37
(2) 土器文様を転移した細形石棒から時期比定できる墓の事例.....	40
2. 墓と副葬・供献品の編年と変遷.....	41
(1) 土坑墓の形状.....	41

(2) 墓標の位置.....	43
(3) 副葬・供献品の変遷と組成.....	45
(4) 小結	47
第Ⅲ章 周堤墓の編年と墓域形成過程.....	49
第Ⅳ章 周堤墓形成期の地域集団の動態.....	55
1. 縄文時代後期中葉.....	55
(1) 石狩低地帯.....	55
(2) 余市湾周囲.....	57
(3) 石狩川上流域.....	59
2. 縄文時代後期後葉.....	60
(1) 石狩低地帯.....	60
(2) 石狩川上流域（空知川流域）	64
(3) 余市湾周囲.....	65
3. 小結	65
第Ⅴ章 周堤墓形成期の居住集団の動態.....	67
1. 分析方法	67
2. 結果	68
3. 考察	69
(1) 縄文時代後期中葉の集落と居住集団.....	69
(2) 縄文時代後期後葉の集落と居住集団.....	71
4. 結語	72
第Ⅵ章 周堤墓の出現に関する総合的考察.....	73
1. 縄文時代中葉の社会的複雑性.....	73
2. 縄文時代後期後葉の社会的複雑性.....	74
引用文献	77
図表	87

序

筆者は、これまで環太平洋地域における定住的狩猟採集民の研究に従事してきた（坂口 2003、2018）。その一環として日本列島に関しては、縄文時代を中心とした先史時代の狩猟採集民研究に取り組んでいる（坂口 2003）。特に、ここ数年来、北海道縄文時代後期に造成された周堤墓の出現に関する研究に着手している。周堤墓（環状土籬とも呼称される）とは、墓域を掘削し、その土を周囲に周堤状に盛った墓である。その最大のものは外径で約 75m、周堤の高さ 5.4m ある。こうした墓を造成するためには多大な労働力を必要とするため、なぜこうした墓が縄文時代に出現したのかという問題は縄文時代研究の中でも最も重要な研究課題である。

周堤墓の出現に関する諸説は、①定住と領域性の高まりによるもの（瀬川 1980）、②環境の冷涼化を契機とする生産性の低下と集団内・集団間の矛盾の激化によるもの（瀬川 1980）、③生業の変化に伴う労働形態の協同化と集約化によるもの（大谷 1978、1983、2010）、④抜歯の解釈にもとづく二分原理（身内・よそ者）説（春成 1983）などがある。

①の定住と領域性は、縄文時代後期以前から始まっていたので、学説として成立しがたい。②の縄文時代後期後葉の環境の冷涼化を示す確たる証拠はない。また、集団内・集団間の矛盾の激化といっても具体的にどういうことなのか不明瞭である。③生業の変化に伴う労働形態の協同化と集約化についても、周堤墓がなぜ縄文時代後期後葉に出現するのかを説明するのは困難であろう。④の春成説は、本州における二分原理説を北海道に応用したものである。しかし、周堤墓は北海道で出現して、本州で出現しないのはなぜかという根本的な疑問が残る。むしろ北海道には、本州とは異なる周堤墓が出現する社会的情勢があったとみるべきであろう。縄文時代後期後葉の北海道中央部は、周堤墓の出現に示唆されるように、社会・経済、文化が大きく変動する時期である。周堤墓遺跡以外にも縄文時代後期後葉の集落遺跡に関するデータが増えつつある今日、従来の概念的な周堤墓の出現に関する諸説は再検討されるべきである。

先行研究にて周堤墓内、及び周堤墓外から検出された土坑墓群を通して、北海道縄文時代後期の社会的階層化について検討するとともに、周堤墓の出現が集落・墓地遺跡の時空間的变化にみられる地域集団の動態と関連していたのではないかという見通しを得ていた（Sakaguchi 2011）。この研究は、当該期の社会階層化の分析に重点がおかれていたため、周堤墓の出現については次の研究課題として残されることとなった。当研究以降、本研究の構想を練るとともに、周堤墓の出現に関する諸説を批判的に検討しながらその理論と方法について模索してきた（坂口 2014）。本研究は、先行研究を踏まえ、周堤墓の出現を縄文時代後期中葉から後葉における地域集団の動態から解明することにある。そのために、研究課題 1）地域集団の動態に関する分析、研究課題 2）居住集団の動態に関する分析、研究課題 3）墓制の変化に関する分析を設定し、これらの統合的分析から周堤墓の出現する要因について解明を試みた。

本研究における地域集団の動態に関する分析とは、北海道中央部を中心とした広域における集落遺跡、墓地遺跡の時空間的な動態を詳細に調べることで、周堤墓の出現する背景となる縄文時代後期の地域集団の動態について検討することにある。一方、居住集団の動態に関する分析とは、住居跡の面積から居住人口を積算し、同時期に所在した住居跡軒数から集落跡における集団の規模や人口動態を追究することである。地域集団の動態に関する分析が遺跡間で広域的であるのに対し、居住集団の動態に関する分析は遺跡内における住居跡単位の居住集団の規模や、人口動態に主眼を置いている。

また、本研究における墓制の変化に関する分析とは、各地域の在来の墓制が周堤墓の普及する縄文時代後期後葉にどのように変容していくかを調査することにある。人類学的に墓制は保守的であることから最も変わりにくいものとされる。そのため、当該期の墓制の変化は、地域間の社会的インターアクションによるものとみることでもある。本研究では、墓制の変化を地域間のインターアクションの頻度を測る指標として用いることで、地域間における墓制の伝播現象、あるいは、それに伴う墓制の変容から地域間のインターアクションを検討する。これらの分析を統合することで、縄文時代後期中葉から後葉にかけての周堤墓出現の背景にある地域集団の動態が解明されることが考えられる。

研究課題 1) ～ 3) を進めるためには、土器編年が確立していることが前提となる。遺跡から検出された住居跡、墓の精度の高い時期比定が研究課題 1) ～ 3) の基礎となるからである。しかしながら、北海道中央部における縄文後期後葉から晩期前葉の編年については、諸説があり、統一されていないのが現況である。これらの分析を実施するためには、北海道中央部を中心とする土器編年の精度を高める必要があり、第 I 章にて新たな当該期の編年について提示した。

既述の通り、周堤墓の出現に関する研究は、これまでその特異な墓制に注目、あるいは、個別の要因（環境悪化説、二分原理説など）に求めてきた。しかしながら、これらの説と考古学的データの乖離は大きい。地域集団の動態、居住集団の動態、及び墓制の変化に関する分析を統合することで、周堤墓の出現する要因について解明を試みるのは本研究が初めてである。周堤墓の出現を通じた人類史における社会の進化に関する理解を深化させることで、本研究は人類学界、考古学界の発展に寄与することとなる。

第 I 章 周堤墓形成期の土器研究：北海道中央部を中心とする縄文時代後期中葉後半期～ 晩期初頭の編年再構築とその意義

1. 序

周堤墓とは、墓域を掘削し、その土を周囲に周堤状に盛った墓である。その最大のキウス周堤墓群 2 号は、外径で約 75m、周堤の高さは 5.4m ある。こうした墓を造成するためには多大な労働力を必要とするため、周堤墓の出現とその形成過程は、縄文社会の進化を検討するうえで最も重要な研究課題である。著者は、現在、周堤墓の出現を縄文時代後期中葉から後葉における地域集団の動態から解明するために下記の研究に取り組んでいる。① 地域集団の動態に関する分析、② 居住集団の動態に関する分析である。地域集団の動態に関する分析は、北海道中央部（道央）を中心とした広域における集落遺跡、墓地遺跡の時空間的な動態を詳細に調べることで、周堤墓の出現する背景となる縄文時代後期の地域集団の動態について検討することにある。一方、居住集団の動態に関する分析は、住居跡の面積から居住人口を積算し、同時期に所在した住居跡軒数から集落跡における集団の規模や人口動態を追究することである。これらの分析を進めるためには、精度の高い土器編年が確立していることが必須であり、本稿はそのための基礎的研究である。周堤墓が形成された縄文時代後期後葉の土器編年については、堂林式→三ツ谷式→御殿山式という大枠が定着している（森田 1981）。ただし、それぞれの土器型式が意味しているところは、後述するように研究者により異なる。近年の縄文時代後期中葉から晩期初頭の北海道中央部における土器編年も諸説があり（阿部 2008, 土肥 2001）、錯綜した状況にある。前稿（坂口 2014）では、キウス周堤墓群の出現と遺跡形成過程に関連して、北海道中央部における当該期の編年について概略したが、本稿は、前稿を改訂・詳述することで、その編年再構築を意図するものである。

土器の編年学的研究方法には、層位的分析と型式学的分析がある。北海道中央部では、当該期の層位的分析を一貫して実施できる資料には恵まれていない。ただし、縄文時代後期中葉後半期に関しては、忍路土場遺跡の層位的資料が編年構築に有効である。一方、縄文時代後期後葉～晩期初頭は、層位的資料が欠如するが、型式学的分析に有効である墓坑出土の一括資料が豊富である。こうした北海道中央部における資料の蓄積状況を踏まえ、本稿では、縄文時代後期中葉後半期に関しては忍路土場遺跡の層位的資料、縄文時代後期後葉後半期～晩期初頭については墓坑出土の一括資料を中心に分析することとした。

本稿では、当該期に並行するより精度の高い編年が確立されつつある東北地方の十腰内式、瘤付土器、亀ヶ岡式の編年と対比しながら北海道中央部の編年を再構築していくという方法を採用する。特に、瘤付土器、亀ヶ岡式は、日本列島の広域にわたり分布するので、北海道中央部のみならず、広域編年を確立するうえで要となる。本稿の主要な分析対象とする北海道中央部も、後述する通り、縄文時代後期後葉後半期～晩期初頭には在来土器に瘤付土器や亀ヶ岡式の特徴（器形・文様・手法）が顕著に現れる。北海道中央部におい

でも在地の土器と瘤付土器、亀ヶ岡式との共伴関係やその製作手法の受容過程に関する分析が編年再構築を進めるうえで重要な位置を占める。そのため、本稿では、北海道中央部における縄文時代後期後葉後半期～晩期初頭の編年については、瘤付土器と亀ヶ岡式の型式名を「並行期」として採用する。

本稿で縄文時代後期中葉から晩期初頭の編年について検討するのは、周堤墓出現前夜、及び衰退期の地域集団の動態も考慮しているためである。本稿は、前半で当該期の編年について提示し、後半はこれまでの諸説を批判的に検討することで、研究史を整理する。なお、本稿では、北海道中央部の編年を中心に考究するが、北海道北部（道北）・東部（道東）・南部（道南）の関連する遺跡出土品についても合わせて検討する。本稿に関連する北海道内の遺跡の位置を第 I-1 図に示す。

2. 北海道中央部における縄文時代後期中葉終末期

周堤墓の出現は、従来、縄文時代後期後葉の堂林式期と考えられてきたが、キウス 4 遺跡の発掘調査成果を総括する中で「周堤墓を含めたキウス 4 遺跡の遺構群は「鯨潤式新（末）段階」の土器が使用される時期から造営され」という所見が示された⁽¹⁾（北海道埋蔵文化財センター 2003b : 93）。鯨潤式は、縄文時代後期中葉終末期に位置づけられるので、周堤墓の出現期はいつなのか、という問題が改めて浮上してくる。こうした問題を解明するためにも、北海道中央部における縄文時代後期中葉後半期～後期後葉の編年が整理される必要がある。キウス 4 遺跡は縄文時代後期後葉を主体とし、後期中葉に関してはマイナーな遺跡なので、後期中葉の資料が充実している忍路土場遺跡出土品や末広遺跡出土品の検討が必要になる。特に、忍路土場遺跡の発掘調査では、C 地区の旧河道、及び斜面の堆積層 IV 層～II b 層にかけての層位的資料をもとに縄文時代後期中葉から後葉への編年案が示された（第 I-2a・b 図）。当層位的資料は、北日本における縄文時代後期中葉後半期における土器編年の基礎となるものであり、本資料の検討が必要となる（ただし、III b 層出土品は極少量のため検討対象外とする）。後述する通り、忍路土場遺跡の編年案は、同遺跡の層位的資料から本来、再検討されるべき既存の論説に依拠した点に禍根を残す。そのため、本稿では、土器編年の基礎となる調査の 1 次データである層位を優先して下位から上位の順序で出土品の検討を進める。第 I-2a・b 図の編年案に関する資料のほとんどは C 地区出土品であるが、A・D 地区出土品も一部含まれる。図中のローマ数字は出土層位を示す。なお、「2nd」は III c 層最上面の生活面、「3rd」は IV 層中の生活面とされ（北海道埋蔵文化財センター 1989a : 72・1989c : 306-308）、忍路土場遺跡報告書では IV 層～II b 層の層位とは区別された土器の実測図が掲載されている。

（1）忍路土場遺跡 IV 層～II b 層出土品の概要

IV 層出土品

IV 層出土品は少量の船泊上層式などが混在して出土しているが、手稲式主体である。船

泊上層式の痕跡を残す小波状口縁や頸部に無文帯を配置するもの、及び口縁部無文帯が幅狭い深鉢は後述する手稻式古段階の特徴を有するが（第 2b 図 28・30・32）、新しい特徴である大波状口縁や口縁部無文帯が幅広な深鉢が主体を占める（第 I-2b 図 14・15・21・22）。特に、筒状底部で胴部から口縁部にかけて朝顔状に大きく開く大波状口縁深鉢が特徴的で、波頂、あるいは波頂間に刻目のない孤状隆帯を施すものもある（第 I-2b 図 14・15）。小波状口縁は衰退する一方、大波状口縁が発達するので、それに伴い波状口縁の単位は 4 単位ないし 5 単位が一般的となる。大波状口縁で幅広な口縁部無文帯を作出することで装飾的な孤状隆帯の配置が可能になったとみられる。筒状底部は無文帯と縄文帯から構成されるものがある（第 I-2b 図 15）。肩部で屈曲する有文深鉢の文様帯は、口縁部無文帯、胴部文様帯から構成され、胴部文様帯には平行沈線文、磨消文様の横「S」字文などが施される（第 I-2b 図 14・15）。深鉢と同様に肩部で屈曲する有文の鉢も口縁部無文帯、胴部文様帯から構成される（第 I-2b 図 29）。注口土器は 3 段造りで、胴部に彫刻的な手法で文様を施し、口縁と頸部、頸部と胴部、及び胴部と底部の境に太く深めの沈線を施すので器面に凹凸があるのが特徴である（第 I-2b 図 44）。注口は長く、太めで基部を突出させるものが多い。

3rd 出土品

3rd 出土品は、IV層出土の手稻式と下記の点に共通点を有する。①筒状底部で口縁部無文帯が幅広な大波状口縁深鉢が特徴的である（第 I-2b 図 1・4・5・10・23）。装飾的な孤状隆帯を口縁に配置する点や、無文帯と縄文帯から構成される筒状底部（第 I-2b 図 5）もIV層出土品（第 I-2b 図 15）と類似する。有文深鉢の胴部文様帯には平行沈線文、磨消文様の横「J」字文などが施される。無文（地文縄文のみのもの含む）の深鉢も口縁部無文帯が幅広で、その中には胴部から底部にかけすばまる形態のものもみられる（第 I-2b 図 3）。②鉢・浅鉢（台付鉢・浅鉢含む）も口縁部無文帯が幅広な点は、深鉢と同様である（第 I-2b 図 7・25）。③3 段造りの注口土器（第 I-2b 図 9）はIV層出土品（第 I-2b 図 27・44）と類似する。3rd 出土品は、第 I-2b 図 2 など一部、手稻式古段階の特徴を有する資料が含まれているが、IV層出土品よりも後述する手稻式中段階のまとまりが看取される資料である。ただし、磨消文様を施文する有文土器が増える傾向が看取されるので、IV層出土品よりも新相を呈しているとみられる。

III d 層出土品

III d 層出土品は、IV層・3rd 出土品の器形や文様を継承するが、下記に新しい傾向が看取される。①器種を越えて口端、肩部などに刻目が施されるようになり（第 I-2a 図 74・80・82・88・89・95・96）、文様を刻目列で縁取りするものが現れる（第 I-2a 図 83）。②肩部で屈曲し、口縁が外反する 2 段作りの深鉢が出土している（北海道埋蔵文化財センター1989b：図VI-63394）。③波状口縁先端が尖る大波状口縁深鉢（北海道埋蔵文化財センター1989b：図VI-63-393）が現われ、弧状隆帯にも刻目が施されている。④広口壺の口縁に縄文帯と無文帯を配置するものが出現する（第 I-2a 図 77・78）。⑤磨消文様が増える傾向があり、「J」字文の短部が横伸びしたとみられる幅広なクランク文が器種を超えて盛行し始める（第

I-2a 図 73・74・78・81・82・89)。⑥深鉢，及び鉢口縁に大形突起が出現する（第 I-2a 図 85）。⑦羽状縄文が出現する（北海道埋蔵文化財センター1989b：図VI-65-404，図VI-67-417）。

その一方で，磨消文様は器種を越えて，ネガ・ポジ文様（高橋 1981）の境を太く陰刻するとともに，ネガ文様を削りポジ文様をレリーフ状に浮かび上がらせる古い手法が看取される（第 I-2a 図 74・78・81・82・83・95）

Ⅲc 層出土品

Ⅲc 層出土品は，Ⅲd 層出土品と類似する内容であるが，下記のような新しい傾向が看取される。①肩部で屈曲し口縁が外反する 2 段造りの深鉢が増える兆候があり（第 I-2a 図 57・76・87），口縁部の文様帯（Ⅱa 文様帯⁽²⁾）に文様を施すものが現れる（北海道埋蔵文化財センター 1989b：図VI-52-311）。②刻目施文は 1 列が主であるが，2 列の刻目が出現する（第 I-2a 図 65，北海道埋蔵文化財センター1989b：図VI-51-307）。③筒状底部の縄文帯に縄文が施されず，沈線だけ痕跡として残るものが現れる（第 I-2a 図 56）。④口縁に突起を付けるものが増える兆候がみられ，深鉢の大波状口縁の中には先端部に突起を付けるもの（北海道埋蔵文化財センター 1989b：図VI-48-283），あるいは先端部が突起化するもの（第 I-2a 図 49）も現れる。⑤羽状縄文が施されたものが増加する（第 I-2a 図 51）。⑥下部単孔土器に瘤，異形土器に瘤状突起が出現する（第 I-2a 図 69・71）

2nd 出土品

2nd 出土品は，Ⅲc 層最上面の生活面出土資料のため，その上位のⅢa 層出土品に近似する様相を呈する。ただし，Ⅲc 層出土品に近似する資料（北海道埋蔵文化財センター1989b：図VI-39-232）も含まれ，混在している可能性がある。Ⅲc 層出土品から 2nd 層出土品への変化には，下記の点が特記される。①第 I-2a 図 63 などを除くと，大波状口縁深鉢が衰退する傾向が看取される。②波状口縁深鉢の波頂に付す孤状隆帯は出土していない。代わりに，深鉢，及び鉢の口縁に大形突起が普及する（第 I-2a 図 47・64）。③口縁部に無文帯を形成する深鉢，鉢の減少が顕著となる。④磨消文様を刻目列で縁取りする手法（北海道埋蔵文化財センター1989b：図VI-41-242・247）や渦状の磨消文様など新しい文様が現れる（北海道埋蔵文化財センター 1989b：図VI-41-241・246，図VI-42-249・251）。また，波状口縁部に三角形の磨り消しを施す装飾手法が現れる（第 I-2a 図 63）。類似する手法はⅢa 層出土品にみられる（北海道埋蔵文化財センター1989b：図VI-34-200・203）。

Ⅲa 層出土品

Ⅲa 層出土品は，十腰内 3 式（小林 2015）に対比され，下記の点に大きな変化が看取される。①筒状底部で頸部から朝顔状に開く 3 段造りの深鉢が激減する。それと相関するよう，Ⅲc 層～Ⅳ層で出土していた無文帯と縄文帯から構成される筒状底部の深鉢（第 I-2a 図 75，第 I-2b 図 5・15 など）が消滅する。一方，肩部で屈曲する 2 段造りの深鉢が主流となり，頸部に幅狭な無文帯を有するものが出現する（第 I-2a 図 33）。②口端，頸部に施される刻目は太めで，2 列以上の刻目列がやや増える（第 I-2a 図 34・38）。③深鉢，浅鉢，台付浅鉢で磨消文様の幅広なクランク文，帯状文が多用される（第 I-2a 図 30・38～41）。

また、襷掛け状文（第 I-2a 図 37）が出現する。その一方で、縦位の弧状文や「S」字文を加えた平行沈線文の衰退がみられる。④浅鉢の高台が発達し、高坏状の器形が出現する（第 I-2a 図 42）。⑤Ⅳ・Ⅲd・Ⅲc 層でみられた底部に磨消文様による連弧文を施した鉢（第 I-2b 図 16・25, 第 I-2a 図 65・70）が消滅する。⑥Ⅲd・Ⅲc 層で出土していた口縁部が縄文帯、無文帯から構成される広口壺（第 I-2a 図 51・78）がほぼ消滅するとみられる。⑦口縁部に無文帯を形成する深鉢、鉢が激減する。⑧少数ながら、口縁部の突起に刺突を施すものが現れる（第 I-2a 図 38・39）。

Ⅱb' 層出土品

Ⅱb' 層出土品は、鯰澗式、鯰澗式から堂林式への過渡的資料（第 I-2a 図 19・21）、及び後述する堂林式 1 式～2 式の資料（第 I-2a 図 11・13）が含まれ、複数の土器型式が混在している状況である。本層出土品には堂林式の生成と関連して注目される深鉢がある。ツメ状で 2 列の細い刻目が施された深鉢（第 I-2a 図 19・21）である。特に、第 I-2a 図 21 の文様帯は、堂林式深鉢の特徴である I・Ⅱa・Ⅱの 3 帯構成で、堂林式への過渡的様相を呈する。

Ⅱb 層出土品

Ⅱb 層出土品もⅢa 層出土品に近似する資料（第 I-2a 図 18・23～29）と堂林 1 式～2 式に相当する資料（第 I-2a 図 10・12・15～17）が含まれ、Ⅱb' 層と同様に混在している状況である。

（2）北海道中央部における縄文時代後期中葉後半期編年の再構築

鷹野光行による編年案の再検討

忍路土場遺跡の層位的資料により、各層準には前後する土器型式の混在が認められるものの、縄文時代後期中葉から後葉への土器の詳細な変遷を追うことが可能となり、Ⅲ期～Ⅺ期の編年案が示された（第 I-2a・b 図）。Ⅳ層・3rd 出土品をもとにⅢ期（手稲 A 式）、Ⅳ期（手稲 B 式）、Ⅴ期（手稲 C 式）、Ⅲd 層出土品をもとにⅥ期（鯰澗 A 式）、Ⅲc 層出土品をもとにⅦ期（鯰澗 B 式）、Ⅲa 層～Ⅱb' 層出土品をもとにⅧ期（忍路 A 式）、Ⅸ期（忍路 B 式）が設定された。Ⅷ期（忍路 A 式）、及びⅨ期（忍路 B 式）は、エリモ B 式（鷹野 1978・1981）に相当するとされる（北海道埋蔵文化財センター1989b：213）。

手稲式と鯰澗式の細分が示されたのは画期的であるが、この編年案の大枠は、本来、再検討されるべき下記の論説に依拠している。論説 A：刻目列と羽状縄文施文の有無を重視し、平行沈線文に刻目列と羽状縄文を併用されないものを手稲式、併用されるものを鯰澗式とする（鷹野 1978・1981）。論説 B：突瘤施文を鯰澗式とエリモ B 式を分離する根拠とし、鯰澗式とエリモ B 式を前後する土器型式とする（鷹野 1978・1981・1982）。しかしながら、これらの論説には層位的資料や一括資料による裏付けがなく、確固たる論拠があるようにはみえない。そのため、縄文時代後期中葉編年に関する標本図の大幅な改訂がなされたり（第 I-3a・b 図）、北・東日本における後期中葉編年の根幹にかかわる広域編年の並行関係が変

更されたとみられる（鷹野 1982）。むしろ忍路土場遺跡の層位的資料を基礎に据え、上記した論説 A・B こそ再検討されるべきである。

上述の北・東日本における縄文時代後期中葉終末期前後の並行関係の変更は、北海道中央部における後期中葉編年再構築の手掛かりになる。当初、北・東日本における縄文時代後期中葉終末期前後の並行関係は、船泊上層式・手稲式—加曽利 B1 式、鯺潤式—十腰内遺跡Ⅲ群—加曽利 B2 式、エリモ B 式—十腰内遺跡Ⅳ群—加曽利 B3 式—曾谷式とされていた（鷹野 1978）。その後、手稲式は加曽利 B2 式並行、鯺潤式は加曽利 B3 式並行と変更された（鷹野 1982）。変更の理由は、オクシベツ川遺跡出土の手稲式深鉢（第 I-3b 図 2）は加曽利 B2 式に対比されるので、後続する鯺潤式は加曽利 B3 式並行に繰り下げられた。また、鯺潤式とエリモ B 式を前後する時期とするため、鯺潤式が加曽利 B3 式並行に繰り下げられたことでエリモ B 式も曾谷式以降に並行すると変更された（鷹野 1982）。

変更の理由となったオクシベツ川遺跡出土の手稲式深鉢（第 I-3b 図 2）が、上述した論説 A の手稲式と鯺潤式を判別する同定基準を再検討するうえで鍵となる。この深鉢が加曽利 B2 式に対比されたのは、その 5 単位の大波状口縁と胴部の文様施文位置からである（鷹野 1982）。これに類似する資料は、忍路土場遺跡Ⅲd 層出土品（北海道埋蔵文化財センター 1989b：図 VI-63-386）、及びⅢc 層出土品（第 I-2a 図 75・93）である。これらの資料は、平行沈線文に刻目列を伴う点、及び器形、波状口縁の形態や波頂単位数が若干、異なる点を除きオクシベツ川遺跡出土品に類似する。

上述した論説 A の刻目列と羽状縄文施文の有無を重視し、平行沈線文に刻目列、あるいは羽状縄文の併用有無を手稲式と鯺潤式を判別する基準（鷹野 1978・1981）を採用すると、これらの資料は鯺潤式になる（そのため、忍路土場遺跡編年案では第 I-2a 図 75・93 は「鯺潤 A 式」に位置づけられている）。しかしながら、これらの資料を加曽利 B3 式に対比するのは無理があろう。手稲式と鯺潤式を判別する基準と鯺潤式—加曽利 B3 式並行説は齟齬することになる。年代的組織のある地域編年（該期では加曽利 B 式）をもとに他地域の土器型式を対比しながら編年網を整備していくという方法が学史的に広域編年構築の基礎であることから、忍路土場遺跡Ⅲd・Ⅲc 層出土品は、加曽利 B2 式並行、すなわち手稲式の範疇で理解され、論説 A の手稲式と鯺潤式を判別する同定基準は見直されるべきであろう。

既述の通り、忍路土場遺跡Ⅲd 層出土品は、①5 単位の朝顔形大波状口縁深鉢が盛行するとともに、波頂に孤状隆帯を付すものも盛行していたとみられる（北海道埋蔵文化財センター 1989b：図 VI-63-393）。また、孤状隆帯を付す大形破片がⅢd 層から出土していることもこのことを傍証する（北海道埋蔵文化財センター 1989b：図 VI-107-791・793、図 VI-108-794～797）。②平行沈線文に縦位の孤状文を加えた文様が盛行している（北海道埋蔵文化財センター 1989b：図 VI-63-386、図 VI-68-425・426、図 VI-69-427）。③口縁に縄文帯と無文帯を配置する広口壺が出土している（第 I-2a 図 77・78）。④口縁部無文帯が幅広な鉢が安定して組成している（第 I-2a 図 88・95）。⑤太い沈線でネガ・ポジ文様を区画し、ネガ文様を削りポジ文様をレリーフ状に浮き上がらせる手法が用いられている（第 I-2a 図 95、北海

道埋蔵文化財センター1989b：図VI-64-398)。総じて、これら①～⑤は、手稲遺跡出土の手稲式の特徴である。

手稲遺跡出土品は、少量の船泊上層式（大場・石川 1956：図 10）、鯰澗式（第 I-3a 図 30）、幣舞式（大場・石川 1956：図 16 右端の注口土器）が出土しているが、手稲式のまとまった資料である⁽³⁾。忍路土場遺跡Ⅲc 層出土品もⅢd 層出土品と同様に上述した①～⑤の特徴を有することから、手稲式の範疇で理解されるべきであろう。

忍路土場遺跡では平行沈線文に刻目列を伴う土器はⅢd 層～Ⅲa 層（Ⅲb 層除く）まで連続と出土している（第 I-2a 図 31・61・75・93, 北海道埋蔵文化財センター1989b：図VI-68-425・426, 図VI-69-427, 図VI-53-320, 図VI-46-278, 図VI-38-222, 図VI-26-130, 図VI-25-125, 図VI-24-121）。羽状縄文を施す土器も同様にⅢd 層～Ⅱb 層（Ⅲb 層除く）まで出土している。刻目・羽状縄文施文は、手稲式から鯰澗式への型式変化の方向性を理解するうえでは重要であるが、Ⅲd 層～Ⅲa 層、あるいはⅡb 層までは複数の土器型式に渡することは明らかなので、厳密な土器型式の判定に用いるのは困難であろう。上述した論説 A の手稲式と鯰澗式を判別する同定基準は、手稲遺跡出土の弧状隆帯に刻目が施された深鉢（大場・石川 1956：図 25・26）や注口土器（大場・石川 1956：図 28 の上端 2 点）が等閑に付された結果生じたものであろう。

また、論説 A を再検討するうえで参考になるのが手稲式に並行する十腰内 2 式である。十腰内 2 式の新しい段階に位置づけられる青森県丹後平遺跡 8 号住居跡床面出土の鉢、及び深鉢（八戸市教育委員会 1988b：図 25-7, 図 30-2）、田面木平(1)遺跡 55 号住居跡床面出土深鉢（八戸市教育委員会 1988a：図 94-3）には平行沈線文に伴い刻目列が施されているので、手稲式にも平行沈線文と刻目列施文を伴う段階があるとみるのが妥当であろう。

手稲式・鯰澗式の再編

近年の蓄積された手稲式の資料を踏まえると、その階梯は、ユカンボシ E3 遺跡 B 地点 3 号堅穴住居跡出土品（古段階）→忍路土場遺跡 3rd 出土品（中段階）→忍路土場遺跡Ⅲd 層出土品（新段階古相）→忍路土場遺跡Ⅲc 層出土品（新段階新相）という変遷が指摘される。ユカンボシ E3 遺跡 B 地点 3 号堅穴住居跡出土品（第 I-4 図）は、住居跡中央の半径 4m ほどの範囲からまとまって出土し、しかも第 I-4 図の 3～6 は集中するとともに、4 の一部は 2 と集中して検出された一括性の高い資料である（恵庭市教育委員会 1992）。その特徴は、①深鉢は胴部がやや丸みを帯び、短めの口縁は強く外反する器形で口縁部無文帯は幅狭である（第 I-4 図 1・2）。第 I-4 図 1 の小波状口縁は 6 単位、第 I-4 図 2 の小波状口縁は 7 単位で、単位数はやや多い傾向が看取される。②胴部の幅広なⅡ文様帯には、磨消文様で「S」字文や、楕円状の文様が施される点にある（第 I-4 図 1・2）。器形、文様ともに先行型式の痕跡がうかがえ、手稲式の古段階に位置づけられる。

このような手稲式の古段階の特徴を有する資料は、神居古潭 7 遺跡一括 No. 1 出土品などが該当する。神居古潭 7 遺跡は、該期の代表的な遺跡で、遺物包含層から縄文時代早期～晩期の資料が出土しているが、主体となるのは手稲式の古段階である。特に、1991・1992・

1994 年度調査出土品は該期のまとまりが看取される好資料である（旭川市教育委員会 1992・1993・1995）。その中でも 1994 年度調査の一括 No. 1 出土品は、E7 グリッド出土で定期的なまとまりが高い資料とみられる（旭川市教育委員会 1995：図 27-2, 図 34-2, 図 37-6, 図 38-1, 図 39-1）。その特徴は、有文・無文の深鉢（旭川市教育委員会 1995：図 27-2, 図 34-2）にかかわらず口縁部無文帯が幅狭な点や、短めの口縁が外反する深鉢の器形（旭川市教育委員会 1995：図 39-1）にあり、ユカンボシ E3 遺跡 B 地点 3 号堅穴住居跡出土品と共通点を有する。

これら手稲式古段階に後続するのが忍路土場遺跡出土品であり、3rd 出土品→Ⅲd 層出土品→Ⅲc 層出土品という階梯で鯔澗式への変遷が理解される（既述の通り、Ⅳ層出土品の主体となる手稲式は、3rd 出土品と近似する内容であり、Ⅳ層・3rd 出土品をもとに手稲式の細分を提示するのは困難であろう）。Ⅳ層～Ⅲa 層にかけて、上層にいくにつれ漸移的に平行沈線文よりも磨消文様が増える傾向が看取されることから、手稲式から鯔澗式への変遷は、器形の変化とともに平行沈線文から磨消文様に文様装飾の重点が移ることにあると大筋理解される。上述した手稲式古段階、中段階、新段階は、各段階が手稲式における 1 階梯を占めるので、それぞれを手稲 1 式、手稲 2 式、手稲 3 式とすることを提唱したい。手稲 1 式は先行型式の特徴を継承する段階、手稲 2 式は手稲式として発達する段階、手稲 3 式は鯔澗式への移行期として位置づけられる。既述の通り、忍路土場遺跡Ⅲc 層出土品は、Ⅲd 層出土品と比べ、新しい特徴を有する資料が含まれるので、Ⅲd 層出土品を手稲 3 式古相、Ⅲc 層出土品を手稲 3 式新相として理解したい。

鯔澗式が提唱された標識資料（名取・松下 1969：図 3）は、帯状文幅が厚めであることと、口端・頸部の刻目が 1 列で太めであることから、忍路土場遺跡のⅢa 層出土品に対比可能な資料とみられる。鯔澗遺跡の標識資料は断片的であることから、忍路土場遺跡Ⅲa 層出土品を鯔澗式の標識資料に位置づけたい⁽⁴⁾。Ⅲa 層出土の深鉢は、①肩部で屈曲する堂林式深鉢の文様帯の特徴であるⅠ・Ⅱa・Ⅱの 3 帯構成を取るものがないこと、②肩部で屈曲する深鉢は頸部に無文帯を設けるものは少数であること、③深鉢口端、頸部に施される刻目は 1 列で太めのものが多用されること、④深鉢、浅鉢、台付浅鉢で磨消文様の幅広なクラク文、帯状文が多用されることから、堂林式とはヒアタスがあり、鯔澗式でも古い段階に位置づけられる。

鯔澗式の新しい段階、すなわち堂林式への過渡的資料には、千歳川流域の末広遺跡 52 号堅穴住居跡床面出土品が該当するとみられる（第 I-5 図）。本堅穴住居跡床面からは、縄文帯と無文帯を交互に配する 4 単位の大波状口縁深鉢（第 I-5 図 2）、口縁と胴部に弧線文を配する 4 単位の波状口縁深鉢（第 I-5 図 1）、異形台付土器（第 I-5 図 9）、異形土器（第 I-5 図 3）、2 段構成の襷掛け状文を配する下部単孔土器（第 I-5 図 10）、磨り消しによる七宝繫状の文様が施された鉢（第 I-5 図 4）などが出土している（千歳市教育委員会 1982）。本堅穴住居跡床面出土品は、①深鉢、鉢、浅鉢に沈線文の盛行する兆候がある点（第 I-5 図 1・4・7）、②刻目が細くなる点（第 I-5 図 4・6・7・9）、③突瘤土器（第 I-5 図 5）が出土し

ている点、④肩部で屈曲する深鉢・鉢では口縁に文様を施す土器（第 I-5 図 1・4）が出土している点にキウス 4 遺跡盛土下位出土品（北海道埋蔵文化財センター 2003a）への過渡の様相がみられる。特に、第 I-5 図 1 の文様帯は I・IIa・II の 3 帯構成を取るとともに頸部に無文帯を配置し、肩部で屈曲する堂林式深鉢の文様帯構成を胚胎した注目される資料である。

末広遺跡では、鯔澗式の新しい段階前後とみられる突瘤土器が 14 号堅穴住居跡覆土 2 層下面、48 号堅穴住居跡（層位不明）、52 号堅穴住居跡（層位不明）からも出土しているが（千歳市教育委員会 1982：図 300-4、図 343-11・12、図 349-12）、少数例であることから普及するまでには至っていないとみられる。突瘤施文は鯔澗式とエリモ B 式を分離する根拠とされたが（鷹野 1978・1981・1982）、鯔澗式には少数ながら突瘤が出現しているので、論説 B の根拠は消滅したことになる。キウス 4 遺跡 F・G 地区建物 19 からは、7 個体の半完形深鉢が潰れて重なった状態で出土しているが（北海道埋蔵文化財センター 2001b：図 232）、この内 5 個体に突瘤が施されている（第 I-6 図 1・2・4～6）。この中には、口端、頸部に刻目列が施された 5 単位の大波状口縁深鉢が 2 個体あり、内 1 個体は突瘤が施されている（第 I-6 図 1）。この一括資料からすると、千歳川流域では鯔澗式直後に突瘤手法が普及するとみられる。この前後には、突瘤を施す深鉢と施さない深鉢が並存していたのであろう。千歳川流域では、末広遺跡 52 号堅穴住居跡床面出土品からキウス 4 遺跡 F・G 地区建物 19 出土品への変遷が認められる。

エリモ B 式の再検討

先に忍路土場遺跡Ⅲa 層出土品を鯔澗式の標識資料に位置づけることを提言した。Ⅲa 層出土品は、忍路土場遺跡編年案ではⅧ期（忍路 A 式）とされる。Ⅷ期（忍路 A 式）と後続するⅨ期（忍路 B 式）は、エリモ B 式に相当するとされるので、次に、論説 B にかかわるエリモ B 式について検討する。エリモ B 式は、当初、エリモ B 遺跡、トコロチャシ南尾根遺跡、手稲遺跡出土品を標識資料としていた（第 I-3a 図 23～38）。エリモ B 遺跡 1 号住居跡出土品（第 I-3a 図 25・28、大場・扇谷 1953：図 32～34）、5 号住居跡出土品（第 I-3a 図 14・15・26・27、大場・扇谷 1953：図 16～24）、9 号住居跡出土品（第 I-3a 図 23・24・29、大場・扇谷 1953：図 27～30）は、各住居跡出土品に時期的なまとまりが看取される。それらの特徴は下記の点にある。①深鉢では頸部に無文帯が形成される（第 I-3a 図 25）。②器種を越えて文様帯は幅広で、「コ」字文や逆「コ」字文、クランク文の磨消文様が多用される（第 I-3a 図 24・25・27）。③口端、頸部に施される刻目は 1 列で太めのものが多用される（第 I-3a 図 25・26・28・29）。忍路土場遺跡の層位的資料と比較すれば、Ⅲa 層出土品（鯔澗式古段階）に対比できる。

一方、トコロチャシ南尾根遺跡と手稲遺跡出土品には、手稲式（第 I-3a 図 31）、鯔澗式（第 I-3a 図 30・33）、後述する堂林 1 式（第 I-3a 図 35・36）が含まれる。改訂されたエリモ B 式標本図には、鯔澗式（第 I-3b 図 14・15・17・18・20）、堂林 1 式（第 I-3b 図 16・19）が含まれる。このようにエリモ B 式は、時空間的に多様な資料を含む。当初の標本図

は手稲式～堂林 1 式，改訂された標本図は鯔潤式～堂林 1 式の階梯に解消される。既述の通り，突瘤施文は鯔潤式とエリモ B 式を分離する根拠とされたが（鷹野 1978・1981・1982），鯔潤式には少数ながら突瘤が出現しているので，鯔潤式とエリモ B 式を分離する根拠も消滅したことからエリモ B 式，及びそれに相当するとされる忍路 A 式と忍路 B 式を用いる必要性もないであろう。

既存の手稲式と鯔潤式を判別する基準やエリモ B 式が清算されれば忍路土場遺跡の層位的資料や，手稲式から鯔潤式への変化とそれに対応する北日本の並行する土器群との関係もスムーズに理解される。要約すれば，忍路土場遺跡の層位的資料は，3rd—手稲 2 式，Ⅲ d 層—手稲 3 式古相，Ⅲ c 層—手稲 3 式新相，Ⅲ a 層—鯔潤式として再編される。縄文時代後期中葉終末期における他地域との各細分段階の編年対比については今後さらに詳細な検討が必要であるが，手稲式から鯔潤式への変化は十腰内 2 式から十腰内 3 式への変遷と大よそ連動するものとみられ，手稲式—十腰内 2 式（関根 2013），鯔潤式—十腰内 3 式（小林 2015）との並行関係を想定することで整理される。

3. 堂林式

忍路土場遺跡が形成された主体となる時期は縄文時代後期中葉であることと，堂林式が出土した層準（Ⅱ b'・Ⅱ b 層）では鯔潤式と堂林式が混在しており，後期中葉から後葉への階梯が判然とするまでには至らなかった。キウス 4 遺跡は堂林式の古い段階から新しい段階まですべて出土しており，特に，堂林式の古い段階は，キウス 4 遺跡の調査によりその様相が明らかになった。後述する通り，これまでの蓄積された研究と資料で堂林式の階梯はキウス 4 遺跡 F・G 地区建物 19 出土品→柏木川 4 遺跡「氾濫原」出土品→浜中 2 遺跡 R 地点 V 層出土品→瘤付土器第Ⅲ段階並行期に伴う堂林式の 4 階梯が指摘できる。縄文時代後期中葉の特徴を継承するキウス 4 遺跡 F・G 地区建物 19 出土品は堂林式の古い段階，柏木川 4 遺跡「氾濫原」出土品は中位の段階，浜中 2 遺跡 R 地点 V 層出土品は堂林式の終末に近い資料なので新しい段階に位置づけることができる。

既述の通り，末広遺跡 52 号堅穴住居跡床面出土品（鯔潤式新段階）→キウス 4 遺跡 F・G 地区建物 19 出土品を指摘した。キウス 4 遺跡 F・G 地区建物 19 出土品は良好な一括資料であるが，器種は深鉢に限られるので，同時期の資料から器種組成を類推する必要がある。F・G 地区建物 19 出土品と同時期とみられる資料は，キウス 4 遺跡 R 地区盛土下位 W-3 層，V-3 層出土品などに前後する時期の土器が混在するものの，ある程度まとまりが看取される（北海道埋蔵文化財センター 2003a：図Ⅳ-151・152，図Ⅳ-174～176）。これらの資料は，大きく F・G 地区建物 19 出土品と柏木川 4 遺跡「氾濫原」出土品に並行する段階の 2 時期の資料が主体とみられ，柏木川 4 遺跡「氾濫原」出土品に並行する段階の資料を差し引けば，堂林式の古い段階が明らかになるであろう。さらに北日本の縄文時代後期中葉終末期は，鯔潤式—十腰内 3 式（小林 2015）の並行関係が指摘される。また，北東北地方における当該期前後の並行する土器群は十腰内 3 式→十腰内 4 式古段階が判明しているので（小

林 2015)、堂林式の古い段階は、十腰内 4 式古段階との並行関係が想定され、十腰内 4 式古段階と対比しながら時期幅のあるキウス 4 遺跡 R 地区盛土下位層準 (W-3 層, V-3 層など) 出土品から堂林式の古い段階の資料を見極めることが課題となる。

本稿では、上述の堂林式の古い段階を堂林 1 式、中位の段階を堂林 2 式、新しい段階を堂林 3 式とすることを提唱する。この細分案は、土肥 (2001) と阿部 (2008) の論考を参照したものである。本章では、堂林 1~3 式について検討し、瘤付土器第Ⅲ段階並行期に伴う堂林式については、次章で後述することとする。

(1) 堂林 1 式

既述のキウス 4 遺跡 F・G 地区建物 19 出土、7 個体の半完形深鉢 (第 I-6 図) が当該期の一括資料であり、キウス 4 遺跡 R 地区盛土下位層準出土品などから柏木川 4 遺跡出土品に並行する段階の資料を差し引くことで代表的な資料を抽出したのが第 I-7 図である。当該期の特徴を器種ごとにまとめると下記の通りである。

壺と注口土器は未分化で、その器形は、胴部が球状で、口縁が短めで弱く外反するか、垂直に立ちあがる 2 段造りのものが多いが (第 I-7 図 5)、3 段造りが形骸化したものもみられる (第 I-7 図 4)。胴部が球状で、やや長めの口縁が内傾する後期中葉的な器形もみられる (北海道埋蔵文化財センター 2003a : 図 V-169-1385)。口端・頸部などに刻目列を伴うものが一般的とみられ (第 I-7 図 4~6)、口縁部に縄文帯が施されるものもしばしばみられる (第 I-7 図 4)。注口は手稻式、鯰潤式のものに比べ、短めになり、その基部の膨らみも矮小化する傾向がある (第 I-7 図 6)。胴部のⅡ文様帯は幅広なので、文様が大柄で、整然としたネガ・ポジ文様手法で襷掛け状文、入組带状文、弧状文などが施文されるのが特徴である。入組带状文は、瘤を中心に入り組む構図がしばしばみられる (第 I-7 図 6)。貼瘤は、後期中葉から出現するが、当該期に普及する (第 I-7 図 4~6)。壺・注口土器の土器製作において、十腰内 4 式古段階と共通した器形、手法 (刻目列・貼瘤)、文様 (襷掛け状文、入組带状文) が用いられる時期といえる。

肩部で屈曲する深鉢は、屈曲する位置は器高の中央近くにあり、口縁部が幅広で頸部に狭めの無文帯を配し、口端・頸部に刻目列を施すのが特徴である (第 I-6 図 1・3, 第 I-7 図 1~3)。並行型式である十腰内 4 式古段階の屈曲する深鉢にも刻目列がみられるので、北日本の縄文時代後期中葉に後続する段階では刻目列を施す手法が継承されたとみられる (小林 2015)。既述の通り、キウス 4 遺跡 F・G 地区建物 19 出土の一括資料には、5 個体に突瘤が施されているが、施さないものもあるので、両者は並存していたことを示唆する。大波状口縁や突起が付く場合は 5 単位、6 単位など単位数が少ないのが特徴である。波頂内面にやや小振りな突起を付ける場合もある (第 I-6 図 3, 第 I-7 図 1・2)。肩部で屈曲する有文深鉢の文様帯は、Ⅰ・Ⅱa・Ⅱの 3 帯構成が普及し、以降の文様帯構成の基底となる。上述の通り、屈曲位置は器高の中央近くにあり、Ⅱa・Ⅱ文様帯が幅広なので、その文様も大柄である (第 I-7 図 1・3)。磨消文様で装飾を施すものは、ネガ・ポジ文様手法で整然と

しており、十腰内 4 式古段階と共通する襷掛け状文、帯状文が用いられる（第 I-7 図 1）。在地的な孤線、鋸歯状、稲妻状などの沈線文も多用されるとともに（第 I-7 図 2）、襷掛け状文、あるいはその変容した文様が沈線文で描かれる場合がしばしばみられる（第 I-7 図 3）。

鉢と浅鉢も深鉢と同様に、波状口縁、あるいは突起が付く場合は 5 単位、6 単位など単位数が少ないのが特徴である（第 I-7 図 7・8）。文様には在地的な孤線、鋸歯状などの沈線文が多用される。

（2）堂林 2 式

堂林 1 式に後続する段階は、柏木川 4 遺跡縄文時代後期の「氾濫原」出土品とみられ（北海道埋蔵文化財センター 2010）、第 I-8 図は同出土品から抜粋して掲載したものである。本資料は、遺跡単位で堂林 1 式の土器製作から刻目手法が衰退していく段階のまとまりが看取される資料で、その特徴は以下の点にある。①波状口縁深鉢の波頂単位や口縁に付す突起は 5 単位が多いとみられ（第 I-8 図 3・6、北海道埋蔵文化財センター 2010：図Ⅲ-61-土器集中 15、図Ⅲ-69 土器集中 26）、堂林 1 式の特徴を継承している。②堂林 1 式に比べ、I 文様帯がやや幅広になるのに伴い沈線間隔の幅広化や沈線本数も 3・4 本のものが増える傾向がみられる（第 I-8 図 1～3）。③肩部が屈曲する深鉢では、屈曲する位置は器高の中央近くにあり、Ⅱa 文様帯が幅広なので、文様も大柄である（第 I-8 図 1・2）。また、頸部に幅狭な無文帯が配置され、その下に刻目列が置換された平行沈線が施されたものがみられる（第 I-8 図 1・3・5）。④文様施文において沈線文が卓越するようになる。深鉢には、沈線文による襷掛け状文（第 I-8 図 2）、襷掛け状文が変形して弧線文化した文様（第 I-8 図 6）、稲妻文が変容してジグザク化した文様（第 I-8 図 4）などが施され、堂林 1 式の痕跡がうかがえる。第 I-8 図 2 には、襷掛け状文間のスペースに補助的な弧線文を加える点に新たな文様構成の胚胎が看取される。⑤深鉢は第 I-8 図 1・4・6 のように文様帯が横位の沈線により区切られ、重畳化がみられるのも本遺跡出土品の特徴である。堂林 1 式には既にⅡa・Ⅱ文様帯を横位の沈線で区切る手法が用いられているので（第 I-7 図 2）、継承されたものとみられる。⑥注口土器（第 I-8 図 8・9）の器形は、胴部が球状で、口縁が短めで弱く外反するか、垂直に近く立ちあがる 2 段造りである。深鉢と同様に胴部には横位の平行沈線が施される。第 I-8 図 8 の口端、胴部には刻目が施されているが、刻目の間隔が空き粗雑化する傾向が看取される。なお、壺、あるいは注口土器の土器集中 27（北海道埋蔵文化財センター 2010：図Ⅲ-69-土器集中 27）には、やや細身であるが整然とした磨消文様による襷掛け状文が施されており、第 I-8 図 8・9 よりも先行する資料の可能性はある。

第 I-8 図 8・9 の注口土器は装飾性に乏しいが、キウス 4 遺跡出土品からすると当該期には装飾的な有文壺・注口土器が組成化するとみられる。集落遺跡であるとともに墓地遺跡でもあるキウス 4 遺跡と、「氾濫原」から炉跡が検出されキャンプ・サイトの様な様相を呈する柏木川 4 遺跡の機能の差異が土器組成にあらわれているのであろう。

柏木川 4 遺跡「氾濫原」出土品は、深鉢、注口土器ともに刻目手法が衰退する傾向が看

取されるが、器形、文様に堂林 1 式の痕跡を残し、堂林式の 1 階梯をなすものとみられる。文様では、特に、沈線文様が卓越していく傾向が看取され、北海道中央部における土器制作の独自性が顕著になる時期である。

柏木川 4 遺跡「氾濫原」出土品に近接する時期の資料としては、キウス 4 遺跡北側盛土に位置する L 地区 S 盛土 S-3 層出土品などがある（北海道埋蔵文化財センター1998b）。S-3 層出土品⁽⁵⁾は、鯔澗式～堂林式の資料が混在しているが、鯔澗式や堂林 1 式を差し引けば、半完形品を中心に当該期の様相がある程度うかがえる資料である。その半完形品を中心とした資料を第 I-9 図に抜粋した。

深鉢（第 I-9 図 9・11・12）は、柏木川 4 遺跡「氾濫原」出土品と上述した①～④の点について共通した特徴を有する。壺・注口土器の器形は、胴部が球状に近いものもあるが（第 I-9 図 4）、胴部中央に稜を形成し、新しい特徴を呈するものがみられる（第 I-9 図 1・2・6）。磨消文様と沈線文様（第 I-9 図 1～3・6）は並存したとみられるが、後者が卓越する傾向がうかがえる。襷掛け状文などが沈線化、孤線化するとともに単位文様が小形化する傾向が顕著で、注口は細めで華奢になる（第 I-9 図 1・2・4）。これら孤線化した沈線文様は、後述する堂林 3 式へ過渡的であり次段階の文様装飾の基底となる。S-3 層からは、十腰内 4 式新段階（小林 2015）に類似の磨消文様による入組帯状文を施す異形の壺（第 I-9 図 5）が出土しており、鯔澗式や堂林 1 式を差し引いた S-3 層出土品の主体となる資料が近接する時期であることを示唆している。

なお、第 I-6・7 図に示した堂林 1 式と柏木川 4 遺跡「氾濫原」出土品にはヒアタスがあり、過渡的な段階が想定される。堂林 1 式から堂林 2 式への変化の方向性としては、襷掛け状文の弧線文化、磨消文様の細身化や沈線文化、及び単位文様の小形化が予察される。また、キウス 4 遺跡 S-3 層出土品には、第 I-9 図 1～3・6 の壺・注口土器に示唆されるように、柏木川 4 遺跡「氾濫原」出土品よりも新相を呈する資料が含まれている可能性がある。堂林 1・2 式の細分、及び各細分段階の内容や判別方法について、良好な一括資料や層位的資料により明らかにすることが今後の課題である。

（3）堂林 3 式

キウス 4 遺跡 F・G 地区や R 地区の盛土上位層準から当該期の資料が出土しているが（北海道埋蔵文化財センター 2001b・2003a）、F・G 地区では盛土出土品と遺物包含層出土品が一括して報告されていることと、R 地区盛土上位層準出土品には瘤付土器第Ⅲ段階並行期の資料がかなり混在しているとみられるため、本稿では浜中 2 遺跡 R 地点の V 層出土品を検討する（第 I-10 図）。浜中 2 遺跡は北海道北部に位置するが、北海道中央部と該期における土器の変化の方向性は大きく変わらないとみられる。同遺跡は、縄文時代後期～アイヌ文化期の複合的な砂丘遺跡で、R 地点では、Ⅱ層～Ⅴ層を層位的に確認するとともに、それに伴い多量の動物遺体、石器、土器が検出された（国立歴史民俗博物館 2000）。Ⅱ層はオホーツク文化期、Ⅲ層は続縄文時代前半期、Ⅳ上層は縄文時代晩期後葉、Ⅴ層は縄文時代後

期後葉である。Ⅴ層出土品には、堂林 3 式に先行する資料（国立歴史民俗博物館 2000：図 4-23-105）や、後述する瘤付土器第Ⅲ段階並行期とみられる資料（国立歴史民俗博物館 2000：図 4-27-112，図 4-37-165・167・171）が含まれているが、堂林 3 式主体とみられる。同層出土品の特徴を器種ごとに下記にまとめる。

肩部で屈曲する深鉢は、屈曲部が弱くなるとともに、波状口縁の単位数が 10 以上のものが増加し、小波状口縁が特徴となる（第 I-10 図 1）。屈曲する位置は器高の上位にあることと、Ⅰ文様帯、及び頸部無文帯の幅広化に伴いⅡa 文様帯の幅狭化が顕著になる（第 I-10 図 1）。それに伴い文様も小形化、圧縮化されるようになる。また、Ⅰ文様帯における平行沈線の本数が 4 本以上に増加する。有文の砲弾形深鉢でも口縁沿いに平行沈線を施すものは 4・5 本が多い（第 I-10 図 3）。磨消文様は衰退し、沈線文様が盛行する。沈線を多用する手法は弧線文を連結させる構図と結びつき、雑描きの新たな文様も生成する。こうした構図は、後述する次段階の瘤付土器第Ⅲ段階並行期へ過渡的である。

壺・注口土器の全形がわかるものはないが、口縁が短めで外反するものが出土しているので（第 I-10 図 7）、口縁、頸部、胴部から構成される 3 段造りの器形になるとみられる。深鉢と同様に、壺・注口土器にも沈線文による弧線文や雑描きの文様が盛行する（第 I-10 図 5・6・8）。浜中 2 遺跡 R 地点Ⅴ層出土品には壺・注口土器の完形品が欠如するので、キウス 4 遺跡出土品から該期の資料を補完し、検討する。第 I-11 図 1～5 は、該期とみられるキウス 4 遺跡出土の完形品に近い壺・注口土器を抽出したものである。これらの特徴は、頸部が長めで内傾し、口縁が短めで外反する 3 段造りの器形にある。算盤玉状の胴部が盛行するのも該期の特徴とみられる（第 I-11 図 2・3）。胴部が球状のものも一部残るとみられるが、胴部の径が縮小することと口頸部が長く細めになるため、器形全体が細身になる。注口は細めで、基部に弱い張り出しが付くものが多い（第 I-11 図 1～3）。文様は、浜中 2 遺跡 R 地点Ⅴ層出土品と同様に胴部に沈線文によるやや雑な弧線文が盛行し、頸部にも平行沈線文や弧線文などが施文される場合がある。

なお、キウス 4 遺跡からは、器形（細長の口頸部）、文様（弧線連結文）の特徴から、これら資料の直前段階に位置づけられるような壺・注口土器が出土している（第 I-11 図 6～15）。第 I-11 図 6～9・11・13～15 に施された構図は、S 盛土 S-3 層出土品に比べると、単位文様の小形化が顕著であるが、木葉状沈線文を縦・横位に組み合わせ整然としている点に特徴がある。やや大柄の沈線化した襷掛け状文の上下に補助的な連弧文が加えられた第 I-11 図 6 は、この中でも古手、あるいは先行する資料の可能性がある。これらの資料は、キウス 4 遺跡 S 盛土 S-3 層出土品と時期的に重複するものが含まれる可能性があるが、同出土品に後続し、堂林 2 式から堂林 3 式への過渡的様相を呈している。

（４）堂林式編年に関する先行研究との対比

本稿の堂林式編年と先行研究（土肥 2001，阿部 2008）によるものでは標本図に関する認識などについて異同があるが、堂林 1 式は土肥（2001）のⅡ期に対比される。また、堂林 1

式に関するものとして、忍路土場遺跡編年案に依拠した鯰澗式新（末）段階／エリモ B 式と堂林式古段階がある（阿部 2008）。鯰澗式新（末）段階／エリモ B 式と堂林式古段階は、深鉢、壺・注口土器の口端、頸部における刻目列の有無を基準として、刻目列を施すものを鯰澗式新（末）段階／エリモ B 式、施さないものを堂林式古段階に該当させている。この基準では、キウス 4 遺跡 F・G 地区建物 19 出土の一括資料（第 I-6 図）の説明が困難となる。また、鯰澗式新（末）段階／エリモ B 式は、十腰内式編年（小林 2015）と対比すると十腰内 3 式（阿部 2008：図 1-1・2）と十腰内 4 式古段階（阿部 2008：図 1-9・15）に対比される資料を含み、2 時期に分離される。堂林 2 式は土肥（2001）のⅢ期、阿部（2008）の堂林式古段階に対比される。堂林 3 式は、土肥（2001）のⅣ期、阿部（2008）の堂林式中段階に対比される。

4. 瘤付土器第Ⅲ段階並行期

（1）当該期の一括資料とその特徴

当該期は、貼瘤、刻目列手法の盛行など、瘤付土器第Ⅲ段階に広くみられる特徴が顕著になり、在来の堂林式に特徴的な器形、文様帯構成、平行沈線による文様の描出などは、特定器種（肩部で屈曲する深鉢など）に限られる傾向がみられるようになる。当該期の一括資料は、柏木 B 遺跡 447 号土坑墓出土品、カリンバ遺跡（旧称カリンバ 3 遺跡）30・80・111 号土坑墓出土品、美々 4 遺跡 378 号土坑墓出土品、美々 4 遺跡 BS3 周堤墓 15 号土坑墓出土品、美沢 1 遺跡 JX3 周堤墓 106 号土坑墓出土品などが好例である（第 I-12 図）。

これらの資料では、器種を越えて弧線文、貼瘤、刻目が文様装飾手法として多用される。弧線文は、連弧状に配置する場合（第 I-12 図 3・5・9）や上下に相対させて連弧状楕円文になる場合がある（第 I-12 図 18）。楕円文は、第 I-12 図 34 のように横位に充填、あるいは重畳化させるものもある（第 I-12 図 1）。第 I-12 図 31 の口端には背向いの弧線文が横位に充填され、頸部には縦長の突起両側に「()」状文様を配するとともに、背向いの弧線文が充填されている。この構図の変異は、瘤付土器第Ⅲ段階に東日本、北日本で広く看取される。第 I-12 図 21 の壺胴部文様帯には、「()」状文様を起点にやや雑描き状の孤線文が充填されている。2 単位の木葉状孤線文を相対させることで七宝繫状文や円文が生成する（第 I-12 図 13・28・38）。円文は同心円状になる場合がある（第 I-12 図 13・15）。磨消文様の 2 単位の孤線文をジグザクに充填したのが第 I-12 図 39 の構図である（ただし、変則的に構図を変えている）。第 I-12 図 23 の壺口縁部文様帯には、磨消文様の孤線文が上下に配置されている。孤線文は変形して、蕨手状（第 I-12 図 3・12）、渦状（第 I-12 図 15）、鉤状（第 I-12 図 14）を呈するものもある。渦状文と同心円文が併用される場合があり（第 I-12 図 15）、これらの文様が当該期の変異であることを示す。孤線文の変形が進み、雑描き状を呈する場合もある（第 I-12 図 21・30）。

貼瘤は器種を越えて盛行し、その形状も様々である。小粒のもの（第 I-12 図 6）、中央に刺突を施すもの（第 I-12 図 1・3・5・12・31）、縦位、あるいは横位の短沈線を加えるもの

(第 I-12 図 28・34) などがある。貼瘤の周りにヘラ状工具で刻目を加え花卉状を呈するものもある(第 I-12 図 36・38)。花卉状の瘤や第 I-12 図 38 にみられる小円文周囲に刻目を加えた花卉状文様は近似する手法で、北日本の広域で看取され、広域編年の指標になる。貼瘤は口端沿い(第 I-12 図 5・31・34) や文様の起点になる部分(第 I-12 図 1・3・5・12・28・34・39) に施され、文様装飾の一部となる場合もある。横走する沈線と組み合わせ、文様帯の区画として用いられる場合もある(第 I-12 図 23・44)。

刻目は文様帯の区画(第 I-12 図 14~16・28・34・41・44) として、あるいは器形の変化する部分に施される(第 I-12 図 12・16)。刻目を縦位に配置したり、あるいは刻目の原体を押し引くことで凹線を施し、装飾の一部とする場合もある(第 I-12 図 14)。沈線間に刻目を充填する手法は北日本の広域で看取され、広域編年の指標になる(第 I-12 図 38・41・42・44)。刻目の形状は、指や竹管状工具によるとみられる粗いマクレ状のもの(第 I-12 図 3・7・16・24)、竹管状工具による「D」字状(第 I-12 図 1・9・12~15・19・28・33・34)、ヘラ状工具による「ハ」の字状(第 I-12 図 41・42・44) などがある。粗いマクレ状の刻目は、第 I-12 図 7・24 のように粗製深鉢にしばしば施される。刻目に関する手法は、後述する通り、遺跡により差異がみられる。

土坑墓一括資料以外では、キウス 1 遺跡平地住居跡出土品(大場・石川 1967) が該期の好資料である。この平地住居跡には、瘤付土器第Ⅲ段階並行期に先行する土器が若干、混在しているが、遺物包含層出土品に比べ瘤付土器第Ⅲ段階並行期資料にまとまりがみられる(坂口 2014)。その土器組成は、遺物包含層出土品と比べ、注口土器、壺など精製土器が出土しているのが特徴である(大場・石川 1967: 113)。また、遺跡の機能により、土器組成が異なる点に注意が必要である。キウス 1 遺跡平地住居跡からは、あらゆる器種がまんべんなく出土しているのに対し、土坑墓出土品は、注口土器、壺に偏る傾向がみられ、その中でも小形品が選択される傾向がある。以下、瘤付土器第Ⅲ段階並行期資料の特徴を器種ごとに概略する。

壺は、細口壺と広口壺に分化する傾向がみられる。また、眼鏡状隆帯が現れる(第 I-12 図 10)。土坑墓から出土する壺・注口土器には、小形のものがしばしばみられ、こうした小形品は、埋葬儀礼に選択して用いられたとみられる(第 I-12 図 18・19・21・28・32 など)。貼瘤、刻目列手法の盛行、及び文様では後期三叉文(小林 2010: 73-76) が現れ、瘤付土器第Ⅲ段階に広くみられる特徴が顕著になる(小林 2010: 39)。

小形の鉢は、縄文地文の素文土器で(第 I-12 図 20・26・27・35)、波状口縁(第 I-12 図 20・27) や、口唇に刻目を施すものがある(第 I-12 図 35)。

在来の肩部で屈曲する深鉢は、該期に継承され、次節で後述する。砲弾形深鉢の口唇には刻目が施され、突瘤と併用されることもある(第 I-12 図 7・24)。また、上述の通り、器面を掘り起こしたマクレ状刻目が盛行する(第 I-12 図 7・11・24)。

このように該期は、貼瘤、刻目列手法の盛行など、瘤付土器第Ⅲ段階に広くみられる特徴が顕著になるが、東北地方の瘤付土器との相違も看取される。当該期における東北地方

の壺・注口土器は、黒色研磨された精製土器で、無文のものも多く、焼成も深鉢とは異なる。一方、北海道中央部では注口土器・壺にも深鉢と同様な焼成、及び刻目が用いられ、無文のものは少ない。東北地方の瘤付土器では、器種と手法の相関性が高く、刻目列は一般的に深鉢に施される傾向がみられる。それに対し、北海道中央部では、東北地方で看取される器種と手法の相関性はみられない。

瘤付土器第Ⅲ段階並行期は、土肥（2001）のⅤ期に対比される。また、当該期に関連するものとして阿部（2008）の堂林式新段階、三ツ谷式古・新段階、及び御殿山式古・新段階があり、これらの評価については、7章で後述する。

（2）瘤付土器第Ⅲ段階並行期の堂林式深鉢

当該期には、瘤付土器第Ⅲ段階に広くみられる特徴が顕著になるが、在来の土器制作は肩部で屈曲する深鉢に継承される。瘤付土器第Ⅲ段階並行期の堂林式深鉢は、①瘤付土器第Ⅲ段階並行期資料との共伴関係、②瘤付土器第Ⅲ段階の手法（刻目列、貼瘤、花卉状瘤）や文様（後期三叉文（小林 2010：73-76）など）を在来の土器制作に取り入れた資料から比定できる。

①の瘤付土器第Ⅲ段階並行期資料と共伴する事例には、美々4遺跡378号土坑墓出土品（第I-12図29）がある。②の事例には、美々4遺跡「環状溝墓」BS3・4出土品（第I-12図36・40）などがある。第I-12図36には、瘤付土器第Ⅲ段階に盛行する花卉状の瘤が口縁波頂部と胴部に付されている。BS3には、他時期の資料が混在しているが、瘤付土器第Ⅲ段階並行期の資料については器種を越えて貼瘤される傾向があり、時期的なまとまりが看取される（北海道教育委員会 1981a）。BS3「環状溝墓」15号土坑墓からは、第I-12図34が出土していることも時期的に整合性がある。

第I-12図40は、第I-12図36とともに堂林式深鉢の好例である。その器形は第I-12図36と共通する特徴を有し、Ⅱa文様帯には背反する孤線文、Ⅱ文様帯には「()」状孤線文と横位に背反する孤線文が交互に充填され、文様の起点となる箇所貼瘤されている。「環状溝墓」BS4出土品もBS3出土品と同様に、貼瘤されたものが多く出土しており（北海道教育委員会 1981a：図82-2、図83-9・22）、瘤付土器第Ⅲ段階並行期のまとまりが看取される。

キウス4遺跡R地区盛土上位に相当する盛土D-4層r-82・83グリッド、盛土E-1・2層s-83・84グリッド、盛土Y-1層x-74グリッド、y-73・74グリッド出土品も瘤付土器第Ⅲ段階並行期資料のまとまりが看取され、当該期の堂林式深鉢の好例が含まれる（北海道埋蔵文化財センター 2003a：図Ⅳ-41、図Ⅳ-64下段、図Ⅳ-107）。

瘤付土器第Ⅲ段階並行期の肩部が屈曲する堂林式深鉢の特徴は、下記の点にあり、在来の土器製作が変容していく過程を示す。①肩部の屈曲が弱まり、砲弾形に近い器形に近づき、頸部無文帯が幅広になる傾向がみられる。②文様の構図は、単位となる文様の連繋がみられなくなる。③在来の文様に刻目列が充填されるものもある（北海道埋蔵文化財センター2003a：図Ⅴ-69-456など）。④Ⅰ文様帯下に無文帯が配置されたり、Ⅱa文様帯が多帯

化しているものもみられる（北海道埋蔵文化財センター1998a：図IV-49-8）。⑤堂林3式よりも口縁波頂の単位数が増加するものがみられ（北海道埋蔵文化財センター2003a：図V-2-10など）、鋸歯状に近い口縁も現れる。

堂林3式から瘤付土器第Ⅲ段階並行期への深鉢の変化は漸移的であり、同定には困難が伴う。上記した①～⑤の特徴を有する資料を鑑定する際には、瘤付土器第Ⅲ段階並行期ではないかと注意して精査、同定する必要がある。

（3）遺跡による文様・構図に関する変異

当該期には、遺跡により文様・構図に関する変異も看取される。入組帯状文、及び階段状入組文は、柏原5遺跡、美々4遺跡出土品で看取される傾向がある（苫小牧市教育委員会1997；北海道埋蔵文化財センター1984・1998a）。マクレ状刻目を深鉢の波状口縁沿いや沈線文沿いに充填したり、縦位、波状に配置し装飾的に用いる手法は、美々4遺跡ⅡB2層出土品、柏原5遺跡2B層出土品、カリンバ遺跡出土品で看取される（北海道埋蔵文化財センター1998a、苫小牧市教育委員会1997、恵庭市教育委員会2003）。縦位弧線文を右、あるいは左に90°回転させることで意匠化したとみられるヒップ状文様（第I-12図33、北海道埋蔵文化財センター1998a：図IV-38-89・91）は、美々4遺跡、柏原5遺跡2B層出土品（苫小牧市教育委員会1997：図5-37-78）で看取される。

上述の通り、刻目の手法についても遺跡により変異が看取される。キウス4遺跡では、壺・注口土器、浅鉢、深鉢に「ハ」の字刻目が多用されるが（第I-12図41・42・44）、マクレ状刻目が施された深鉢は少数例が確認されるのみである（北海道埋蔵文化財センター2001b）。キウス1遺跡平地住居跡出土品では、深鉢へのマクレ状刻目、壺などへの「ハ」の字刻目の両手法が看取される（大場・石川1967）。キウス4遺跡以外で「ハ」の字刻目が施された壺・注口土器、浅鉢などが一定量出土しているのは美々4遺跡であり、同遺跡ではマクレ状刻目が施された深鉢も多数出土している（北海道教育委員会1979a・1981a；北海道埋蔵文化財センター1984・1998a）。一方、柏木B遺跡では、マクレ状刻目が施された深鉢は多数出土しているのに対し、「ハ」の字刻目が施された広口壺は少数確認できるのみである（恵庭市教育委員会1981）。カリンバ遺跡でも、マクレ状刻目が施された深鉢は多数出土しているのに対し、「ハ」の字刻目が施された注口土器は少数である（恵庭市教育委員会2003a・2004）。柏原5遺跡2B層でもマクレ状刻目が施された深鉢は多数出土しているのに対し、「ハ」の字刻目は細口壺1点に確認できるのみである（苫小牧市教育委員会1997）。こうした土器制作に関する文様、手法の変異は、それぞれの地域集団にかかわる土器制作者／集団の存在や、地域集団間の需要・供給による土器の多様な搬出・搬入関係を示唆する。

5. 瘤付土器第Ⅳ段階並行期

(1) 当該期の一括資料とその特徴

北海道中央部

該期の一括資料は、西島松 5 遺跡 395・398・399・431・497・506・526・510 号土坑墓出土品、カリンバ遺跡 118 号土坑墓出土品、美々 4 遺跡 X310・X311 号土坑墓出土品、美沢 1 遺跡 38 号土坑墓出土品、御殿山遺跡 3 号配石墓出土品など充実している(第 I-13a・b 図)。これら資料の特徴は、器種を越えて瘤付土器第Ⅳ段階に広く用いられる孤線文、七宝繫状文、三叉状陰刻・沈刻、及びこれらを組み合わせた文様が多用されることにある。単位となる孤線文を組み合わせたり、変形させたり、あるいは三叉状陰刻・沈刻を付加することで、多様な構図が生成する。2 単位の孤線文と三叉状陰刻を組み合わせた構図は北日本～東日本の当該期の注口基部にしばしば施される(小林 2010: 図 29)。第 I-13a 図 9 のファロス付注口⁽⁶⁾基部には、そのやや粗雑な構図が看取される。三叉状陰刻で囲まれたスペースに縦位列点文を施し、周りに七宝繫状の磨り消された弧線文を展開させているのが第 I-13a 図 34 の構図で、さらに七宝繫状文間に上下に対置する三叉状陰刻を施すことで装飾効果をあげている。注口(欠損している)周囲の円文に三叉状沈刻を巡らせるとともに、円状弧線文両側に三叉状沈刻を付加した構図が胴部に施されたのが第 I-13a 図 32 である。こうした文様描出は、後述する第 I-13b 図 9 と類似する手法である。注口周囲に三叉状陰刻・沈刻を巡らせ、その周りに三叉状陰刻を付加した磨消文様による孤線文で動物的造形(ヘビ)を描出しているのが第 I-13b 図 2 の注口土器である。

横位の孤線文を 2 段に配置し、その隙間に円文と向かい合わせの三叉状陰刻を対置させたのが第 I-13a 図 20 の構図である⁽⁷⁾。この構図は、上下の孤線文末端が連結すれば、七宝繫状文が展開するので、第 I-13a 図 20 は高石野類型注口土器(小林 2010: 図 29)に類するものとみなすこともできる。横位 2 単位孤線文、あるいは連弧状孤線文を背反させて、その隙間に向かい合わせの三叉状陰刻を横「I」状に配したのが、第 I-13a 図 18 の構図である。ただし、文様連結部に縦位の孤線文、あるいは 2 単位孤線文が配されており、孤線文が雑描的であるとともに構図も極めて変則的である。

三叉状陰刻を付加したポジ文様のハート形孤線文を上向き、下向きに交互に配置し、その文様間に上下に対置する三叉状陰刻を加えたのが第 I-13a 図 7 の構図である。類似する構図と手法は、第 I-13a 図 22、第 I-13b 図 1 に看取される。楕円状弧線文に背向かいの三叉状陰刻を付加するとともに、その文様間に上下に三叉状陰刻を対置させたのが、第 I-13a 図 22 頸部文様帯の構図である。この注口土器口縁部には、三叉状陰刻が上向き、下向き交互に配置されている。底部には向かい合わせの三叉状陰刻を横「I」状に配し、三叉状陰刻で囲まれた楕円状スペースに縦位の刻目を施している。磨消文様の楕円文を 2 段に配し、その文様間に上下向かい合わせの三叉状陰刻を施したのが第 I-13b 図 1 の胴部文様帯構図である。

ネガ文様の弧線文を階段状に入り組ませ、ポジ文様に三叉状沈刻を付加したのが第 I-13a

図 26 の胴部文様帯の構図である。胴部が球胴で底部がすぼまる器形が特徴的なファロス付注口土器である。東北地方の入組帯状文では、ネガ文様に三叉状沈刻が施されるので、ネガ・ポジ文様の関係が逆転していることになる⁽⁸⁾。これと類似する構図が施されているのが美々4遺跡墳墓 M5 出土の壺である（北海道教育委員会 1977b：図 103-5）。ポジ文様に三叉状陰刻／沈刻を付加する手法は、第 I-13a 図 7、第 I-13b 図 2 にも看取され、北海道中央部の土器制作者の手法とみられる。

孤線文は、第 I-13a 図 15 のミニチュア土器のように縦位に配される場合もある。第 I-13a 図 10 の鉢に施されたやや粗雑な綾杉状文は、縦位孤線文の変異とみることもできる。沈線間に刻目を充填した弧線文を縦位に鉤状、あるいは蕨手状に入り組ませ並列配置させるとともに、その文様間のスペースを斜線で区切り、斜線を軸として三叉状陰刻を対置させるように配置したのが第 I-13a 図 17 の基本構図である。ただし、下記の点に変則性が看取される。①弧線文間のスペースに斜線を挿入する場合と挿入しない場合がある。②弧線文の入り組む部分に点文を施す場合と施さない場合がある。③背面（注口の反対側）は、弧線文を縦位に入り組ませないで、蕨手状文様を充填している。

孤線文は、第 I-13a 図 20 のように規則的に配置される場合もあるが、孤線文、三叉状陰刻を複雑、変則的に絡み合わせた構図は北海道中央部や東部独自で、第 I-13a 図 12 の場合、そうした文様が注口土器の正面（注口周囲）にのみ施されている。

構図の変則性は、文様装飾に関する自由度を高め雑描きの近い孤線文（第 I-13a 図 2・18）を生成する要因となる。構図の変則性のため、三叉状陰刻がランダムに近く配置される場合もある（第 I-13a 図 2）。

当該期の東北地方で盛行する入組帯状文は、後述する通り、北海道中央部では少数である。第 I-13a 図 36 の台付き鉢の口縁には、左下がりの入組帯状文の入り組む箇所三叉状沈刻を対置する構図が展開するものとみられる。

北海道東部

北海道東部では、朱円周堤墓 A 号 1 号墓出土品（第 I-13b 図 5～10、口絵 3・4）が当該期の一括資料である（河野広 1981、北海道埋蔵文化財センター 2012）。これら資料の特徴も北海道中央部と同様に、器種を越えて瘤付土器第Ⅳ段階に広く用いられる孤線文、七宝繫状文、三叉状陰刻、及びこれらを組み合わせた構図が用いられることにある。後述する通り、朱円 A 号 1 号墓出土品は、縄文時代後期終末として示された学史的にも重要な資料を含むため（野口・安孫子 1981）、個別に記述する。

第 I-13b 図 5 は、広口壺で、ツメ状列点文で区画された胴部文様帯に楕円と円を組み合わせた文様（単位文様）を上下 2 段に配置し、その文様間に沈線、及び背反する三叉状陰刻を付加する。第 I-13a 図 7 と類似する手法である。下段の単位文様間下部には、上向きの三叉状沈刻を加える箇所と加えない箇所があり、変則的である。第 I-13b 図 6 は、4 単位の方形波状口縁深鉢で、列点文で区画された文様帯に入組帯状文が施されている。入組帯状文が下がる所では、円状の透かし、あるいはつまみ出すような押圧が施されている。第

I-13b 図 7 は胴部に帯縄文を巡らせ、その下部に円状の沈線文が施された壺である（注口が欠損したファロス付注口土器の可能性も残る）。第 I-13b 図 8 は、胴部文様帯に上向きと下向きの孤線文を交互に充填し、孤線文の背後に沿うように刻目を施すとともに、孤線文間に向きが一定しないややランダムな三叉状陰刻を配置した壺である。第 I-13b 図 9 は、円文の内外に三叉状陰刻・沈刻を加えた構図で装飾された壺で、底部に眼鏡状隆帯が施されている。第 I-13b 図 10 は、頸部には孤線文を境に上向き、下向きの三叉状陰刻を交互に充填し（そうでない箇所もあり変則的である）、胴部から底部にかけては磨消文様の孤線文、七宝繫状文を施し、文様間のスペースに三叉状陰刻・沈刻を充填することで複雑な構図が描出された壺である。器形、装飾、手法、焼成の近似性から、第 I-13b 図 9 と同一製作者によるものと推定される。

朱円周堤墓 A 号 1 号墓出土品は、有文土器が豊富なため当該期の特徴を把握するための絶好資料である。特に、第 I-13b 図 6 は、滋賀県滋賀里遺跡出土品とともに瘤付土器第Ⅳ段階並行期の資料として示され、北日本から西日本における縄文時代後期終末の広域編年の鍵となる資料である（野口・安孫子 1981）。これらの理由から、朱円周堤墓 A 号 1 号墓出土品は、北海道の縄文時代後期終末を位置づけるうえでも基準となる。

（２）瘤付土器第Ⅳ段階並行期の組成と特徴

以上の一括資料をもとに器種ごとに当該期資料の特徴を下記にまとめる。壺・注口土器の器形は、胴部に最大径があり、口縁部が弱く外反、あるいは垂直に近く立ちあがる傾向があり（第 I-13a 図 1・12・17・20・25・28, 第 I-13b 図 1・4・7・8）、頸部、あるいは胴部に眼鏡状隆帯がしばしば施される（第 I-13a 図 1・2・9・12・20・25, 第 I-13b 図 2・4・8・9）。底部は、径が小さくすぼまり上底、ボタン状のものもあり、そのままでは据え置くことができないものも多い（第 I-13a 図 9・22・25・26・29・32, 第 I-13b 図 2・3・7・9・10）。こうした器形は、東北地方北部のものと共通する特徴を有する。その一方で、美沢 1 遺跡出土品（北海道教育委員会 1977a：図 43-2）のように、胴部が算盤玉状、頸部が内傾し、口縁部がやや長めのラップ状で在地色の強い注口土器もみられる。文様は、瘤付土器第Ⅳ段階に広く用いられる孤線文と三叉状陰刻・沈刻を組み合わせた在地色の強いものが用いられ、構図は東北地方のものとは比べ、変則的なものが多い。既述の通り、北海道中央部ではボジ文様部分に三叉状陰刻・沈刻が施されるものがみられ、この手法は大洞 B 式並行期まで継承される（千歳市教育委員会 1994：図 47-1, 北海道教育委員会 1977a：図 43-1 など）。

鉢は、地文が縄文、あるいは帯縄文を口縁部に施すもの（第 I-13a 図 16・19）、素文（地文縄文含む）土器（第 I-13a 図 14・33）、波状口縁土器（第 I-13a 図 31）、有文土器（第 I-13a 図 10・18）、突起付（第 I-13a 図 24・27）がある。

肩部で屈曲する在来の深鉢は激減し、砲弾形深鉢が主流となる。有文の砲弾形深鉢は、口縁部文様帯には孤線文、七宝繫状文、三叉状陰刻を組み合わせた構図が用いられる。突

瘤された砲弾形（粗製）深鉢は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期から継続する（第 I-13a 図 8・11・21）。刻目は、深鉢だけでなく、鉢（第 I-13a 図 13・18）、注口土器（第 I-13a 図 22）、壺（第 I-13b 図 5・8・9）にも文様帯の区画、装飾の一部として継続して用いられる。刻目は、細めで器面に対して浅いものが多い傾向が看取される（第 I-13a 図 13・18・22・36, 第 I-13b 図 5）。ただし、本稿で検討対象としているのは土坑墓出土品に限られるので、墓坑以外の時期が特定できる資料の分析が必要である。刻目には刺突に近いものもあり（第 I-13b 図 8・9）、刺突列（第 I-13b 図 3）は刻目の変異とみることもできる。貼瘤は少数例が確認されるのみで（第 I-13a 図 22・35・36, 第 I-13b 図 6）、減少する。

（3）先行研究との編年対比と遺跡による文様・構図に関する変異

瘤付土器第Ⅳ段階並行期は、土肥（2001）のⅥ期と重複する部分がある。Ⅵ期には、瘤付土器第Ⅲ段階並行期に位置づけられる美沢 1 遺跡 JX3 周堤墓 106 号土坑墓出土品（第 I-12 図 18・21・23）と瘤付土器第Ⅳ段階並行期に位置づけられる美々 4 遺跡 X310 号土坑墓出土品（第 I-13a 図 28・29）が含まれるので 2 時期に分離される。また、当該期に関するものとして御殿山式があるが、それに関する見解は様々で、7 章で後述する。

遺跡による文様・構図に関する変異は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期に引き続き看取される。第 I-13a 図 28・29, 第 I-13b 図 1 にみられる壺・注口土器口縁部の立体的な装飾は、美々 4 遺跡（北海道教育委員会 1977b：図 103-4・5・14, 図 104-18, 北海道埋蔵文化財センター 1998a：図Ⅳ-57-88）、美沢 1 遺跡（北海道教育委員会 1977a：図 43-2）、美沢 2 遺跡（北海道教育委員会 1978：図 432-470）、柏原 5 遺跡（苫小牧市教育委員会 1997：図 5-44-159・167・168）、御殿山遺跡（藤本 1963：図版 15-1）、茂辺地遺跡（国立歴史民俗博物館 2001：図 12-224・226 など）の出土品にも看取され、北海道中央部では瘤付土器第Ⅳ段階並行期に盛行することがわかる。また、その分布が太平洋側の遺跡に偏る傾向が注目される。

該期の東北地方で盛行する入組帯状文は、柏原 5 遺跡（苫小牧市教育委員会 1997：図 5-60416・417）、御殿山遺跡（藤本 1963：図版 17 上段 1・2・9・10）、美々 4 遺跡（北海道教育委員会 1977b：図 103-2）、カリンバ遺跡（恵庭市教育委員会 2003：図 192-27）の出土品に少量ながら看取され、太平洋側の遺跡に分布が偏る傾向が注意される。

6. 大洞 B 式並行期

（1）当該期の一括資料とその特徴

大洞 B 式並行期は、瘤付土器第Ⅳ段階並行期の在来の器形と文様を継承、発達させるとともに、亀ヶ岡式の器形と文様を部分的、あるいは変容させながら取り入れている点に特徴がある。一括品、あるいは一括性の高い資料には西島松 5 遺跡 462 号土坑墓出土品、美々 4 遺跡 395 号土坑墓出土品、西島松 5 遺跡 MA 盛土遺物集中 3 出土品、ユカンボシ E2 遺跡 3 号土坑出土品がある（第 I-14 図）。

在来の文様の特徴は、器種を超えて瘤付土器第Ⅳ段階に広く用いられた孤線文、七宝繫

状文、三叉状陰刻、及びこれらを組み合わせた意匠を継承、変形、発達させたもので、そうした文様に蕨手状文、鉤状文があり、両者は一連のものである。蕨手状文を縦に並列し、その文様間に雑描きの文様を付加したのが第 I-14 図 10 の構図である。末端が鉤状の「く・」状文様を入り組ませ、その両側に三叉状陰刻を配置することで、玉抱き三叉文風を描出したのが第 I-14 図 11 の基本構図である。第 I-14 図 8 には、鉤状文を入り組ませることで蕨手状文様を展開するとともに、鉤状文に「←」状文様を付け加えたり、あるいは三叉状陰刻、弧線文、雑描きの文様を変則的に加えている。第 I-14 図 1 の注口土器の胴部には、蕨手状文や複雑な弧線文が胴部に施されている。その胎土は茶褐色ないし、肌色で、黒色研磨がみられず、北東北地方のものと比較すると精巧さに欠ける。この点は、第 I-14 図 2～3 も同様である。

その一方で、第 I-14 図 14 のように、在来の器形の台付ファロス付注口土器の正面口縁部文様帯に比較的丁寧な玉抱き三叉文が施される場合もある。後述する通り、このような比較的洗練された入組三叉文系土器が看取されるのが美々4 遺跡出土品の特徴である。

瘤付土器第Ⅳ段階並行期の孤線文が並線化、あるいは沈線文化するのも当該期の特徴である。第 I-14 図 9 の鉢胴部には、やや粗雑な並線化した孤線文を引っ掛けるように配置したり、文様間のスペースを埋めるように三叉状陰刻を加え、底部近くに横位の綾杉文が充填されている。第 I-14 図 23 の船底形土器の口縁には、沈線文化した木の葉状孤線文がジグザクに配置されている。第 I-14 図 19 の深鉢口縁には、連孤文化した構図が看取される。2 単位の相対する孤線文が圧縮されるとともに、文様間の連携がなくなるのが第 I-14 図 22 の構図である。

瘤付土器第Ⅳ段階並行期では、七宝繫状の文様中央に円文や列点文が加えられたものがみられるが（第 I-13a 図 20・34）、大洞 B 式並行期では連孤文間や孤線文間の中央に点文、あるいは円文が施文される点に七宝繫状文の痕跡がうかがえる（第 I-14 図 18・19・22）。第 I-14 図 17 の構図も 2 単位の相対する磨消文様による孤線文中央に「ハ」字状文を付加している点に七宝繫状文が変形した様子が看取される。

瘤付土器第Ⅳ段階並行期では、2 単位の孤線文を相対させることで、そのスペースに菱形状文様が形成されるが（第 I-13a 図 20）、そうした菱形状文様が孤線文から独立化し、主文様として並列されているのが第 I-14 図 7 の構図とみられる。

これらの資料を亀ヶ岡式と対比すれば、文様、器形の特徴から西島松 5 遺跡 462 号土坑墓出土品、美々4 遺跡 395 号土坑墓出土品、西島松 5 遺跡 MA 盛土遺物集中 3 出土品が大洞 B1 式並行期に比定される⁽⁹⁾。ユカンボシ E2 遺跡 3 号土坑は、土坑墓の可能性があり（恵庭市教育委員会 2015）、時期的にまとまりのある資料とみられる⁽¹⁰⁾。その出土品は、大洞 B2 式並行期の注口土器（第 I-14 図 24）が出土していることから該期に比定されよう。

器種ごとに大洞 B 式並行期資料の特徴を下記にまとめる。壺・注口土器は、亀ヶ岡式的な器形が増えるが、在来の器形が継承される場合もある（北海道埋蔵文化財センター 2004：図 V-29-19）。東北地方からの搬入品は、柏原 5 遺跡出土の薄手で、黒色研磨された注口土

器（苫小牧市教育委員会 1997：図 5-51-275）などを除くと少数とみられる。鉢も壺・注口土器と同様に瘤付土器第Ⅳ段階並行期の文様が踏襲，変形されながら用いられる。

肩部で屈曲する深鉢はほぼ消滅し，有文・無文の砲弾形深鉢が一般的となる。有文の砲弾形深鉢は，口縁部文様帯，あるいは無文帯下に刻目列を加える新たな文様構成が普及していく（第 I-14 図 5・19）。刻目は，竹管状工具による「D」字状（第 I-14 図 14・19），ヘラ状工具によるツメ状（第 I-14 図 13），マクレ状（第 I-14 図 5・16）のものなどがある。竹管状工具による刺突に近いものも看取される。文様帯区画としての刻目列は，継承される（第 I-14 図 13）。突瘤土器も瘤付土器第Ⅳ段階並行期から継承される（第 I-14 図 12）。貼瘤も少数ながら継承される（第 I-14 図 9・14）。

（2）先行研究との編年対比と遺跡による文様・構図に関する変異

大洞 B 式並行期は，土肥（2001）のⅦ期と重複する部分がある。Ⅶ期は，美々4 遺跡 M-5 墳墓出土品（北海道教育委員会 1977b）から構成される。後述する通り，M-5 出土品は，主に瘤付土器第Ⅳ段階並行期，大洞 B2 式並行期の資料を含むので，Ⅵ期と重複する部分があるとともに，Ⅶ期は少なくとも 2 時期に分離される。また，当該期に関するものとして東三川 I 式があるが，7 章で後述する。

当該期は，瘤付土器第Ⅳ段階並行期に続き，遺跡による文様の変異が看取される。鉤状文や蕨手状文が施文される土器が出土している遺跡（西島松 5 遺跡，東三川遺跡）とそうでない遺跡があり，その頻度にも差異がある（北海道埋蔵文化財センター 2004，由仁町教育委員会 1969）。特に，西島松 5 遺跡では，土器の出土量が多いためか，その頻度が高い。美々4 遺跡には，洗練された入組帯状文と三叉文が施された「フクロウ土器」（熊谷 2001：図 2）に示唆されるように，土器の特色が他遺跡とかなり異なるものも含まれる。美々4 遺跡には，既述した瘤付土器第Ⅳ段階並行期の入組帯状文系土器を継承する土器制作者／集団の存在が想定される。

7. 編年に関する諸説と検討

これまで北海道中央部における層位的資料や土坑墓出土の一括資料を検討し，縄文時代後期中葉から晩期初頭の編年について提示した。本章では，これらの成果をふまえ，既存の土器型式，及び編年に関する諸説の検討を行う。既述の通り，堂林式→三ツ谷式→御殿山式という後期後葉編年の大枠は定着しつつある。堂林式については，その名称，及び細部については相違があるが，その階梯が数段階にわたることは，共通認識になりつつある。三ツ谷式，御殿山式に関しては，研究者によりその認識が異なる。これらに関連するものとして，柏原 I～Ⅳ式，美々4 式，東三川 I 式などがある。これらの土器型式には，縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけて時期幅のある遺物包含層資料に基づいて設定されたものもあり，その内容については共通認識が得られず錯綜しているのが現状で，標識資料を含めた学史的整理が必要である。以下，その内容に関する諸説の整理，検討を行う。

(1) 三ツ谷式

三ツ谷式は、北海道南部に位置する三ツ谷貝塚出土の層位的資料をもとに、その 2 類土器を縄文時代後期終末期として設定されたものである（大場・渡辺 1966）。この層位的資料は、第一混土貝層下部出土資料（1 類）→第一混土貝層中部出土資料（2 類）→第一混土貝層上部出土資料（3 類）という縄文時代後期から晩期への大よその流れは追えるが、各層位資料には混在がみられる（鈴木 1999）。1 類は、平行沈線や突瘤を施す深鉢（大場・渡辺 1966：図 4-1・4・5・7～9）、マクレ状刻目を施す深鉢（大場・渡辺 1966：図 4-16～20）、小波状口縁深鉢（大場・渡辺 1966：図 4-10・12・13）が出土している。深鉢の中には、平行沈線を斜めに切る沈線文、斜格子文もあり（大場・渡辺 1966：図 4-2・9）、これらの特徴から、堂林 3 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期のものとみられる。

2 類は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期を主体とするが（大場・渡辺 1966：図 5-2～10・13・15・19・21～23）、鯿潤式（大場・渡辺 1966：図 5-17・18）などの他時期の資料が含まれる。瘤付土器第Ⅲ段階並行期の資料は、器種を越えて弧線文、貼瘤、刻目が多用される。沈線間に刻目を充填する手法（大場・渡辺 1966：図 5-15・19）や弧線入組文（大場・渡辺 1966：図 5-22・23）もみられる。

3 類は、瘤付土器第Ⅲ段階～Ⅳ段階並行期（大場・渡辺 1966：図 6-6）、大洞 B 式並行期（大場・渡辺 1966：図 6-1・2）、大洞 BC 式並行期（大場・渡辺 1966：図 6-12）の資料が含まれる。

2 類から鯿潤式などの他時期の資料を差し引けば、瘤付土器第Ⅲ段階並行期の資料としてある程度まとまりがみられる。1 類のマクレ状刻目を施す深鉢や小波状口縁深鉢などは、2 類の瘤付土器第Ⅲ段階並行期の資料に伴う可能性がある。

北海道中央部にも美沢 1 遺跡 JX3 周堤墓 106 号土坑墓出土品（第 I-12 図 18～24）など、三ツ谷式に相当する資料が存在することが指摘され、堂林式→三ツ谷式→御殿山式という縄文時代後期後葉編年の大枠が組まれた（森田 1981）。

鷹野（1989）の三ツ谷式は、ほぼ瘤付土器第Ⅲ段階並行期の資料と同じ内容であるが、北川遺跡墓穴出土品、美々 4 遺跡 395 号土坑墓出土品などの前後する土器が若干含まれる。北川遺跡墓穴出土の注口土器（鷹野 1989：297-No. 23）の器形は第 I-13a 図 1 に類似する。その文様は注口両側に 2 単位の弧線文と三叉状沈刻を向かい合わせに配置し、側面には 2 単位の弧線文と三叉状沈刻を背反させ、その文様間のスペースに三叉状沈刻を上下に対置させた構図である。既述の通り、こうした構図は、北日本～東日本の瘤付土器第Ⅳ段階の注口土器に類例が看取されることから（小林 2010：図 29）、当該期と判断される。青森県石郷遺跡出土の注口土器（鷹野 1989：297-No. 25）は、器形、及び向かい合わせの三叉状陰刻を瘤の両側に充填させる構図の特徴から瘤付土器第Ⅳ段階である（小林 2010：232）。美々 4 遺跡 395 号土坑墓出土品（鷹野 1989：297-No. 12・24、第 I-14 図 14・16 参照）が、大洞 B1 式並行期であることは既述した。

阿部（2008）の三ツ谷式古・新段階は、下記のような課題が残る。①堂林式新段階、及

び三ツ谷式古・新段階は、いずれも瘤付土器第Ⅲ段階並行期の資料が主体である。②三ツ谷式新段階と御殿山式古段階に分けた湯の里3遺跡C群土器(阿部2008:図2-51~56)は、遺物包含層出土ながら瘤付土器第Ⅲ段階並行期のまとまりが看取される資料である(鈴木1999)。③同氏の御殿山式古・新段階にも瘤付土器第Ⅲ段階並行期資料が少なからず含まれている。この点については、後述する。

(2) 御殿山式

当式は、朱円周堤墓の栗沢式とほぼ並行する年代のものとして「静内御殿山式」として初出するとみられる(静内町教育委員会1954:41-42)。その後、河野・藤本(1961:23-26)は、「第1群土器を御殿山Ⅰ式、第2群土器を御殿山Ⅱ式とする」とした。第1群土器(河野・藤本1961:図7-1~11・13, 図8-14・15)は堂林式などを含む。第2群土器(河野・藤本1961:図7-12⁽¹¹⁾, 図8-16~23)は、瘤付土器第Ⅳ段階並行期やそれに先行する資料を含む。一方、藤本(1961:55)の論考では、「第3号墳に副葬されてあった土器(主として第2群土器)をタイプとして呼称されている御殿山式土器」とある(第I-13b図1~4参照)。河野・藤本(1961)の論考では、御殿山Ⅰ・Ⅱ式があり、かなり時期幅がある。藤本(1961)の論考では、瘤付土器第Ⅳ段階並行期として時期が限定されることになる。

御殿山遺跡の報告書が未公開なことも一因とみられるが、今日では、御殿山式は研究者によりその時空間的位置づけは様々である。御殿山遺跡の報告当初から、第2群土器は安行1式~3a式に類似点があるとされ、縄文時代後期末、あるいは晩期初頭に位置づけられていた(河野・藤本1961:27, 静内町教育委員会1954:42)。近年でも御殿山式は縄文時代後期末~晩期初頭の土器群とする見解がみられる(関根2007, 福田2003)。関根(2007)は、カリンバ遺跡出土品をもとに御殿山Ⅱ式は後期末と晩期初頭(晩期1a期)に細分可能とする。関根(2007:図8)の「後期末」は瘤付土器第Ⅲ段階並行期に位置づけられるカリンバ遺跡30・80・111号土坑墓出土品(第I-12図1~11), 瘤付土器第Ⅳ段階並行期に位置づけられるカリンバ遺跡118号土坑墓出土品(第I-13a図24~27)を含むので2時期に分離される。また、晩期1a期の標本図の多くは、遺物包含層出土品で、瘤付土器第Ⅲ段階並行期(関根2007:図8-31), 瘤付土器第Ⅳ段階並行期(関根2007:図8-33・37)の資料を含む。関根(2012)は、その後、北海道中央部の晩期1a期には東三川Ⅰ式古段階を相当させている。この評価については、後述する。

鷹野(1989)の御殿山式は、ほぼ瘤付土器第Ⅳ段階並行期と同じ内容であるが、前後する土器が若干含まれる。既述の通り、湯の里3遺跡出土品(鷹野1989:297頁No.27・28・38)は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期である。美沢1遺跡出土品(鷹野1989:297頁No.50)は、大洞B式並行期である⁽¹²⁾。

阿部(2008)は、御殿山式を古・新段階に分け、その古段階は柏原Ⅲ式の大部分、新段階は柏原Ⅳ式を相当させる。この細分案は、後述する柏原式編年案に依拠したため、御殿山式古・新段階ともに瘤付土器第Ⅲ段階並行期(阿部2008:図2-78・79・80・81・85・92・

93・94)と瘤付土器第Ⅳ段階並行期(阿部 2008:図 2-87~90・96~98)の資料が含まれている。

このように、御殿山式は研究者により幅広い意味で使われているので、依拠する基準資料の提示と定義が必要であろう。既述の通り、御殿山遺跡 3 号配石墓出土品は、瘤付土器第Ⅳ段階並行期の一括資料である。北海道東部の並行する資料は、朱円周堤墓 A 号 1 号墓出土品であり、当該地域の資料については、栗沢式が用いられることが多い。栗沢式を用いる場合は、御殿山式と時空間的にどのように違うのか、説明されるべきであろう。

(3) 美々4式

美々4式は、美々4遺跡と美沢1遺跡の墳墓出土品、及び同遺跡包含層資料をもとに設定された(林 1983)。美々4式は、当初、晩期初頭の土器型式として設定され(林 1983)、その後、設定者自身によりその存在が撤回されたが(林 1998)、その標識資料とされた美々4遺跡と美沢1遺跡の墳墓出土品、及び同遺跡包含層資料は、時期幅があるにもかかわらずいまだに単一時期とする説もみられる。本稿では、土器の時期比定が可能な有文土器が出土し、型式名の由来となった美々4遺跡 M-3~M-7 墳墓付近出土資料を検討対象とし、同遺跡包含層資料は検討対象外とする。なお、美々4遺跡における「M」とは、火山灰を人為的に盛り上げたマウンドの呼称で、M-2, M-3, M-4, M-6 から人骨、あるいはその痕跡が確認され、墳墓であることが判明しているが、M-1, M-5, M-7 から人骨は出土していない(北海道教育委員会 1977b)。

M-3 からは、瘤付土器第Ⅳ段階並行期に特徴的な入組文を施した浅鉢が出土している(北海道教育委員会 1977b:図 100-1)。M-5 出土品は、瘤付土器第Ⅳ段階並行期の深鉢(北海道教育委員会 1977b:図 103-2)と壺・注口土器(北海道教育委員会 1977b:図 103-4・5・13~15)、大洞 B2 式並行期の鉢(北海道教育委員会 1977b:図 103-7)と注口土器(北海道教育委員会 1977b:図 103-12)の少なくとも 2 時期の資料が含まれる。M-5 下位の層準である M-5 下からは、大洞 B2 式の広口壺(北海道教育委員会 1977b:図 105-1)が出土している。このように M-5 では、瘤付土器第Ⅳ段階並行期の土器が上位の層準から、大洞 B2 式並行期の土器が下位の層準から出土し、層位的な逆転現象が認められる(鷹野 1989)。M-6 からは、瘤付土器第Ⅳ段階並行期の広口壺(北海道教育委員会 1977b:図 102-2)、大洞 B2 式並行期の鉢(北海道教育委員会 1977b:図 102-1)が出土している。M-7 からは、瘤付土器第Ⅳ段階並行期の広口壺が出土している(北海道教育委員会 1977b:図 99-6)。

このように美々4式は、瘤付土器第Ⅳ段階並行期~大洞 B2 式並行期資料を含むことと、基準資料となった M-5 出土品には層位的な逆転現象が認められることから、その有効性はない(鷹野 1989, 林 1998)。むしろ、これらの土器を用いた儀礼が墳墓付近で複数時期にわたり行われたことを示し、その遺跡形成過程を理解する上で重要である。

(4) 柏原Ⅰ～Ⅳ式

柏原Ⅰ～Ⅳ式は、縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけて時期幅のある柏原5遺跡2B層包含層資料をもとに設定されたものである(工藤2000)。柏原Ⅰ式は、堂林3式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期(工藤2000:図1-12・14～17, 図2-19～24・32)が主体で、縄文時代後期中葉の注口(工藤2000:図2-31)なども含まれる。柏原Ⅱ式には、堂林1式(工藤2000:図2-45), 瘤付土器第Ⅲ段階並行期(工藤2000:図2-37～41)が含まれる。柏原Ⅲ式(工藤2000:図3)は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期としてまとまりがみられる。柏原Ⅳ式には、瘤付土器第Ⅲ段階並行期(工藤2000:図4-71・75・79・80・82・83), 瘤付土器第Ⅳ段階並行期(工藤2000:図4-77・85・92・93), 大洞B1式並行期(工藤2000:図4-76)⁽¹³⁾が含まれる。このように、柏原式はそのⅢ式は有効性があるが、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ式の有効性を認めるのは困難である。こうした点を勘案すれば、柏原Ⅲ式だけを単独で用いることは適切でなかろう。

(5) 東三川Ⅰ式

東三川遺跡1964～1966年調査資料は、A群土器(深鉢を主体とする突瘤土器), B群土器(深鉢を主体とする刺突文土器), C群土器(浅鉢, 壺を主体とする精製土器), D群土器(三叉文が施された精製土器), E群土器(沈線文や磨消縄文の有文土器), F群土器(雲形文土器), G群土器(撚糸を口縁に押圧した続縄文前半の土器), H群土器(沈線文などの有文土器), I群土器(縄文地文の粗製土器)に分類された(由仁町教育委員会1969)。東三川Ⅰ式は、A群～E群土器がほぼ共伴関係にあるとし、設定された(由仁町教育委員会1969:52)。また、東三川Ⅱ式はF群土器をもとに大洞C1式に並行する土器型式、東三川Ⅲ式はG・H群土器をもとに続縄文時代初頭の土器型式として設定された。

これらの土器群(A群～I群)に関しては、混在のような形で出土し、確実な土器の型式的変遷といったものを層位的に把握するまでには至らなかったとされる(由仁町教育委員会1969:32・51)。東三川Ⅰ式を大洞B式並行とした根拠は、D群土器にみられる三叉文は大洞B式土器の特徴と判断されたためである(由仁町教育委員会1969:53)。今日の研究状況では、D群土器(由仁町教育委員会1969:図14-29～38)のほとんどは、後期三叉文(小林2010:70-79)が施文されているとみられる。C群土器の中には、瘤付土器第Ⅳ段階並行期の孤線文を施す浅鉢(由仁町教育委員会1969:図14-18), 蕨手状文と三叉状沈刻を施す大洞B1式並行期の注口土器(由仁町教育委員会1969:図14-14・15)などが含まれる。E群土器は、晩期前葉の在地的な文様を施す土器が主体を占めるが、瘤付土器第Ⅲ段階、あるいはⅣ段階並行期の資料(由仁町教育委員会1969:図15-20)も含まれる。以上の点を踏まえると、A群～E群土器は、縄文時代後期後葉～晩期前葉の資料が含まれ、その共伴関係を認めることは困難である。上述した層位的所見は、こうした状況を裏付けるものであろう。

同遺跡の2009年調査E地区出土品にも瘤付土器第Ⅲ段階並行期(由仁町教育委員会

2011:図 23-48～50, 図 24-63), 瘤付土器第Ⅳ段階並行期(由仁町教育委員会 2011:図 22-29, 図 24-68, 図 26-91) と大洞 B2 式並行期(由仁町教育委員会 2011:図 26-90) の資料が含まれ, 時期的に幅がある。これらの点を考慮すれば, 東三川Ⅰ式という名称が縄文時代晩期初頭の土器型式として妥当かどうか再検討されるべきであろう。

佐藤(2008・2010)は, 西島 5 遺跡 MA 盛土遺物集中 1～5・9 出土品とカリンバ遺跡 82 号土坑墓出土品を東三川Ⅰ式古段階, 西島松 5 遺跡 B・C-15 グリッド出土品を新段階に細分し, 前者を大洞 B1 式並行, 後者を大洞 B2 式並行としている。既述の通り, 西島松 5 遺跡 MA 盛土遺物集中 3 は, 大洞 B1 式並行期の資料と判断される。西島松 5 遺跡 B・C-15 グリッド出土品には, 大洞 B1 式並行期(北海道埋蔵文化財センター2004:図Ⅳ-38-180・184・185 など) と大洞 B2 式並行期(北海道埋蔵文化財センター2004:図Ⅳ-36-165) の 2 時期の資料が含まれる。

関根(2012)は, 佐藤(2008・2010)の東三川Ⅰ式の内容を拡大し, N30 遺跡 8・9 層出土品は東三川Ⅰ式古段階の一括資料, 柏原Ⅳ式は東三川Ⅰ式古段階とほぼ同じ内容とみなす。N30 遺跡 8・9 層出土品には, 瘤付土器第Ⅳ段階並行期の深鉢(札幌市埋蔵文化財センター1998:図 119-7, 図 120-15) と堂林式的な平行沈線文を施す深鉢(札幌市埋蔵文化財センター1998:図 118-1・2) が含まれる⁽¹⁴⁾。N30 遺跡 8・9 層出土品は, 瘤付土器第Ⅳ段階並行期と堂林式的な平行沈線文を施す土器の共伴関係, すなわち堂林式的な土器がいつまで継承されるのかという課題が残る, その一括性についてはさらに今後, 検証が必要とされる。柏原Ⅳ式の有効性を認めるのは困難であることは, 既述した。

8. 結語

本稿の前半では, 北海道中央部を中心とした縄文時代後期中葉後半期から晩期初頭の編年について提示し, 後半では, 編年に関する諸説を批判的に検討することで研究史を整理した。本研究の成果を表 1 に示す。本研究により北海道中央部における当該期編年は, かなり整理されたことになる。本稿で分析対象とした資料の性格は様々で, 分析と当該期編年の精度に関与する。縄文時代後期中葉後半期に関しては忍路土場遺跡の層位的資料と近年の蓄積された資料により精度の高い編年の再構築が可能となった。ただし, 忍路土場遺跡出土品は層位的資料とはいえ, 各層準には混在が認められるので, 良好な一括資料により検証を行うことで編年や土器型式に関する同定の精度を高めていく必要がある。堂林式の古い段階は, キウス 4 遺跡の調査によりその様相が明らかになったが, 堂林 1 式の一括資料は同遺跡建物 19 出土品に限られるので, 器種組成を解明することや, その内容を一層明らかにすることが今後の課題である。こうした点を検討するうえで, キウス 4 遺跡盛土下位層準における土器一括(廃棄集中箇所)出土品などの再精査や再検討が期待される。堂林 2 式は一括資料が欠如しており, 器種組成の解明, 及び堂林 1・2 式の細分やその判別方法が今後の課題である。縄文時代後期後葉後半期～晩期初頭の編年は, 層位的資料を欠く一方で, 墓坑出土の一括資料により, 精度の高い編年の再構築が可能となった。ただし,

晩期初頭の在地土器の文様・器形は多様であるとともに、遺跡による大きな変異が看取され、今後さらに詳細な分析が必要である。

本研究による編年再構築の応用は、下記のように多岐にわたる。第一に、住居跡、及び土坑墓の時期比定に有効であることから、集落遺跡、墓地遺跡の時空間的な動態をより正確に把握することが可能となる。北海道中央部の当該期、とりわけ縄文時代後期後葉後半期から晩期の土坑墓からは供献、副葬された土器の事例が豊富であることから、墓域の形成過程をより正確に把握することが可能になるとともに、土坑墓の編年構築に有効である。また、周堤墓の編年構築やその遺跡形成過程についても有効性を発揮するであろう。

第二に、北海道中央部からは、墓坑出土の漆製品、玉類、石製品など縄文社会の進化を検討するための最も重要な資料が出土している。これらの精度の高い時期比定が土器との共伴関係を検討することで可能になり、縄文社会の進化を検討するための基礎的データを提供することとなる。また、本稿で展開した土器の文様分析は、細形石棒に装飾された文様の分析にも有効であり、細形石棒の時期を比定できる事例もある（坂口 2014）。土坑墓における細形石棒と土器の共伴関係を検討することで、細形石棒の編年構築にも有効である。

第三に、当該期の編年が再構築されたことで、周堤墓形成期における土器製作の地域性も明らかになってきた。こうした地域性は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期～大洞 B 式並行期にかけて顕著になる傾向が看取される。縄文時代後期後葉から晩期前葉にかけて、それぞれの地域集団にかかわる土器制作者／集団の存在が想定される。北海道中央部では、壺・注口土器を供献、あるいは埋葬儀礼に用いるのは縄文時代後期中葉以来の伝統であり、こうした埋葬儀礼に土器制作者／集団も関与していたであろう。そのピークは事例の多さから瘤付土器第Ⅲ・Ⅳ段階並行期にあると推定される。葬送儀礼は地域集団の威信を示す場でもあるから（Hayden 2009）、威信技術としての土器製作技術を保持する当該期における土器制作者／集団の社会経済的役割は大きかったであろう。周堤墓形成期の背景にあるポリティカル・エコノミーを支える工芸集団としての土器制作者／集団の存在を視野に入れるべきであろう。

また、瘤付土器第Ⅲ段階並行期～大洞 B1 式並行期にかけて、大きく太平洋側と内陸側で文様の表現や選択に関する地域性が看取された。瘤付土器と亀ヶ岡式の文様・手法を部分的にはあるが直接的に取り入れる土器制作者／集団と間接的、あるいは大きく変容させる土器制作者／集団の存在を予測させる。こうした現象は、東北地方からの土器搬入品の粗密とも関係するものであろう。北海道中央部の太平洋側には、既述した柏原 5 遺跡出土の亀ヶ岡式に示唆されるように、北東北地方からの搬入品が少数ながら分布する傾向がみられる。物質文化の搬入品に関する分布の粗密は地域集団間の社会的関係を示すので

（Trubitt 2003）、特に北東北地方の地域集団と北海道中央部太平洋側の地域集団との関係が示唆される。こうした背景をもとに両地域集団のアイデンティを継承する社会的にハイブリッドな個人／集団の存在も想定されよう。また、上述した土器の地域性、土器搬入品の粗密や遺跡の立地は、当該期の海岸部から内陸への交易ルートとそれらをめぐる地域集

団間のポリティカル・エコノミーが関与していたと予察される。

当該期の土器研究は、精度の高い編年をもとに周堤墓形成期における地域集団の形成やポリティカル・エコノミーにアプローチする方法となりうる。本研究成果の応用を次に展開していくこととし、本稿を閣筆する。

注

- (1) ただし、同報告書中の周堤墓一覧では、キウス4遺跡の周堤墓の時期は、堂林式期とされている（北海道埋蔵文化財センター 2003b：75-76）。キウス4遺跡の発掘調査関係者の間でも編年、及び周堤墓の時期比定に関しては意見の相違がみられるようである。
- (2) 以下、文様帯、及びその記号については山内清男（1964）に準拠する。
- (3) 手稲遺跡からは、後述する手稲式の古段階（第I-3a図9、大場・石川 1956：図12上端2点の波状口縁深鉢）、中段階（第I-3a図5）、新段階（大場・石川 1956：図25・26の大多数）が出土している。手稲遺跡出土品は、手稲記念館で所蔵展示されている。同館では完形、半完形を中心とする資料が所蔵され、その中には『手稲遺跡』（大場・石川 1956）には未報告の資料も含まれる。同館のご厚意により実見させていただいた。なお、幣舞式注口土器については、高瀬克典氏からご教示いただいた。
- (4) 2nd 出土品は、本文で既述の通り、Ⅲc 層に由来する手稲3式が混在している可能性があるため、忍路土場遺跡Ⅲa層出土品を鮎潤式の標識資料に位置づけたい。
- (5) 盛土S層出土品の層位については、報告書の本文・図と表に一部齟齬がみられる（北海道埋蔵文化財センター 1998b）。本稿では、本文・図の層位に依拠している。
- (6) 直立した注口を陰茎とみたと、その下部に陰囊が表現されていると判断できるものをファロス付注口土器と呼称する（坂口 2013）。
- (7) 西島松5遺跡506号土坑墓には、第I-13a図20・21が供献され、共伴関係にあると判断されることから図を掲載している。同土坑墓から出土した広口壺（北海道埋蔵文化財センター2009：図126-7）は、その破片のほとんどが遺構確認以前の遺物包含層から発見されていることから（北海道埋蔵文化財センター 2009：80）、本稿では検討対象外としている。
- (8) 本資料については、小林圭一氏からご教示いただいた。
- (9) 美々4遺跡395号土坑墓出土品については、小林圭一・中門亮太氏からご教示いただいた。
- (10) 第I-14図18と22、第I-14図17と『恵庭市内遺跡発掘調査等報告書1』（恵庭市教育委員会 2015）図Ⅱ-20-12、第I-14図20と同報告書図Ⅱ-19-6は接合しないが、それぞれ同一個体である。恵庭市教育委員会のご厚意により実見した。第I-14図22は底面、第I-14図17・18・23は覆土下位、第I-14図19～21は覆土上位、第I-14図24は覆土（一括）出土で（恵庭市教育委員会 2015）、時期的にまとまりのある資料とみられる。
- (11) 河野・藤本（1961）は、23頁で既に「第1群土器（図7-1～11）」としているため、

「第2群土器（図7-5～12，図8-16～23）」の「図7-5～12」は，図7-12の誤記とみられる。本稿では，図7-12で解釈する。

(12) 本資料については，小林圭一・中村大氏からご教示いただいた。

(13) 本資料については，小林圭一氏からご教示いただいた。

(14) 『N30 遺跡』（札幌市埋蔵文化財センター1998）図119-7には，瘤付土器第Ⅳ段階並行期に特徴的な七宝繫状文が施されている。同報告書図120-15の主要モチーフは，三叉状陰刻を対置させることで描出された楕円文に縦位列点文を付加し，周りに七宝繫状の磨り消された弧線文（磨り消しが不十分な箇所もある）を展開させている。さらに主要モチーフ両側の2段の円状文様周囲に三叉状陰刻・沈刻を巡らせることで，連続的かつ副次的なモチーフを造形している。主要モチーフ，副次的なモチーフともに規則性がみられず変則的である。こうした楕円文の両側に三叉状陰刻を対置させるモチーフや円状文様周囲に三叉状陰刻・沈刻を巡らせる手法は，瘤付土器第Ⅳ段階に広く用いられる手法であることから（小林2010：図29；第I-13a図22・32・34，第I-13b図9参照），当該期と判断される。ただし，七宝繫状の弧線文が閉じ気味で扁平化している点などに大洞B1式並行期への過渡的様相もうかがえる。

第Ⅱ章 周堤墓形成期の墓と副葬・供献品の編年と変遷

より精度の高い土器編年が確立したことで、当該期の土器を伴う墓や副葬・供献品の編年の確立も可能となった。前章では、土器編年を確立するために時期比定の比較的容易な有文土器を伴う一括資料を中心に検討した。石狩低地帯には、有文土器を伴う一括資料のほかに無文土器の良好な一括資料や土器が単体で副葬、供献された例もある。また、土器の共伴関係に加え、細形石棒に陰刻された文様から、時期比定が可能なものもある。本章の1節では、前章で確立した土器編年をもとに石狩低地帯で副葬・供献品としての土器が伴う墓と細形石棒に陰刻された文様から時期比定できる墓を集成し、縄文時代後期後葉～晩期初頭における墓、及び出土品の編年を提示する（第Ⅱ-1～19図）。また、前章で漏れた資料を中心にその時期比定に関する根拠について解説し、補遺とする。2節では、これらの成果をもとに墓の形態、副葬品の組成に関する変遷と所見を示す。本章で得られた成果が、第Ⅲ章における周堤墓の編年と墓域形成過程、及び第Ⅳ章における周堤墓形成期の地域集団の動態を検討するうえで基礎となる。

1. 前章の補遺

（1）土器の副葬・供献品から時期比定できる墓

堂林1式

美々4遺跡325号墓の細口壺形の注口土器は、胴部が張る器形で、胴部に施されたやや細めの襷掛け状文や短小化がみられる注口の形状から堂林1式に比定される（第Ⅱ-1図）。

堂林3式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期

柏木B遺跡2008号墓出土品（第Ⅱ-2図）は、波頂の下に縦位沈線、胴部から底部に横位の沈線で区画された文様帯に弧線沈線文が充填された波状口縁浅鉢である。波状並行沈線下に縦位沈線を垂下させる手法は、柏木B遺跡の瘤付土器第Ⅲ段階並行期の深鉢にしばしば看守されることから（恵庭市教育委員会 1981：図461-1・3など）、2008号墓出土品も当該期まで下る可能性を示唆する。末広遺跡2号周堤墓1号墓出土の注口土器（第Ⅱ-2図）は、細口の口縁部は弱く外反し、頸部～胴部にかけて刺突を施した貼瘤を起点に横位の弧線沈線文が充填されている。

西島松5遺跡750号墓出土のNo.1深鉢には、口縁部から胴部に計6条の沈線文（上位は波状沈線文、下位は並行沈線文）が施されている（第Ⅱ-2図）。No.3の口縁部を欠損した鉢胴部には、太めの3条並行沈線が施されている。No.2の注口土器口縁部には凹線に近い2条並行沈線、胴部には4本の縦位沈線をずらしながら2段に配置している。杵状に縦位沈線を垂下させる手法は、柏木B遺跡の瘤付土器第Ⅲ段階並行期資料にしばしば看守され（第Ⅱ-3図の柏木B遺跡365号墓出土品、第Ⅱ-4図の柏木B遺跡2004号墓出土品など）、750号墓出土品も当該期まで下る可能性を示唆する。同遺跡558号墓出土の推定16単位の波状

口縁を呈する鉢には、波頂沿いに太い1条波状沈線（所により2条波状沈線で、変則的である）、その下部に縄文帯、胴部から底部にかけての幅広な文様帯には弧線文が充填されている（第Ⅱ-2図）。

瘤付土器第Ⅲ段階並行期

既述の通り、当該期は、器種を越えて弧線文、貼瘤、刻目が文様装飾手法として多用される。柏木B遺跡448号墓出土の深鉢口縁部には、磨消しによる縦位の弧線文やクランク状弧線文を不規則にアレンジした文様が施されている（第Ⅱ-3図）。西島松5遺跡445号墓出土品は、マクレ状刻目で区画された文様帯に太めの沈線で雑描きの弧線状の文様が描かれた片口土器である（第Ⅱ-4図）。美沢1遺跡119号墓出土の鉢には、磨消し文様の三叉状や逆「J」字状の非定型的な弧線文が施されている（第Ⅱ-8図）。

墓の供献品には、特に注口土器、壺が選択される傾向があることは既述した。カリンバ遺跡62号墓出土の細口壺胴部には、貼瘤を起点として重弧状の磨消し文様が連結され、その上下隙間にも向かい合うように三角形の磨消し文様が施されている（第Ⅱ-5図）。柏木B遺跡2004号墓出土の広口壺（第Ⅱ-4図）には、波状口縁部に沿い2条の並行沈線とそれに垂下する2条の縦位沈線、頸部から胴部には2段の「ハ」の字刻目を充填した三角連係文とやや粗雑な横位の「ハ」の字刻目列、底部には弧線沈線文が2段充填されている。同遺跡365号墓出土の壺口縁部（第Ⅱ-3図）には、「()」状文の両側に三叉状のネガ文様を施すことで弧線連結文的なモチーフが描かれ、胴部にも弧線文が施されている。美々4遺跡X208号墓出土の壺胴部文様帯には、類似する三叉状のネガ文様を用いることで、弧線文が展開している（第Ⅱ-7図）。柏木B遺跡1106号墓出土の注口土器（第Ⅱ-4図）には、人面付き注口、及び「()」状文の両側に「<>」状弧線文を配することで菱形状文を胴部に展開させている。

西島松5遺跡455号墓出土の広口壺形の注口土器（第Ⅱ-5図）には、口縁部と胴部の文様帯（縦位沈線と貼瘤で枠状に区画している）に連弧文が充填され、注口基部には「○」状微隆帯と貼瘤が配されている。同遺跡772号墓出土の広口壺（第Ⅱ-5図）には、頸部と胴部の上下沈線で区画された文様帯に「Y」字状の沈刻を向かい合わせた菱形状の文様が充填されている。頸部の文様帯は、「○」状微隆帯の両側に「Y」字状の沈刻を配置することで文様としての効果を出している。

柏木B遺跡1号周堤墓1003号墓出土の広口壺は、口縁部と肩部に2条の並行沈線が施されるとともに、縦位の凹線が施された縦長の大きな貼瘤が肩部に付けられている（第Ⅱ-4図）。ずんぐりした器形、口縁・肩部の2条並行沈線、及び貼瘤の特徴から瘤付土器第Ⅲ段階並行期とみられる。同遺跡417号墓出土の鉢（第Ⅱ-3図）も屈曲部に施された並行沈線、弧線沈線文、及び縦長の大きな貼瘤から瘤付土器第Ⅲ段階並行期とみられる。

BS3周堤墓3号墓出土の深鉢（第Ⅱ-7図）は、下記の特徴から瘤付土器第Ⅲ段階並行期に比定される公算が高い。①器壁が薄く、肩部の屈曲が弱くなる器形で、口縁部突起内側

には太めの 3 条の縦位沈線が施されている。②Ⅱa 文様帯には「X」状沈線文、Ⅱ文様帯には確認できる限り 2 条の並行沈線が施されている⁽¹⁾。「X」状沈線文に類似する文様は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期のまとまりが看取される BS4 出土品にも認められる（北海道教育委員会 1981a：図 83-7）。③BS3 出土品（第Ⅰ-12-36・37 図）には、瘤付土器第Ⅲ段階並行期のまとまりが看取されることは既述した。しかもこれらの多くが堅穴（溝）床面、あるいは床直上から出土しており⁽²⁾、時期的に整合的である（北海道教育委員会 1981a：139）。

柏木 B 遺跡でマクレ状刻目が施された深鉢が多数出土していることは、前章で既述した。第Ⅱ-3 図にそれらに関連する墓を掲載している。383 号墓出土の深鉢口縁部には 3 列のマクレ状刻目、401 号墓出土品には 2 列のマクレ状刻目が施されている。両土器ともに突瘤が施されている。401 号墓からは、波頂沿いに 5 条の波状沈線文が施された波状口縁深鉢の大形破片も出土しており、時期的に整合的である。

瘤付土器第Ⅳ段階並行期

カリンバ遺跡 124 号墓出土の注口土器（第Ⅱ-12 図）の口縁部は花卉状を呈し、頸部に大形の眼鏡状隆帯と貼瘤を付している。胴下部には七宝繫状文の両側に 2 単位の孤線文、あるいは三叉状陰刻を配するモチーフ、胴上部には雑描きの弧線沈線文を施している。同遺跡 123 号墓出土の注口土器（第Ⅱ-14 図）は、口頸部が長く、胴部に最大径がある器形で、ボタン状の底部は強い上底である。口頸部に 2 段の眼鏡状隆帯が付され、注口基部両側に三叉状陰刻が施されている。美々4 遺跡 396 号墓出土品（第Ⅱ-15 図）は、口縁部、胴部、及び注口周囲に装飾的な突起、頸部と胴部に横位の列点状刺突を施し、アクセントを加えている。

西島松 5 遺跡 433・487・508 号墓出土品、美沢 1 遺跡 23 号墓出土品（No. 1・2）は、前章で指摘した瘤付土器第Ⅳ段階並行期の特徴を有する無文の注口土器、及び壺である。西島松 5 遺跡 433 号墓出土品 No. 1（第Ⅱ-12 図）は、ラッパ状口縁部に陰刻を施した装飾的な突起、頸部に眼鏡状隆帯を付している。487 号墓出土品（第Ⅱ-11 図）は、胴部下半に最大径があり、上底が特徴的である。508 号墓出土品 No. 1（第Ⅱ-9 図）は、短小細口の口縁部、胴部が幅広で、ボタン状を呈する底部の注口土器である。No. 2 は、口縁部が垂直に近く立ちあがり、胴部下半に最大径がある。底部は欠損しているが、剥離の痕跡からボタン状を呈するとみられる（北海道埋蔵文化財センター 2009a：81）。No. 4～6 などの鉢、及び高坏状土器の口縁部には大きめの突起が装飾的に施され、同墓出土品は当該期の良好な一括資料である。美沢 1 遺跡 23 号墓出土品 No. 1（第Ⅱ-15 図）は、底部がすばまり強い上底が特徴的である。No. 2 は、胴部下半に最大径があり、底部は丸底である。頸部に 4 単位の刺突を施した貼瘤を付し、注口基部に刺突を加えている。同墓出土品は、当該期の副葬・供献品の組成がうかがえる良好な一括資料である。

瘤付土器第Ⅳ段階～大洞B式並行期

柏木B遺跡 436 号墓出土の 2 窓式香炉形土器⁽³⁾の口唇部には向かい合わせの三叉状陰刻（第Ⅱ-16 図写真 1a）、頸部上側に列点文、その下部から弧線入組文が側面の瘤状突起に向けて配され（第Ⅱ-16 図写真 1c・d）、側面の列点文と弧線入組文の隙間には下向きの三叉状陰刻が施されている（構図がやや変則的で、左側面では三叉状陰刻が列点文上に施されている）。弧線入組文の下部には、透かし彫りによる向かい合わせの三叉文が加えられた入組文が配されている。No. 2 の台付鉢底部には、綾杉状文様が横位に充填され、同文様は第 I-13a 図 10 にみられるような縦位の入組文の変異とみなすこともできる。これら 2 点は覆土出土とされ（上屋・木村 2016: 224、256）、436 号墓に伴うとすれば同墓は当該期に比定される。

カリンバ遺跡 82 号墓出土の壺 No. 1（第Ⅱ-16 図）は、口縁部に並行沈線、頸部に眼鏡状隆帯（?）、胴部には渦状沈線文の間を弧線文で連結し、連結部の上には傘状弧線文を施した構図を展開させている。鉢 No. 2 の構図は、向かい合わせの 2 単位の孤線文間に三叉状陰刻を対置させるのが基本構図とみられるが（第 I-13a 図 9 にも看守される）、その一部のみに玉状磨消し縄文が看守される（土器正面と推定される）。文様割付が粗雑なこともあり、2 単位の孤線文と三叉状陰刻が対置されることなく連結されたり、2 単位の孤線文がくずれたり構図は変則的である。刺突を加えた口縁部の山状突起の類例は、第 I-13a 図 18 にみられ、瘤付土器第Ⅳ段階並行期にみられる特徴が各所に看守される。その一方で、口縁部に並行沈線、2 列の刺突列を施した鉢 No. 4 には、大洞 B 式並行期の様相もうかがえる。

西島松 5 遺跡 432 号墓出土の注口土器 No. 3 は、口縁部、頸部、胴底部から構成される 3 段作りの器形で、底部は丸みを帯びた平底である（第Ⅱ-17 図）。頸部縄文帯の下部に縦長の刻目、注口基部の両側に三叉状陰刻、及び基部片側に「の」字状微隆帯、その反対側には楕円状の磨消縄文が施されている。同墓からは、片口の鉢 No. 1、口縁部が内湾する器形の鉢 No. 2、口縁部の屈曲の強い広口の小形壺 No. 4 も出土している。

大洞B式並行期

美々4遺跡 334 号墓出土の注口土器（第Ⅱ-18 図）の口縁部と胴上部には、横「人」字状の三叉文を連結し、胴部中央には菱形沈線文と渦巻沈線文を横位沈線で連結した構図が施されている。口縁部、胴部の構図から、大洞 B 2 式並行期に比定される。同遺跡 118 号墓出土の深鉢（第Ⅱ-19 図）は、破線状の沈線により区画された胴部文様帯に大洞 B 2 式に特徴的な入組三叉文が充填されていることから、当該期に比定される。

（2）土器文様を転移した細形石棒から時期比定できる墓の事例

キウス周堤墓群 4 号周堤墓外縁部墓

墓底面から出土した細形石棒（第Ⅱ-8 図、第Ⅲ-2 図）の頭部文様から瘤付土器第Ⅲ段階並行期に比定されることについては、既に論じたことがあるので参照されたい（坂口 2014）。

柏木 B 遺跡 1 号周堤墓 1008 号墓

墓底面から有頭と無頭の 2 本の細形石棒が出土している（第Ⅱ-19 図）。有頭の細形石棒頭部には、三叉文どうしの間隔が空き、咬み合わずに双方向に延びた左下りの入組三叉文が沈刻されている。同入組三叉文は、大洞 B2 式に特徴的な文様であることから、本土坑墓は当該期に比定される。

カリンバ遺跡 75 号墓

墓底面から 2 本の細形石棒が出土している（第Ⅱ-19 図）。単頭の細形石棒の頭部には、鋸歯状文様、その下部には大洞 B2 式の入組三叉文がくずれて変形した渦巻文様が沈刻されているものとみなし、当該期と判断した。

2. 墓と副葬・供献品の編年と変遷

（1）土坑墓の形状

堂林式前半期（堂林 1・2 式期）

美々 4 遺跡 325 号墓（第Ⅱ-1 図）からは、伸展葬の人骨、及び覆土から逆位の注口土器が出土している（北海道埋蔵文化財センター 1984: 322）。当該期で土器が供献された墓は、同墓に限られるため、周堤墓の竪穴床面出土品により、周堤墓の時期比定が可能なキウス 4 遺跡 X11・X12 周堤墓、及び美々 4 遺跡 X9 周堤墓から土坑墓の形状に関する所見を述べる。堂林 1 式に比定されるキウス 4 遺跡 X12 周堤墓 X1201 号墓の平面形は、楕円の細身で深度も深く伸展葬とされる。周堤内竪穴床出土品から堂林 2 式に比定される X11 周堤墓の X1101 号墓の平面形は楕円の細身で、深度も深い（北海道埋蔵文化財センター 2000a）。総じて、キウス 4 遺跡周堤墓で堂林式前半期に対比が可能な第 1 群周堤墓（X12～X15）、第 2 群周堤墓（X11）の主体となる埋葬法は伸展葬で（北海道埋蔵文化財センター 2000a）、それに対応するように土坑墓の平面形は楕円の細身で、深度も深い傾向が看守される（藤原 2000b）。

美々 4 遺跡 X9 周堤墓（後述する通り、堂林 2 式に比定される）土坑墓の形状は、平面形楕円の細身で深度も深い点で共通している。X904 号墓被葬者の埋葬姿勢は伸展葬で、その他の X901～903・905 号墓の被葬者も規模や遺体層から伸展葬とされる（北海道埋蔵文化財センター 1986）。

堂林 3 式期～瘤付土器第Ⅲ段階並行期

堂林 3 式期で土器が供献されているのは末広遺跡 2 号周堤墓 1 号墓で、当該期の土坑墓の形状を検討するうえで基準となる（第Ⅱ-2 図）。また、同遺跡 2 号周堤墓の竪穴床面出土の深鉢（千歳市教育委員会 1981: 図 105-6）も堂林 3 式に比定され、1 号墓出土の注口土器と時期的に整合的である。同遺跡 2 号周堤墓の土坑墓の平面形は、不整の楕円が一般的で、隅丸方形もしくはそれに近い楕円（小判形）が増える。堂林 1・2 式期にみられた平面形が

細身の土坑墓は減少し、短軸がやや幅広になるとともに、深度もやや浅くなる傾向が看守される（千歳市教育委員会 1981）。

既述の通り、柏木 B 遺跡 2008 号墓、西島松 5 遺跡 558・750 号墓は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期まで下る可能性がある（第Ⅱ-2 図）。柏木 B 遺跡 2008 号墓の深度は深い、その平面形は長軸幅に対し短軸幅が長くなることで隅丸方形状を呈する。西島松 5 遺跡 558・750 号墓の平面・断面形は不定形化が進むとともに、深度も浅くなる点に後述する瘤付土器第Ⅲ段階並行期の特徴が看守される。

瘤付土器第Ⅲ段階並行期

当該期から土器の副葬・供献が顕著になるため、墓の時期比定が可能な事例も増える。また、遺跡間、遺跡内で差異が顕著となる。柏木 B 遺跡 1 号周堤墓 1106 号墓は、長軸に対し短軸がやや幅広な楕円形で、深度は深い（第Ⅱ-4 図）。同周堤墓周堤内竪穴に位置する 1101・1104・1110 号墓、及び同遺跡 2 号周堤墓では 2004 号墓（第Ⅱ-4 図）をはじめ類似する特徴が看守される（恵庭市教育委員会 1981）。一方、1 号周堤墓の周堤に位置する 1003 号墓は、長軸に対し短軸がさらに幅広で、平面形が楕円形で丸みを帯びるようになり、深度は浅くなる（第Ⅱ-4 図）。このような傾向は、西島松 5 遺跡 455 号墓でも看守される（第Ⅱ-5 図）。柏木 B 遺跡第Ⅱ地点の墓は、1 号周堤墓 1003 号墓の形状に類似する 383 号墓もみられるが、401・417・447 号墓のように長軸・短軸がほぼ同じ円形のものが現れ、深度もさらに浅くなる傾向が看守される（第Ⅱ-3 図）。

美々 4 遺跡 X2 周堤墓の造成時、竪穴内に設けられたとされる X201・203・204・206～208・212～218・220・222 号墓は、208 号墓をはじめとして伸展葬に対応した長楕円形を呈し、深度も深い傾向がある（第Ⅱ-7 図、第Ⅲ-7 図参照、北海道埋蔵文化財センター 1984）。一方、同周堤墓の周堤に設けられた 378 号墓は長軸に対し短軸が幅広な楕円形で、深度も浅い（第Ⅱ-7 図）。BS3 周堤墓の土坑墓の形状は、上記 X2 周堤墓の造成時、竪穴内に設けられたとされるものと相違が看守される。BS3 周堤墓の墓は 3 号土坑墓（第Ⅱ-7 図）をはじめ規模から屈葬主体とみられ（北海道教育委員会 1981a）、埋葬法の相違が形状に反映されているのであろう。

美沢 1 遺跡 JX3 周堤墓では 106 号墓（第Ⅱ-8 図）のように、平面形が長楕円形で断面細身の土坑墓（規模から伸展葬）がある一方で、規模から屈葬の土坑墓も混在しているとみられる（北海道教育委員会 1979b）。

このように遺跡間、遺跡内で土坑墓の形状が多様化する背景には、当該期に伸展葬、屈葬、合葬など様々な埋葬法が併存し、それらに適した形状が選択されたためとみられる。

瘤付土器第Ⅳ段階並行期

美々 4 遺跡 X3 周堤墓 X308～314 号墓（南群）の X310・311 号墓は、供献された土器から当該期に比定される好例である（第Ⅱ-15 図）。上述した X2 周堤墓 X208 墓のような細長楕

円形の形状がみられなくなり、小判形楕円、円形が主体となる。伸展葬が減少し、屈葬が主体となるためとみられる。瘤付土器第Ⅲ段階並行期に比定される可能性が高い X301～307 号墓（北群）に比べ、深度が浅くなる傾向がみられる（北海道埋蔵文化財センター 1984）。そうした傾向は、美沢 1 遺跡 23・38 号墓（第Ⅱ-15 図）、西島松 5 遺跡 398・431・526 号墓、カリンバ遺跡 126 号墓でも看守される（第Ⅱ-10～12 図）。

なお、当該期から様々な墓が現れる。柏木 B 遺跡 436 号墓（第Ⅱ-16 図）は、土坑墓の周りに竪穴状の掘込みがあり、その周囲に板状礫が配されていたとみられ、同遺跡の瘤付土器第Ⅲ段階並行期における立石や配石の伝統が継承されている（恵庭市教育委員会 1981）。美々 4 遺跡では、瘤付土器第Ⅳ段階～大洞 B2 式並行期に火山灰を人為的に盛り上げたマウンドを伴う墓が検出されている（第Ⅲ-12 図）。対岸の美沢 1 遺跡でも当該期の可能性のあるマウンドが形成されている（第Ⅲ-15 図）。

大洞 B 式並行期

瘤付土器第Ⅳ段階並行期の形状が継承され、小判形楕円、円形主体で、深度も浅い土坑墓が普及する（第Ⅱ-19 図）。規模から屈葬が主体とみられ、それに対応した形状を反映しているであろう。美々 4 遺跡 334 号墓は、上述の火山灰を人為的に盛り上げたマウンドを伴う墓の好例であろう（第Ⅱ-18 図）。

（2）墓標の位置

墓標とは、石製墓標、あるいは木製墓標用のピットが土坑墓内、あるいは外に検出されているもののことである。墓標の位置については、乾（1981）の分類を参照し、下記のような分類を行うとともに、土器の共伴関係から時期比定を検討した。土坑墓内で墓標が検出されたものを I、外で墓標が検出されたものを O、土坑墓長軸端に接して検出されたものを E、土坑墓内・外で墓標が検出されたものを IO とし、墓標の位置をアルファベット、検出された墓標の本数をアラビア数字で表記することとした（第Ⅱ-20 図）。この分類に基づき、墓標が検出されている土坑墓について一覧表を作成した（第Ⅱ-1 表）。

I1—土坑墓の長軸内側で墓標が 1 本検出されたもの

I2—土坑墓の長軸内側で墓標が 2 本検出されたもの

E1—土坑墓端長軸に接して墓標が 1 本検出されたもの

E2—土坑墓端長軸に接して墓標が 2 本検出されたもの

O1—土坑墓の長軸外側で墓標が 1 本検出されたもの

O2—土坑墓の長軸外側で墓標が 2 本検出されたもの

IO1—土坑墓の長軸内・外側で墓標が各 1 本検出されたもの

IOE1—土坑墓内側で墓標が 1 本、土坑墓端長軸外に接して墓標が 1 本検出されたもの

I は、キウス 4 遺跡では周堤墓第 1・2 群の堂林式前半期の周堤墓に看守される(藤原 2000b)。美々 4 遺跡の X9 周堤墓(堂林 2 式比定) X901・903・904 号墓から I2 が検出されており、堂林式前半期の特徴が看守される。ただし、I2 は美々 4 遺跡の X2 周堤墓 X208 号墓(瘤付土器第Ⅲ段階並行期)からも検出されていることから、I は X2 周堤墓の関係者には瘤付土器第Ⅲ段階並行期まで継承される。

E は 0 への過渡的形態で、E2 は美沢 1 遺跡 JX3 周堤墓 107 号墓、JX4 周堤墓 101 号墓で検出されている。美々 4 遺跡 X2 周堤墓 X215 墓(次章で後述する通り、周堤墓造成時の墓とされ、瘤付土器第Ⅲ段階並行期に比定される可能性が高い)でも E2 が看守されることから(北海道埋蔵文化財センター 1984)、同周堤墓の造成にかかわる集団には少数ながら I2 とともに用いられている。

I1E1、I101 は 0 2 への過渡的形態で、前者はキウス 4 遺跡 X11 周堤墓 1101 号墓、丸子山遺跡 2 号周堤墓 1 号墓、後者は美沢 1 遺跡 JX4 周堤墓 105 号墓で検出されている。

01 は、堂林 3 式期の末広遺跡 2 号周堤墓 1 号墓(第Ⅱ-2 図)、瘤付土器第Ⅲ段階並行期の柏木 B 遺跡 1 号周堤墓 1106 号墓(第Ⅱ-4 図)で検出されている。02 は、美々 4 遺跡 BS3 周堤墓 3 号墓(瘤付土器第Ⅲ段階並行期)、X3 周堤墓 X310・311 号墓(瘤付土器第Ⅳ段階並行期)で検出されている(第Ⅱ-7・15 図)。

美沢 1 遺跡 JX4 周堤墓(後述する通り、116 号墓は堂林 3 式の可能性が高い)では I 主体、JX3 周堤墓(最も新しく設けられたとみられる 106 号墓が瘤付土器第Ⅲ段階並行期)では 02 主体であることから、本遺跡では I から 0 への変化は堂林 3 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期に起きていたと考えられる。

美々 4 遺跡 X2 周堤墓における周堤墓の造成時の土坑墓とされる X201・203・204・206～208・212～218・220・222 号墓(後述する通り、瘤付土器第Ⅲ段階並行期の可能性が高い)では、X204、X206、X208、X212、X214、X216、X218 号墓で I、X213、X220、X222 号墓で 0 が検出されていることから、瘤付土器第Ⅲ段階並行期に I から 0 へ変化していると考えられる。同周堤墓の周堤内堅穴に覆土が形成される過程で設けられたとされる X202・205・209～211・219・221 号墓(後述する通り、瘤付土器第Ⅳ段階並行期の可能性が高い)では、墓標は検出されていない。

X3 周堤墓では、北群 X301～307 号墓(後述する通り、瘤付土器第Ⅲ段階並行期と考えられる)と南群 X308～314 号墓(X310・311 号墓が瘤付土器第Ⅳ段階並行期である)ともに 02、あるいは 02? が検出されている。瘤付土器第Ⅳ段階並行期には、美々 4 遺跡内でも墓標が継承される集団(X3 周堤墓南群 X308～311 号墓の多くで確認される)とそうでない集団(X202・205・209～211・219・221 号墓)が存在したとみられる。

柏木 B 遺跡で確認できる墓標は、01、02 である。このように、墓標の位置に関する消長は遺跡間、遺跡内で相違が看守される。

I から 0 への変化は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期頃に起きていたことは上述の通りであるが、こうした変化には埋葬法が関与していたと考えられる。美沢 1 遺跡 JX4 周堤墓では、人骨

が伴う事例から埋葬法と墓標の位置が判明しているものが8例あり、Iで伸展葬のものが87.5%である。同周堤墓で伸展葬が確認された最小規模の119号墓の長軸は、1.79/1.62（上場/下場）mである。この大きさを基準とし、それより大きい土坑墓を伸展葬、小さいものを屈葬とすると、同周堤墓では伸展葬が主体であるのに対し、JX3周堤墓では伸展葬と屈葬が混在しているとみられる（北海道教育委員会1979b）。美々4遺跡X2周堤墓でもIの伸展葬が7例、0の伸展葬は3例が検出されているに過ぎない（北海道埋蔵文化財センター1984）。埋葬法が伸展葬から屈葬に移ることで、墓長軸の狭小化に伴い墓標もIから0へ遷移したとみられる。

上述の通り、美々4遺跡X2周堤墓堅穴内では、I2、02などが検出されている。遺跡内では、墓標の位置に関する情報は土坑墓の構築順序を知る手掛かりになる可能性がある。一方、遺跡間では、その情報は地域差（地域集団による差異）を考慮する必要がある。

（3）副葬・供献品の変遷と組成

堂林式前半期（堂林1・2式期）

堂林1式注口土器の供献例が美々4遺跡325号墓に1例あることは既述した（第Ⅱ図1）。注口土器が覆土から逆位で出土しており、同遺跡の縄文時代後期中葉墓群の第3群149号墓（第Ⅲ-6図、北海道埋蔵文化財センター1985：図48）にみられるような、縄文時代後期中葉の埋葬儀礼が継承されているとみられる。キウス4遺跡X15周堤墓（第1群）1503号墓から漆製品、X10周堤墓1006号墓（堂林2式比定）から赤漆櫛、X17周堤墓（堂林式前半期？）から石斧（1703号墓）、石鏃（1704号墓）、玉（1701・1705号墓）が出土している（北海道埋蔵文化財センター2000a）。周堤墓から検出された墓、周堤墓外から検出された墓にかかわらず、副葬・供献品が少ないのが当該期の特徴である（藤原2000b）。

堂林3式期～瘤付土器第Ⅲ段階並行期

供献品としての土器は注口土器、壺、深鉢、浅鉢が用いられる（第Ⅱ図2）。ただし、堂林3式期に比定できるのは、末広遺跡2号周堤墓1号墓に限られる。既述の通り、柏木B遺跡2008号墓、西島松5遺跡558・750号墓は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期まで下る可能性がある。末広遺跡2号周堤墓4号墓から玉2点、6号墓から石斧2点が出土している（第Ⅲ-3図、千歳市教育委員会1981）。末広遺跡1～3号周堤墓の様相からすると、総じて、当該期の副葬・供献品は少なく、出土する頻度も低い傾向が看守される（藤原2000b）。

瘤付土器第Ⅲ段階並行期

当該期に副葬・供献品が顕著になる。供献品としての土器は瘤付土器第Ⅲ段階並行期以前から看守されるが、出土事例、及び供献品の増加が顕著となる。土器の組成は注口土器、壺、浅鉢、深鉢があるが、注口土器、壺が多い傾向がみられる。埋葬用とみられる特殊な小形品も現れる（第Ⅱ-8図の美沢1遺跡JX3周堤墓106号墓出土品等参照）。

細形石棒が副葬品として出土する事例が増える（第Ⅱ-4、7、8 図）。瘤付土器第Ⅲ段階並行期～縄文晩期前葉には、細形石棒が墓に副葬ないし供献されることが知られている（大谷 2009）。キウス 4 遺跡「盛土」出土の細形石棒は、すべて破損した状態で出土しており、その中には被熱を受けたものも含まれる（北海道埋蔵文化財センター 1998a: 図 V-6-70-112・113、2001b: 図 169-14、図 173-152～154、図 176-224、2003a: 図 V-202-246～248、図 V-203-249～254）。これらの出土事例は、本州と同様に非個人・特定集团的なコンテクストで出土しており、石狩低地帯では縄文時代後期後葉から集落で細形石棒を使用する儀礼が実施されるようになるとみられる。

それに対し、瘤付土器第Ⅲ段階並行期の副葬された細形石棒は、特定個人への細形石棒所有権の確立を示唆し、その利用に大きな変化が見いだされる。威信技術（prestige technology）の産物としての大形で敲打・研磨され黒光りし、頭部の形状、文様が独特な細形石棒は、縄文時代後期から晩期の政治・経済的な野望、及び自己利益を追求する aggrandizer を魅惑し、威信財となったことは容易に推定できる（Hayden 1998）。

細形石棒は、柏木 B 遺跡、美沢 1 遺跡、美々 4 遺跡では、周堤墓に関連する（堅穴内、及び周堤上）土坑墓から出土する傾向が看取される（第Ⅲ-7～9、13、17、18 図）。柏木 B 遺跡では、第 I 地点の周堤墓堅穴内、及び周堤の土坑墓からはその頻度が高く、一方、ほぼ時期的に並行する第 II 地点の墓からは細形石棒は発見されていない（恵庭市教育委員会 1981）。また、漁川流域では、細形石棒は柏木 B 遺跡で多く出土し、カリンバ遺跡、西島松 5 遺跡では少量出土する傾向がみられる。地域集団間、地域集団内で細形石棒の副葬に関しては変異が看取される。

既述の通り、石斧は先行する時期から出土しているが、美沢 1 遺跡、美々 4 遺跡、柏木 B 遺跡では 2～3 本セットもあり（第Ⅲ-7、8、13、17、18 図）、副葬品として定着化と普及する様子が看守される。

玉類（平玉、垂飾り）は先行する時期から出土しているが、装身具としてその増加と多様化が顕著になる。理化学的分析によりキウス 4 遺跡 X17 周堤墓（堂林式前半期？）1701・1705 号墓出土の玉類のほとんど（少なくとも 8 例中 7 例）は、糸魚川産のヒスイ製とされる（藁科 2000）。それに対し、西島松 5 遺跡では、緑泥石岩（蛇紋岩に由来する緑泥石岩）、滑石などへの石材に変化する傾向があり（アースサイエンス 2009、北海道埋蔵文化財センター 2009a）、カリンバ遺跡 30 号墓出土の玉類にも同様な傾向がみられ（恵庭市教育委員会 2003a）、質から量への転換が看守される。

漆製品は先行する時期から出土しているが、出土量が増加しはじめ（北海道埋蔵文化財センター 2009a: 4）、特に装飾品の櫛、腕輪などは精緻複雑さで特徴付けられる（第Ⅱ-6 図）。サメ歯は漆製品とともに装身具として出土する。西島松 5 遺跡 411 号墓の三角形石製品（第Ⅱ-5 図）はサメ歯の模製品とされ、類似する製品が 404 号墓の頭部付近から出土している（北海道埋蔵文化財センター 2009b: 図 42-4）。後述の通り、堂林 3 式期以前に比定されると考えられる丸子山遺跡 1・2 号周堤墓の弓出土例から（千歳市教育委員会 1994）、弓

は瘤付土器第Ⅲ段階並行期に先行する時期から副葬されていた可能性が高いが、美沢 1 遺跡 JX3 周堤墓で弓副葬事例が多いことから（第Ⅲ-13 図）、当該期に普及していく傾向が看守される。一方、カリンバ遺跡と西島松 5 遺跡では弓は出土していないことから、地域集団により漆製品への志向性が異なる可能性がある。

瘤付土器第Ⅳ段階並行期

供献品としての土器は、注口土器と壺が主体で、鉢、深鉢もみられる。西島松 5 遺跡 395・433・508 号墓では、埋葬用とみられる特殊な小形土器やミニチュアが供献されている（第Ⅱ図 9・12）。漆製品の出土量が顕著で、それとともに装身具の精緻複雑さがピークを迎える（恵庭市教育委員会 2003a、北海道埋蔵文化財センター 2009a: 4）。サメ歯も漆製品とともに装身具として出土する。玉類（平玉、垂飾り）の増加と多様化は継続し、瘤付土器第Ⅲ段階並行期と同様に西島松 5 遺跡では緑泥石岩、滑石などが多用されている（アースサイエンス 2009、北海道埋蔵文化財センター 2009a）。カリンバ遺跡 118・123・126 号墓出土の玉類にも同様な傾向が看守される（恵庭市教育委員会 2003a）。石斧の副葬は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期をピークに減少する。当該期の副葬された細形石棒類は、西島松 5 遺跡 433 号墓、美々 4 遺跡 X310 号墓で確認されるのみで（第Ⅱ-12・15 図）、瘤付土器第Ⅲ段階並行期をピークに減少する。

大洞 B 式並行期

土器の組成は、注口土器、壺が多く、粗製深鉢がみられなくなる。埋葬用とみられる特殊な小形土器は、西島松 5 遺跡 462 号墓に認められるだけである（第Ⅱ-19 図）。漆製品は西島松 5 遺跡 462 号墓に認められるが、瘤付土器第Ⅳ段階並行期をピークに出土量が減少する傾向がある（北海道埋蔵文化財センター 2009a: 4）。玉類（平玉、垂飾り）は、多様化が顕著でなくなり、サメ歯も減少しているとみられる。瘤付土器第Ⅳ段階並行期から細形石棒の出土事例は減少しているが、少数ながら柏木 B 遺跡 1008 号墓、カリンバ遺跡 75 号墓などで細形石棒の副葬が継承される（第Ⅱ-19 図）。

（４）小結

本章では、新たな土器編年をもとに縄文時代後期後葉～晩期初頭における墓や副葬・供献品の編年と変遷を提示した。堂林 1・2 式期は、伸展葬が盛行するため、土坑墓もそれに対応した細長楕円の形状で、深度は深いという点に強い企画性がみられる。堂林 3 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期には、伸展葬、屈葬、合葬墓など様々な埋葬法が併存し、それらに適した形状が選択されたため、墓の形状は変異と多様化が看守されるようになる。瘤付土器第Ⅳ段階～大洞 B 式並行期には、屈葬が主体となり、それに適した形状がとられている。また、当該期に竪穴状の掘込みを伴う土坑墓や火山灰を人為的に盛り上げたマウンドを伴う墓が現れる。

副葬・供献品は、堂林 1～3 式期まで少数確認されるのみであるが、瘤付土器第Ⅲ・Ⅳ段階並行期にピークを迎える。レガリア（儀礼・歌舞などの際に着装し、身分・出自を表す。）として副葬・供献品が定着、普及していくためであろう。瘤付土器第Ⅲ段階～大洞 B 式並行期、特に、瘤付土器第Ⅲ段階並行期と瘤付土器第Ⅳ段階並行期の土坑墓の形状、深度、及び副葬・供献品は共通する特徴を有するので、副葬・供献品としての土器を伴わない場合でも、個別遺跡における墓域形成過程や遺跡の継続性などを総合的に検討していくと精度は低くなるが、土坑墓のおおよその時期は推定可能な場合がある。次章では、これまでの成果をもとに、周堤墓の編年やその墓域形成過程を総合的に検討していくこととする。

注

- (1) 器面の剥離が激しい部分を正面中心に据えて実測されていることもあり、報告書の図ではⅡ文様帯の並行沈線が図化されていない。保管されている北海道埋蔵文化財センターで実見した。
- (2) 北海道埋蔵文化財センターで保管されているスライド S 55-千-R-1090・1091「BS-3 の P-5 の石と土器片」、S 55-千-R-1100「BS-3 の一括土器片」を実見した。
- (3) 本資料については、小林圭一氏からご教示いただいた。

第Ⅲ章 周堤墓の編年と墓域形成過程

周堤墓は個人墓の場合もあるが、その多くは集団墓として造成されたため、墓域としての周堤墓には時期幅が想定される場合が多い。そのため、第Ⅰ・Ⅱ章で確立した土器編年に基づき周堤墓の墓出土品、及び竪穴床面出土品に基づき時期比定、及び墓域の形成過程を検討する。検討に際しては、第Ⅱ章で論じた墓標の位置や周堤墓の重複（新旧）関係も参照している。

キウス4遺跡

キウス4遺跡の周堤墓（第Ⅲ-1図）は、規模、土器の出土状況、及び新旧関係から第1群（X12～15）、第2群（X11・17）、第3・4群（X1・10）、第5群（キウス周堤墓群2・4号）に分類されている（藤原2000b：図VI-6～8）。第1群（X12～X15）は、X12周堤墓の周堤内竪穴床面出土の台付鉢、及び1201号墓出土の深鉢（北海道埋蔵文化財センター2000a：図2-27-1、図2-28-1）から堂林1式に対比される。第2群（X11・17）はX11周堤墓の周堤内床出土品（北海道埋蔵文化財センター2000a：図2-23-1）から堂林2式に対比される⁽¹⁾。第3・4群（X1・10）は、X10周堤墓の周堤内竪穴床出土品、及び1006号墓出土の鉢（北海道埋蔵文化財センター2000a：図2-5-1・9、図2-11-1）から堂林2～3式に対比される。

墓標の位置は、X15周堤墓（第1群）、X10周堤墓（第3・4群、堂林2～3式比定）でⅠが検出されている（第Ⅱ表1）。X11周堤墓（第2群、堂林2式比定）ではⅠⅠE1、X17周堤墓（第2群、堂林式前半期？）ではE1が検出されている。X1周堤墓XP-1号墓はⅠⅠとみられる柱状礫が検出されている。キウス4遺跡では、周堤が検出されなかったが周堤墓とされるXαを除き0は確認されていないので、墓標の位置は古い特徴が看守される。Xαには0ⅠE1のLP11号墓、Ⅰ2のLP12号墓があり、墓標の位置からすると土坑墓に時期幅がある可能性がある。

キウス周堤墓群

1号周堤墓はトレンチ内の出土品、2号周堤墓は配石を伴う土坑墓周囲の出土品、4号周堤墓はその外縁部墓から出土した細形石棒、土器、及び同墓付近から出土した土器から瘤付土器第Ⅲ段階並行期と推定された（第Ⅲ-2図、坂口2014）。藤原秀樹（2000b）は、上述のキウス4遺跡における周堤墓の分類にもとづきキウス周堤墓群1・12号は第3群、キウス周堤墓群3・5・6・7・11号は第4群、キウス周堤墓群2・4号は第5群に分類している（1号周堤墓の外径は75m、内径は39mあるので（千歳市埋蔵文化財センター2014）、第5群に分類されるべきであろう。）。1・2・4号周堤墓が瘤付土器第Ⅲ段階並行期で、またキウス4遺跡における周堤墓の分類と編年がキウス周堤墓群にも当てはまるとすれば、第3群（12号周堤墓）、第4群（3・5・6・7・11号周堤墓）は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期に先行する可能性が指摘された（坂口2014）。

また、キウス周堤墓群の史跡範囲確認調査により推定竪穴径 10.7m、周堤外径 18.6m の 14 号周堤墓が確認され、キウス 4 遺跡第 2 群に相当する周堤墓が存在することが判明した（千歳市教育委員会 2019）。

末広遺跡

当遺跡では、1 号～3 号周堤墓が検出されているが、時期比定が可能な出土品が確認されているのは 2 号周堤墓に限られる（第Ⅲ-3 図）。2 号周堤墓 1 号墓出土の注口土器（第Ⅱ-2 図）、及び竪穴床面出土の深鉢（千歳市教育委員会 1981：図 105-6）は堂林 3 式である。全体的に土坑墓出土の副葬品や供献品が少ない点（1 号墓から注口土器 1 点、4 号墓から玉 2 点、6 号墓から石斧 2 点出土しているだけである）は、当該期の特徴を示すものであろう（千歳市教育委員会 1981）。

1 号周堤墓（周堤径 31m、竪穴径 17m）、3 号周堤墓（推定周堤径 28m、竪穴径 15m）の規模は 2 号周堤墓（周堤径 25m、竪穴径 15m）と近似することから（千歳市教育委員会 1981、1982）、2 号周堤墓と近接する時期と推定される。

丸子山遺跡

丸子山遺跡では、周堤の重複と立地から 1 号周堤墓（周堤径 26m、竪穴径 15～17m）→2 号周堤墓（周堤径 18m、竪穴径 13m）の新旧関係が指摘されるが、大きな時期差はないともされる（千歳市教育委員会 1994）。墓標の位置は、2 号周堤墓 1 号墓が I1E1、4 号墓は I1 である。1 号周堤墓土坑墓は規模と遺体層から伸展葬、2 号周堤墓の土坑墓も 1 号墓を除くと規模から伸展葬と推定され、堂林式前半期の埋葬法が継承されているとみられる。1 号周堤墓土坑墓から弓、2 号周堤墓 3 号墓から玉 1 点が出土しているが（千歳市教育委員会 1994）、こうした副葬品の少なさや組成は堂林 3 式期以前の周堤墓であることを示唆する。

美々4 遺跡

当遺跡西端には X9 周堤墓が位置し、遺跡東側には周堤墓の集中が看守される（第Ⅲ-4・5 図）。X9 周堤墓（竪穴径約 11m）は、竪穴内床面出土の深鉢（北海道埋蔵文化財センター 1986：図Ⅳ-15-1）から堂林 2 式に比定される可能性が高い。

周堤墓の集中区については、重複関係から X2 周堤墓→X1 周堤墓、X4 周堤墓→X3 周堤墓、X4 周堤墓→X1 周堤墓という新旧関係が得られている（北海道埋蔵文化財センター 1984：133）。土坑墓から供献土器が出土し、時期比定が可能な X2・3 周堤墓から検討する。X2 周堤墓の土坑墓は、周堤内竪穴の覆土形成過程と規模・形状から X201・203・204・206～208・212～218・220・222 号墓と X202・205・209～211・219・221 号墓に分けられる（第Ⅲ-7 図）。前者は周堤墓の造成時に設けられ、その平面形は長楕円形で深度も深いに対し、後者は周堤内竪穴に覆土が形成される過程で設けられ、その平面形は小判形で、深度も浅い傾向がある。前者と後者では長軸もずれる傾向が看取される（北海道埋蔵文化財センター 1984）。

前者に含まれる X208 号墓が瘤付土器第Ⅲ段階並行期なので（第Ⅱ-7 図）、前者の土坑墓は瘤付土器第Ⅲ段階並行期に比定される可能性が高い。後者の X202 号墓出土の粗製深鉢は瘤付土器第Ⅳ段階～大洞 B 式並行期とみられるが⁽²⁾、口縁部にめぐる凹凸のある隆帯は瘤付土器第Ⅳ段階並行期の眼鏡状隆帯を想起させる（第Ⅲ-7 図）。同墓の副葬品は、石鏃 1 点、石錐 3 点、スクレイパー 1 点、石斧 3 点、たたき石 1 点、石皿 1 点、剥片 31 点、玉類 51 点、櫛 2 点、漆製品 4 点と豊富である。また、X210・221 号墓の副葬品も漆製品、玉類が豊富で、これらの出土品は瘤付土器第Ⅳ段階並行期の様相を彷彿とさせる（北海道埋蔵文化財センター 1984）。X202・205・209～211・219・221 号墓は、①土坑墓の形状、②豊富な副葬品、③瘤付土器第Ⅳ段階並行期に比定される X3 南群土坑墓（X308 号～314 号墓）と同様な周堤内堅穴に覆土が形成される過程で設けられている、ことを勘案すると瘤付土器第Ⅳ段階並行期に比定される可能性が高い。

周堤上の 378 号墓は瘤付土器第Ⅲ段階並行期なので（第Ⅱ-7 図、第Ⅲ-7 図）、周堤上にも周堤内堅穴と並行して墓が設けられている。ただし、周堤上の 395 号墓は大洞 B1 式並行期なので（第Ⅱ-19 図）、周堤上の墓は瘤付土器第Ⅲ段階～大洞 B1 式並行期までの時期幅が想定される。また、周堤内堅穴には大洞 B2 式並行期に 334 号「盛土墓」が設けられている（第Ⅱ-18 図）。

X3 周堤墓の土坑墓は、周堤内堅穴の覆土形成過程と規模・形状から X301～307 号墓（北群）、X308～314 号墓（南群）に分けられる（第Ⅲ-8 図）。北群は、周堤内堅穴床面から掘削されるのに対し、X308～312 号は、周堤内堅穴に覆土が形成される過程（周堤内堅穴が埋没していく過程）で設けられたとされる（北海道埋蔵文化財センター 1984: 172）。南群の X310・311 号墓は、供献された土器から瘤付土器第Ⅳ段階並行期に比定されるので（第Ⅱ-15 図）、南群は該期のものが多いとみられる。X301～307 号墓（北群）は、①X2 周堤墓 X201・203・204・206～208・212～218・220・222 号墓と同様に周堤内堅穴床面から掘削されたという点、②土坑墓の規模・形状、及び副葬品の組成から北群→南群（瘤付土器第Ⅳ段階並行期）という調査所見、を踏まえると瘤付土器第Ⅲ段階並行期に比定される可能性が高い。このようにみていくと、時期の同定が困難な北群 X306 号墓出土の突瘤深鉢の大形破片も瘤付土器第Ⅲ段階並行期に比定される公算が高くなり、調査の所見や X3 出土品（北海道埋蔵文化財センター 1984: 図 114）と整合性があることになる。

既述の通り、周堤墓の重複関係は X2 周堤墓→X1 周堤墓で、X2 周堤墓は、X208 号墓出土品から瘤付土器第Ⅲ段階並行期には造成されているので（第Ⅲ-7 図）、X1 周堤墓の編年的位置は瘤付土器第Ⅲ段階並行期以降に位置づけられる。

X1 周堤墓と X3 周堤墓の周堤が X4 のそれを覆っていることから X4 周堤墓→X3 周堤墓、X4 周堤墓→X1 周堤墓という新旧関係が指摘される（北海道埋蔵文化財センター 1984: 133、190）。X4 周堤墓 X401 号墓の形状は、X2 周堤墓の造成時に設けられたとされる土坑墓群（X201・203・204・206～208・212～218・220・222）に類似している。また、X4 周堤墓出土の香炉形注口土器（北海道埋蔵文化財センター 1984: 図 129-1）は瘤付土器第Ⅲ段階並

行期に比定され、同周堤墓も当該期の可能性が高い。

X6 には堅穴はあるが、周堤がないので周堤墓であることが疑問視されている。X6 は X2 周堤墓の周堤を切って造られていることから、X2 周堤墓→X6 とされる（北海道埋蔵文化財センター 1984: 134）。X601～605 号墓は、①その規模・形状は X3 周堤墓南群土坑墓（X 308～314 号）に類似するものがあることと、②X604 号墓に副葬された小形壺（第Ⅲ-7 図、北海道埋蔵文化財センター 1984: 図 137-1）は瘤付土器第Ⅳ段階～大洞 B 式並行期に比定される⁽³⁾、ことから X3 周堤墓南群土坑墓（瘤付土器第Ⅳ段階並行期）に近接する時期の土坑墓が含まれていると推定される。

美々4 遺跡では、瘤付土器第Ⅲ段階並行期に周堤墓から「環状溝墓」が派生する（北海道教育委員会 1981a）。BS3 はその過渡的形態とみられる（第Ⅲ-9 図）。既述の通り、BS3 は、3 号墓が瘤付土器第Ⅲ段階並行期の可能性が高いことや、瘤付土器第Ⅲ段階並行期の土器が堅穴（溝）床面、あるいは床直上から出土していることから、当該期に比定される。BS3 周堤上の 15 号墓も瘤付土器第Ⅲ段階並行期である（第Ⅱ-7 図）。BS3 が BS1 を切っていることから、BS1→BS3 の新旧関係が指摘される（北海道教育委員会 1981: 49、59）。BS1 には、土坑墓の規模から伸展葬と屈葬が混在しているとみられる。また、BS1 の 4 号墓の墓標位置は 01 であることから、BS1 の時期は瘤付土器第Ⅲ段階並行期以前が想定される。BS2 には堅穴はあるが、周堤がないので周堤墓であることが疑問視されている。土坑墓の規模から伸展葬と屈葬が混在しているとみられ、BS1 と同様な時期の可能性もある。

第Ⅰ章で既述の通り、BS4 の出土品は瘤付土器第Ⅲ段階並行期のまとまりが看取されることから、当該期とみられる。BS5 も下記の点から総合的に判断して、瘤付土器第Ⅲ段階並行期であろう。①基本的に BS4 と同一形態の墓で、開口部はその変異とみられる。②周溝覆土から出土した注口土器（供献された可能性が高い）は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期とみられる（第Ⅲ-9 図）。BS6、X5・7（第Ⅲ-8・9 図）も基本的に BS4 と同一形態の墓とみられることから、瘤付土器第Ⅲ段階並行期の可能性がある。

美沢1 遺跡

当遺跡については、土坑墓から供献土器が出土している JX 3・4 周堤墓から検討する（第Ⅲ-13 図）。JX 4 周堤墓（堅穴径約 14.4m）は、116 号墓坑口から堂林 3 式注口土器が出土している可能性が高く⁽⁴⁾、そうであれば少なくとも当該期には造成されている。

JX 3 周堤墓（堅穴径約 13m）は、106 号墓の供献土器から瘤付土器第Ⅲ段階並行期には造成されている（第Ⅱ-8 図）。106 号墓は、周堤内のスペースがなくなり堅穴壁際に設けられたものとみられることや、断面細身で深度の深い土坑墓に比べ深度が浅く、JX 3 周堤墓の中でも最も新しく設けられたものと推定される。113 号墓に供献された可能性がある瘤付土器第Ⅲ段階並行期とみられる注口土器（？）破片が 128 号土坑の坑口から（北海道教育委員会 1979b: 図 7-31-1～4）、またその同一個体破片が 106 号墓覆土から出土している（第Ⅰ-12 図-22）。周堤墓内における活動に伴い、供献された注口土器（？）が破損、断片・分散化し、

106号墓覆土に混入したものと推定される。113号墓と106号墓が近接した時期に設けられたことを示すとともに、JX3周堤墓の時期を示唆している。

副葬品（細形石棒、漆製品）の組成と多寡、及び墓標の位置（JX4周堤墓ではI主体、JX3周堤墓ではO主体）から、JX4周堤墓→JX3周堤墓という遷移が考えられる（乾1981）。ただし、JX4周堤墓とJX3周堤墓では副葬品も共通するものがみられることから、墓が並行する時期に設けられていた可能性もある。

周堤墓KX1・2の新旧関係は、KX1（堅穴径約12m）の排土がKX2（径約9mで墓はなく、造成後、放棄されている。）に流れ込んでいることから、KX2が古く、KX1が新しいとされる（北海道教育委員会1979b: 436）。KX1周堤墓の墓標の位置は、I1が3基、O1が1基あることと（第II表1）、副葬品は110号墓のみから石鏃が出土していることを勘案すると、同周堤墓の編年的位置は堂林3式以前の可能性がある。JX2周堤墓（堅穴径約9m）には、墓標の位置がI1の土坑墓が1基あり、同周堤墓は堂林3式以前の可能性がある。JX1周堤墓（堅穴径約9m）の土坑墓の形状はJX2周堤墓のものに類似するので、時期的に近接するものとみられる。

美沢1遺跡では、JX1・2周堤墓→KX1周堤墓→JX3・4周堤墓という変遷が指摘されるが（乾1981）、JX1・2周堤墓の土坑墓断面は丸みを帯びる傾向が看守され、美々4遺跡X9周堤墓（堂林2式期）の土坑墓と比べると、新相を呈する。美沢1遺跡では、堂林3式以前～瘤付土器第III段階並行期にかけて周堤墓が造成され、瘤付土器第III段階並行期以降に大規模な墓域は対岸の美々4遺跡に遷移していくとみられる。

柏木B遺跡

柏木B遺跡I区には周堤墓、II区の北側には柱穴群・焼土を伴う土坑墓群が3カ所、南側には列状に配置された土坑墓群が検出されている（第III-16～18図）。1～3号周堤墓の認定は確実で、4・5号周堤墓の認定は不確実であるとされる（恵庭市教育委員会1981: 172）。1号周堤墓は、周堤内堅穴床面出土品（恵庭市教育委員会1981: 図175-1、184-1～3、199-3・5）から堂林3式～瘤付土器第III段階並行期に造成されたとみられるが、周堤内堅穴の多くの墓は1106号墓出土の供献された注口土器（第II-4図）から瘤付土器第III段階並行期とみられる。周堤内堅穴の土坑墓には、平面楕円形、断面細身、深度も深い古相を示すものが含まれる一方、1116・1117・1119・1121号墓など新相（深度浅め、平面楕円で丸みをおび、断面幅広になる傾向がある。）を呈する土坑墓が周堤墓開口部付近に設けられている。

周堤に土坑墓が設けられるようになるのは、1003号墓出土品（第II-4図）から瘤付土器第III段階並行期である。調査の所見では、周堤上土坑墓は1003号（瘤付土器第III段階並行期）→1001号→1007号→1008号（大洞B2式並行期）→1009号→1010号という構築順序が指摘される（恵庭市教育委員会1981: 162）。既述の通り、1008号墓は副葬された細形石棒から大洞B2式並行期である（第II-19図）。1009号土坑墓は、1008号土坑墓を切って作られているので、大洞B2式並行期以降に位置づけられる。1008・1009号墓の特徴は、平

面が小判状で深度は浅いことに特徴がある。隣接する 1010 号土坑墓も近似する特徴を有することから大洞 B2 式並行期以降であろう。

2 号周堤墓は、2008 号墓（第Ⅱ-2 図）、及び 2004 号墓に供献された土器（第Ⅱ-4 図）から堂林 3 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期、すなわち 1 号周堤墓と併存する時期とみられる。2 号周堤墓の土坑墓の平面・断面形状は 1 号周堤墓の周堤内竪穴の古相を呈する土坑墓の平面・断面形状と共通する特徴を有する。また、2 号周堤墓と 1 号周堤墓では副葬品（細形石棒、石斧）も共通するものがみられる。1 号周堤墓→2 号周堤墓とされるが（恵庭市教育委員会 1981: 168）、堂林 3 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期における新旧関係であろう。

3 号周堤墓も副葬品（細形石棒、石斧）が 1 号周堤墓のものと共通する特徴があること（第Ⅲ-18 図）、また土坑墓の平面・断面形状も類似するものが多数あることから、瘤付土器第Ⅲ段階並行期の可能性が高い。同様に、4 号周堤墓（？）の 324・331 号墓などの形状は 1 号周堤墓のものに類似することから、瘤付土器第Ⅲ段階並行期の可能性がある。5 号周堤墓（？）の 365 号墓は供献された注口土器（第Ⅱ-3 図）から瘤付土器第Ⅲ段階並行期である。

注

- (1) 個別の周堤墓の編年的位置については、さらに検証が必要である。例えば、X17 周堤墓出土品は堂林 1 式土器が伴うとされるが、①副葬品として石斧（1703 号墓）、石鏃（1704 号墓）、玉（1701・1705 号墓）が出土している。②1704 号墓の墓標位置は E1 で、小形立石が検出されている（北海道埋蔵文化財センター 2000a）。これらの特徴は、後述する末広遺跡 2 号周堤墓（堂林 3 式）への過渡的な様相が看守される。
- (2) 本資料については、中門亮太・中村大氏からご教示いただいた。
- (3) 本資料については、中門亮太・中村大氏からご教示いただいた。
- (4) 116 号墓では、「墓壙内南端に立石が認められた。また壙口の北端側に礫の破片が認められ、南端側には注口土器の破片が集中していた」とされる（北海道教育委員会 1979b: 433）。報告書では、どの注口土器が相当するのか示されていないが、この注口土器は以下の点から、第Ⅲ-13 図掲載品（北海道教育委員会 1979b: 図 7-39-1）が該当するとみられる。破片が集中し、完形、あるいは半完形に復元できるような注口土器は、周堤墓 JX4 からは 3 点出土している。第Ⅲ-13 図掲載品の注記でグリッドが判読可能なのは、口縁部の「□・70・39・7 JX4」、「c2□39・5」、底部のほとんどは「c2・70・39」、「c2・70・39・4 JX4」で占められている。116 号墓の南端（上記から、立石付近と考えられる）は、グリッド c2-70-39 に位置することから、第Ⅲ-13 図掲載品が該当するとみられる。

一方、報告書図 7-39-2 の注記は、「c2・70・38・1 JX4」、「c2・70・38・2 JX4」、「c2・70・38・7 JX4」、「c2・70・38・9 JX4」、「c2・70・38・10 JX4」で、それらグリッド（c2-70-38）は 116 号墓の南端が含まれない。報告書図 7-39-3 は注口土器であるが、その注記は「JX4 周外」と記されているので、JX4 周堤外から検出されたものとみられ論外である。保管されている千歳市埋蔵文化財センターのご厚意により土器を実見した。

第Ⅳ章 周堤墓形成期の地域集団の動態

本章では、北海道中央部における縄文時代後期中葉～後葉の集落・墓地遺跡の時空間的变化から周堤墓の出現する背景となる地域集団の動態について検討する。これまでの研究成果（坂口 2014）では、縄文時代後期後半に（１）石狩低地帯、（２）余市湾周囲（積丹半島含む）、（３）石狩川上流域（空知川流域含む）に集落・墓地遺跡のまとまりが看取されることから、これらの地域を中心に検討することとした（第Ⅳ-1～5 図）。

石狩低地帯については、発掘調査による資料が充実しつつあることと、周堤墓の出現にかかわる最も重要な地域であるため、大きく千歳川流域、美沢川流域に分け集落・墓地遺跡の時空間的变化について検討する。

1. 縄文時代後期中葉

（１）石狩低地帯

1) 千歳川流域

手稲式前半期の集落は、音江別川流域の富ヶ岡 E 遺跡（旧称北広島団地第一遺跡）、柏木川流域の西島松 15 遺跡、祝梅川流域の梅川 3 遺跡が知られているが、後述するユカンボシ E3/E8 遺跡を除くといずれも小規模である（恵庭市教育委員会 1993、千歳市教育委員会 1986、北海道住宅団地開発事務所 1971）。カリンバ遺跡では居住域が不明であるが、手稲 1 式主体の墓域が検出されている（第Ⅳ-10 図、恵庭市教育委員会 2003a）。

ユカンボシ川の北岸にユカンボシ E8 遺跡、南岸にユカンボシ E3 遺跡が所在し（第Ⅳ-6 図）、両遺跡は地理的近接性と手稲 1 式を主体とした時期に形成されていることから、有機的に関連する遺跡とみられる（本稿では両遺跡全体の遺構・遺物について述べる場合は、ユカンボシ E3/E8 遺跡を用いる。）。ユカンボシ E3 遺跡 A・B 地点を中心に手稲 1 式期の居住域が形成され、A 地点では竪穴住居跡の重複が顕著である。多数の土坑墓が河岸段丘沿いに検出されているが、分散する傾向が看守される。ユカンボシ E3/E8 遺跡は、石狩低地帯における手稲 1 式期の最大の集落遺跡であるが、手稲 2 式期の遺構は少数で当該期には衰退していく傾向が看守される（恵庭市教育委員会 1989、1992a、1992b）。

キウス川流域で隣接して所在するキウス 7 遺跡、キウス 5 遺跡は一連の遺跡とみられ、2 遺跡の面積を合わせると広大であるが、手稲 1～3 式の住居跡が分散し、各時期の遺構も疎らで、ユカンボシ E3/E8 遺跡のように集住化する様子はみられない（北海道埋蔵文化財センター 1996、1997b、1997c、1998b）。

上述の通り、ユカンボシ E3/E8 遺跡は手稲 1 式主体で、手稲式後半期には衰退していく。その後に現れるのが手稲 2 式～鮎瀬式を主体として形成された末広遺跡である（第Ⅲ-3 図）。同遺跡手稲 2～3 式の住居跡は、段丘縁辺に分散しているが、鮎瀬式期に居住域が形成される傾向がみられる。居住活動に伴うように、居住域の西側に手稲 2 式～鮎瀬式期（その中でも手稲 3 式と鮎瀬式主体）の大規模な焼土・盛土（SM1・2）が形成されている（千歳市

教育委員会 1982、1996)。手稲 2 式～鯔澗式の土坑墓と推定される遺構が検出されているが、調査区全体に分散している。末広遺跡における居住活動は、手稲 2 式～鯔澗式にピークがあり、堂林 3 式期には周堤墓が構築され、墓域に変容していく様子が看取される。

末広遺跡以外の鯔澗式の集落は、梅川 3 遺跡で小規模な集落が確認されている（千歳市教育委員会 1986）。また、キウス周堤墓群の史跡範囲確認調査により鯔澗式古段階とみられる住居跡 3 基（ⅡH1・2・4）や規模の大きな焼土が検出されたことから、キウス地区における当該期の集落の存在が判明してきた（千歳市教育委員会 2019）。今後、その集落構成（墓域の有無、焼土の広がり）や規模、鯔澗式新段階の遺構が存在するのかが、キウス 4 遺跡との関連性やキウス地区における周堤墓の出現前夜の動向を解明するうえで重要な研究課題である。

2) 美沢川流域

当流域では、手稲式に先行する時期から居住されているが、手稲 1 式期は美々 4 遺跡（北海道埋蔵文化財センター 1998a）と美沢 1 遺跡（北海道教育委員会 1981b）、手稲 2～3 式期は美々 4 遺跡（北海道埋蔵文化財センター 1984）、美沢 1 遺跡（北海道教育委員会 1978a）で小規模な集落が営まれ、集落が移転している可能性がある（第Ⅲ-4、5、14 図）。

鯔澗式期には、美々 4 遺跡（北海道教育委員会 1981a）、美沢 3 遺跡（北海道教育委員会 1977a）で小規模な集落が営まれ、当流域で居住域が移転しているとみられる。集落は小規模で分散しているが、美々 4 遺跡の台地縁辺には手稲式期～鯔澗式期にかけて 6 群から構成される土坑墓群が形成される（第Ⅲ-5・6 図、北海道埋蔵文化財センター 1985）。以降、美々 4 遺跡、及び対岸の美沢 1 遺跡では、大規模な墓域が縄文時代後期後葉へと継承される点が注目される。

3) 豊平川流域

当流域は、石狩低地帯の外縁に位置するが、石狩低地帯と余市湾周囲を結ぶ交通の要衝、あるいは両地域に割拠した有力な地域集団の緩衝地帯に位置すると考えられるため、本節で検討することとした。豊平川下流域では、吉井の沢 1 遺跡（手稲 2 式期）、N30 遺跡（手稲 1 式期？）で小規模な集落が発見されている（北海道埋蔵文化財センター 1982、札幌市埋蔵文化財センター 1998）。手稲遺跡は豊平川流域からやや離れるが、石狩低地帯と余市湾を結ぶ交通の要衝に位置し、手稲式の集落遺跡の可能性はある（堅穴住居の可能性のある遺構が発見されているが、部分的な調査のためその全体像は不詳である（大場・石川 1956））。また、T361 遺跡などで手稲式の土坑墓が発見されているが（札幌市埋蔵文化財センター 1987）、集落跡の全体像が解明される状況までには至っていない。

鯔澗式の住居跡は確認されていないが、当該期の遺物散布地は吉井の沢 2 遺跡（江別市教育委員会文化課 2003）などがあり、手稲式期と同様な小規模な居住活動により形成されたものとみられる。

現時点では、縄文時代後期中葉の規模の大きな集落遺跡は確認されておらず、総じて、豊平川流域における当該期の遺跡密度は低い傾向が看取される。縄文時代後期中葉における当流域は、有力グループが割拠する余市湾周囲と石狩低地帯の狭間的な地域の様相を呈する。

（２）余市湾周囲

余市湾から塩谷湾沿いには、配石遺構、及び関連する遺跡が2～3km間隔で分布し（第Ⅳ-7図）、これらの遺跡は maritime の生業に適応した地域集団により形成されたことを示唆する（金子 1989）。配石遺構は安芸遺跡が砂丘に位置する以外は、丘陵、あるいは海岸に近接する山尾根に立地する。余市湾周囲で最大の西崎山ストーンサークルの墓域は、山尾根の計5区から構成される⁽¹⁾（田才ほか 1999、北海道埋蔵文化財センター 2001c）。1区4号配石（駒井 1959：図41・42）からは手稲式土器、4区の3・4号配石（大場・重松 1977）からはウサクマイ C 式と手稲式土器が出土していることから、西崎山ストーンサークルが当該期から形成されたことを示す。

西崎山ストーンサークルの約2.5km東には、忍路土場遺跡が所在する。縄文時代後期の忍路土場遺跡は、後期前葉～後葉に遺跡が形成されているが、そのピークは手稲2・3式～鯨潤式とみられる。台地部の居住域に隣接して巨大柱穴7基、旧河道沿い低地部の手稲3式の層準（Ⅲc層）から検出された「作業場跡」では、櫛、弓、木製容器、木柱、漆塗り櫛、漆入り土器などが多量に出土し、土器の優品に示唆される土器工芸とともに、木工芸、特に漆器生産が裏付けられた（北海道埋蔵文化財センター 1989a）。「作業場跡」からは、饗宴・儀礼の準備やその場で使用されとみられる木製品（脚付皿形容器、片口舟形容器）も出土している。忍路土場遺跡から約70m南の丘陵末端に忍路環状列石、約200m南西の山尾根に地鎮山環状列石が所在し、忍路土場遺跡周囲は、縄文時代後期中葉の余市湾周囲における中心部の様相を呈する。

忍路環状列石は長軸約30m、短軸約20mの楕円形を呈し、中央に円形の配石を有する余市湾周囲における最大の配石遺構である。さらに、その周囲にも配石遺構、土坑、巨大柱穴などが存在することが確認されている（小樽市教育委員会 2001）。忍路環状列石の時期詳細は不明であるが、周囲の試掘坑出土品から手稲式～鯨潤式が想定される。巨大柱穴は、忍路環状列石で4基、忍路土場遺跡で7基、計11基が確認されている（小樽市教育委員会 2001：52）。岩石学的分析から忍路環状列石、西崎山ストーンサークルの石材は、約8.5km離れた余市湾北端に位置するシリバ岬から搬入されたものとされる（加納ほか 1987）。これら配石遺構の造成には、石材の搬入と構築に多大の労働力が投入されている。

地鎮山環状列石には、方形の土坑底面と坑口周囲に小円礫を敷きつめるとともに、土坑周囲に大形立石が長軸約10m、短軸約8mの楕円状に巡る（第Ⅳ-7図、駒井1959）。地鎮山環状列石は、忍路土場遺跡のⅢa層（鯨潤式層準）・Ⅲb層（鯨潤式層準?）から検出された小円礫を配した配石遺構（北海道埋蔵文化財センター1989a：図V-41・45・46）との関連が指

摘される。地鎮山環状列石に類似する配石遺構は、北海道南部の日吉遺跡から検出されている（市立函館博物館 1971）。また、方形の土坑底面に小円礫を敷きつめた配石遺構は、北海道南部の臼尻小学校遺跡、八木B遺跡、浜松2遺跡で看取され、臼尻小学校遺跡配石遺構、八木B遺跡1号配石遺構、浜松2遺跡4号配石遺構からは鯨潤式土器が出土している（南茅部町教育委員会1972、南茅部町埋蔵文化財調査団1992、八雲町教育委員会 1991）。これらの事例は、地鎮山環状列石の編年的位置を推定する有力な手がかりであるとともに、余市湾周囲と北海道南部における地域集団のインターアクションを示唆する。

西崎山ストーンサークルの約 3km 西には、忍路土場遺跡と時期的に併存する手稲 1 式～鯨潤式に形成された低地遺跡の安芸遺跡が所在する。忍路土場遺跡と同様に黒色漆塗り堅櫛をはじめとする漆製品が出土し、木製品、土器などにみられる物質文化は忍路土場遺跡と共通する特徴を有する（余市町教育委員会 2002、2003、2007）。安芸遺跡からも配石遺構が発見され（余市町教育委員会 1971、2007）、その約 500m 南の丘陵末端には八幡山遺跡が所在する。八幡山遺跡の配石遺構は 20 基位あったとされるが、そのほとんどが破壊されている（佐藤 1977、乾 2000）。八幡山遺跡の配石遺構は、西崎山ストーンサークルの配石遺構と類似する。配石遺構のほかにも土坑墓の可能性のある遺構が発見されている。その遺構から出土した細形石棒は単頭で（佐藤 1977）、頭部に陰刻された文様の特徴から縄文時代後期後葉のものであろう。これらのことから、八幡山遺跡は縄文時代後期中葉～後葉に形成されたとみられる。

塩谷湾には塩谷 6 遺跡と鯨潤遺跡が所在する。塩谷 6 遺跡では、丘陵沿いの旧河道から手稲 2 式土器がまとまって出土していることから（小樽市教育委員会 1999）、当該期の活動域が近接して存在するとみられ、忍路土場遺跡や安芸遺跡と類似する遺跡が周囲に存在する可能性もある。上述の通り、余市湾から塩谷湾沿いの当該期の遺跡が海岸部からやや入った内陸の丘陵や山尾根に位置する傾向があるのに対し、鯨潤遺跡は海岸部に所在することから、より maritime の生業に適した立地とみられる。同遺跡は、その出土品（名取・松下 1969：図 3、宮 1981、鷹野 1978：図 3・4）から鯨潤式を主体とする時期に形成されたとみられる。

このように余市湾～塩谷湾における縄文時代後期の遺跡形成は、手稲式～鯨潤式がピークである。既述の通り、配石遺構の造成には、多大の労働力を要する。余市湾～塩谷湾沿いに集中する配石遺構の規模と数は、これらを造成した地域集団の社会政治的力を示唆する。このような余市湾～塩谷湾の動向に対し、積丹半島西部では、集落の痕跡がほとんどみられない。ヘロカルウス遺跡群、堀株 1 遺跡などで包含層から縄文時代後期中葉の遺物が少量出土しているだけである（泊村教育委員会 1998、泊村教育委員会 2005）。茶津洞穴 2 号の 4 層は鯨潤式主体で、当該期の季節的な漁撈活動のための洞穴利用が示唆される（小樽市博物館 1962）。

(3) 石狩川上流域

石狩川上流域は、余市湾周囲とともに縄文時代後期の配石遺構が分布する地域として早くから知られてきた。ただし、他地域の配石遺構と同様にその正確な編年的位置を決定できる資料は限られている。石狩川上流域のコアとなるエリアは、音江環状列石と神居古潭 5 遺跡（神居古潭ストーンサークル）が所在する地域にあったとみられる（第IV-8 図）。特に、神居古潭 5 遺跡や神居古潭 7 遺跡の所在する神居古潭地区は、そうした地域集団の本拠であった可能性が高い。

神居古潭 5 遺跡は山頂に位置するが、その時期は不詳である。神居古潭 7 遺跡は、神居古潭 5 遺跡から直線距離で約 2 km 離れた石狩川支流の内大部川沿いの河岸段丘面に所在する。水沢果樹園が位置する河岸段丘平坦面にはかつてストーンサークル（開墾により破壊され消失）があったとされ（旭川市教育委員会 1990）、この地点から採集された水沢コレクションには手稲式前半期の資料が含まれている（斎藤 1969）。消失したストーンサークルがあったとすれば、当該期の可能性がある。

河岸段丘末端部（崖線部）に位置する神居古潭 7 遺跡 1991・1992・1994 年度調査地点は、遺跡中心部から離れた地点とみられる。この地点の遺物包含層出土品には縄文時代早期～晩期の資料が含まれるが、主体となるのは手稲 1 式である。手稲 1 式以外の縄文時代後期の土器はウサクマイ C 式、手稲 2 式、鯰澗式が少量出土しているだけで、手稲 2 式以降、閑散としていく様子が看取される（旭川市教育委員会 1992、1993、1995）。

内大部川の対岸に位置する内園 3 遺跡はウサクマイ C 式～手稲 1 式、内園 6 遺跡は氾濫原における旧河道沿いのウサクマイ C 式～堂林 1 式のキャンプ・サイトの様相を呈する（深川市教育委員会 1996、1997、1999；北海道埋蔵文化財センター 2000b）。両遺跡ともに手稲 1 式が主体で、鯰澗式、堂林 1 式期にもマイナーながら利用されていたとみられる。

縄文時代後期中葉における内大部川沿いにおける地域集団の本拠の一つは、神居古潭 7 遺跡にあったと推定される。上述の通り、神居古潭 7 遺跡は手稲 1 式期を主体として形成されている。内園 6 遺跡、内園 3 遺跡も縄文時代後期の遺物の出土量は少量とはいえ、手稲 1 式期に遺物が増加する傾向が看取されることから、両遺跡は神居古潭 7 遺跡における本拠の隆盛化と関連して利用されたものとみられる。今後さらなる検証が必要であるが、神居古潭地区では、手稲 1 式が縄文時代後期中葉における遺跡形成の一つのピークと推定される。ただし、石狩川と内大部川の合流点近くには神居古潭 6 遺跡が所在し、本遺跡からは完形の鯰澗式下部単孔土器（北海道開拓記念館開設準備事務所 1970：写真 1）などが採集されていることから、当該期の遺構が存在する可能性がある。本遺跡や神居古潭地区に当該期の集落が形成されていたのかどうか、今後の重要な検討課題である。

音江環状列石は、神居古潭地区から直線距離で約 12.5 km の下流に位置し、立地は神居古潭 5 遺跡と類似する低平な山尾根の平坦面に位置する。音江環状列石の南側に位置する配石遺構 3 基周囲は不整形の「盛土」で囲まれ、北側の配石遺構 10 基は斜面に沿うように分布する。音江環状列石の編年的位置を決める資料は乏しく、第 5 号環状列石出土の土器

片（駒井 1959：図 20）が唯一の手掛かりである。同土器片は、「()」状文様の両側に弧線状の磨消しを施した手稲 1 式土器口縁部と推定される。その類例は、神居古潭 7 遺跡出土品（旭川市教育委員会 1995：図 31-3）などに看取される。この推定が正しければ、音江環状列石の編年の位置は、手稲 1 式が候補の一つとなる。上述の通り、神居古潭地区の縄文時代後期中葉における遺跡形成の一つのピークが手稲 1 式であることを勘案すれば、音江環状列石の構築もこうした動向と連動していた可能性がある。

ただし、神居古潭 5 遺跡と音江環状列石における配石の仕方に両者における地域集団の独自性や差異も示唆される。前者では、環状に配した立石内外に礫を整然と配置する I・IV 群の配石遺構が特徴的である（旭川市教育委員会 1990）。一方、音江環状列石北側の配石遺構は、ランダムに近く角礫を配するものが主体であり、神居古潭 5 遺跡 IV 群にみられるような整然とした配石遺構はみられない（駒井 1959）。こうした配石遺構の特徴から、両者は地域集団内におけるサブグループであった可能性も想定される。

2. 縄文時代後期後葉

（1）石狩低地帯

1) 千歳川流域

既述の通り、当流域の手稲 2 式～鯨潤式における代表的な遺跡の一つであった末広遺跡では、堂林式 1・2 式の出土品はほぼ皆無に等しく、当該期における活動の痕跡は未確認である。その後、堂林 3 式期に周堤墓が造成され、墓域に変容していくとみられる（千歳市教育委員会 1982、1996）。

一方、キウス 4 遺跡の遺跡形成は、鯨潤式新段階から開始され（鯨潤式古段階はほぼ皆無）、堂林 1 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期にピークを迎える。キウス 4 遺跡は、墓域、居住域、低地に面した生活・作業場空間から構成される（第Ⅲ-1 図）。その遺跡形成の初期には、土坑墓が居住域近くに設けられていたが、周堤墓第 1 群（X12～X15 周堤墓）が遺跡北東側に設けられると、以降、居住域と墓域が対称的に配置される集落が形成されるようになったとされる（北海道埋蔵文化財センター 2003b）。居住域には少なくとも 124 軒の住居跡が検出され、確認できる多くの住居跡の主軸（入口施設と支柱穴の中軸を結んだ軸線）は周堤墓の分布する墓域の方向を向くように配されていることから（北海道埋蔵文化財センター 2001a）、周堤墓は墓域であるとともに、祖先崇拝の場でもあったことを示す。キウス 4 遺跡では居住域と墓域が対置され、周堤墓を中心に大規模な集落が作られる。集落のレイアウトや住居構造から知られる規模、及びそれに伴う居住人口に縄文時代後期中葉のものとは大きな飛躍が認められる（この点については、第Ⅴ章で後述する。）。

千歳川流域における中心部がキウス 4 遺跡に形成されると、千歳川東岸（馬追丘陵沿い）に集落が遷移していく様子がうかがえる。キウス 4 遺跡に近接するキウス 1 遺跡（大場・石川 1967）では、堂林 3 式前後に遺跡の形成が開始され、晩期前葉まで継続する。ただし、当遺跡での遺跡形成を示唆する「盛土」には、堂林 3 式～晩期前葉の資料が含まれるが、

瘤付土器第Ⅳ段階並行期の出土品が皆無に等しいことが注意される。キウス 1 遺跡で検出された平地住居は瘤付土器第Ⅲ段階並行期に位置づけられ（坂口 2014）、その約 25m 西から「盛土」が発見されている（第Ⅲ-1 図）。「盛土」は、小川の約 50m 下流にも所在し、複数あったとみられる。付近一帯は、土器、石器が出土することから、キウス 1 遺跡は大規模な集落跡であったとされる（大場・石川 1967:103、113）。

既述の通り、キウス周堤墓群では、キウス 4 遺跡における周堤墓第 2 群に相当する 14 号周堤墓が確認され、堂林式前半期に周堤墓が造成され始めていた可能性が高まった（千歳市教育委員会 2019）。ただし、キウス周堤墓群 12 号はキウス 4 遺跡における周堤墓第 3 群（堂林 3 式期の可能性）、3・5・6・7・11 号はキウス 4 遺跡の周堤墓第 4 群（堂林 3 式期の可能性）、1・2・4 号はキウス 4 遺跡の周堤墓第 5 群（瘤付土器第Ⅲ段階並行期）に分類され（藤原 2000b）、堂林 3 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期に周堤墓造成のピークがあった可能性がある。

上述の通り、キウス 1 遺跡は堂林 3 式前後に遺跡の形成が始まるので、キウス 4 遺跡からキウス 1 遺跡、及びキウス周堤墓群に居住・墓域は遷移しているとみられる（大谷 2010:78、藤原 2000b）。こうしたキウス地区の動きに派生するように、近接する丸子山遺跡、末広遺跡でも周堤墓が造成されるのであろう。末広遺跡が縄文時代後期後葉に墓域に変容していくことは、既述した。周堤墓は丸子山遺跡で 2 基、末広遺跡で 3 基確認されている（千歳市教育委員会 1982、1994、1996）。丸子山遺跡の墓域は小規模で、末広遺跡の墓域もキウス 4 遺跡やキウス周堤墓群に比べ小規模の可能性はある。

馬追丘陵沿いでは、この前後する時期にトプシナイ 2 遺跡やイカベツ 2 遺跡で小規模な集落が形成される。トプシナイ 2 遺跡の竪穴 VH2 は床面出土土器から堂林式 2～3 式と推定され、包含層出土品も本遺跡が当該期に形成されたことを示唆する（北海道埋蔵文化財センター 2018）。

イカベツ 2 遺跡には調査区中央に居住域、調査区の北側と南側に墓域が 2 カ所確認されている（北海道埋蔵文化財センター 2018）。南側墓域の土坑墓における墓標の位置（15 号土坑墓は I1、11 号土坑墓は O2、12 号土坑墓は O1 である）、平面・断面形態、及び深度は様々である。墓標の位置では 0 が存在することと、キウス 4 遺跡における周堤墓の分類（藤原 2000b）で第 1 群の特徴とされる平面・断面形態が細身で、深度の深い土坑墓が存在しないことから、墓域は堂林式後半期～瘤付土器第Ⅲ段階並行期に形成された可能性がある。

さらに馬追丘陵沿いの延長線上には、幌内神社遺跡⁽²⁾、幌内 L 遺跡（旧称ウレロッチ左岸遺跡）、堂林遺跡（堂林 3 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期主体）、12 区 B 遺跡（堂林 3 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期主体）が所在する（河野常 1981、野村 1984、野村・宇田川 1967、北海道埋蔵文化財センター 2000a）。幌内 L 遺跡からは、安山岩製の角柱礫 8 本、長円礫 2 個が採集されている⁽³⁾（河野常 1981）。類似する角柱礫と長円礫は、柏木 B 遺跡（恵庭市教育委員会 1981）などから発見されていることから、幌内 L 遺跡にも周堤墓が存在した可能性がある（北海道埋蔵文化財センター 2000a: 17）。

キウス 4 遺跡、キウス 1 遺跡、キウス周堤墓群が存在するキウス地区がコアとなり、馬追丘陵沿いに集落が形成されていく様子が看取される。それに伴い馬追丘陵沿いの交通路が活発化する様子がうかがえる。夕張川流域、石狩川流域に通じる交通路や、馬追丘陵越えの交通路が所在するのであろう。しかしながら、キウス 4 遺跡、キウス周堤墓群、及びキウス 1 遺跡では、瘤付土器第Ⅳ段階並行期の遺構や出土品が皆無の状態に等しく、こうした馬追丘陵沿いの活況も当該期には衰退する可能性がある。

漁川流域では、堂林式前半期（堂林 1・2 式）における周堤墓は確認されていない。柏木川 4 遺跡（堂林 1～2 式期）で狩猟採集などの資源利用のためのキャンプ・サイトや遺物の散布が確認されているにとどまる（北海道埋蔵文化財センター 2010）。それに対し、縄文時代後期後葉後半期～晩期初頭には、柏木 B 遺跡、西島松 5 遺跡、カリンバ遺跡の存在に示唆されるような地域集団の隆盛が顕著になる。これらの遺跡では、下記のように大規模な墓域が形成される。

柏木 B 遺跡の墓域は、第Ⅰ・Ⅱ地点から構成される（第Ⅲ-16 図）。既述の通り、第Ⅰ地点の 1～3 号周堤墓は確実で、4・5 号周堤墓の設定は不確実であるとされる（恵庭市教育委員会 1981: 172）。第Ⅱ地点の北側には柱穴群・焼土を伴う土坑墓群が 3 カ所、南側には墓が列状に配置された墓域が形成されている（恵庭市教育委員会 1981）。第Ⅰ・Ⅱ地点における墓域形成のピークは、墓出土の副葬・供献品から瘤付土器第Ⅲ段階並行期である。一方、瘤付土器第Ⅳ段階並行期～大洞 B 式並行期（436 号墓や 1 号周堤墓 1008 号墓などが該当する）の遺構は少数であることから、当該期には墓域形成が衰退していく傾向が看取される。第Ⅱ地点包含層出土の縄文土器（恵庭市教育委員会 1981: 図 452-467）の主体が瘤付土器第Ⅲ段階並行期であるのは、こうした墓域形成の状況を反映しているのであろう。

カリンバ遺跡では、カリンバ川により形成された段丘面に墓域、低地面に生活・作業場空間が形成されている（第Ⅳ-9・10 図、恵庭市教育委員会 2004）。分布調査で 1999 年調査区東側のトレンチ（TR14）から、安山岩製の角柱礫が検出された周堤墓とみられる遺構 KD1（推定径約 8m）が確認されている（恵庭市教育委員会 2003b）。KD1 の時期は、本発掘調査が行われていないので不明であるが、周堤墓と周堤墓外の墓群の時期的関係の検討が今後、必要とされる。

本遺跡の土坑墓で土器編年による時期比定が可能なものは限られるが（第Ⅳ-10 図）⁽⁴⁾、その多くは、下記の点から瘤付土器第Ⅲ段階～Ⅳ段階並行期と推定される（手稲式期を除く）。①第Ⅰ・Ⅱ章で既述の通り、土器の副葬・供献品を伴う土坑墓で時期比定できるものは瘤付土器第Ⅲ・Ⅳ段階並行期で、大洞 B 式並行期の土坑墓は少数である。また、葬送・追悼儀礼に伴い用いられたとみられる土器が包含層出土品に多く含まれるが（恵庭市教育委員会 2003a）、そのほとんどは瘤付土器第Ⅲ・Ⅳ段階並行期である。②土坑墓平面・断面の形状は、瘤付土器第Ⅲ・Ⅳ段階並行期に時期比定されたものと類似する。③副葬品の組成（漆製品・玉類の多副葬）も瘤付土器第Ⅲ・Ⅳ段階並行期の特徴を示す。

西島松 5 遺跡の墓域は、周堤墓周囲の墓群（南側墓群）、中央の墓群（中央墓群）、北側

の墓群（北側墓群）から構成される（第Ⅳ-11 図）。南側墓群の周堤墓は、1～3 号が設定されている。ただし、周堤墓の周堤は失われているため、1・2 号周堤墓は確実で、3 号周堤墓の設定は不確実であるとされる（北海道埋蔵文化財センター 2009a: 4）。1 号周堤墓は、558・750 号墓出土品（第Ⅱ-2 図）から堂林 3 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期に位置づけられよう。既述の通り、石狩低地帯における完形、半完形の細形石棒は、時期の確実なものでは瘤付土器第Ⅲ段階並行期以降の土坑墓に伴うことや、3 号周堤墓（？）690 号墓出土の細形石棒（北海道埋蔵文化財センター 2009b: 図 213-3）も形態、及び頭部全体に切り込みを施し装飾する点に新しい特徴が看取され、同墓と 3 号周堤墓（？）の編年的位置を示唆している。南側墓群は堂林 3 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期が主体と推定される。

中央墓群には、瘤付土器第Ⅲ段階並行期の 411・444・445・455・470⁽⁵⁾・772 号墓、瘤付土器第Ⅳ段階並行期の 431～433・486⁽⁶⁾・487・497・506・526 号墓、大洞 B 式並行期の 428・462 号墓が含まれ、東端に瘤付土器第Ⅳ段階並行期の墓が分布している。北側墓群には瘤付土器第Ⅳ段階並行期の土坑墓（395・398・399・508・510 号墓）がまとまって分布している。堂林 3 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期の土坑墓が主体とみられる南側墓群から瘤付土器第Ⅲ段階～第Ⅳ段階並行期が主体とみられる中央墓群、北側墓群に墓域が広がっていく様子が看取される（北海道埋蔵文化財センター 2009a）。

漁川流域では、瘤付土器第Ⅲ段階並行期にカリンバ遺跡、西島松 5 遺跡、柏木 B 遺跡では墓域が並行して形成されるが（柏木 B 遺跡でピーク）、瘤付土器第Ⅳ段階並行期にはカリンバ遺跡、西島松 5 遺跡で墓域が継続して形成される一方で、柏木 B 遺跡における墓域形成は衰退していく。大洞 B 式並行期には、カリンバ遺跡での墓域形成は衰え、MA・MC「盛土」出土品、及びグリッド B・C-15 包含層（「盛土」の可能性もあるとされる）出土品に示唆されるように西島松 5 遺跡に遺跡形成が収斂していく様子が看取される（北海道埋蔵文化財センター 2004）。

ユカンボシ川流域でも小規模な集落や墓域がユカンボシ E8 遺跡 A 地点（堂林 2～3 式期）⁽⁷⁾、ユカンボシ E1 遺跡 S31b 区（堂林 3 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期）で確認されている（恵庭市教育委員会 1989、2013）。千歳川上流のウサクマイ B 遺跡（旧称ウサクマイ遺跡 B 地点）でも瘤付土器第Ⅲ段階並行期に小規模な集落が形成されている（千歳市教育委員会 1979）。

このように堂林 3 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期は、千歳川流域における集落跡の増加に示唆される人口増加期と判断される。しかしながら、既述の通り、千歳川東岸と馬追丘陵沿いでは瘤付土器第Ⅳ段階～大洞 B 式並行期の遺構・遺物は少数確認されるのみで、当該期における中心部は、西島松 5 遺跡、カリンバ遺跡、ユカンボシ E2 遺跡（恵庭市教育委員会 2006、2012、2015）の所在する漁川流域に移る可能性がある。

2) 美沢川流域

美沢川流域では堂林 2 式期に美々 4 遺跡で X 9 周堤墓が造成される（北海道埋蔵文化財センター 1986）。対岸の美沢 1 遺跡台地部では、堂林 3 式以前～瘤付土器第Ⅲ段階並行期に

周堤墓が造成され（北海道教育委員会 1979b）、斜面の平坦部では堂林 2 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期の住居跡と建物跡から構成される集落跡が検出されている（第Ⅲ-4 図、北海道教育委員会 1978a）。美々4 遺跡でも瘤付土器第Ⅲ段階並行期に X1～4 周堤墓が造成される（第Ⅲ-5、7、8 図、北海道埋蔵文化財センター 1984）。さらに、その東側にも、周堤墓から派生したとみられる「環状溝墓」が台地際に沿って設けられ、広大な墓域が形成される（第Ⅲ-9 図、北海道教育委員会 1981a）。

これら周囲での墓域形成は、縄文時代晩期初頭（晩期後葉の墓（？））が検出されているが、本稿では検討対象外とする）まで継続され、台地斜面にも広がる（第Ⅲ-10 図）。川べりには、瘤付土器第Ⅳ段階～大洞 B2 式並行期を中心とする墓が設けられ、東側には火山灰を人為的に盛り上げたマウンド（「墳墓」M1～M7）が形成され、マウンド上にも 112・170・185 号墓（大洞 B2 式並行期？）が設けられている（第Ⅲ-11・12 図、北海道教育委員会 1977a）。マウンドからは瘤付土器第Ⅳ段階～大洞 B2 式並行期の注口土器や壺を中心とする土器が出土しており、これらを用いた葬送儀礼や追悼儀礼が複数時期にわたり行われたことを示唆する。対岸の美沢 1 遺跡舌状台地先端部の 1976 年度調査地点でも、瘤付土器第Ⅲ段階～大洞 B 式並行期の墓域が形成され（第Ⅲ-14・15 図）、美々4 遺跡と同様なマウンドが形成されている（北海道教育委員会 1977b）。

（2）石狩川上流域（空知川流域）

石狩川上流域の縄文時代後期中葉における遺跡形成の一つのピークが手稲 1 式であることは既述した。しかしながら、縄文時代後期後葉の神居古潭地区周囲では遺跡、及び遺物の量が減少し、閑散としていく傾向が指摘される（北海道埋蔵文化財センター 2000b: 7）。代わりに、空知川流域には野花南周堤墓の出現に示唆される新たなコアとなるエリアが現れる。野花南周堤墓の南、約 500m に野花南丸谷遺跡、さらに約 500m 南に野花南熊の沢遺跡が位置する（第Ⅳ-12 図）。野花南熊の沢遺跡、野花南丸谷遺跡における遺跡形成は手稲式期に遡るが、その遺物の出土量は少ないことから、当該期の遺跡形成はマイナーのものとみられる。

野花南熊の沢遺跡では、手稲式、鯨潤式、堂林式の資料が出土し、配石遺構が 2 基、検出されている（芦別市教育委員会 1987）。野花南丸谷遺跡は、堂林 3 式、瘤付土器第Ⅲ・Ⅳ段階並行期の資料が出土し、D 区 1・2 号は配石墓とされる（芦別市 1974）。野花南熊の沢遺跡出土品には瘤付土器第Ⅲ・Ⅳ段階並行期の資料が含まれないのに対し、野花南丸谷遺跡では、瘤付土器第Ⅲ・Ⅳ段階並行期の資料が出土していることから、当流域では野花南熊の沢遺跡→野花南丸谷遺跡へと遷移しているとみられる。

「野花南周堤墓群」には、1 号周堤墓と 2 号周堤墓が存在するとされてきた。しかしながら、2012・2013 年の調査で 1 号周堤墓は周堤と竪穴部が確認されたが、2 号周堤墓は周堤と竪穴部も確認されず、周堤墓である可能性が低くなった（北海道埋蔵文化財センター 2014）。1 号周堤墓の時期は不詳ながら、同調査で周堤内竪穴から堂林式土器片（堂林 3 式？）

が出土している（北海道埋蔵文化財センター 2014：図 14 上段）。河野広道が 1954 年に野花南周堤墓を調査した時の出土品とされる資料（北海道埋蔵文化財センター 2014：図 14 下段）には、堂林 3 式～瘤付土器第Ⅳ段階並行期（?）が含まれる。

（3）余市湾周囲

余市湾～塩谷湾における縄文時代後期中葉の遺跡形成は、手稲式～鮎潤式期がピークであることは既述した。しかしながら、こうした遺跡形成も縄文時代後期後葉には継続されず、当該期には衰退していく傾向が看取される。忍路土場遺跡も堂林 1・2 式期を最後に衰退していくとみられる。余市湾～塩谷湾で縄文時代後期後葉の遺跡は、忍路土場遺跡以外では既述した八幡山遺跡が知られるのみである。このような余市湾～塩谷湾の動向に対し、積丹半島西部では縄文時代後期後葉に季節的な漁撈活動のための洞窟利用が盛んになる傾向が注意される。特に、下記の洞穴遺跡が縄文時代後期後葉には漁撈キャンプとして利用されたとみられる（第Ⅳ-13 図）。

茶津洞穴 2 号の 2・3 層は堂林 3 式主体、4 層は鮎潤式主体である（小樽市博物館 1962）。土器の量が往時の活動を反映するとすれば、堂林 3 式期に最も利用されている。当洞穴は、漁撈キャンプ、及び貝輪製作跡として機能しているため、石皿、磨石、石鏃などの定形的石器が欠如し、石器組成に偏りが看取される。茶津洞穴遺跡は、茶津洞穴 1・2 号の手前に位置し、鮎潤式、堂林 3 式、縄文時代晩期、続縄文時代の資料が出土している（泊村教育委員会 1989）。縄文時代後期については、茶津洞穴 2 号出土品と共通する様相を呈する。照岸洞穴の出土品は縄文時代晩期後半が主体で、縄文時代後期は堂林 3 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期が少量出土している（千代 1965）。

3. 小結

縄文時代後期中葉（手稲式・鮎潤式期）の北海道中央部では、集落・墓地遺跡のコアとなる地域は石狩川上流域、余市湾周囲、石狩低地帯に分散している。縄文時代後期後葉には、石狩川上流域のコアであったエリアは衰退する傾向がみられる。代わりに、空知川流域には野花南周堤墓に示唆されるように新たなコアとなるエリアが出現する。余市湾周囲も縄文時代後期中葉には、コアな地域であったが縄文時代後期後葉には衰退する。その一方で、縄文時代後期後葉には積丹半島西部に漁撈キャンプとして機能したとみられる洞穴遺跡が分布する傾向が注目される。重要なのは、石狩低地帯のみ縄文時代後期中葉～後葉まで一貫して遺跡が継続して形成されていることである。

注

- (1) 地区の名称については、『西崎山ストーンサークル』（北海道埋蔵文化財センター 2001c）に基づいている。
- (2) 幌内神社遺跡には、社殿手前に周堤墓状遺構が 1 基存在する（北海道埋蔵文化財センタ

- ー 2000a: 17)。周堤墓状遺構は、近代の「相撲場跡」と位置的に重複するので（幌内神社 2006: 89）、この遺構に関しては確認調査による検証が必要である。
- (3) これらの角柱礫、長円礫は幌内神社の社殿手前に陳列されている。1913 年（大正 2 年）に地元青年会役員の提唱により集められ、社殿手前に陳列・保存されることになったという（幌内神社 1997: 34、2006: 96）。
- (4) 第Ⅳ-10 図には、1999 年調査区の発掘調査所見に第Ⅰ・Ⅱ章の研究成果を加えて図示している。報告書（恵庭市教育委員会 2003a）では 173・230 号は土坑、同報告書図 293 では 173 号は縄文時代後期末葉～晩期初頭の土坑墓、230 号は縄文時代晩期前葉～後葉の土坑墓として図示されている。173 号土坑から出土した鉢形土器（恵庭市教育委員会 2003a: 図 116-173 号土坑-1）、230 号土坑から出土した鉢形土器（恵庭市教育委員会 2003a: 図 126-230 号土坑-1）は、両土器ともに瘤付土器第Ⅲ段階並行期に比定される。両土器が各土坑に伴うとすれば、当該期に比定される。第Ⅳ-10 図では、両土坑を瘤付土器第Ⅲ段階並行期の土坑墓として図示している。
- (5) 470 号墓出土のミニチュア正面（北海道埋蔵文化財センター 2009b: 図 105-P470-1）には雑な沈線文（2 条になったり 3 条になったり変則的である）、背後には口縁部が平縁ながら 3 条の波状沈線文（本来、波状口縁に施される）が施されている。このような波状沈線文の類例は、柏木 B 遺跡 401 号墓出土品（第Ⅱ-3 図）、西島松 5 遺跡 455 号墓出土品（第Ⅱ-5 図）、カリンバ遺跡 111 号墓出土品（第Ⅱ-5 図）に看守されることから、瘤付土器第Ⅲ段階並行期と判断される。第Ⅳ-11 図では、470 号墓を当該期として図示している。
- (6) 486 号墓出土の注口土器（?）（北海道埋蔵文化財センター 2009b: 図 116-69）の器形、胎土、調整（外面ミガキ、内面ナデ）、及び焼成は、487 号墓出土の注口土器（第Ⅱ-11 図）と酷似することから、両者は同一製作者によるものと推定される。486 号墓出土の注口土器（?）が同墓に伴うとすれば、瘤付土器第Ⅳ段階並行期に比定される。第Ⅳ-11 図は、この所見に基づき図示している。
- (7) ユカンボシ E8 遺跡 A 地点の 1 号住居跡は、床面出土の土器（恵庭市教育委員会 1989: 図 9-39・40）から堂林 2～3 式期とみられる。53 号墓（恵庭市教育委員会 1989: 図 47-53）は、平面・断面の形状から縄文時代後期後葉と推定される。

第Ⅴ章 周堤墓形成期の居住集団の動態

1. 分析方法

本研究では、北海道中央部の縄文時代後期中葉～後葉における集落の人口動態、及び居住集団の規模に関する検討を行うため、①住居跡面積の計測、②住居跡面積の遺跡内、遺跡間変異、及び時期的変化に関する分析、③住居跡面積から居住人口の積算を実施することとした。

住居跡面積は、往時の住居に関する居住人口を積算するために発掘調査報告書などに掲載された住居跡の輪郭からプランメーターで計測している。ただし、一部の住居跡については、ソフト「!0_0! Excel シリーズ: 長さ・面積測定 Free」を用いて計測した。このソフトでは、デジタル化された住居跡の輪郭をなぞることで、住居跡面積の測定が可能である。

本研究では、石狩川上流域、空知川流域、余市湾周囲では縄文時代後期中葉～後葉の住居跡面積を計測するのに良好な住居跡が検出されていないため、石狩低地帯における住居跡面積の計測を実施することとなった。後述する通り、忍路土場遺跡の台地部では住居跡が検出され（第Ⅳ-7 図）、余市湾周囲における縄文時代後期中葉の住居跡規模の一端がうかがえる。

本研究では、住居跡が完存するものを中心に計測を行うこととしたが、攪乱などにより欠損している住居跡については、その輪郭の推定復元が可能な場合は、計測を行うこととした。千歳川流域における縄文時代後期中葉～後葉の住居跡については、遺跡形成過程の様々な要因により堅穴住居跡の深度が浅い傾向があることが指摘されている（北海道埋蔵文化財センター 2001a: 359）。キウス4遺跡、イカベツ2遺跡では、支柱穴、壁柱穴、炉跡（検出されない場合もある）、入口施設（検出されない場合もある）は検出されているが、掘り込みや住居跡壁は確認されていないため住居跡輪郭は不明である（北海道埋蔵文化財センター1997d、2001a、2001b、2018）。こうしたキウス4遺跡、イカベツ2遺跡の事例については、壁柱穴をもとに推定復元した住居跡輪郭から住居跡面積を計測している（第Ⅴ-1 図）。この方法は、下記の観点から有効と考えられる。

北日本における縄文時代後期中葉～後葉の住居跡は、支柱穴、壁柱穴、炉跡（検出されない場合もある）、入口施設（検出されない場合もある）から構成される点に類似した特徴があり、壁柱穴の周りに堅穴の輪郭が巡ることが知られている（青森県埋蔵文化財調査センター 2000；北海道埋蔵文化財センター 2001b: 374-380）。上述の通り、キウス4遺跡、イカベツ2遺跡の住居跡も同様に、平面形は不整の円形で支柱穴、壁柱穴、炉跡（検出されない場合もある）、入口施設（検出されない場合もある）から構成される点に強い規格性が看取され、壁柱穴の周りに住居跡輪郭が巡るとみられる。こうした特徴から、壁柱穴の配列に基づき推定復元した住居跡輪郭から住居跡面積を計測する方法には有効性が認められよう。

住居跡面積は、遺跡内、遺跡間、あるいは時期（土器型式）ごとに統計的分析を実施することで居住集団の規模、変異、動態を分析することとした。統計的分析には Excel 2019 を使用している。住居跡の時期比定については、原則的に床面出土土器に基づき行っている。上記した通り、キウス 4 遺跡、イカベツ 2 遺跡では住居跡掘り込みや住居跡壁は確認されていないため、一般的な竪穴住居跡の床面出土土器に基づく精度の高い時期比定は一部を除き困難である。キウス 4 遺跡の住居跡は、その出土品、包含層、及び「盛土」出土品を総合的に勘案すると堂林 1 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期のものが含まれているとみられる。

イカベツ 2 遺跡の住居跡は、併存した可能性の高い墓域の形成過程を手掛かりに時期を推定している。既述の通り、a) 本遺跡には、墓標の位置に関する分類では I が 1 例、0 が 2 例ある（第Ⅱ-1 表）。b) 本遺跡には、キウス 4 遺跡における周堤墓の分類（藤原 2000 b）で第 1 群（堂林 1 式期に対比される）の特徴とされる平面・断面形態が細身で、深度の深い土坑墓が存在しない。以上の点から、墓域は堂林式後半期～瘤付土器第Ⅲ段階並行期に形成され、住居跡も近接する時期のものと推定される。

遺跡内、及び遺跡間変異に関する統計的分析には、ユカンボシ E3/E8 遺跡、キウス 7 遺跡、末広遺跡、キウス 4 遺跡のデータを使用している。縄文時代後期中葉の住居跡に関しては、手稲式期と鯨潤式期という単位で分析を実施している。第 I 章にて、手稲式と鯨潤式の細別時期について既述しているが、細別時期ではサンプル数が限られるためである。遺跡間変異に関するキウス 7 遺跡の住居跡データに手稲 1～3 式のものが含まれるのも、同様な理由からである。

上述の通り、縄文時代後期後葉の住居跡については、キウス 4 遺跡を含む多くの遺跡で精度の高い時期比定が可能なものは限られるため（第Ⅴ-2 表）、住居跡面積の時期的変化に関する統計的分析をする際には、堂林 1 式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期を「堂林式」として扱うこととした（第Ⅴ-2 図）。

住居跡面積に基づく居住人口の積算は、ヘイデンら（Hayden et al. 1996）の民族誌にもとづく竪穴住居の居住空間に関する研究を参照している。ヘイデンらは北米の極圏を中心とした民族誌に記録された竪穴住居の面積、居住人口、人口密度、及び気候（冬季の気温）を通文化的に検討した。その結果、a) 竪穴住居の面積が大きくなれば、居住人口が増えること、b) 室内の保温効果を高めるために、寒冷地になるほど人口密度が高くなること、c) 竪穴住居の一人あたりの居住空間は平均が 2.16m^2 である、との所見を得ている。この所見は、特に竪穴住居における人口密度の高い極圏を中心とした民族誌データに依拠しているので、本稿では、住居跡一人あたりの居住空間を 2m^2 とともに 3m^2 で換算し、住居跡面積から居住人口を積算することとした。

2. 結果

計測した縄文時代後期中葉、及び後葉の住居跡面積の結果を第Ⅴ-1・2 表に示す。統計的

分析を実施した住居跡面積の遺跡内、及び遺跡間変異と時期的な変化を第 V-2 図に示す。サンプル数は限られるが、手稲 1 式期主体のユカンボシ E3/E8 遺跡で住居跡面積の変異幅が大きく、手稲式後半期～鯉潤式期の末広遺跡では変異の幅が小さい結果が得られた（第 V-2a 図）。住居跡面積の中央値は、ユカンボシ E3/E8 遺跡で 28.5m²、キウス 7 遺跡で 22.8m²、末広遺跡で 15.8m² である。縄文時代後期中葉の遺跡間では、特にユカンボシ E3/E8 遺跡の変異の幅がやや大きく、中央値が末広遺跡のそれをかなり上回る点が注意される。既述の通り、ユカンボシ E3/E8 遺跡は石狩低地帯における手稲 1 式期のコアとなる集落で大形住居も含まれるため、こうした遺跡の性格がデータに反映されている可能性がある。

縄文時代後期後葉については、キウス 4 遺跡を除くと遺跡内、及び遺跡間変異を検討できるような良好なデータは得られなかった。キウス 4 遺跡では住居跡面積の変異が大きく、中央値は 52.9m² である。住居の大形化が顕著で、居住集団の拡大傾向を示す。キウス 4 遺跡では、4 本支柱穴配列の規模（支柱穴間距離）と住居跡規模の相関が指摘され（北海道埋蔵文化財センター 2001a: 365）、4 本支柱穴配列の規模の変異は、住居跡面積の変異を反映しているのであろう。遺跡間では、縄文時代後期後葉のキウス 4 遺跡と縄文時代後期中葉の遺跡で明瞭な差異が看守される。

第 V-2b 図に縄文時代後期中葉～後葉の住居跡面積の時期的な変化を示す。手稲式期の中央値は 17.5m²、鯉潤式期の中央値は 25.0m² で、両時期ともに住居跡面積のバラツキが小さい傾向がうかがえる。それに対し、堂林式期の中央値は 52.1m² で、住居跡面積のバラツキが大きくなり、住居の大形化と住居跡面積の変異が拡大している。堂林式期のデータは、手稲式・鯉潤式のそれと明瞭な差異が看守され、堂林式期が大きな転換期で、居住集団の拡大傾向を示す。ただし、堂林式期のデータはキウス 4 遺跡のものが過半数を占めるので、キウス 4 遺跡の傾向を反映している可能性もあり、今後データの蓄積と検証が必要とされる。また、居住集団の動態に関するより詳細な分析を実施するためにも、住居跡の精度の高い時期比定されたデータの蓄積が期待される。

3. 考察

（1）縄文時代後期中葉の集落と居住集団

石狩低地帯における当該期の集落は、数軒から構成される小規模集落で、住居跡面積は一般的に 10m²～30m² の小規模なものである。ただし、ユカンボシ E3/E8 遺跡で住居跡面積の変異が大きい。ユカンボシ E3 遺跡 A 地点の住居跡 HP 6 は、支柱穴の径も太く、4 本支柱穴配列（支柱穴間距離）の規模は 4.6m～4.9m で（恵庭市教育委員会 1992b）、住居跡面積は推定 88.4m² である（報告書の復元案（恵庭市教育委員会 1992b: 図 75）では、長軸約 13m、短軸約 12m、住居跡面積約 139m² である。）。HP 6 は、HP 7～10 と重複し、建替えが繰り返され、遺跡内における選地傾向が看取される（第 IV-6 図）。こうした建替えに伴い形成されたとみられる手稲 1 式を主体とする時期に形成された「盛土」が隣接して検出されているので、HP 6～10 は手稲 1 式に比定される可能性がある。ユカンボシ E3/E8 遺跡の一般的な住居は規

格性が弱く、規格性の強い HP6～10 は特殊な住居の可能性もある。HP6～10 は大きさに差異がみられるが、4 本主柱穴、壁柱穴（検出されない場合もある）、炉跡、入口施設から構成され、主軸は東方向に揃うという規格性がみられる（HP7 の 4 本主柱穴配列の規模は 3.9m～4.0m、住居跡径 10m 前後、HP10 の 4 本主柱穴配列の規模は 2.6m～2.8m、住居跡径 8m 前後、HP8・11 も HP10 と同様な大きさと推定されている。）。後述するキウス 4 遺跡でみられる 4 本主柱穴配列の規模と住居跡規模の相関、及び住居跡規模と柱穴の規模（径と深度）の相関が手稲式期に看取される（恵庭市教育委員会 1992b）。こうした企画性の強い住居跡が手稲 1 式期のコアとなる集落遺跡で検出された点が注目される。

当該期の集落遺跡は分散しており、ユカンボシ E3/E8 遺跡、末広遺跡を除くと集住化するような様子はみられず、居住地移転の頻度が高かったことが推測される。第Ⅳ章で既述の通り、キウス 7・5 遺跡の面積は広大であるが、手稲 1～3 式の住居跡が分散し、遺構の密度は低い（北海道埋蔵文化財センター1996、1997a、1997b、1998c）。美沢川流域でも手稲式～鯨潤式期には小規模な集落が分散している傾向が看守され、美々4 遺跡の縄文時代後期中葉土坑墓群は、こうした居住集団の手稲式～鯨潤式期の集合墓地であった可能性がある（第Ⅲ-6 図）。

一方、ユカンボシ E3/E8 遺跡（恵庭市教育委員会 1989・1992a・1992b）は手稲 1 式期、末広遺跡（千歳市教育委員会 1982）は手稲 2・3 式～鯨潤式期のコアとなる集落であった可能性がある。ユカンボシ E3/E8 遺跡の手稲 1 式期（当該期の可能性ある住居跡も含む）の住居跡 6 軒（合計住居跡面積 235.24 m²）が並存していたと仮定した場合、一人あたりの住居スペースを 2m² で換算すると約 118 人、3m² で換算すると約 78 人の居住集団である（ただし、ユカンボシ E3 遺跡は全面調査されていないことと、重複関係から HP9（主柱穴住居）→HP4（普通の住居）が指摘されるので（恵庭市教育委員会 1992b）、手稲 1 式期に比定される住居が併存していたとは限られず、現状では不確定な部分が多く残る。）。ユカンボシ E3 遺跡では住居跡の密度が高く、集住化の様子が看取され、それに伴いユカンボシ E3/E8 遺跡で手稲 1 式期主体の大きな墓域も形成されたとみられる（第Ⅳ-6 図）。

既述の通り、縄文時代後期中葉の末広遺跡では手稲 2 式～鯨潤式新段階に集落が形成されていた（第Ⅲ-3 図、千歳市教育委員会 1981、1982、1985）。手稲式期（手稲 2 式～手稲 3 式）の住居跡は、調査区全体の段丘縁辺に分散しているが、鯨潤式期に住居跡が集中する居住域が形成される。鯨潤式期 4 軒（住居跡面積合計約 100m²）の住居が並存していたと仮定した場合、一人あたりの住居スペースを 2m² で換算すると約 50 人、3m² で換算すると約 33 人から構成される集落である。ただし、周堤墓の造成により攪乱されているため、計測していない鯨潤式期の住居跡 H28（径約 6m≒面積約 28m²）、鯨潤式の可能性のある住居跡 H48（面積約 22m²）を加えると、もう少し大きな居住集団が想定される。

既述の通り、余市湾周囲と石狩川上流域では、良好なデータは得られていない。忍路土場遺跡の住居跡 H1 の推定径は 4.3～4.7m（住居跡面積約 16 m²）、H2 の推定径は 6m（住居跡面積約 28 m²）で、その 4 本主柱穴配列の規模は 1.8～2m あり、余市湾周囲における縄文時

代後期中葉の住居跡規模の1事例を示す（第Ⅳ-7図、北海道埋蔵文化財センター 1989a）。

（2）縄文時代後期後葉の集落と居住集団

当該期については、キウス4遺跡を除くと遺跡間変異を検討できるような良好なデータは得られなかった。キウス4遺跡では、約124軒の住居跡が検出されており（北海道埋蔵文化財センター 2003b: 13）、これらの住居が同時期に並存していないとしても同遺跡が石狩低地帯における縄文時代後期後葉の最大集落遺跡であり、当該期に集住化が起きていたことを示す（第Ⅲ-1図）。

既述の通り、キウス4遺跡では、4本主柱穴配列の規模（主柱穴間距離）と住居跡面積の大きさに相関が看取される。すなわち4本主柱穴配列の規模が大きくなれば、住居跡面積も大きくなる傾向がみられる。住居跡面積と柱穴の規模（上端短径と深度）にも相関があり、大形の住居跡の主柱穴の規模は大きい傾向が指摘される。こうした大形の住居跡は、建て替えが繰り返され、遺跡内での場所も選択され、その存在が特殊であったとされる（北海道埋蔵文化財センター 2001a: 363-373）。

美沢1遺跡（第Ⅲ-4図）では、住居跡輪郭と主柱穴配列がうかがえるものが1例（FH35）ある。FH35の主柱穴配列の規模は2.4m～2.6mで、住居跡面積は約20.4m²である。美沢1遺跡では、キウス4遺跡と同様に住居跡壁は検出されていないが、主柱穴配列と炉跡が検出された建物跡が5例（FH39・43・44・46・56）ある（北海道教育委員会 1978a）。これらの主柱穴配列の規模は1.9m～2.8mである。上記のキウス4遺跡で看取される4本主柱穴配列の規模（主柱穴間距離）と住居跡面積の大きさに関する相関が美沢1遺跡でもあるとすれば、FH39・43・44・46・56の住居跡面積は20m²前後と推測される。キウス4遺跡では住居跡面積の変異に対応するように、4本主柱穴配列の規模も2m～5m以上のものがある（北海道埋蔵文化財センター 2001a: 365）。美沢1遺跡の住居跡はキウス4遺跡のものと比較すると、小形の傾向が看取される。美沢1遺跡集落の規模、及び人口もキウス4遺跡のものと比較すると、規模が小さいことがうかがえる。ただし、美沢1遺跡では、FH22のような大形住居跡（推定約104 m²）が存在し、遺跡内における住居跡面積の変異がうかがえる（北海道教育委員会 1978a）。

イカベツ2遺跡の住居跡、特にH4・5については、主柱穴、壁柱穴、入口施設の配置、主柱穴と入口施設を結ぶ主軸の方向、及び規模（住居跡面積約50m²）に強い規格性がみられる。同じ社会集団により構築されたためであろう。住居跡H1・4・5の3軒（合計住居跡面積155.34 m²）が同時期に存在したと仮定した場合、一人あたりの住居スペースを2m²で換算すると約78人、3m²で換算すると約52人から構成される集落である。イカベツ2遺跡では、居住域に隣接して4本主柱穴から構成される掘立柱建物跡2棟、やや離れた場所に墓域が形成されており（北海道埋蔵文化財センター 2018）、縄文時代後期後葉における小規模な集落の景観や居住人口がうかがえる事例といえよう。

4. 結語

以上の居住集団に関する分析から、以下のことが読み取れる。1) 縄文時代後期中葉の末広遺跡、キウス 7 遺跡に比べ、堂林式期のキウス 4 遺跡では住居跡面積の中央値が 2 倍以上ある。キウス周堤墓群の史跡範囲確認調査で検出された鯿澗式古段階の竪穴住居跡 II H4 の住居跡面積は 28m²である（第 V-1 表）。周堤墓出現の直前段階である鯿澗式新段階の様相がさらなる今後の研究課題となるが、キウス 4 遺跡、及びキウス周堤墓群関連遺跡においても堂林式期が居住集団の大きな転換期であった可能性が示唆される。2) 堂林式期には、住居の大形化が顕著で、居住集団の拡大と地域社会における労働力の再編成が示唆される。住居の大形化と居住集団の拡大化に示唆される地域集団の人口増が周堤墓の造成に必要とされる労働力を支えたと考えられる。3) また、堂林式期には住居跡面積の変異が拡大する。このように、当該期が居住集団の大きな転換期で、キウス 4 遺跡では居住集団が拡大化し、それとともにその大小が現われる傾向がある。このような傾向は、遺跡内では有力者とそうでないもの、遺跡間では有力グループとそうでないグループの存在を示唆している（坂口 2014、Sakaguchi 2011）。

第Ⅵ章 周堤墓の出現に関する総合的考察

1. 縄文時代後期中葉の社会的複雑性

第Ⅳ章にて、周堤墓の出現前夜である縄文時代後期中葉の（１）石狩低地帯、（２）余市湾周囲（積丹半島含む）、（３）石狩川上流域（空知川流域含む）の集落・墓地遺跡の時空間的变化を検討することで、これらの地域におけるセトルメント・パターンや地域集団の動態も明らかになってきた。

石狩低地帯の千歳川流域では、ユカンボシ E3/E8 遺跡を除くと小規模集落の居住地移転の頻度が高く、手稲式と鮎濶式の各時期にコアとなる集落が移り、地域集団の fission/fusion (*sensu* Blitz 1999) が起きていた可能性が示唆された。それに対し、美沢川流域では集落は小規模で分散しているが、美々4 遺跡の台地縁辺に手稲式～鮎濶式期の6 群の土坑墓群から構成される大規模な墓域が形成され、以降、縄文時代後期後葉まで大規模な墓域は当流域で場所を変えながら継承されることで一貫していることから、千歳川流域とは異なるセトルメント・パターンや地域集団の存在が示唆された。

石狩川上流域では集落が発見されていないが、神居古潭地区と音江地区が遺跡密度や環状列石の存在から地域集団の中心部とみられる。神居古潭 5 遺跡と音江環状列石における配石遺構の差異から、両者は地域集団内におけるサブグループであった可能性も想定される。一般的に縄文時代後期中葉における北海道中央部では、副葬・供献品を伴う墓の比率は低い傾向があるが、音江環状列石では美々4 遺跡の縄文後期中葉土坑墓群とともに副葬・供献品の比率が高い点が注目される（駒井 1959）。音江環状列石には漆製品が発見された墓が3 基あり、特に、赤漆塗りの弓が発見された11 号墓は縄文時代後期後葉の副葬・供献品を髣髴とさせ、先取性が看取される（第Ⅳ-8 図）。

余市湾周囲では、2～3km 間隔で分布する配石遺構、及び関連遺跡に地域集団のネットワークが示唆される。余市湾周囲は比較的狭い範囲でありながら、中心部が西崎山ストーンサークル（ウサクマイ C 式～手稲式期）→忍路土場遺跡周囲（手稲2・3 式～鮎濶式期主体）と安芸遺跡（手稲式～鮎濶式期主体）に移転している可能性がある。忍路土場遺跡周囲では、川べりの低地における生活空間、川べりに面した台地に居住域、その背後の丘陵や山尾根に配石遺構が設けられている。忍路環状列石と地鎮山環状列石が近接して所在する忍路土場遺跡周囲は、縄文時代後期中葉の余市湾周囲における地域集団の中心部であろう。こうした地域集団の中心部となる集落では、葬送・追悼儀礼や様々な饗宴・儀礼が行われたであろう。既述の通り、葬送・追悼儀礼は地域集団の威信を示す場でもあるから、威信技術としての物質文化（土器・木工芸品）が発達することとなる（Hayden 1998、2009）。

忍路土場遺跡出土の土器・木工芸品はその物的証拠であり、こうした饗宴・儀礼のために威信技術としての漆製品も発達したのでであろう（小林 1998）。北海道縄文時代後期は漆製品の盛行期であるが（小林 1998、三浦 2003）、その先駆けの一角を担っていたのが忍路土場遺跡の工芸集団であろう。漆製品に代表される奢侈品は富の象徴であり、縄文時代後期

における漆製品の発達と社会的複雑化は一連のものであろう。地鎮山環状列石の被葬者はこうした物的基盤を背景にもつとともに、北海道南部の地域集団とのネットワークをも持ち合わせていた有力者とみられる。

大形の配石墓である地鎮山環状列石や美々4 遺跡の縄文時代後期中葉土坑墓群の群内中央に位置する土坑墓（第6群 X817 墓）は、当該期における被葬者の社会的重要性と社会階層化を示唆する。関連して注目されるのは、美々4 遺跡の手稲式～鮎瀬式期の6群の土坑墓群では、副装品が出土している土坑墓は群内に位置し、群外の土坑墓からは出土していないことである（第Ⅲ-6図）。群内と群外の土坑墓の比率は前者が約94%、後者が約6%を占める（第Ⅵ-4図）。前者を elite 層、後者を non-elite 層とすれば、elite 層が大半を占めていたことになる。同遺跡の6群の土坑墓群は、周堤墓の祖型とされ（北海道埋蔵文化財センター 1985）、キウス4 遺跡における周堤墓内外の墓にみられる副葬品、墓標、赤色顔料の差違（第Ⅵ-1～3図）は、縄文時代後期中葉の手稲式～鮎瀬式期に胚胎されていたとみられる。

また、美々4 遺跡の手稲式～鮎瀬式期の6群の土坑墓群で注目されるのは、ヒスイ製玉類が多数出土していることである。これらヒスイ製玉類は、理化学的分析によりそのほとんどが約750 km 離れた糸魚川から搬入されたものとされる（藁科 1996）。一般的に交易物資は、原産地から距離が離れるにつれ減少していく（down-the-line trade）ことが知られている（Renfrew and Bahn 2000: 371）。しかしながら、縄文時代後期のヒスイは原産地から離れた遠隔地の北海道中央部に偏在して分布する傾向がみられる（野村 2005）。これは down-the-line trade とは逆のパターンであり、北海道中央部の有力者が奢侈品のヒスイを aggrandizer strategy（sensu Hayden 1998）の一部として所望した結果生じた事象であろう。ヒスイ製玉類が副葬された被葬者は、ヒスイ交易のネットワークに関与し、遠隔地の希少財にアクセスできた有力者とみられる。

縄文時代後期中葉の集落は小規模でも有力者を中心とした集落間の交易やネットワークが形成され、複雑化した社会が形成されていたとみられる。こうした当該期における heterogeneous elements が縄文時代後期後にさらに発達するのであろう。

2. 縄文時代後期後葉の社会的複雑性

第Ⅳ章で検討した通り、当該期の余市湾周囲と石狩川上流域では、セトルメント・パターンに大きな変化が看守された。余市湾周囲は、縄文時代後期中葉にはコアな地域であったが縄文時代後期後葉には衰退する。その一方で、積丹半島西部に漁労キャンプとして機能したとみられる洞穴遺跡が分布する傾向が注目される。こうした事象は、①余市湾周囲における人口の減少、②当湾周囲が居住域から logistical locations に変容し、周縁化していったことを示唆する。

石狩川上流域でも神居古潭地区における遺跡形成が衰退する傾向が看守された。代わりに、空知川流域には野花南周堤墓が出現する。北海道中央部の縄文時代後期中葉の墓制に

は、各地に地域的な墓制（配石墓、土坑墓、クラスターを形成する土坑墓群）が展開していた。空知川流域はもともと配石遺構や配石墓の分布する地域であったから、人類学的に墓制は保守的とされることを勘案すれば、周堤墓の出現は当流域の地域社会における変化を如実に示すものであろう。

さらに周堤墓は、北海道東部にも広がる。朱円周堤墓には、在地的な配石墓と新規に採用された周堤墓との hybridization が看守される（河野広 1981、北海道埋蔵文化財センター 2014）。周堤墓の数は、野花南周堤墓が 1 基（約 1.4%）、朱円周堤墓が 2 基（約 2.9%）、その他の北海道東部で 9 基（約 13.4%）、石狩低地帯で 55 基（約 82.0%）が確認されていることから（石狩低地帯、及びその他の北海道東部の周堤墓数は、藤原（2003：図Ⅲ-2）に準拠）、その差異は明瞭である。墓制の伝播やそれに伴う在地の伝統的な墓制の変容は、地域集団間のインターアクションの度合を示す指標となる（Renfrew 1986）。特に、円形の堅穴に周堤を伴う周堤墓は企画性が強く、往時の地域間のインターアクション（力関係、社会政治）の度合を示唆する。上記の差異は、石狩低地帯に有力な地域集団が割拠し、その他の地域には小規模な地域集団が分布し、地域集団の勢力を示すものとみることができよう。

しかも石狩低地帯における周堤墓の数は、キウス周堤墓群とキウス 4 遺跡で全体の約半分、それに美々4 遺跡と美沢 1 遺跡を加えると、過半数で占められる（第Ⅵ-5 図）。既述したキウス周堤墓群、キウス 4 遺跡、キウス 1 遺跡の遺跡形成過程からすれば、キウス周堤墓群はキウス 4 遺跡の関係者、ないし後継者により形成されたとみられる（大谷 2010:78）。美々4 遺跡と美沢 1 遺跡は、縄文時代後期後葉には同時期に遺跡が形成されていることと、その地理的近接性から同一グループないし、affiliation のあるグループにより形成されたとみられる（Sakaguchi 2011）。周堤墓の造成には、多大の労働力を要することから、周堤墓の規模と数は、周堤墓を造成した集団の社会政治的力を示したものと見えよう。

縄文時代後期後葉にはセトルメント・パターンの劇的な変化とともに、第Ⅴ章の居住集団の動態に関する分析においても、下記の変化が明らかになった。1) 住居の大形化に伴う居住集団の拡大が顕著で、地域社会における労働力の再編成が示唆された。2) また、住居跡面積の変異が拡大し、大小が現われる傾向が看守された。こうした事象は、縄文時代後期中葉の小規模な居住集団が後期後葉に拡大し、特に、キウス 4 遺跡では規模の大きな居住集団が形成されていたことが示唆された。居住集団は拡大化、多様化し、居住集団間で有力者と非有力者の差異化や新たな労働編成が起きていたことも示唆された。セトルメント・パターンと住居跡面積の変化に示唆される居住集団の拡大傾向や居住集団間の変異の拡大化は、縄文時代後期後葉に共時的に起きていたとみられ、これらの分析結果はイカワ・スミス(Ikawa-Smith 1992) が想定するような当該期における平等的な社会を支持しない。

既述の通り、美々4遺跡の縄文時代後期中葉土坑墓群における群内と群外の土坑墓の比率は前者が約94%、後者が約6%を占めている（第Ⅵ-4図）。縄文時代後期後葉のキウス4遺跡における周堤墓内と周堤墓外の土坑墓の比率は、前者が約44%、後者が約56%を占めてい

る。前者をelite層、後者をnon-elite層とすれば、その比率はほぼ半々ということになる。この推定が妥当とすれば、縄文時代後期後葉には、non-elite層が増加しており、このような増加は住居跡面積の変異に示唆される居住集団の拡大や労働力の再編に関与していた可能性がある。既述の通り、縄文時代後期後葉の北海道中央部は、石狩低地帯を中心に社会が再編成され、そのような中でコアとなるキウス地区の地域集団（遺跡として残されたのはキウス4遺跡やキウス周堤墓群）は周囲の人口を合併、吸収できた可能性がある。

当該期の石狩低地帯は、ヒスイ、細形石棒、緑色片岩、黒曜石、アスファルトなどの実用・奢侈品の集中に示唆されるように、北海道中央部における交易物資のgateway的様相を呈する(*sensu* Hirth 1978)。このような地域間、及び長距離交易による物資の集中は、①石狩低地帯への有力グループの割拠とともに交易ネットワークの形成、②地域集団内、地域集団間における競覇のための交易物資の利用、③その結果、有力な個人・集団への富（奢侈品）の集中として副葬・供献品に具現されたものであろう。

既述の通り、縄文時代後期中葉の北海道中央部では、集落・墓地遺跡のコアとなる地域は余市湾周囲、石狩川上流域、石狩低地帯に分散していた。ところが、縄文時代後期後葉には、周堤墓遺跡が石狩低地帯の比較的狭い範囲に集中するように分布し、個別の周堤墓遺跡はネットワークの一部であることを示唆する。その一方で、その他の地域は周縁化していく様相が看守された。周堤墓の出現やその形成過程は、こうした縄文時代後期後葉の北海道中央部におけるセトルメント・パターン、及び居住集団の劇的な変化に伴うもので、縄文時代後期中葉の分散化する傾向がみられた地域社会が石狩低地帯への人口の集中とともに再編成されたことを示す。

引用文献

- 青森県埋蔵文化財調査センター編 2000「まとめ」『山下遺跡Ⅱ・米山(2)遺跡』青森県教育委員会、青森、111-117 頁
- 旭川市教育委員会編 1990『神居古潭ストーンサークル遺跡調査報告書』旭川市教育委員会、旭川
- 旭川市教育委員会編 1992『神居古潭 7 遺跡』旭川市埋蔵文化財発掘調査報告第 14 号、旭川
- 旭川市教育委員会編 1993『神居古潭 7 遺跡 2』旭川市埋蔵文化財発掘調査報告第 15 号、旭川
- 旭川市教育委員会編 1995『神居古潭 7 遺跡 4』旭川市埋蔵文化財発掘調査報告第 19 号、旭川
- 芦別市編 1974「芦別市野花南丸谷遺跡の発掘調査」『芦別市史』芦別市、芦別、60-82 頁
- 芦別市教育委員会編 1987『野花南熊の沢遺跡』芦別市教育委員会、芦別
- アースサイエンス 2009「西島松5遺跡出土玉類の岩石学的分析」『西島松5遺跡 6 第1分冊』北海道埋蔵文化財センター調査報告第260集、江別、221-235頁
- 阿部明義 2008「堂林式・御殿山式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション、東京、560-567 頁
- 石川徹 1969「北海道千歳市キウス環状土籬外縁部墳墓について」『北海道考古学』5、37-40 頁、北海道考古学会、札幌
- 乾芳宏 1981「美沢川流域の環状土籬群：研究史と墓壇の分析を中心にして」『北海道考古学』17、25-35 頁、北海道考古学会、札幌
- 乾芳宏 2000「八幡山ストーンサークル」『余市水産博物館研究報告』3、25-32 頁、余市水産博物、余市
- 上屋眞一・木村英明 2016『国指定史跡 カリンバ遺跡と柏木B遺跡：縄文時代の後期 石棒集団から赤い漆塗り帯集団へ』同成社、東京
- 恵庭市教育委員会編 1981『柏木B遺跡』恵庭市教育委員会、恵庭
- 恵庭市教育委員会編 1989『ユカンボシE8遺跡』恵庭市教育委員会、恵庭
- 恵庭市教育委員会編 1992a『ユカンボシE3遺跡B地点』恵庭市教育委員会、恵庭
- 恵庭市教育委員会編 1992b『ユカンボシE3遺跡A地点/ユカンボシE8遺跡B地点』恵庭市教育委員会、恵庭
- 恵庭市教育委員会編 1993『西島松14遺跡・西島松15遺跡』恵庭市教育委員会、恵庭
- 恵庭市教育委員会編 2003a『カリンバ3遺跡(1)』恵庭市教育委員会、恵庭
- 恵庭市教育委員会編 2003b『カリンバ3遺跡(2)』恵庭市教育委員会、恵庭
- 恵庭市教育委員会編 2004『カリンバ3遺跡(3)』恵庭市教育委員会、恵庭
- 恵庭市教育委員会編 2006『ユカンボシE2遺跡』恵庭市教育委員会、恵庭

- 恵庭市教育委員会編 2012『ユカンボシ E2 遺跡Ⅲ・ユカンボシ E11 遺跡Ⅲ』恵庭市教育委員会、恵庭
- 恵庭市教育委員会編 2013『ユカンボシ E1 遺跡』恵庭市教育委員会、恵庭
- 恵庭市教育委員会編 2015『恵庭市内遺跡発掘調査等報告書 1』恵庭市教育委員会、恵庭
- 江別市教育委員会文化課編 2003『吉井の沢 2 遺跡（2）』江別市教育委員会、江別
- 大谷敏三 1978「環状土籬について」『考古学ジャーナル』156、7-11 頁、ニュー・サイエンス社、東京
- 大谷敏三 1983「環状土籬」『縄文文化の研究 9 巻』雄山閣、東京、46-56 頁
- 大谷敏三 2009「千歳市中央出土の石棒と石棒からみる縄文の墓制」『物質文化史学論聚：加藤晋平先生喜寿記念論文集』北海道出版企画センター、札幌、149-166 頁
- 大谷敏三 2010『北の縄文人の祭儀場』新泉社、東京
- 大場利夫・石川徹 1956『手稲遺跡』手稲町、手稲
- 大場利夫・石川徹 1967『千歳遺跡』千歳市教育委員会、千歳
- 大場利夫・扇谷昌康 1953『エリモ遺蹟』日高教育研究所、浦河
- 大場利夫・重松和男 1977「北海道後志支庁余市町西崎山遺跡 4 区調査報告」『北海道考古学』13、13-25 頁、北海道考古学会、札幌
- 大場利夫・渡辺兼庸 1966「北海道爾志郡三ツ谷貝塚」『考古学雑誌』51 巻 4 号 13-27 頁、日本考古学会、東京
- 小樽市市博物館 1962『茶津洞窟遺跡(小樽市博物館紀要 No. 1)』小樽市市博物館、小樽
- 小樽市教育委員会 1999『塩谷 6 遺跡Ⅳ』小樽市教育委員会、小樽
- 小樽市教育委員会 2001『忍路環状列石Ⅱ』小樽市教育委員会、小樽
- 金子浩昌 1989「忍路土場遺跡出土の動物遺存体」『忍路土場遺跡・忍路 5 遺跡 第 4 分冊』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 53 集、札幌、222-287 頁
- 加納博、早川寛志、石川俊夫 1987「忍路環状列石の岩石考古学」『郷土と科学』98、13-22 頁、郷土と科学編集委員会、札幌
- 工藤肇 2000「柏原 I～Ⅳ式土器について：柏原 5 遺跡出土の縄文後期後葉の土器を主体に」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』2、9-28 頁、苫小牧市埋蔵文化財調査センター、苫小牧
- 熊谷仁志 2001「「フクロウ」意匠の貼付が施された土器」『北海道立埋蔵文化財センター年報 平成 13（2001）年度』北海道立埋蔵文化財センター、江別、55-61 頁
- 河野常吉（宇田川洋校注）1981『河野常吉ノート考古篇 1：北海道先史時代遺跡』北海道出版企画センター、札幌
- 河野広道 1981「斜里町栗沢台地の調査」『河野広道ノート考古編 1 北海道東北部の考古学的調査』北海道出版企画センター、札幌、118-131 頁
- 河野広道・藤本英夫 1961「御殿山墳墓群について」『考古学雑誌』46 巻 4 号、15-33 頁、日本考古学会、東京

- 国立歴史民俗博物館編 2000『浜中 2 遺跡発掘調査報告書』国立歴史民俗博物館研究報告 85 集、佐倉
- 国立歴史民俗博物館編 2001『落合計策縄文時代遺物コレクション』国立歴史民俗博物館、佐倉
- 小林圭一 2010『亀ヶ岡式土器成立期の研究：東北地方における縄文時代晩期前葉の土器型式』早稲田大学総合研究機構先史考古学研究所、東京
- 小林圭一 2015「国宝「合掌土偶」の編年的位置：風張（1）遺跡第 15 号竪穴住居跡出土土器の検討を通して」『研究紀要』14、23-104 頁、東北芸術工科大学東北文化研究センター山形
- 小林幸雄 1998「先史時代の漆器」『第 47 回特別展 うるし文化：漆器が語る北海道の歴史』北海道開拓記念館、札幌、8-10 頁
- 駒井和愛 1959『音江：北海道環状列石の研究』慶友社、東京
- 斎藤傑 1969「旭川市神居古潭・水沢遺跡出土の土器」『Field』7、北海道青年人類科学研究会、旭川
- 坂口隆 2003『縄文時代貯蔵穴の研究』アム・プロモーション、東京
- 坂口隆 2013「縄文時代の男性的シンボルに関する基礎的研究—ファロス付注口土器の展開（上）」『考古学雑誌』97 巻 3 号、1-26 頁、日本考古学会、東京
- 坂口隆 2014「キウス周堤墓群の出現と遺跡形成過程」『日本考古学協会 2014 年度北海道大会研究発表資料集』日本考古学協会 2014 年度伊達大会実行委員会、伊達、609-631 頁
- 坂口隆 2018『北米ノースウェストの人類考古学的研究』雄山閣、東京
- 札幌市埋蔵文化財センター編 1987『T361 遺跡』札幌市教育委員会、札幌
- 札幌市埋蔵文化財センター編 1998『N30 遺跡』札幌市教育委員会、札幌
- 佐藤剛 2008「東三川 I 式・上ノ国式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション、東京、694-699 頁
- 佐藤剛 2010「北海道島における縄文時代晩期初頭の土器様相：恵庭市西島松 5 遺跡出土の東三川 I 式土器の検討から」『北杜—辻秀人先生還暦記念論集—』辻秀人先生還暦記念論集刊行会、仙台、1-16 頁
- 参謀本部 n.d.『下富良野（大正 8 年測図）』参謀本部、東京、
https://stacks.stanford.edu/image/iiif/bx561dj9658%252Fbx561dj9658_00_0001/full/1/13038,/0/default.jpg. accessed. 0422/2019.
- 静内町教育委員会編 1954『静内町先史時代遺跡調査報告』静内町役場、静内
- 静内町教育委員会編 1984『御殿山遺跡とその周辺における考古学的調査：静内町遺跡分布調査報告書』静内町、静内
- 鈴木克彦 1999「北海道渡島・桧山地域の後期後半の編年 北海道西南部の縄文後期の編年学的研究 3」『古代』107、43-63 頁、早稲田大学考古学会、東京
- 瀬川拓郎 1980「環状土籬の成立と解体」『考古学研究』27 巻 3 号、55-73 頁、考古学研究

会、岡山

関根達人 2007「大洞系・類大洞系・非大洞系土器の検証：道南・道央における縄文晩期初頭の土器型式構造」『考古学談叢』六一書房、東京、287-312頁

関根達人 2012「北海道晩期縄文土器編年の再構築」『北海道考古学』48、33-52頁、北海道考古学会、札幌

関根達人 2013「土器の編年」『青森県史資料編 考古2 縄文後期・晩期』青森県、青森、8-21頁

大日本帝国陸地測量部 1918a『岩見沢（大正5年測図）』大日本帝国陸地測量部、東京

大日本帝国陸地測量部 1918b『小樽西部（大正5年測図）』大日本帝国陸地測量部、東京

大日本帝国陸地測量部 1918c『当別（大正5年測図）』大日本帝国陸地測量部、東京

大日本帝国陸地測量部 1918d『夕張炭山（大正5年測図）』大日本帝国陸地測量部、東京

大日本帝国陸地測量部 1919『江別（大正5年測図）』大日本帝国陸地測量部、東京

大日本帝国陸地測量部 1920a『漁（大正5年及6年測図）』大日本帝国陸地測量部、東京

大日本帝国陸地測量部 1920b『石山（大正6年測図）』大日本帝国陸地測量部、東京

大日本帝国陸地測量部 1920c『樽前（大正6年測図）』大日本帝国陸地測量部、東京

大日本帝国陸地測量部 1920d『苫小牧（大正8年測図）』大日本帝国陸地測量部、東京

大日本帝国陸地測量部 1921a『迫分（大正8年測図）』大日本帝国陸地測量部、東京

大日本帝国陸地測量部 1921b『白老（大正8年測図）』大日本帝国陸地測量部、東京

大日本帝国陸地測量部 1921c『千歳（大正7年測図）』大日本帝国陸地測量部、東京

大日本帝国陸地測量部 1921d『早来（大正8年測図）』大日本帝国陸地測量部、東京

大日本帝国陸地測量部 1921e『鶴川（大正8年測図）』大日本帝国陸地測量部、東京

鷹野光行 1978「北海道における縄文時代後期中葉の土器の編年について」『考古学雑誌』63巻4号、339-354頁、日本考古学会、東京

鷹野光行 1981「北海道の土器」『縄文文化の研究 4巻 縄文土器2』雄山閣、東京、114-122頁

鷹野光行 1982「鮪澗式と「ホッケマ式」」『古代』73、47-52頁、早稲田大学考古学会、東京

鷹野光行 1989「御殿山式土器様式」『縄文土器大観 4 後期・晩期・続縄文』小学館、東京、295-298頁

高橋龍三郎 1981「亀ヶ岡式土器の研究：青森県南津軽郡浪岡町細野遺跡の土器について」『北奥古代文化』12、1-51頁、北奥古代文化研究会、東京

田才雅彦・青木誠・乾芳宏 1999「西崎山ストーンサークル」『余市水産博物館研究報告』2、1-10頁、余市水産博物館、余市

千歳市教育委員会 1979『ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査』千歳市文化財調査報告書4、千歳

千歳市教育委員会 1981『末広遺跡における考古学的調査（上）』千歳市文化財調査報告書7

千歳

千歳市教育委員会 1982『末広遺跡における考古学的調査（下）』千歳市文化財調査報告書 8

千歳

千歳市教育委員会 1985『末広遺跡における考古学的調査（続）』千歳市文化財調査報告書 11、千歳

千歳市教育委員会 1986『梅川 3 遺跡における考古学的調査』千歳市文化財調査報告書 12、千歳

千歳市教育委員会編 1994『丸子山遺跡における考古学的調査』千歳市文化財調査報告書 19、千歳

千歳市教育委員会 1996『末広遺跡における考古学的調査 4』千歳市文化財調査報告書 21、千歳

千歳市教育委員会 2019『史跡キウス周堤墓群総括報告書』千歳市文化財調査報告書 44、千歳

千歳市埋蔵文化財センター編 2014『国指定史跡 キウス周堤墓群（千歳市埋蔵文化財センター文化財普及啓発事業広報資料）』千歳市埋蔵文化財センター、千歳

千代肇 1965「北海道積丹半島第一次調査報告：古宇郡泊村照岸洞窟調査」『先史学研究』5、1-15 頁、同志社大学先史学会、京都

土肥研晶 2001「編年」『キウス 4 遺跡 8』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 157 集、幌，408-412 頁

苫小牧市教育委員会編 1997『柏原5遺跡』苫小牧市教育委員会、苫小牧

泊村教育委員会 1989『茶津洞穴遺跡発掘調査報告書』泊村教育委員会、泊

泊村教育委員会編 1998『ヘロカルウス遺跡群』泊村教育委員会、泊

泊村教育委員会編 2005『堀株 1 遺跡（2）』泊村教育委員会、泊

内務省 n.d.「深川（大正 5 年測図昭和 3 年鉄道補入）」内務省、東京、
https://stacks.stanford.edu/image/iiif/fs409zn9131%252Ffs409zn9131_00_0001/full/14140,/0/default.jpg. accessed. 0422/2019.

名取武光・松下亘 1969「北海道」『新版考古学講座 3 巻：先史文化』雄山閣、東京、181-202 頁

日本地図センター編 1994「地図で見る札幌の変遷 I（明治 29 年頃の札幌）」『地図で見る札幌の変遷』日本地図センター、東京

野口義麿・安孫子昭二 1981「磨消縄文の世界」『縄文土器大成 3 後期』講談社、東京、130-135 頁

野村崇・宇田川洋 1967『長沼町幌内堂林遺跡調査報告』長沼町教育委員会、長沼

野村崇編 1984『長沼町 12 区 B 遺跡の発掘調査』長沼町教育委員会、長沼

野村崇 2005「北海道出土のヒスイ製装飾品」『地域と文化の考古学』六一書房、東京 531-546 頁

- 市立函館博物館 1971『函館市日吉遺跡発掘報告書』市立函館博物館友の会、函館
- 八戸市教育委員会編 1986『丹後谷地遺跡』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 15 集、八戸
- 八戸市教育委員会編 1988a『田面木平遺跡(1)』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 20 集、八戸
- 八戸市教育委員会編 1988b『丹後平遺跡(2)・丹後谷地遺跡(4)・笹子遺跡(3)』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 27 集、八戸
- 春成秀爾 1983「堅穴墓域論」『北海道考古学』19、1-18 頁、北海道考古学会、札幌
- 林謙作 1983「美々4式の構成」『考古学論叢 1』東出版寧楽社、東京、273-307 頁
- 林謙作 1998「美々4式の再検討」『北海道考古学』34、122 頁、北海道考古学会、江別
- 深川市教育委員会編 1996『内園 6 遺跡』深川市教育委員会、深川
- 深川市教育委員会編 1997『内園 6 遺跡Ⅱ』深川市教育委員会、深川
- 深川市教育委員会編 1999『内園 3 遺跡Ⅱ』深川市教育委員会、深川
- 福田正宏 2003「北海道における亀ヶ岡式土器と在地系土器の系統」『海と考古学』5、19-52 頁、海交史研究会、つくば
- 藤本英夫 1961「御殿山ケールン群墳墓遺跡について」『民族学研究』26(1)、47-57 頁、日本民族学会、東京
- 藤本英夫 1963『Gotenyama: Plates』静内町教育委員会、静内
- 藤原秀樹 2000a「北海道における周堤墓の分布」『キウス 4 遺跡 5』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 144 集、札幌、235-244 頁
- 藤原秀樹 2000b「キウス 4 遺跡・キウス周堤墓群における周堤墓の分類と新旧関係」『キウス 4 遺跡 5』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 144 集、札幌、245-258 頁
- 藤原秀樹 2003「その後の周堤墓研究史」『キウス 4 遺跡 10』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 187 集、江別、69-76 頁
- 北海道開拓記念館開設準備事務所編 1970『中川弥一寄贈資料目録』北海道開拓記念館開設準備事務所、札幌
- 北海道教育委員会編 1977a「美沢 3 遺跡」『美沢川流域の遺跡群 1』北海道教育委員会、札幌、13-28 頁
- 北海道教育委員会編 1977b「美沢 1 遺跡」『美沢川流域の遺跡群 1』北海道教育委員会、札幌、29-102 頁
- 北海道教育委員会編 1977c「美々4 遺跡」『美沢川流域の遺跡群 1』北海道教育委員会、札幌、103-194 頁
- 北海道教育委員会編 1978a「美沢 1 遺跡」『美沢川流域の遺跡群 2』北海道教育委員会、札幌、17-197 頁
- 北海道教育委員会編 1978b「美沢 2 遺跡」『美沢川流域の遺跡群 2』北海道教育委員会、札幌、199-391 頁

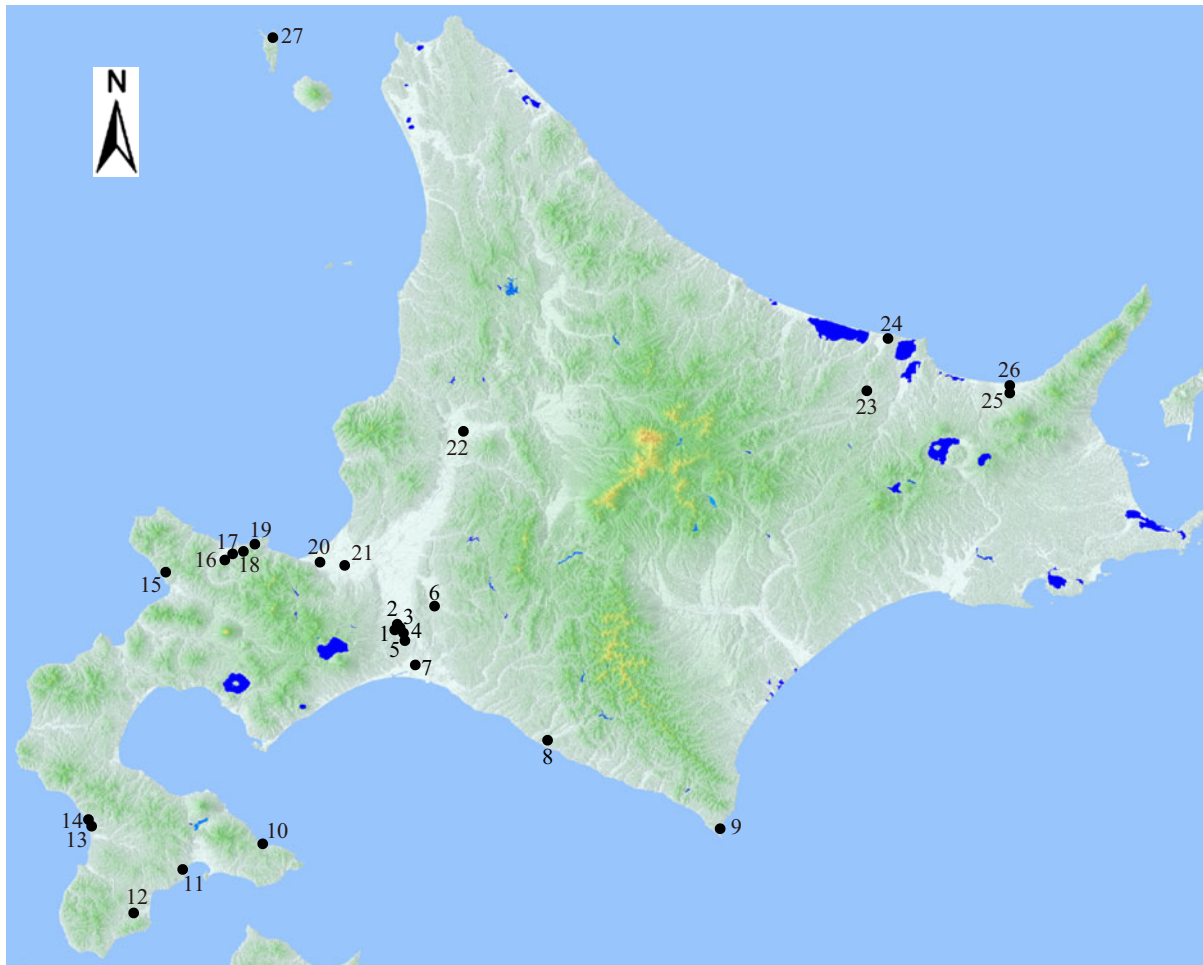
- 北海道教育委員会編 1979a 「美々4 遺跡（呑口）」『美沢川流域の遺跡群 3』北海道教育委員会、札幌、13-62 頁
- 北海道教育委員会編 1979b 「美沢 1 遺跡」『美沢川流域の遺跡群 3』北海道教育委員会、札幌、365-501 頁
- 北海道教育委員会編 1981a 「美々4 遺跡」『美沢川流域の遺跡群 4』北海道埋蔵文化財調査報告書第 3 集、札幌、19-240 頁
- 北海道教育委員会編 1981b 「美沢 1 遺跡」『美沢川流域の遺跡群 4』北海道埋蔵文化財調査報告書第 3 集、札幌、351-439 頁
- 北海道住宅団地開発事務所 1971 『北海道広島町の縄文時代後期の遺跡：道営北広島団地第 1 遺跡の調査と第 2 遺跡の予備調査』北海道文化財保護協会、札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1982 『吉井の沢の遺跡』北海道埋蔵文化財センター、札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1984 『美沢川流域の遺跡群 7』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 14 集、札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1985 『美沢川流域の遺跡群 8』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 17 集、札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1986 『美沢川流域の遺跡群 9』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 24 集、札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1989a 『忍路土場遺跡・忍路 5 遺跡 第 1 分冊』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 53 集、札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1989b 『忍路土場遺跡・忍路 5 遺跡 第 2 分冊』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 53 集、札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1989c 『忍路土場遺跡・忍路 5 遺跡 第 3 分冊』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 53 集、札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1989d 『忍路土場遺跡・忍路 5 遺跡 第 4 分冊』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 53 集、札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1989e 『美沢川流域の遺跡群 12』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 58 集、札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1990 『美沢川流域の遺跡群 13』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 62 集、札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1996 『キウス 7 遺跡 3』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第 105 集
- 北海道埋蔵文化財センター編 1997a 『美沢川流域の遺跡群 19』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 113 集、札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1997b 『キウス 5 遺跡 3』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集、札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1997c 『キウス 7 遺跡 4』北海道埋蔵文化財センター調査報

告書第 117 集、札幌
 北海道埋蔵文化財センター編 1997d『キウス 4 遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告
 第 119 集、札幌
 北海道埋蔵文化財センター編 1997e『美々・美沢：新千歳空港の遺構と遺物』北海道埋蔵
 文化財センター、札幌
 北海道埋蔵文化財センター編 1998a『キウス 4 遺跡 2』北海道埋蔵文化財センター調査報
 告第 124 集、札幌
 北海道埋蔵文化財センター編 1998b『キウス 7 遺跡 5』北海道埋蔵文化財センター調査報
 告書第 127 集、札幌
 北海道埋蔵文化財センター編 1999a『キウス 4 遺跡 3』北海道埋蔵文化財センター調査報
 告第 134 集、札幌
 北海道埋蔵文化財センター編 2000a『キウス 4 遺跡 5』北海道埋蔵文化財センター調査報
 告書第 144 集、江別
 北海道埋蔵文化財センター編 2000b『内園 6 遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書
 第 145 集、江別
 北海道埋蔵文化財センター編 2001a『キウス 4 遺跡 7』北海道埋蔵文化財センター調査報
 告第 152 集、江別
 北海道埋蔵文化財センター編 2001b『キウス 4 遺跡 8』北海道埋蔵文化財センター調査報
 告第 157 集、江別
 北海道埋蔵文化財センター編 2001c『西崎山ストーンサークル』北海道立埋蔵文化財セン
 ター、江別
 北海道埋蔵文化財センター編 2003a『キウス 4 遺跡 9』北海道埋蔵文化財センター調査報
 告第 180 集、江別
 北海道埋蔵文化財センター編 2003b『キウス 4 遺跡 10』北海道埋蔵文化財センター調査報
 告第 187 集、江別
 北海道埋蔵文化財センター編 2004『西島松 5 遺跡 3』北海道埋蔵文化財センター調査報告
 第 209 集、江別
 北海道埋蔵文化財センター編 2006『西島松 5 遺跡 4』北海道埋蔵文化財センター調査報告
 第 224 集、江別
 北海道埋蔵文化財センター編 2009a『西島松5遺跡 6 第1分冊』北海道埋蔵文化財センター
 調査報告第260集、江別
 北海道埋蔵文化財センター編 2009b『西島松5遺跡 6 第2分冊』北海道埋蔵文化財センター
 調査報告第260集、江別
 北海道埋蔵文化財センター編 2010『柏木川4遺跡 4』北海道埋蔵文化財センター調査報告
 第264集、江別
 北海道埋蔵文化財センター編 2012a『祝梅川小野遺跡(1)・梅川1遺跡(1)』北海道埋蔵文化

- 財センター調査報告第285集、江別
- 北海道埋蔵文化財センター編 2012b『斜里町斜里朱円周堤墓』北海道立埋蔵文化財センター、江別
- 北海道埋蔵文化財センター編 2014『芦別市野花南周堤墓群』北海道立埋蔵文化財センター、江別
- 北海道埋蔵文化財センター編 2018『トプシナイ2遺跡・イカベツ2遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告第348集、江別
- 幌内神社 1997『幌内神社百年史』幌内神社、長沼
- 幌内神社 2006『幌内神社史 続：鎮守創建百十年の軌跡』幌内神社、長沼
- 三浦正人 2003「縄文・続縄文の木文化」『新北海道の古代 2 続縄文・オホーツク文化』北海道新聞社、札幌、70-93 頁
- 南茅部町教育委員会編 1972「臼尻遺跡」『北海道南茅部町の先史』南茅部町教育委員会、南茅部、30-44 頁
- 南茅部町埋蔵文化財調査団編 1992『八木 B 遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団
- 宮宏明 1981「鮎潤遺跡」『北海道の文化』45、45-47 頁、北海道文化財保護協会、札幌
- 森田知忠 1981「北海道」『縄文土器大成 3 後期』講談社、東京、136-138 頁
- 八雲町教育委員会編 1991『浜松 2 遺跡』八雲町教育委員会、八雲
- 山内清男 1964「文様帯系統論」『日本原始美術 I 縄文式土器』講談社、東京、157-158 頁
- 由仁町教育委員会編 1969「由仁町東三川遺跡」『北海道由仁町の先史遺跡』由仁町教育委員会、由仁、27-58 頁
- 由仁町教育委員会編 2011『東三川遺跡』由仁町教育委員会、由仁
- 余市町教育委員会編 1971『天内山』余市町教育委員会、余市
- 余市町教育委員会編 2002『安芸遺跡』余市町教育委員会、余市
- 余市町教育委員会編 2003『安芸遺跡』余市町教育委員会、余市
- 余市町教育委員会編 2007『安芸遺跡』余市町教育委員会、余市
- 藁科哲男 1996「美々4 遺跡出土の玉類の原産地分析」『調査年報 8: 平成 7 年度』北海道埋蔵文化財センター、札幌、83-94 頁
- 藁科哲男 2000「GP-1701、1705 出土のヒスイ製玉類の産地分析」『キウス 4 遺跡 5 』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第 144 集、江別、279-288 頁
- Blitz, J. H. (1999). Mississippian chiefdoms and the fission-fusion process. *American Antiquity*, 64(4), 577-592.
- Hayden, B. (1998). Practical and prestige technologies: The evolution of material systems. *Journal of Archaeological Method and Theory*, 5(1), 1-55.
- Hayden, B. (2009). Funerals as feasts: Why are they so important? *Cambridge Archaeological Journal*, 19(1), 29-52.
- Hayden, B., Reinhardt, G. A., Holmberg, D., & Crellin, D. (1996). Space per capita and the optimal

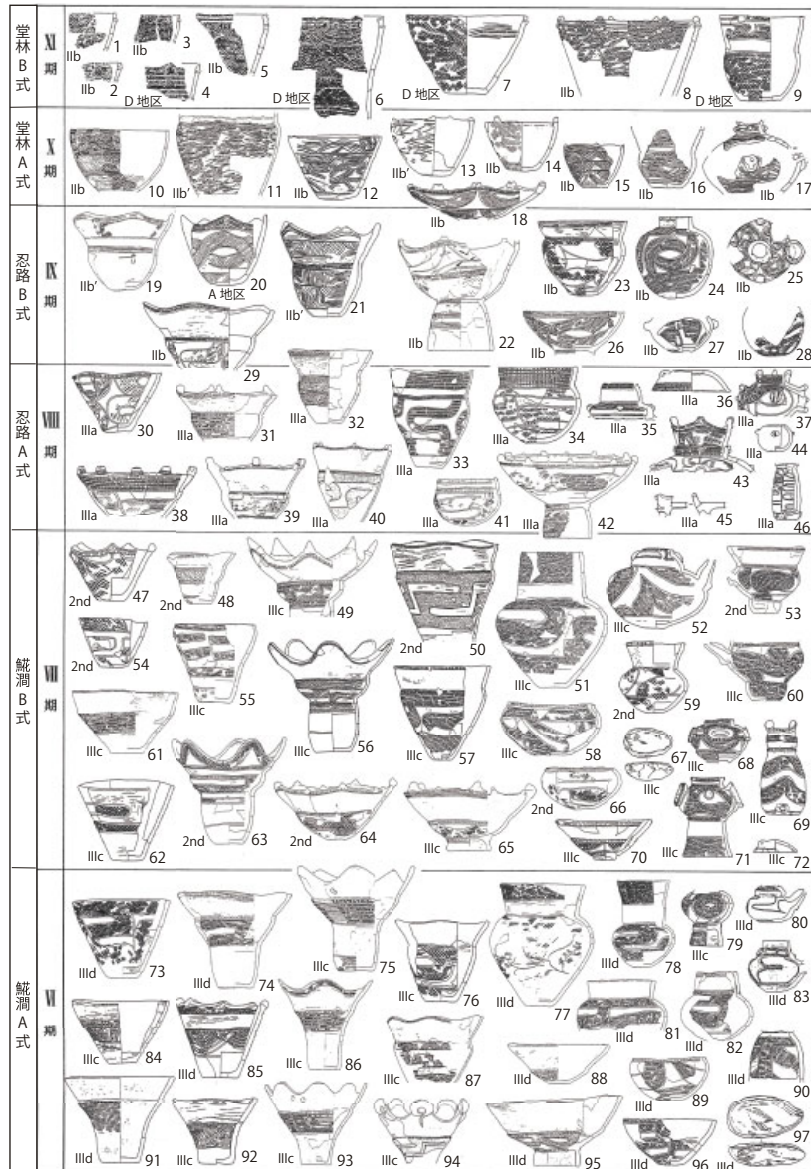
- size of housepits. In G. Coupland, & E. B. Banning (Eds.), *People who lived in big houses: Archaeological perspectives on large domestic structures* (pp.151-64). Madison: Prehistory Press.
- Hirth, K. (1978). Interregional trade and the formation of prehistoric gateway communities. *American Antiquity*, 43(1), 35-45.
- Ikawa-Smith, F. (1992). Kanjodori: communal cemeteries of the Late Jomon in Hokkaido. In C. M. Aikens, & S. N. Rhee (Eds.), *Pacific Northeast Asia in prehistory: Hunter-fisher-gatherers, farmers, and sociopolitical elites* (pp. 83-89). Pullman: Washington State University Press.
- Renfrew, C. (1986). Introduction: Peer polity interaction and socio-political change. In C. Renfrew, & J. F. Cherry (Eds.). *Peer polity interaction and socio-political change* (pp. 1-18). Cambridge: Cambridge University Press.
- Renfrew, C., & Bahn, P. (2000). *Archaeology: Theories, methods, and practice 3rd ed.* New York: Thames and Hudson.
- Sakaguchi, T. (2011). Mortuary variability and status differentiation in the Late Jomon of Hokkaido based on the analysis of *shuteibo* (communal cemeteries). *Journal of World Prehistory*, 24(4), 275-308.
- Trubitt, M. B. D. (2003). The production and exchange of marine shells. *Journal of Archaeological Research*, 11(3), 243-277.

图表

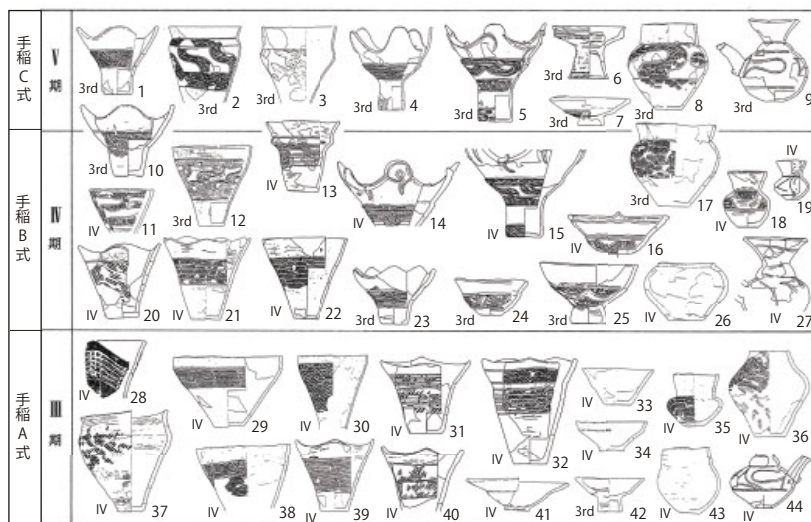


第I-1図 I章に関連する北海道の縄文時代後・晩期の遺跡
(カシミール3Dを用いて50mメッシュ標高データ(全国)から作成した地図を加工)

1:西島松5, 柏木B, 柏木川4 2:カリンバ, ユカンボシE2・E3・E8 3:キウス1・4 4:末広 5:美々4, 美沢1・2
6:東三川 7:柏原5 8:御殿山 9:エリモ 10:臼尻 11:茂辺地 12:湯の里3 13:元和 14:三ツ谷 15:茶津 16:沢町
17:西崎山 18:忍路土場 19:鯨潤 20:手稲 21:N30 22:神居古潭7 23:北川 24:トコロチャシ南尾根 25:朱円
26:オクシベツ川 27:船泊, 浜中2, ウエンナイホ



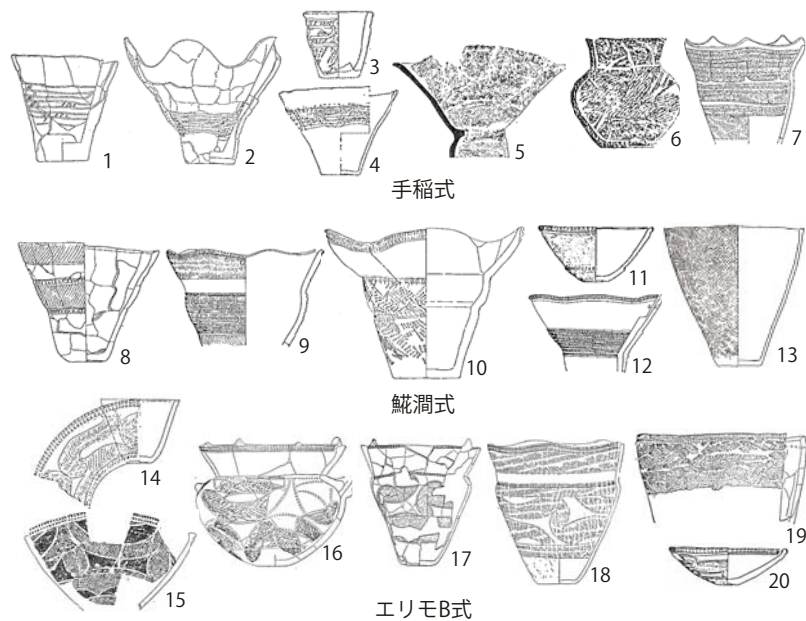
第I-2a図 忍路土場遺跡編年案(1) (ローマ数字は出土層位を示す)(出土品: 縮尺不同)
(北海道埋蔵文化財センター(1989b: 図1)から作成)



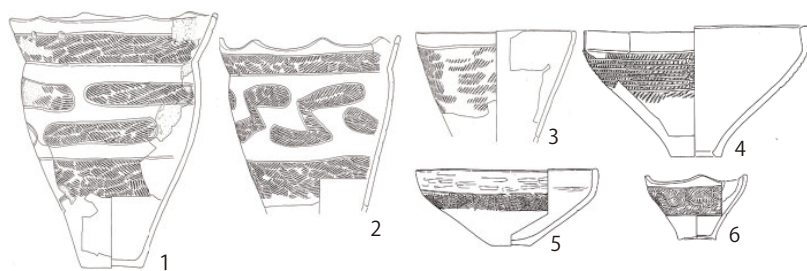
第I-2b図 忍路土場遺跡編年案(2) (ローマ数字は出土層位を示す)(出土品: 縮尺不同)
(北海道埋蔵文化財センター(1989b: 図2)から作成)



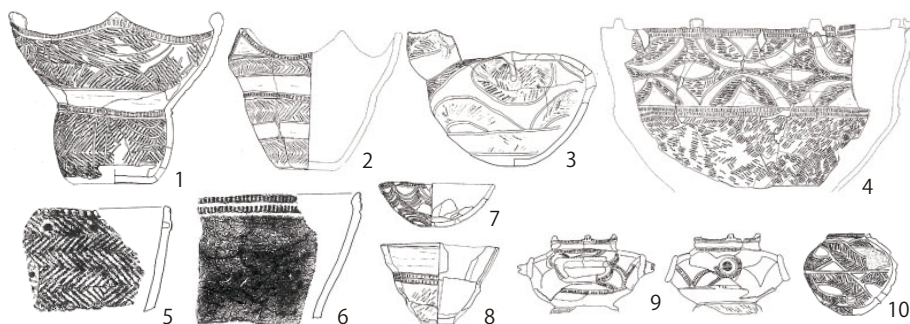
第I-3a図 鷹野光行（1978）の縄文時代後期中葉に関する編年案と標本図（縮尺不同）
 (1～12・19・30・31・34・37・38: 手稲遺跡 13: 臼尻遺跡 14・15・23～29: エリモ遺跡 16: 茶津洞窟
 20: 船泊第4遺跡 18・21・32・33・35・36: トコロチャシ南尾根遺跡 17・22: ウエナイボ遺跡
 鷹野(1978: 図2-3～11、図5～8)から作成)



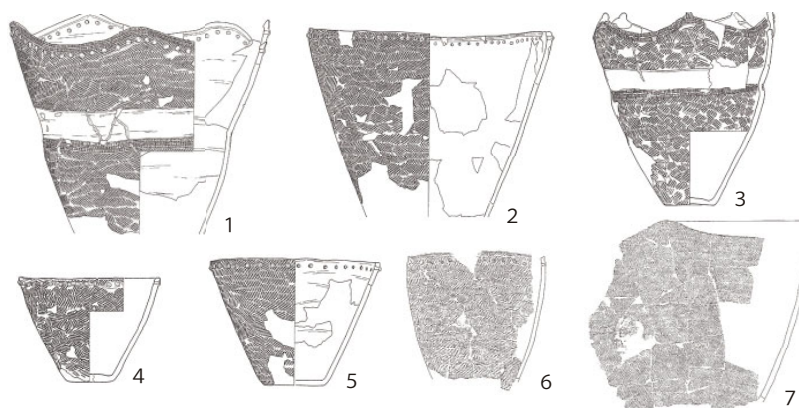
第I-3b図 鷹野光行（1981）の縄文時代後期中葉に関する編年案と標本図（縮尺不同）
 (1・2・19: オクシベツ川遺跡 3: 西崎山遺跡 4・18: 美沢2遺跡 5・6: 手稲遺跡 7・14: 美沢1遺跡
 8・15・17: 元和遺跡 9・11～13・20: 美々4遺跡 10・16: トコロチャシ南尾根遺跡
 鷹野(1981: 図1-5～23、図2-1)から作成)



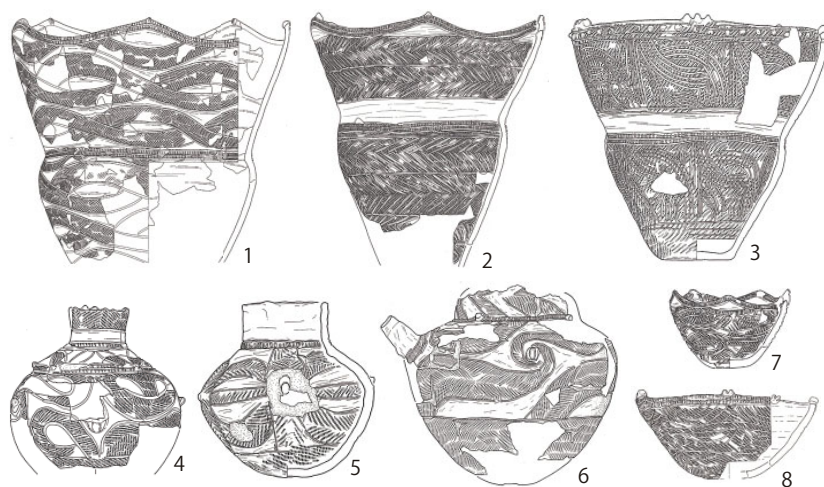
第I-4図 ユカンボシ E3 遺跡 3 号住居跡出土品 (縮尺不同)
(恵庭市教育委員会 (1992a: 図25-1、3、5、6、図26-8、16) から作成)



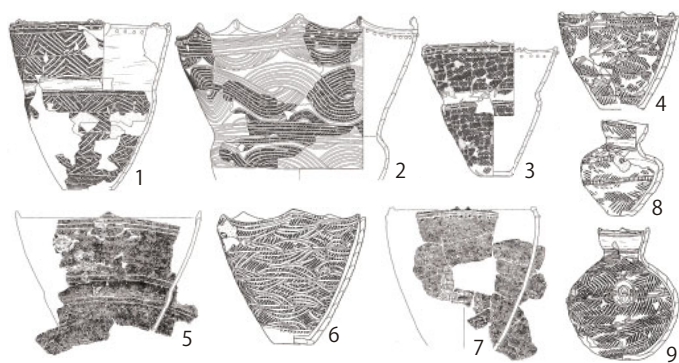
第I-5図 末広遺跡 52 号竪穴住居跡床面出土品 (縮尺不同)
(千歳市教育委員会 (1982: 図346-3~6、図347-1~3、図348-4、図349-13、16) から作成)



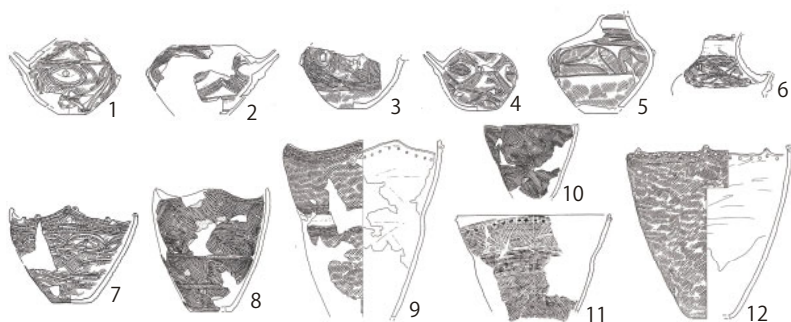
第I-6図 キウス 4 遺跡建物 19 出土品 (縮尺不同)
(北海道埋蔵文化財センター (2001b: 図60-1、図63-18、図70-68~70、図74-119、図85-276) から作成)



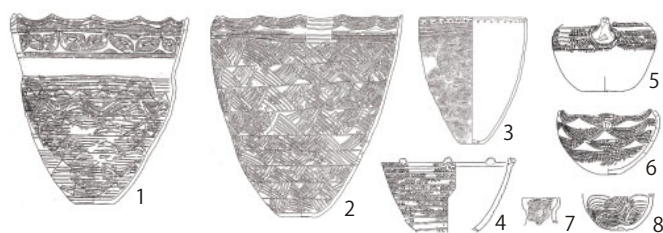
第I-7図 キウス 4 遺跡 F・G 地区、及び R 地区出土品 (縮尺不同)
(北海道埋蔵文化財センター (2001b: 図60-4、図64-22、図89-368、2003a: 図V-102-936、940、
図V-103-944、図V-167-1378、図V-170-1390) から作成)



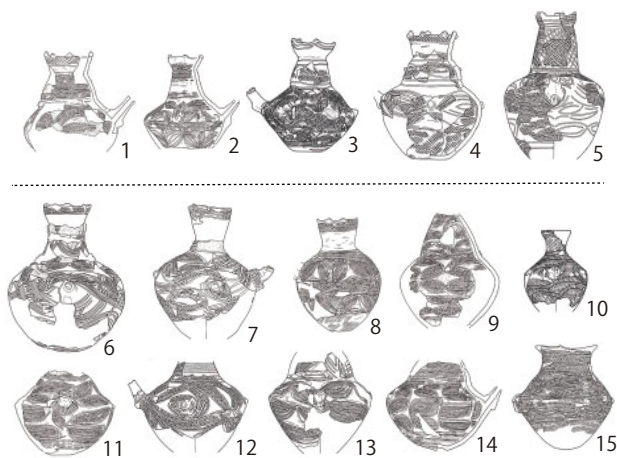
第I-8図 柏木川4遺跡出土品（縮尺不同）
（北海道埋蔵文化財センター（2010：図Ⅲ-57-土器集中5、7、図Ⅲ-60、図Ⅲ-62、図Ⅲ-65-土器集中20・21、図Ⅲ-66-土器集中22、図Ⅲ-67）から作成）



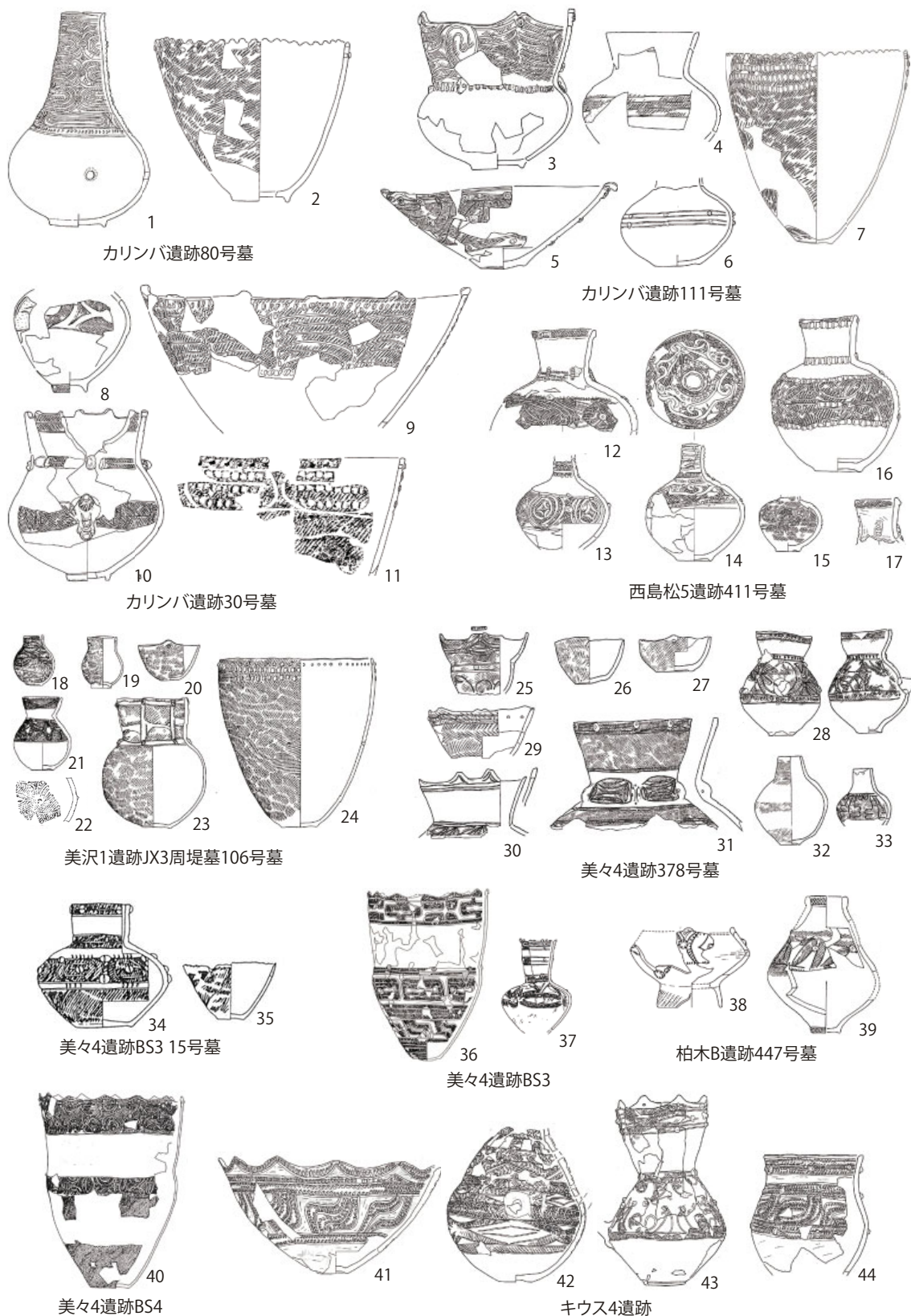
第I-9図 キウス4遺跡S盛土S-3層出土品（縮尺不同）
（北海道埋蔵文化財センター（1998a：図V6-48-216、218～220、図V-6-49-224、227、図V-6-50-229～231、図V-6-51-233～235）から作成）



第I-10図 浜中2遺跡R地点V層出土品（縮尺不同）
（国立歴史民俗博物館（2000：図4-25-109、図4-39-183、図4-41-187、図4-44-223、232、238、241、242）から作成）



第I-11図 キウス4遺跡出土の注口土器（縮尺不同）
（北海道埋蔵文化財センター（1999a：図Ⅱ-5-2、3、2001b：図130-970、972、図131-976、978、図132-985、図157-1441、1447、2003a：図V-75-526、528、図V-76-531、532、図V-176-1418、1419）から作成）



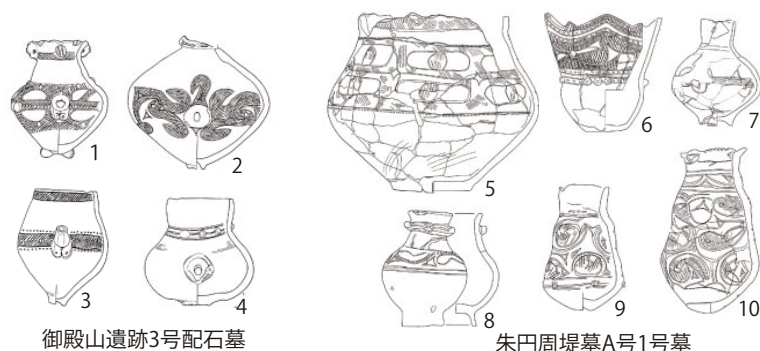
第I-12図 瘤付土器第Ⅲ段階並行期の一括資料と関連資料（縮尺不同）

（恵庭市教育委員会 1981：図256-1、2、2003a：図17-1～4、図31-1、2、図106-1～5；北海道教育委員会 1979b：図7-25-1～7、1981a：図71-1、5、図78-1、3、図82-1；北海道埋蔵文化財センター 1984：図173-1～9、1999a：図V-24-1、2001b：図161-1574、2003a：図V-82-597、598、2009b：図48-7～12から作成）



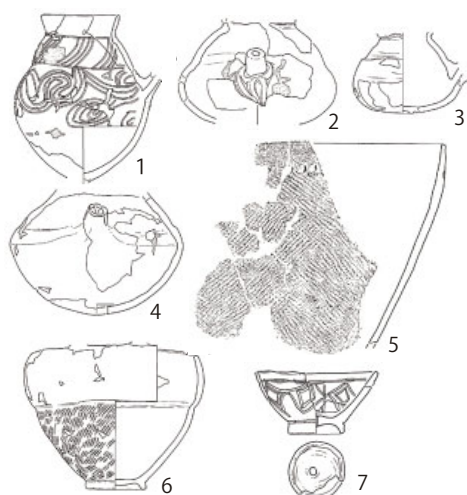
第I-13a図 瘤付土器第IV段階並行期の一括資料 (1) (縮尺不同)

(恵庭市教育委員会(2003a: 図50-1~4、図79-2、3); 北海道教育委員会(1977a: 図26-P38-1、2); 北海道埋蔵文化財センター(1984: 図125-1~6、図126-1、2、2009b: 図26-1~6、図30-104、105、図35-46、47、図62-5、6、8、図122-2、3、図126-3、8、図135-43、44、図152-6、9)から作成)

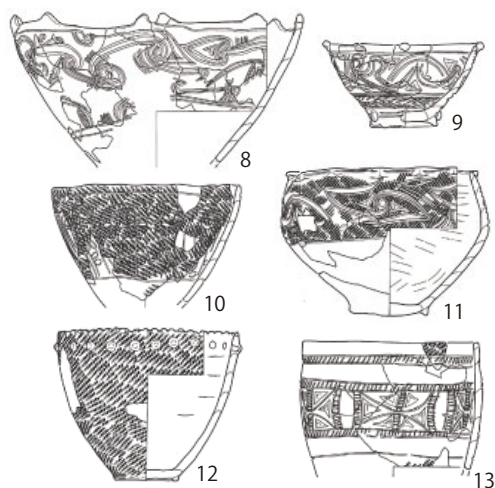


第I-13b図 瘤付土器第IV段階並行期の一括資料 (2) (縮尺不同)

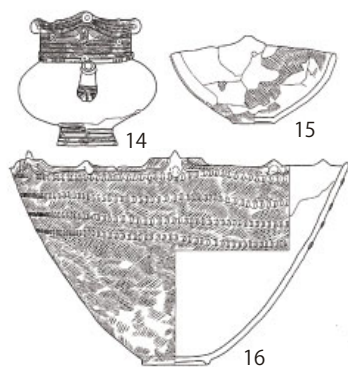
(静内町教育委員会(1984: 図20-2、3、図21-1、2); 北海道埋蔵文化財センター(2012b: 図IV-1-1~3、図IV-2-4~6)から作成)



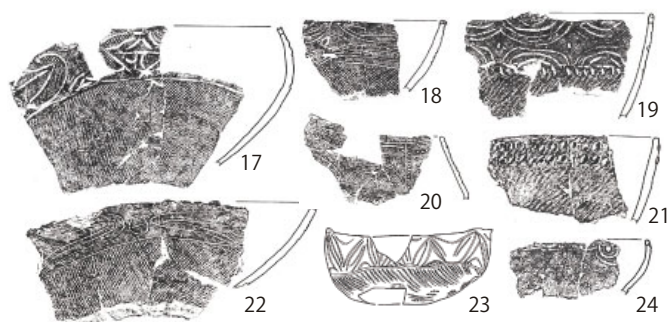
西島松5遺跡462号墓



西島松5遺跡MA盛土遺物集中3



美々4遺跡395号墓



ユカンボシE2遺跡3号土坑

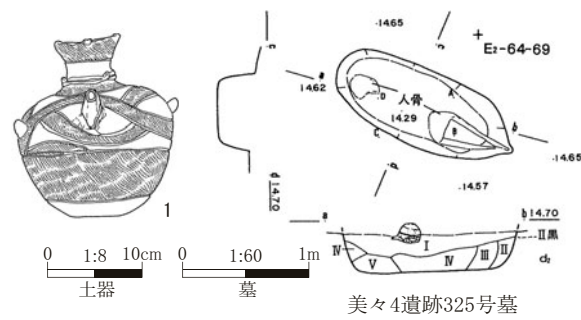
第I-14図 大洞B式並行期の一括資料（縮尺不同）

（恵庭市教育委員会（2015：図2-19-1、4～7、図2-20-9、10、16）；北海道埋蔵文化財センター（1984：図184-1～3、2004：図V-26-8、図V-27-13～15、図V-28-16、17、2009b：図101-2～5、8、9、11）から作成）

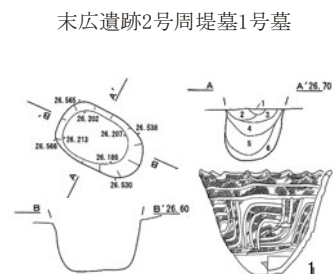
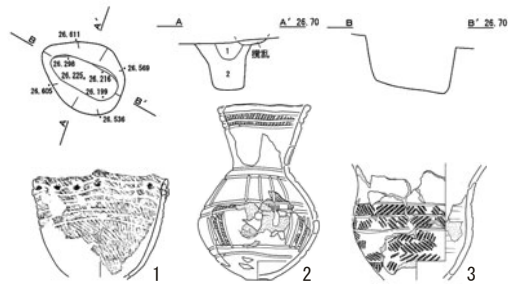
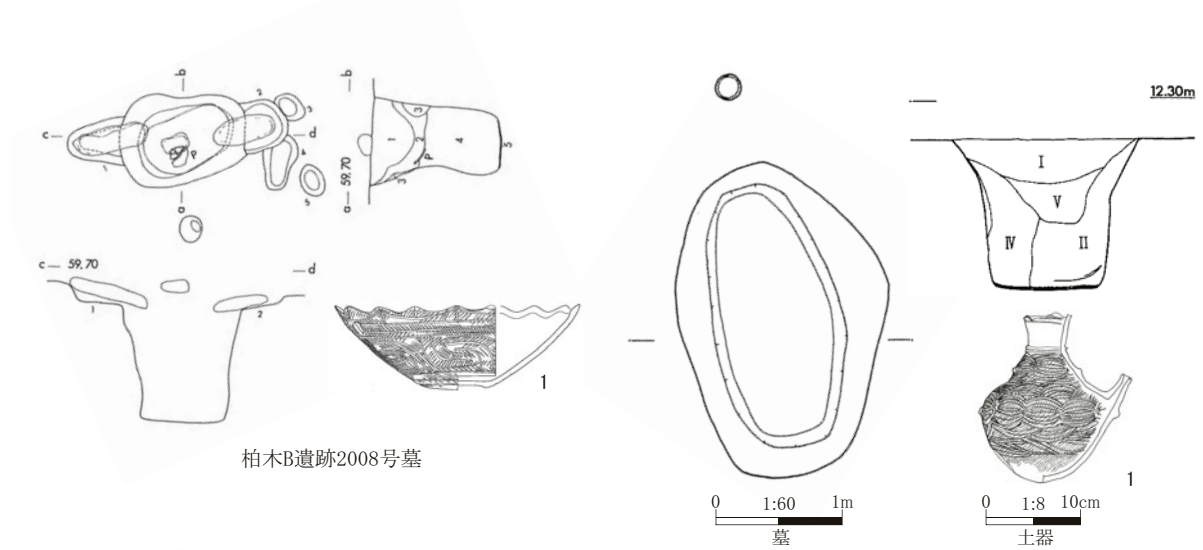
第I-1表 北海道中央部を中心とする縄文時代後期中葉後半期から晩期初頭の土器編年と代表的な資料

阿部 (2008)	土肥 (2001)	本稿	北海道中央部	北海道北部	北海道東部
—	—	手稲1式	ユカンボシE3 B地点3号住	船泊(一部)	
—	—	手稲2式	忍路土場3rd	船泊(一部)	オクシベツ川(一部)
—	—	手稲3式	忍路土場IIIId・III c 層		
鯨潤式新(末) 段階/エリモB式	I期	鯨潤式	(古段階) 忍路土場IIIa層 (新段階) 末広52号住		トコロチャシ南尾根 4号堅穴
鯨潤式新(末) 段階/エリモB式	II期	堂林1式	キウス4建物19		オクシベツ川(一部)
堂林式古段階	III期	堂林2式	柏木川4(一部)		オクシベツ川(一部)
堂林式中段階	IV期	堂林3式	キウス4盛土上位層準(一部)	浜中2V層	オクシベツ川(一部)
堂林式新段階～ 御殿山式	V期	瘤付土器第III 段階並行期	第I-12図参照	浜中2V層 (一部)	オクシベツ川(一部)
御殿山式	VI期～ VII期	瘤付土器第IV段 階並行期	第I-13a・b図参照		朱円周堤墓A号1号墓、 北川墓穴
—	VII期	大洞B式並行期	第I-14図参照		

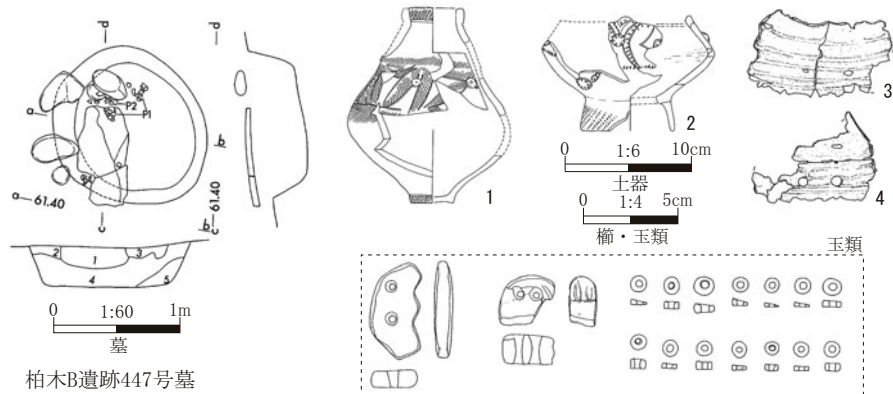
* 先行研究との編年対比については、異同があり、本文を参照されたい。



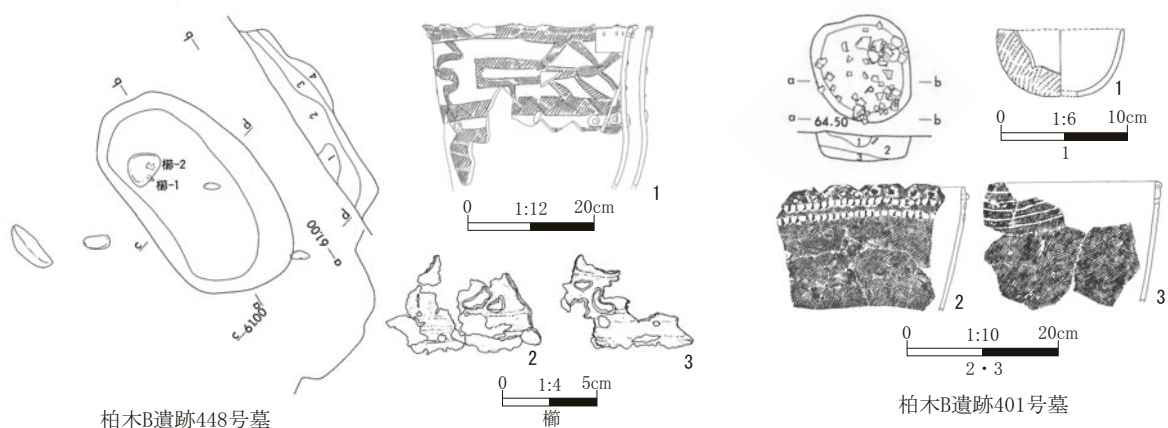
第Ⅱ-1図 堂林1式の墓、及び出土品
(北海道埋蔵文化財センター (1984: 図159)から作成)



第Ⅱ-2図 堂林3式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期の墓、及び出土品
(恵庭市教育委員会 (1981: 図214)、千歳市教育委員会 (1981: 図103、104-1)、
北海道埋蔵文化財センター (2009b: 図168、235)から作成)

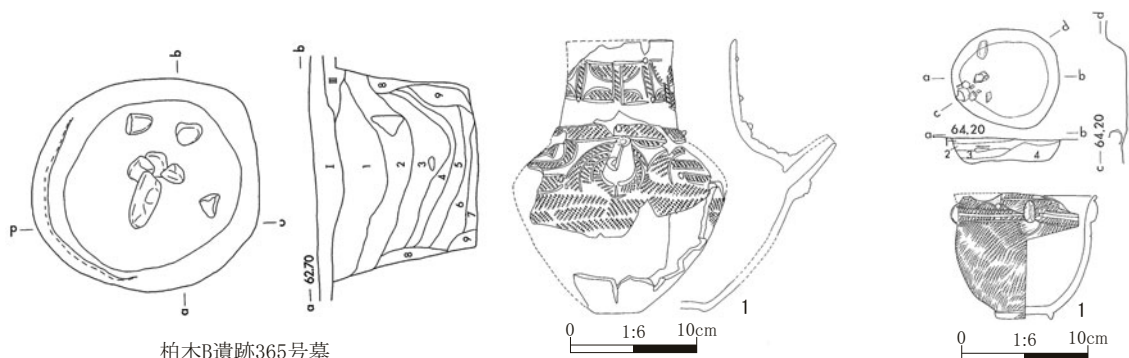


柏木B遺跡447号墓



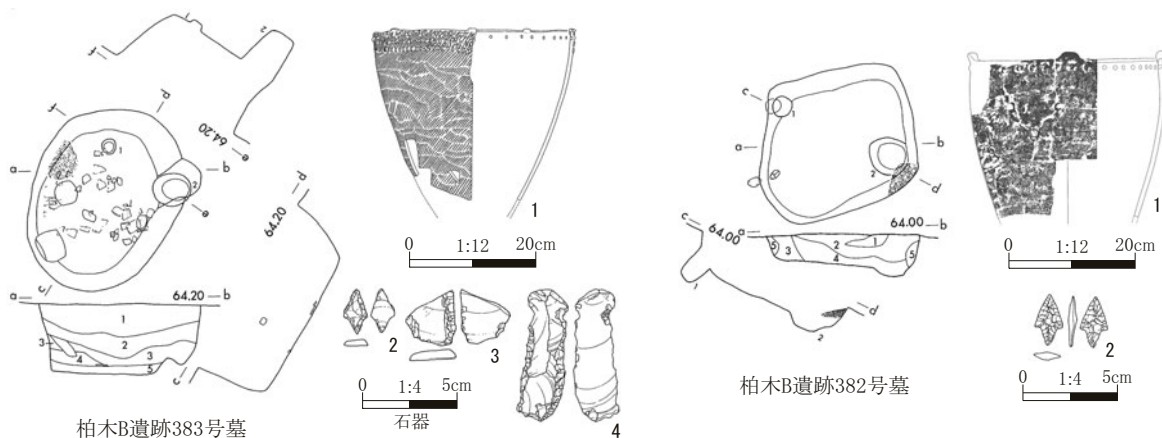
柏木B遺跡448号墓

柏木B遺跡401号墓



柏木B遺跡365号墓

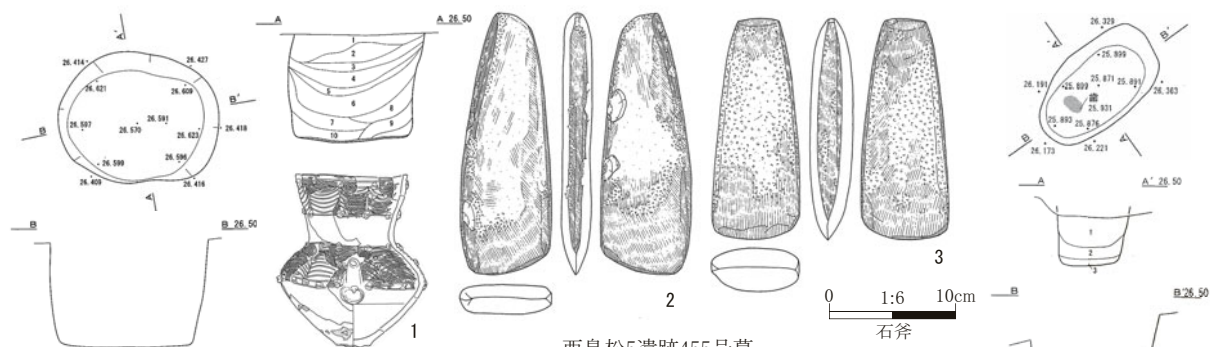
柏木B遺跡417号墓



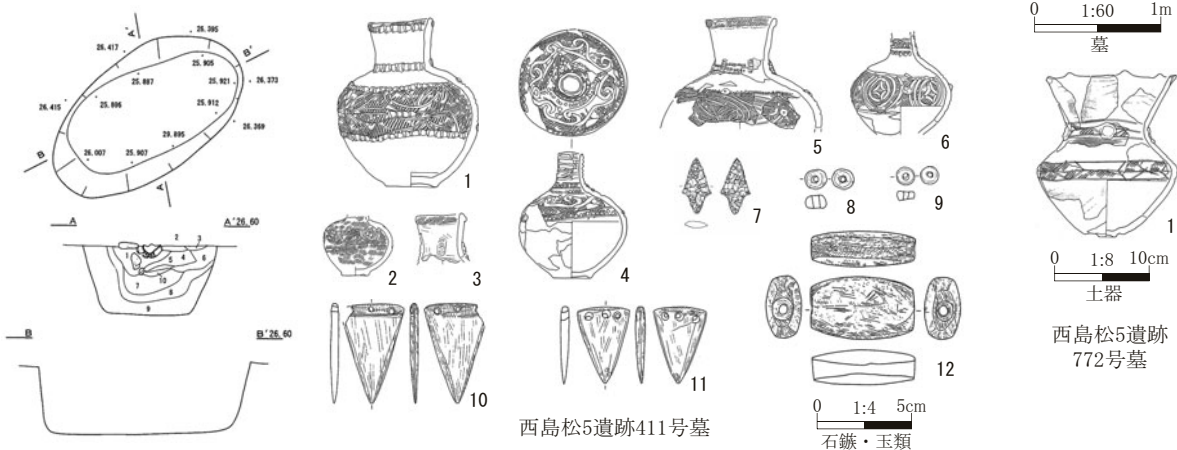
柏木B遺跡383号墓

柏木B遺跡382号墓

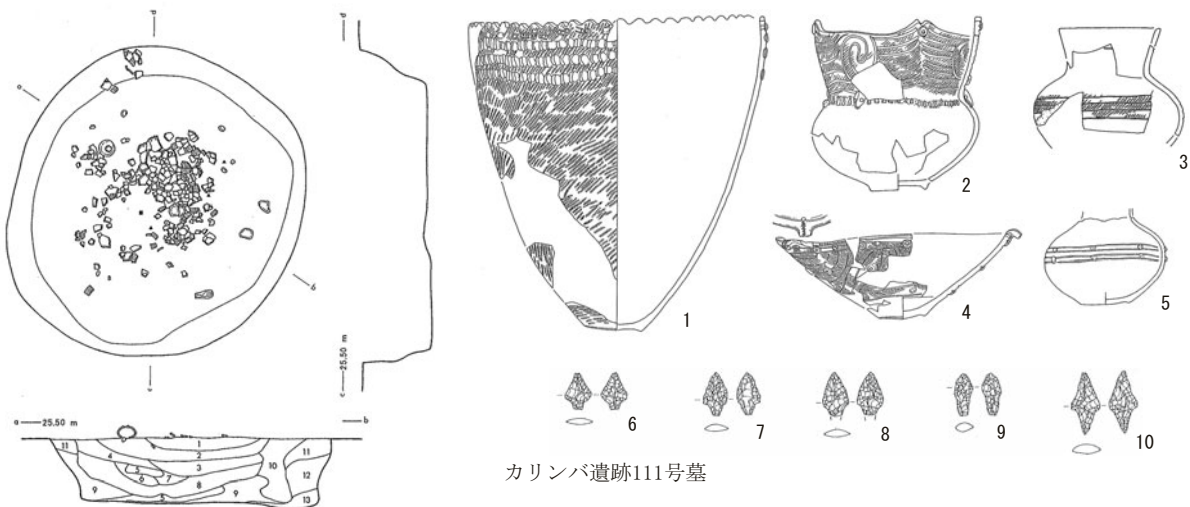
第II-3図 瘤付土器第III段階並行期の墓、及び出土品(1)
(恵庭市教育委員会 (1981: 図238、256~259、263、268)から作成)



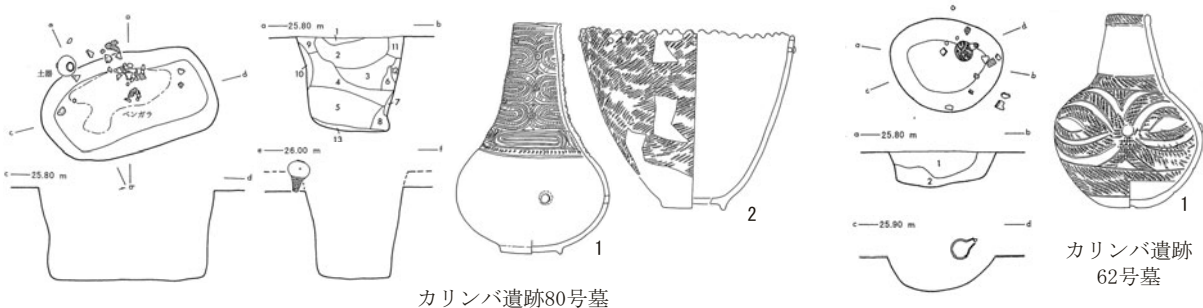
西島松5遺跡455号墓



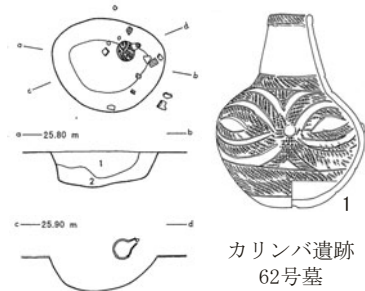
西島松5遺跡411号墓



カリンバ遺跡111号墓

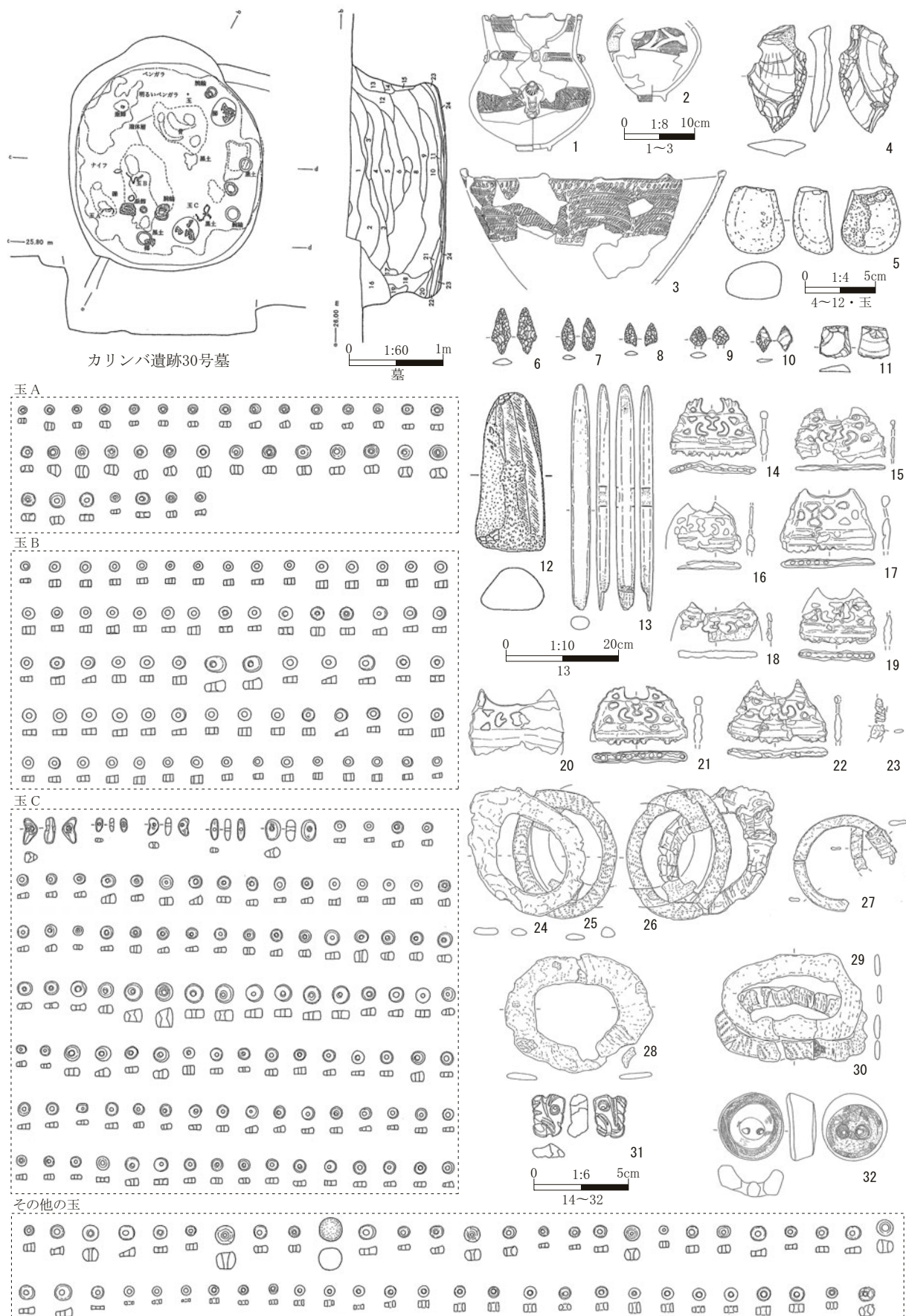


カリンバ遺跡80号墓

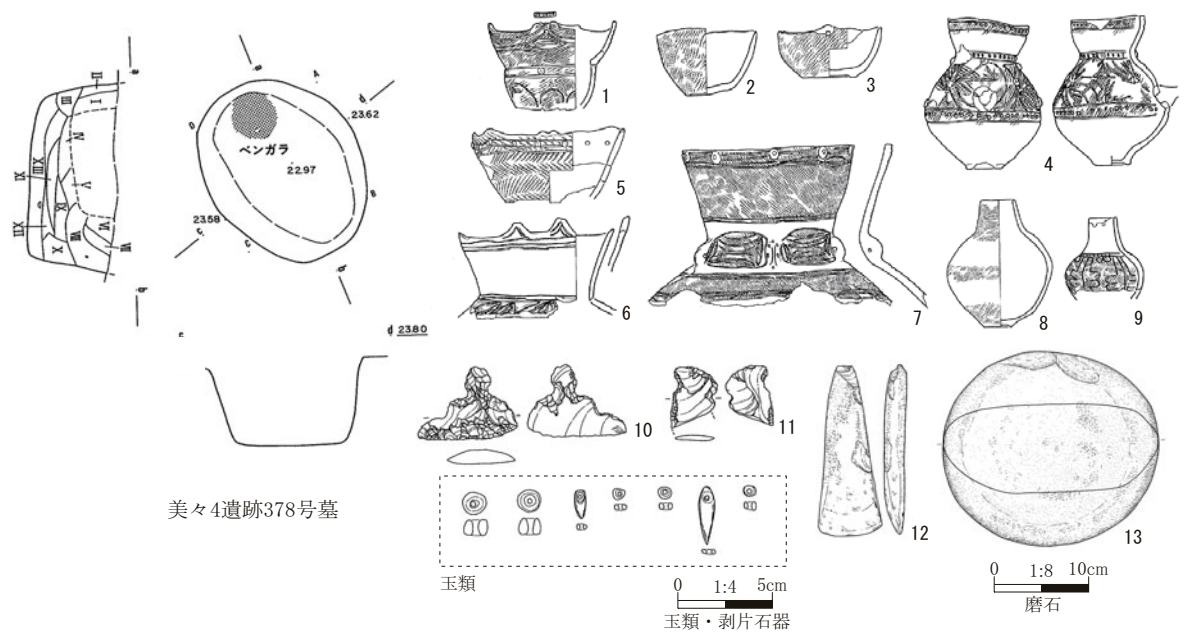
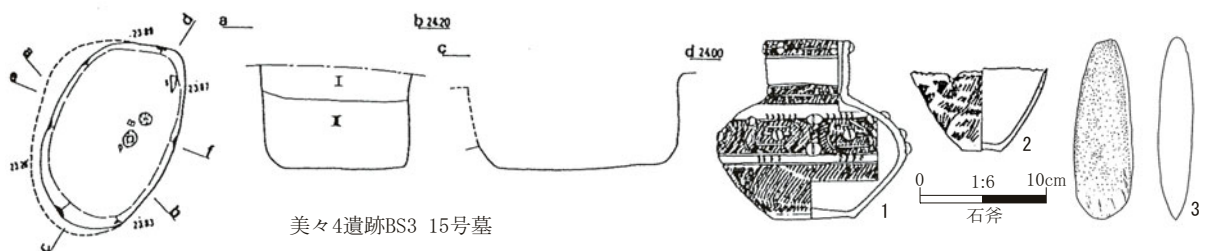
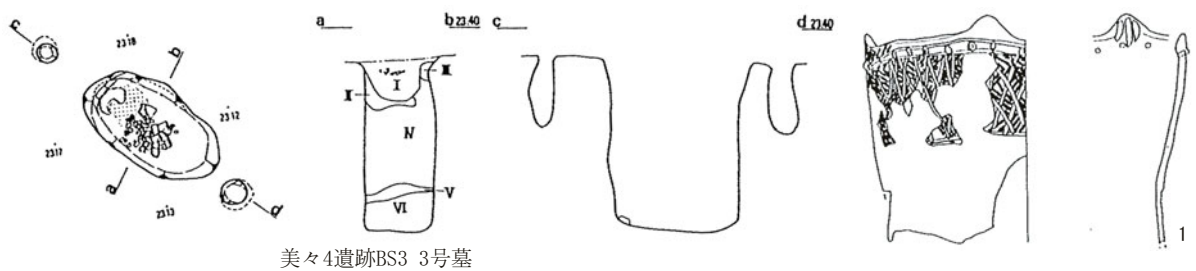
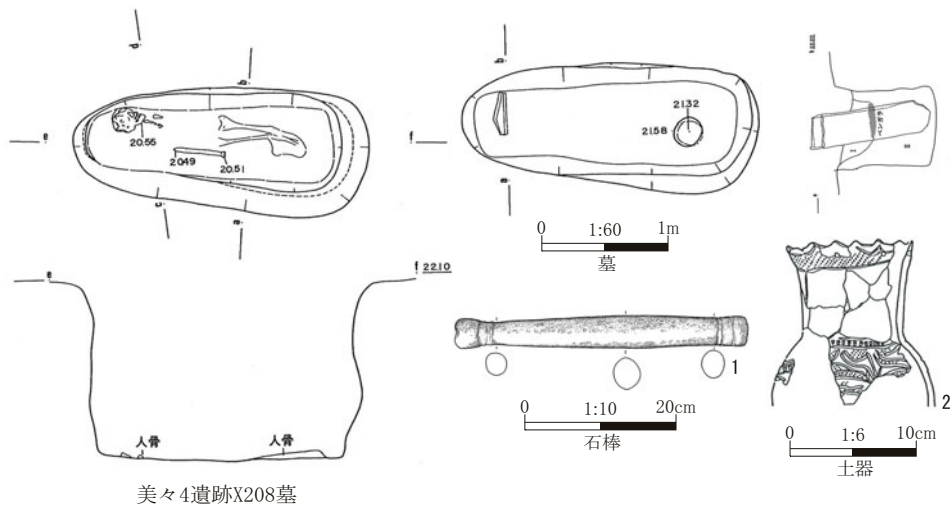


カリンバ遺跡
62号墓

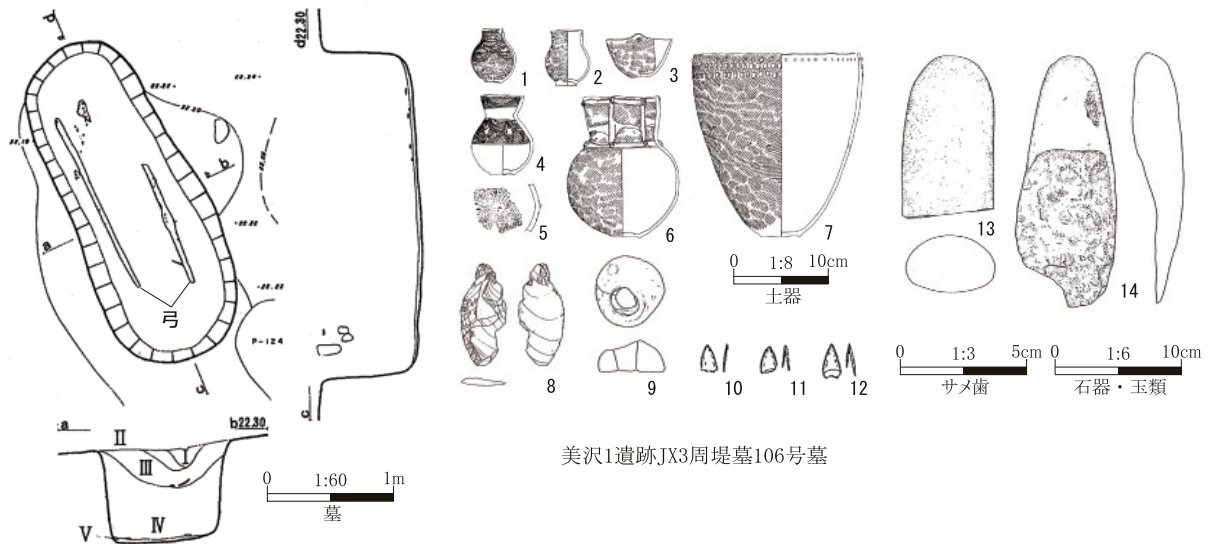
第Ⅱ-5図 瘤付土器第Ⅲ段階並行期の墓、及び出土品(3)
(恵庭市教育委員会 (2003a: 図31、98、105、106)、北海道埋蔵文化財センター (2009b: 図48、93、94、242)から作成)



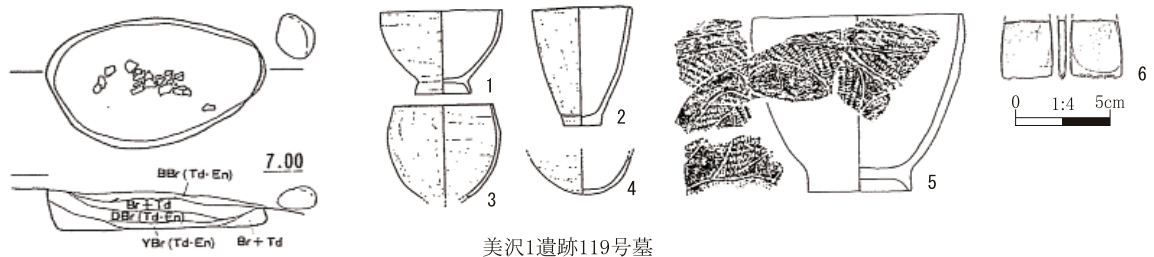
第II-6図 瘤付土器第III段階並行期の墓、及び出土品(4)
(恵庭市教育委員会 (2003a: 図16~23) から作成)



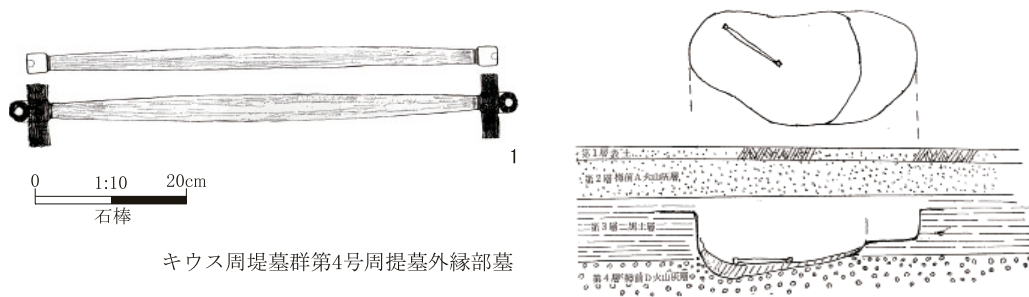
第Ⅱ-7図 瘤付土器第Ⅲ段階並行期の墓、及び出土品(5)
(北海道教育委員会 (1981a: 図74、75、78)、北海道埋蔵文化財センター (1984: 図97、173、174、228-1)から作成)



美沢1遺跡JX3周堤墓106号墓

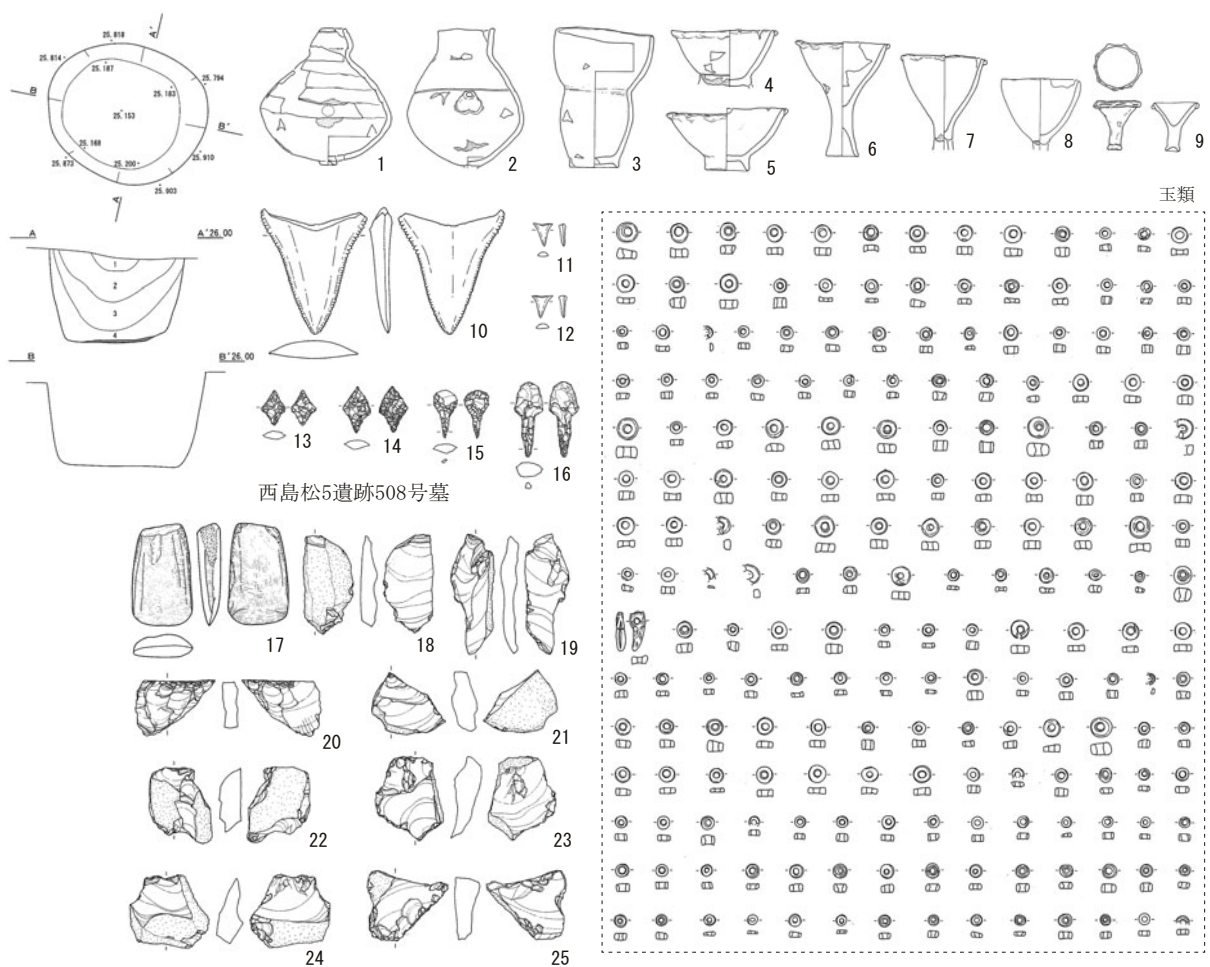
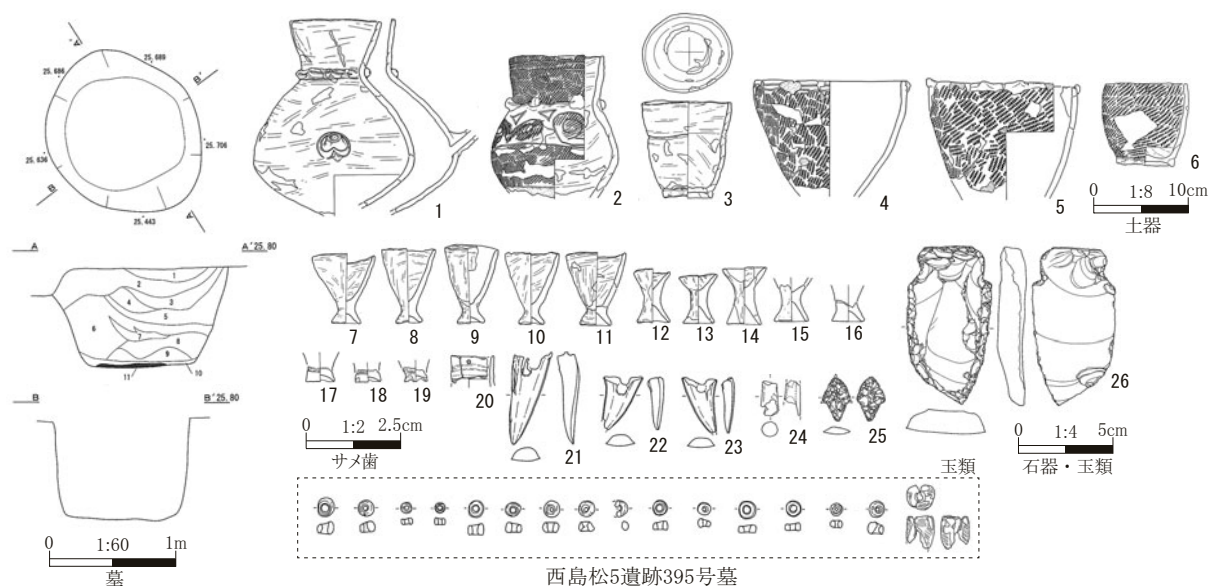


美沢1遺跡119号墓

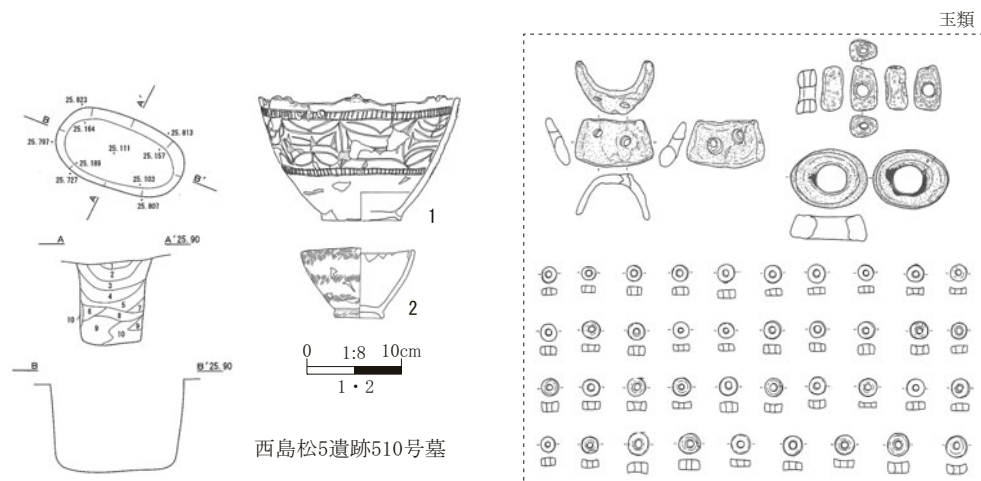
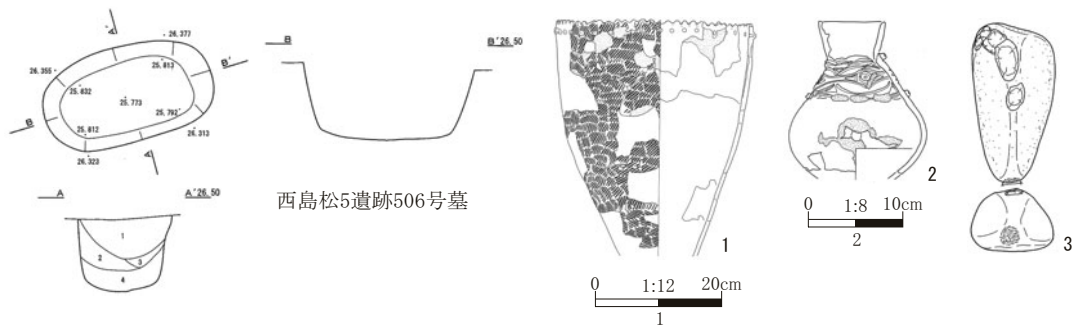
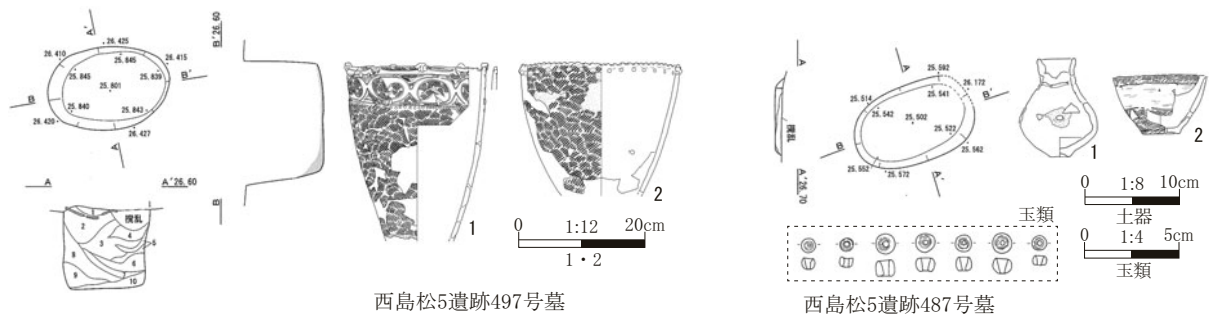
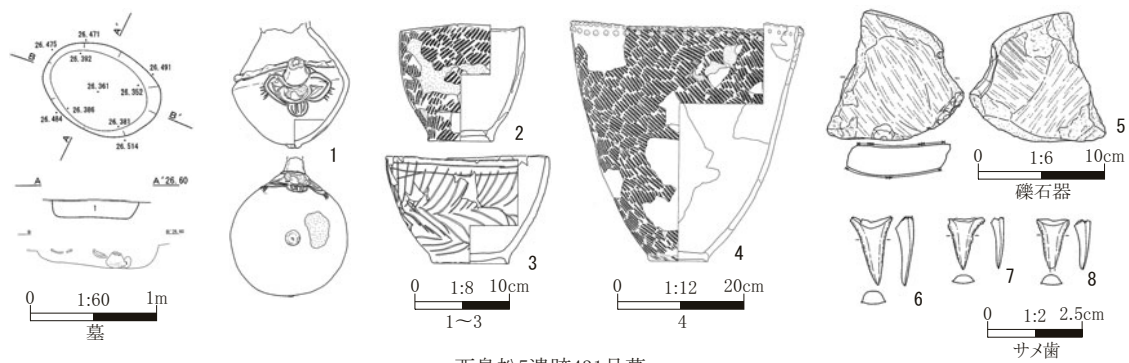


キウス周堤墓群第4号周堤墓外縁部墓

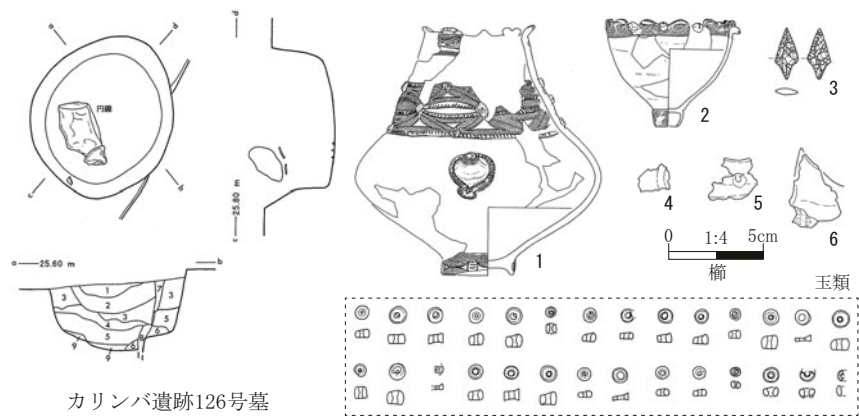
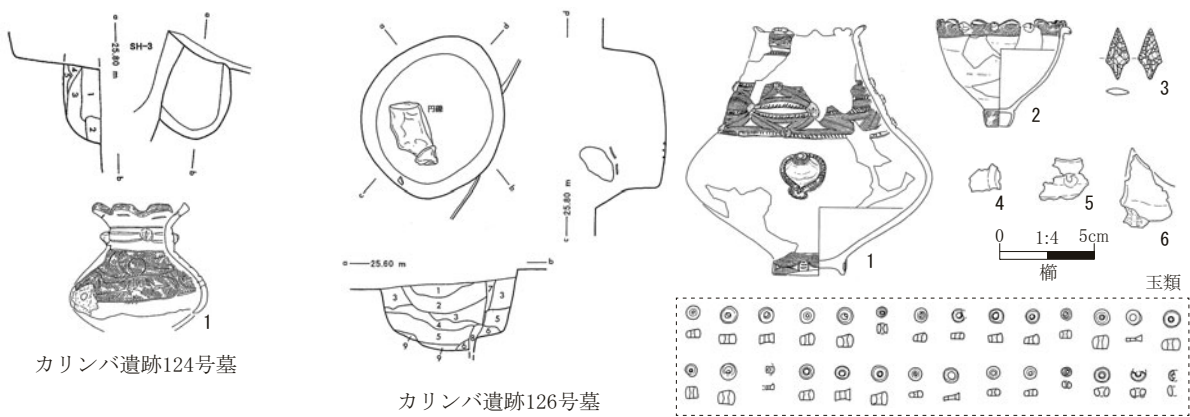
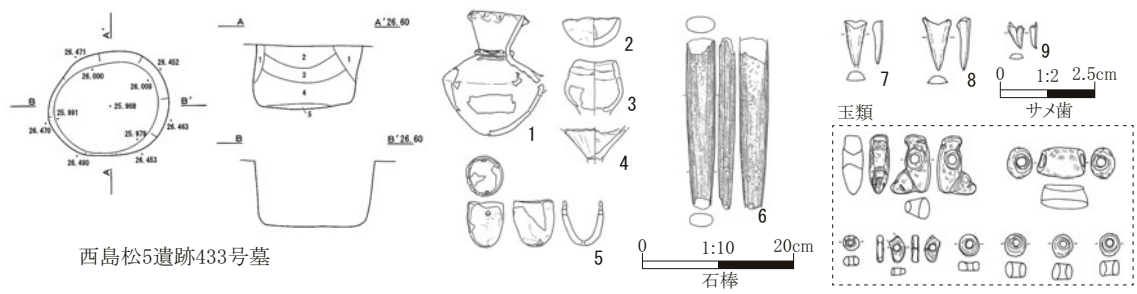
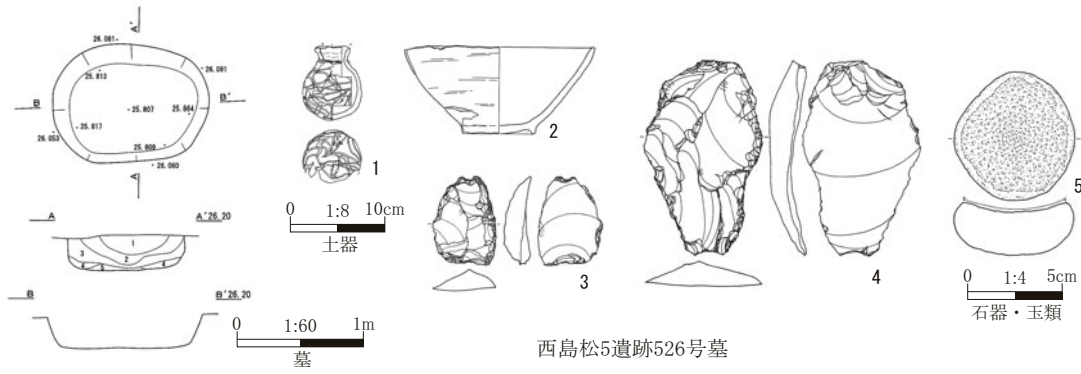
第Ⅱ-8図 瘤付土器第Ⅲ段階並行期の墓、及び出土品(6)
(石川(1969: 図3、6)、北海道教育委員会(1977a: 図33、1979b: 図7-25・26)から作成)



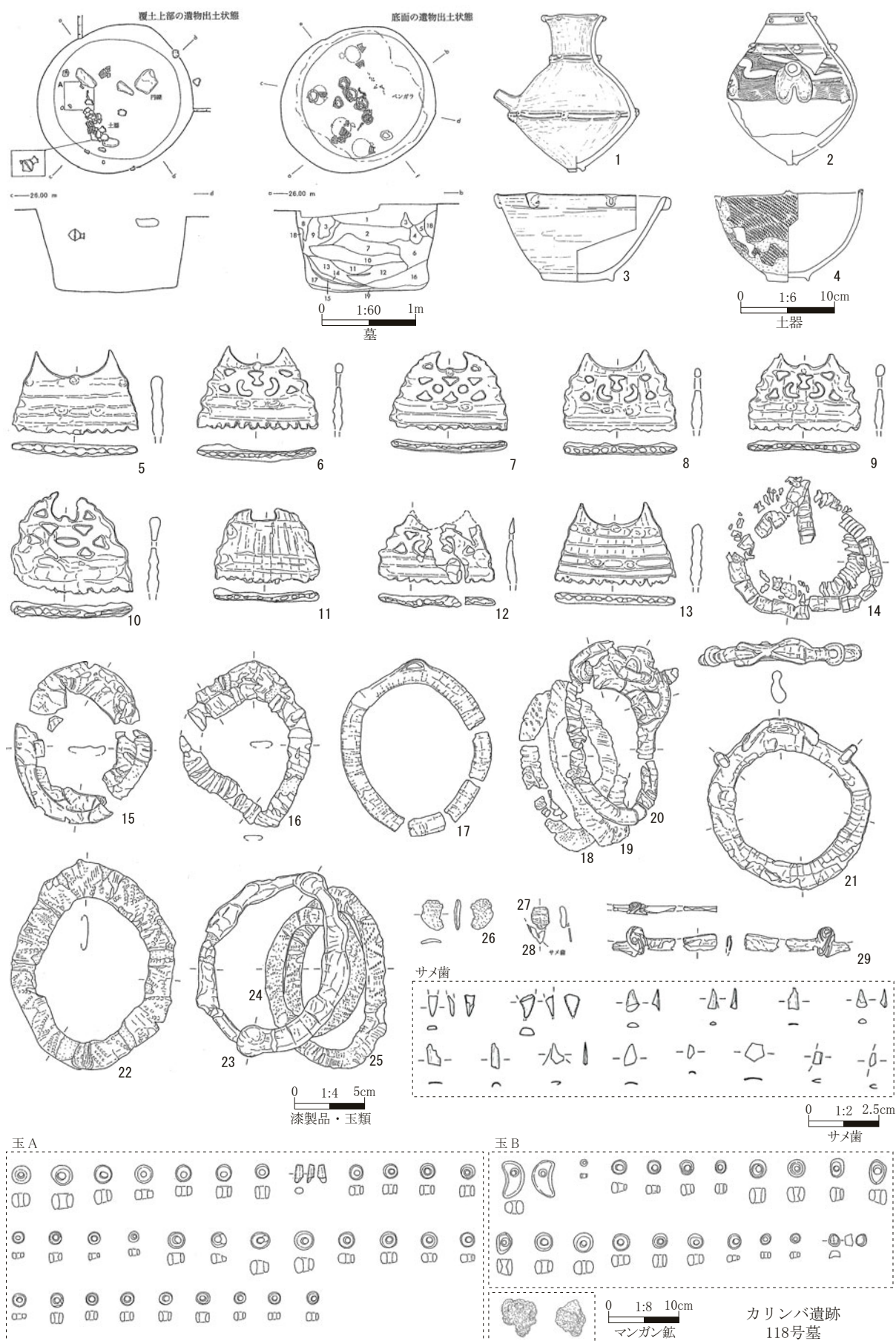
第Ⅱ-9図 瘠付土器第Ⅳ段階並行期の墓、及び出土品(1)
(北海道埋蔵文化財センター (2009b: 図25、26、128、129、131、132)から作成)

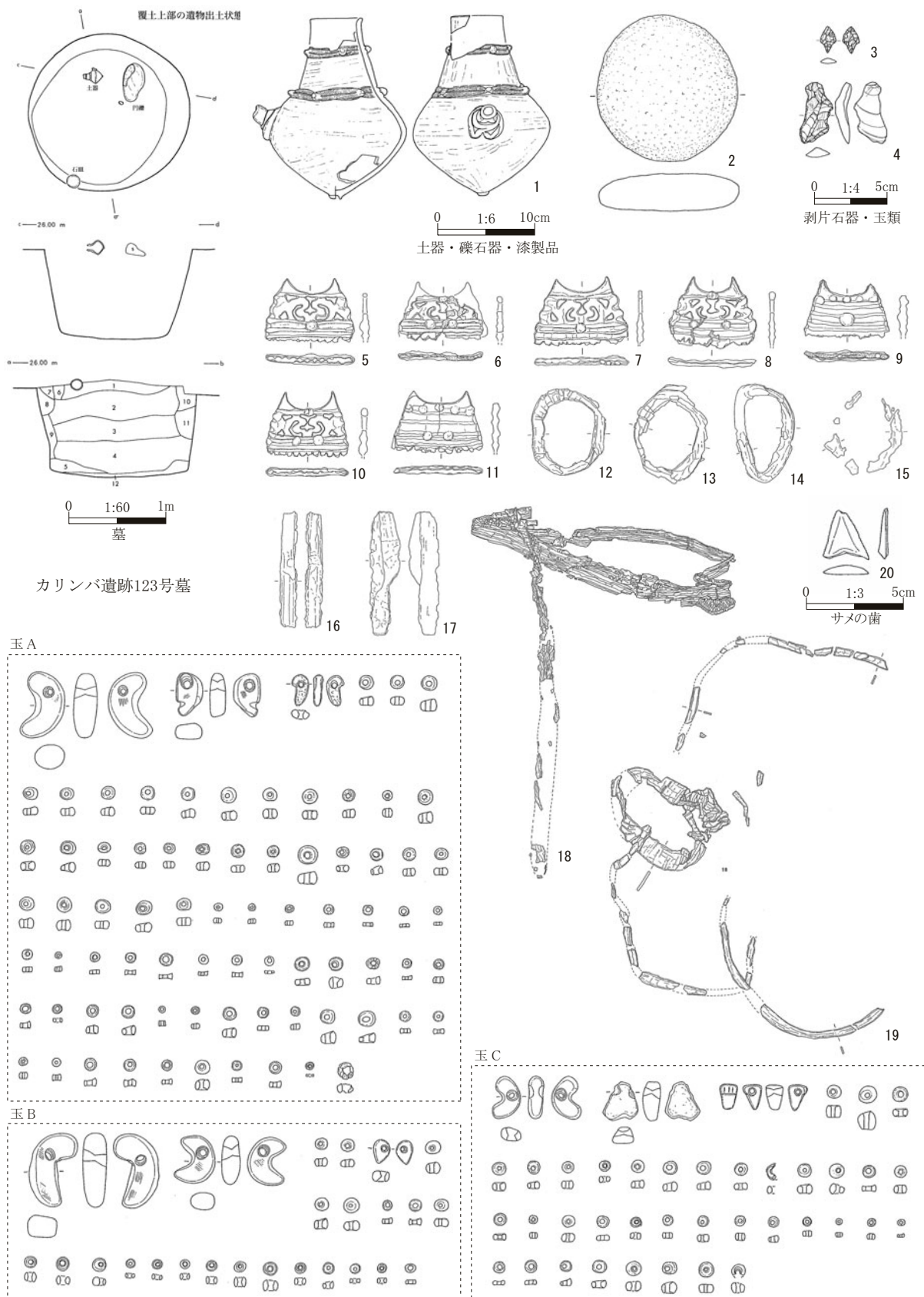


第Ⅱ-11図 瘤付土器第Ⅳ段階並行期の墓、及び出土品(3)
(北海道埋蔵文化財センター (2009b: 図61、62、117、121、122、126、134、135)から作成)

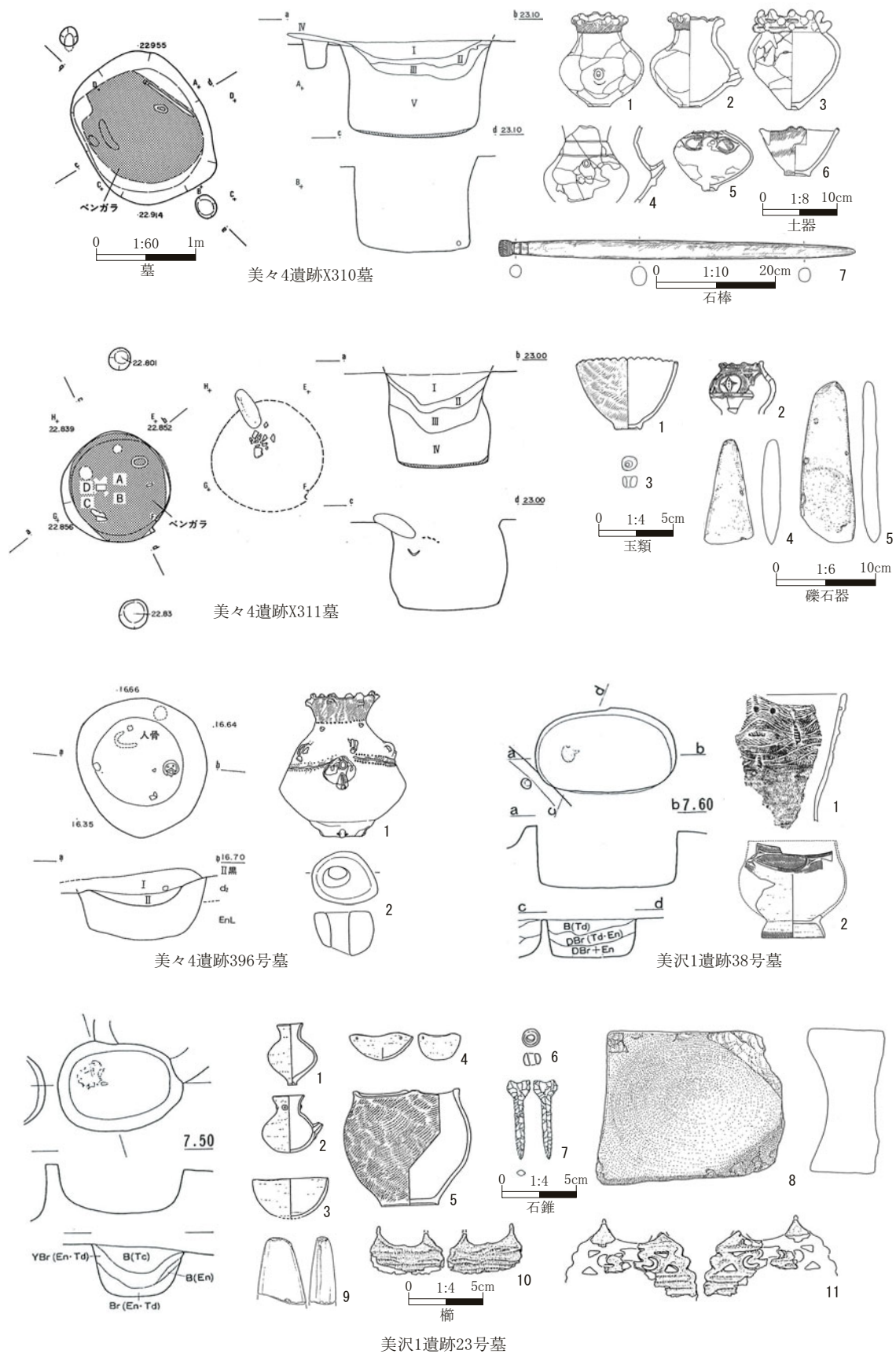


第Ⅱ-12図 瘤付土器第Ⅳ段階並行期の墓、及び出土品(4)
(北海道埋蔵文化財センター (2009b: 図66、67、152)、恵庭市教育委員会 (2003a: 図78、79、109) から作成)

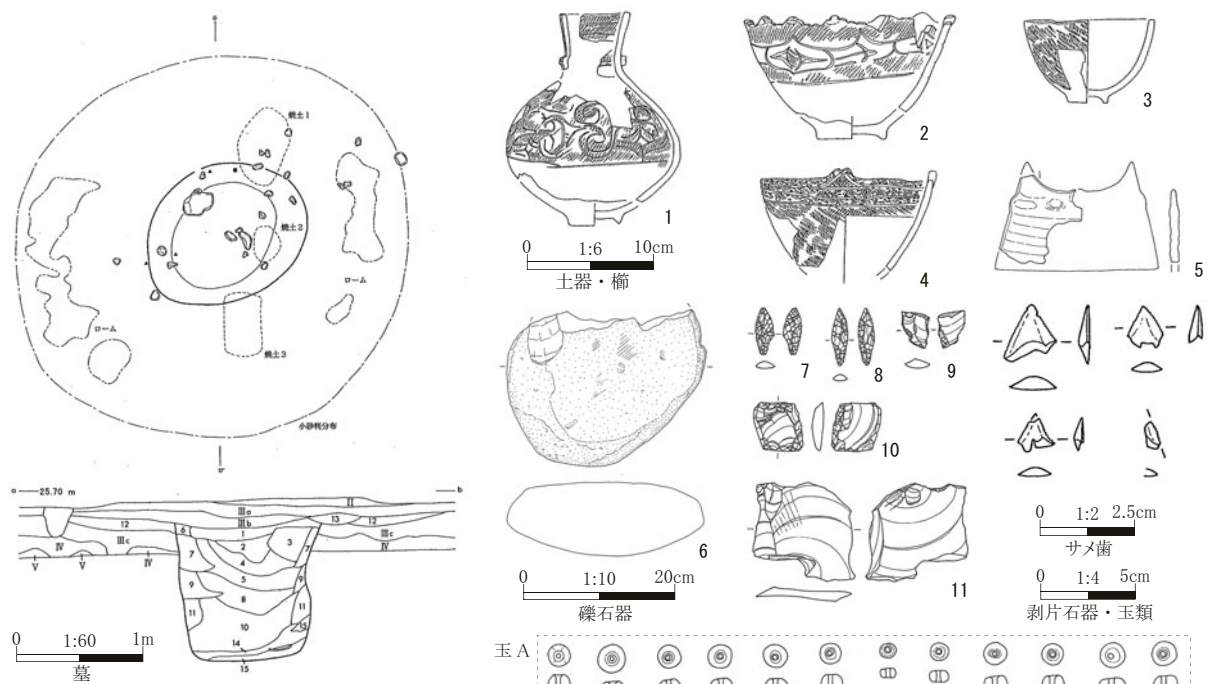




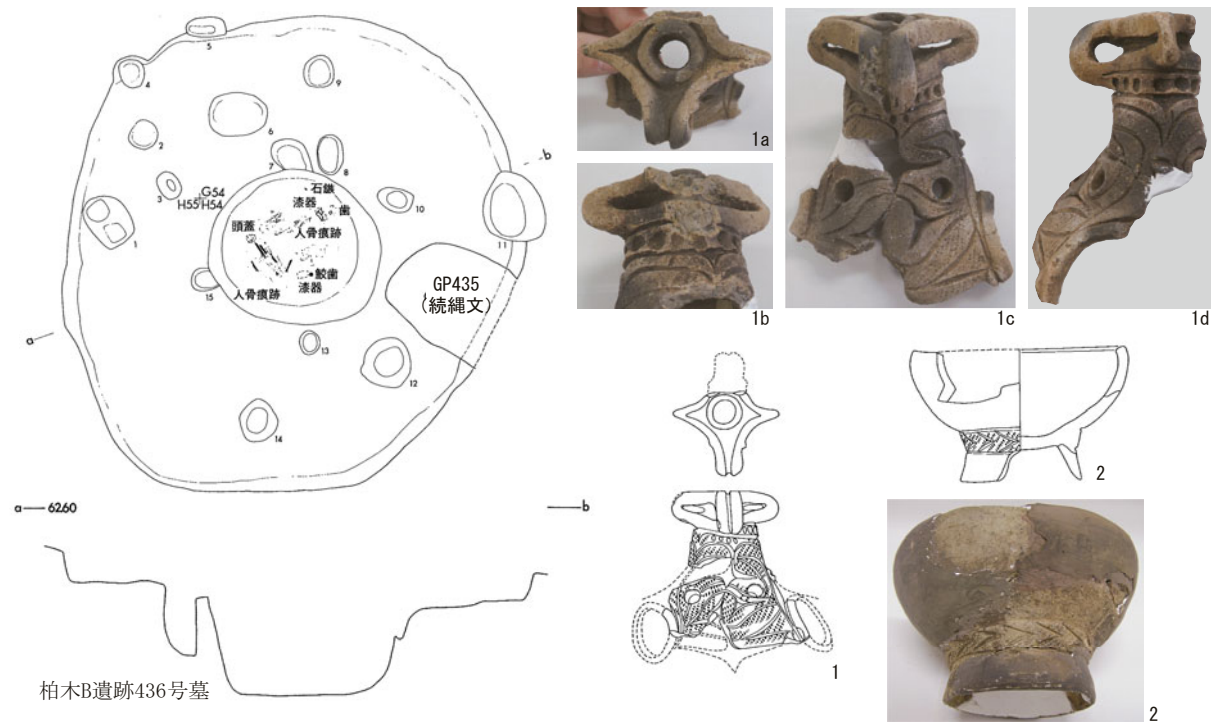
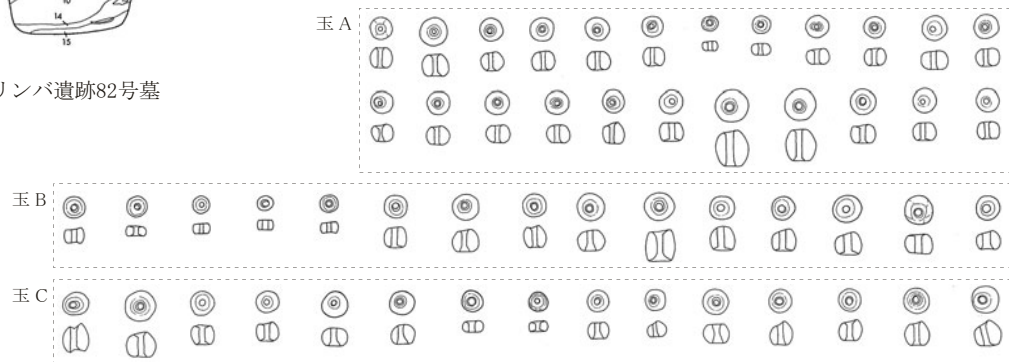
第Ⅱ-14図 瘤付土器第Ⅳ段階並行期の墓、及び出土品(6)
(恵庭市教育委員会 (2003a: 図67、71~77) から作成)



第Ⅱ-15図 瘤付土器第Ⅳ段階並行期の墓、及び出土品(7)
 (北海道教育委員会 (1977a: 図25、26)、北海道埋蔵文化財センター (1984: 図125、126、149、228-4)から作成)

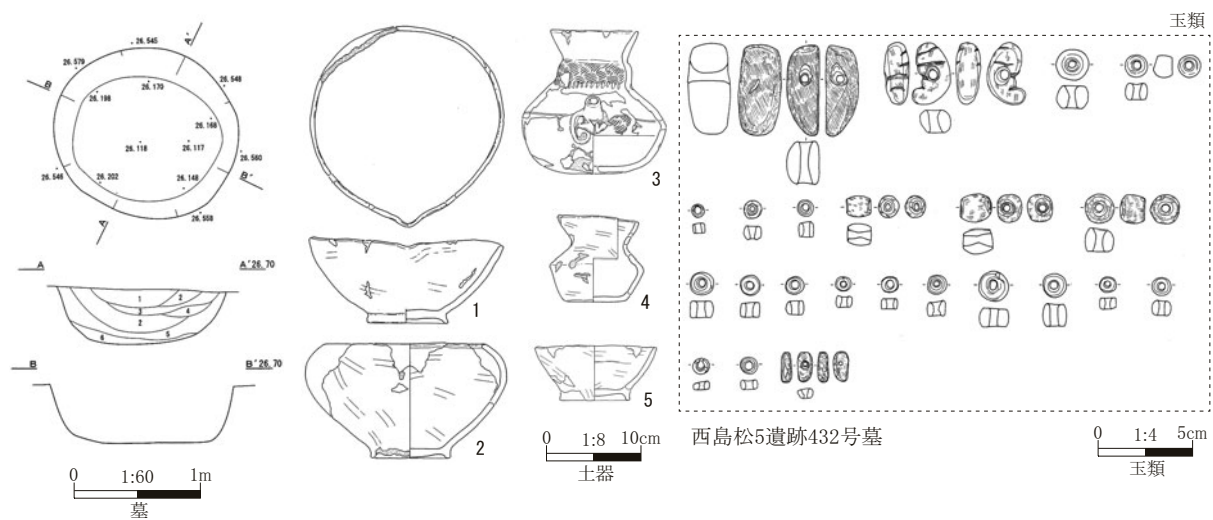


カリンバ遺跡82号墓

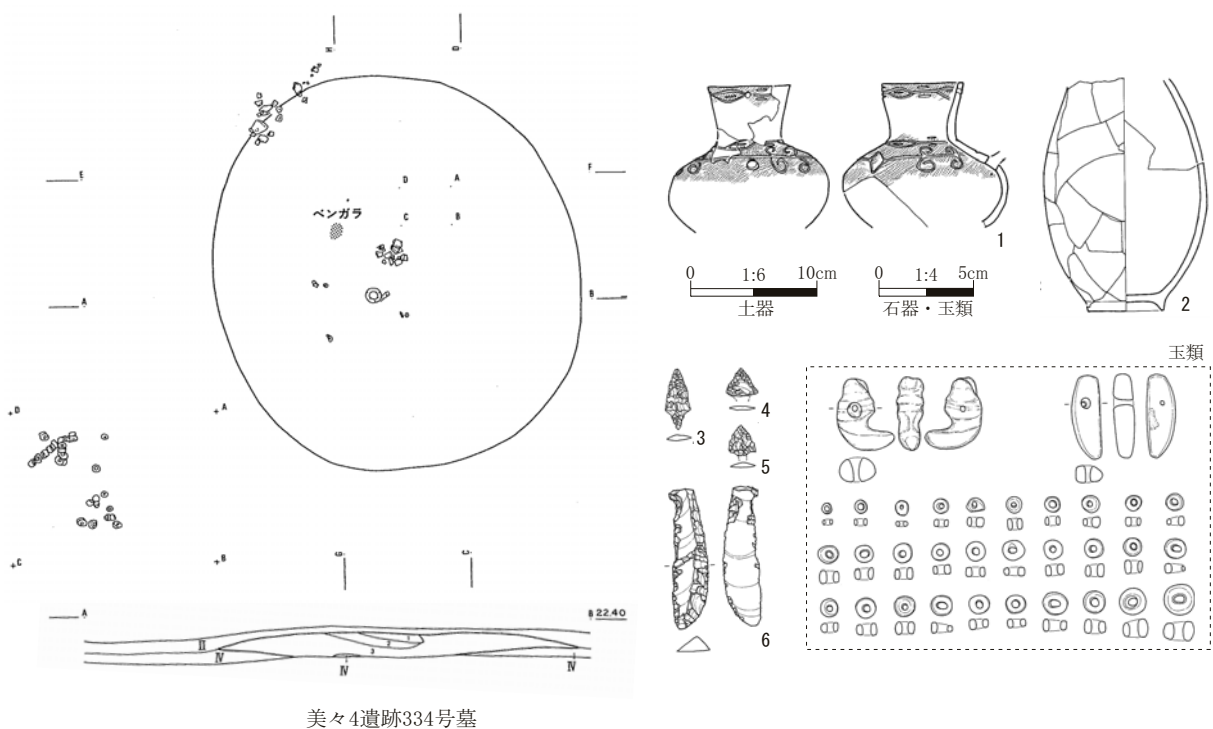


柏木B遺跡436号墓

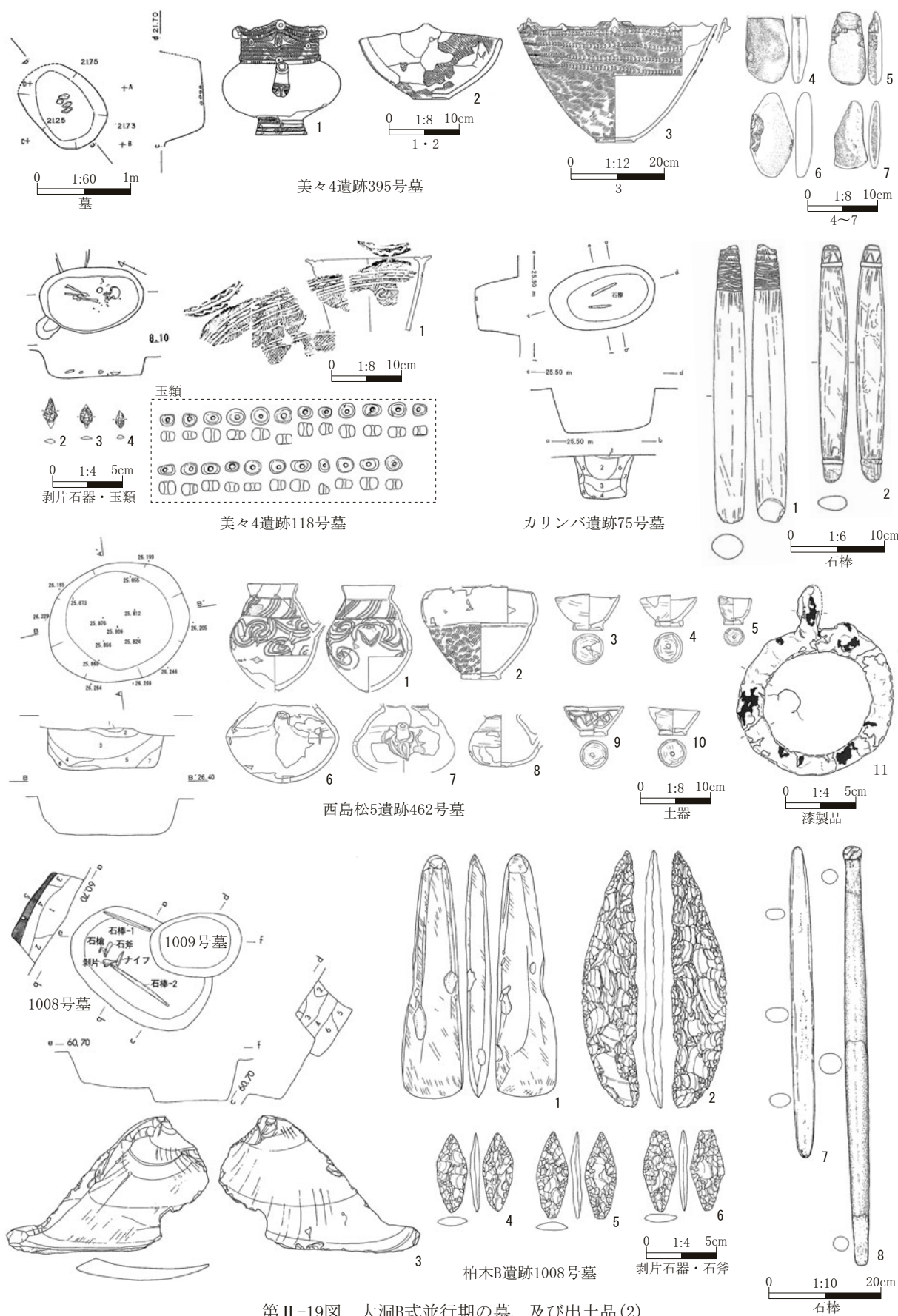
第Ⅱ-16図 瘤付土器第Ⅳ段階～大洞B式並行期の墓、及び出土品(1)
(恵庭市教育委員会(1981: 図246、2003a: 図32～34)、筆者撮影写真(土器: 恵庭市教育委員会蔵)から作成)

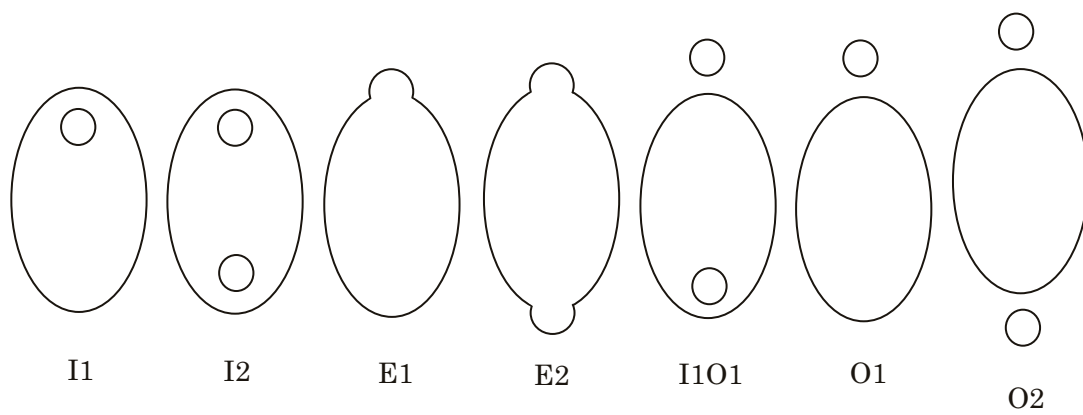


第Ⅱ-17図 瘤付土器第Ⅳ段階～大洞B式並行期の墓、及び出土品(2)
(北海道埋蔵文化財センター (2009b: 図63～65) から作成)



第Ⅱ-18図 大洞B式並行期の墓、及び出土品(1)
(北海道埋蔵文化財センター (1984: 図144、145) から作成)





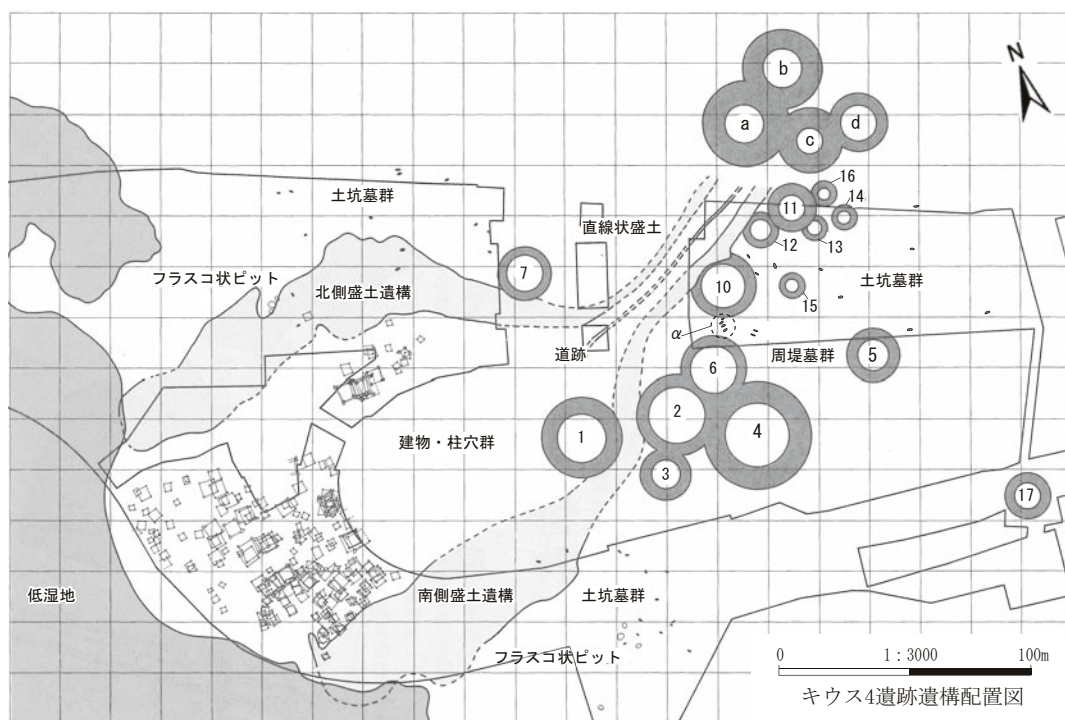
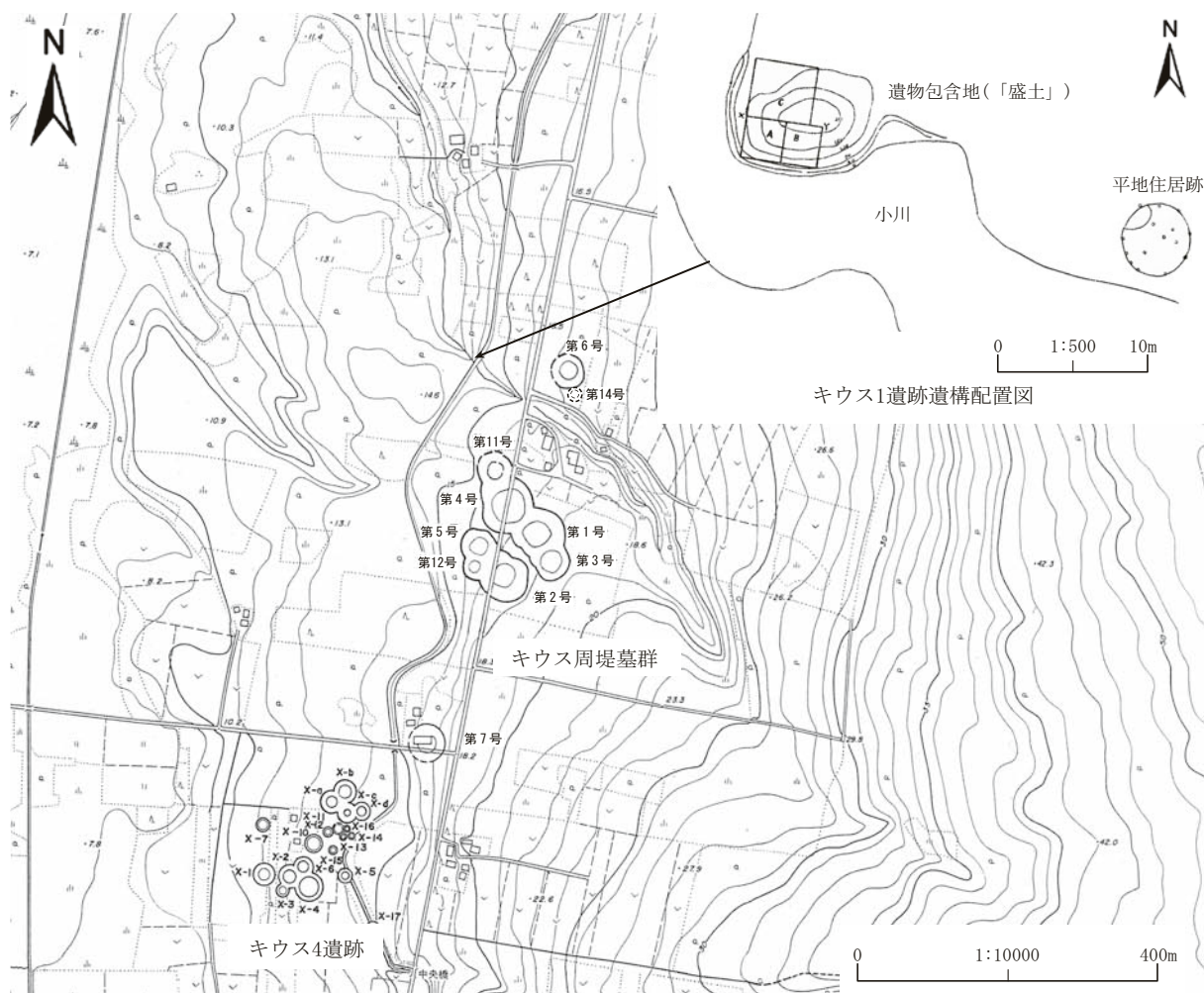
第II-20図 墓標位置の分類（模式図）

第II-1表 墓標の位置に関する一覧(1)

遺跡	遺構	分類	時期(土器共伴)	埋葬姿勢 (人骨・遺体層)	備考	出典
キウス4	X1周堤墓XP1号墓	I1		不明	柱状礫	北海道埋蔵文化財センター 1997c
キウス4	X10周堤墓1002号墓	I2		伸展葬?		北海道埋蔵文化財センター 2000a
キウス4	X10周堤墓1005号墓	I2		不明		北海道埋蔵文化財センター 2000a
キウス4	X10周堤墓1006号墓	I2	堂林2式	不明	櫛出土	北海道埋蔵文化財センター 2000a
キウス4	X10周堤墓1007号墓	I2		不明		北海道埋蔵文化財センター 2000a
キウス4	X10周堤墓1008号墓	I2		伸展葬		北海道埋蔵文化財センター 2000a
キウス4	X10周堤墓1009号墓	I2		伸展葬?		北海道埋蔵文化財センター 2000a
キウス4	X10周堤墓1012号墓	I1		不明		北海道埋蔵文化財センター 2000a
キウス4	X10周堤墓1013号墓	I2		伸展葬?		北海道埋蔵文化財センター 2000a
キウス4	X10周堤墓1014号墓	I1		伸展葬?		北海道埋蔵文化財センター 2000a
キウス4	X11周堤墓1101号墓	I1E1		不明	堂林2式周堤墓	北海道埋蔵文化財センター 2000a
キウス4	X15周堤墓1501号墓	I1		不明		北海道埋蔵文化財センター 2000a
キウス4	X15周堤墓1503号墓	I2		伸展葬		北海道埋蔵文化財センター 2000a
キウス4	X17周堤墓1704号墓	E1		屈葬	砂岩小形立石	北海道埋蔵文化財センター 2000a
キウス4	X α 周堤墓LP11号墓	01E1		伸展葬?		北海道埋蔵文化財センター 2000a
キウス4	X α 周堤墓LP12号墓	I2		伸展葬?		北海道埋蔵文化財センター 2000a
イカベツ2	11号墓	02		不明		北海道埋蔵文化財センター 2018
イカベツ2	12号墓	01		不明		北海道埋蔵文化財センター 2018
イカベツ2	15号墓	I1		不明		北海道埋蔵文化財センター 2018
末広	2号周堤墓1号墓	01?	堂林3式	不明		千歳市教育委員会 1981
末広	2号周堤墓10号墓	01?		不明		千歳市教育委員会 1981
丸子山	2号周堤墓1号墓	I1E1		不明		千歳市教育委員会 1994
丸子山	2号周堤墓4号墓	I1		不明	弓出土	千歳市教育委員会 1994
美々4	X1周堤墓X101号墓	I2		不明	礫墓標	北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X2周堤墓X203号墓	02?		不明	片側礫墓標?	北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X2周堤墓X204号墓	I2		伸展葬		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X2周堤墓X206号墓	I1		伸展葬?		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X2周堤墓X207号墓	I2?		伸展葬	南北すみに2個 の小ビット	北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X2周堤墓X208号墓	I2	瘤付土器III段階	伸展葬		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X2周堤墓X212号墓	I1		伸展葬		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X2周堤墓X213号墓	02		伸展葬		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X2周堤墓X214号墓	I2		伸展葬		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X2周堤墓X215号墓	E2		伸展葬		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X2周堤墓X216号墓	I2		伸展葬		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X2周堤墓X217号墓	01?		不明	片側礫墓標?	北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X2周堤墓X218号墓	I2		伸展葬		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X2周堤墓X220号墓	02		伸展葬		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X2周堤墓X221号墓	01?		不明		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X2周堤墓X222号墓	02		伸展葬		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X3周堤墓X302号墓	02		不明	片側礫	北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X3周堤墓X304号墓	02?		不明		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X3周堤墓X305号墓	02?		不明		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X3周堤墓X306号墓	02?		不明		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X3周堤墓X307号墓	01?		不明		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X3周堤墓X308号墓	02		不明		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X3周堤墓X309号墓	02	瘤付土器IV段階?	不明		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X3周堤墓X310号墓	02	瘤付土器IV段階	不明		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X3周堤墓X311号墓	02	瘤付土器IV段階	不明		北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	X9周堤墓X901号墓	I2		不明		北海道埋蔵文化財センター 1986
美々4	X9周堤墓X903号墓	I2		不明		北海道埋蔵文化財センター 1986
美々4	X9周堤墓X904号墓	I2		伸展葬		北海道埋蔵文化財センター 1986
美々4	BS1周堤墓(?)4号墓	01		不明		北海道教育委員会 1981a
美々4	BS3周堤墓1号墓	02		不明		北海道教育委員会 1981a

第II-1表 墓標の位置に関する一覧(2)

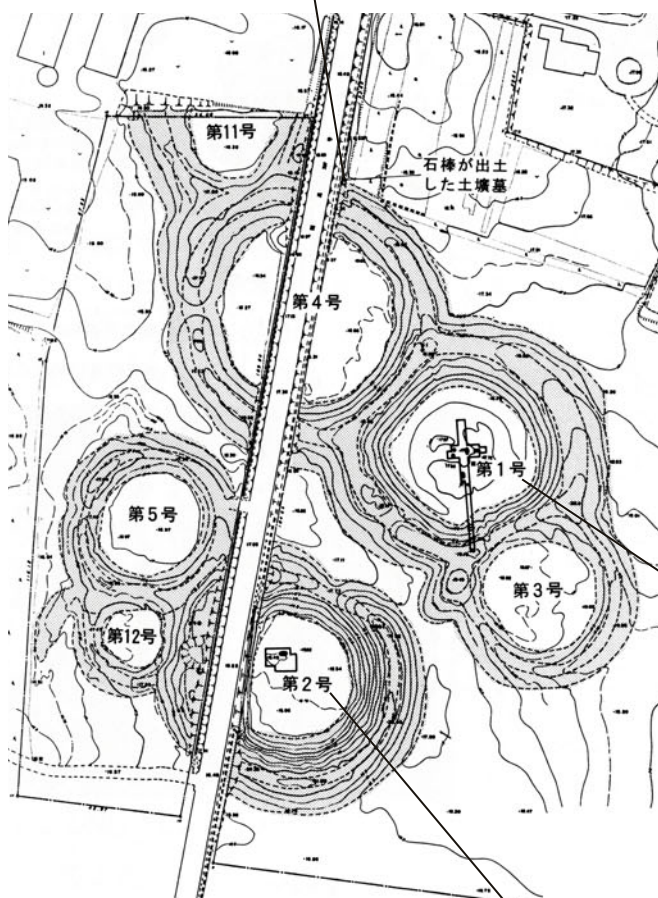
遺跡	遺構	分類	時期(土器共伴)	埋葬姿勢 (人骨・遺体層)	備考	出典
美々4	BS3周堤墓2号墓	02	瘤付土器III段階	不明	片側礫	北海道教育委員会 1981a
美々4	BS3周堤墓3号墓	02		不明		北海道教育委員会 1981a
美々4	BS3周堤墓5号墓	02		不明		北海道教育委員会 1981a
美々4	BS3周堤墓6号墓	02		不明		北海道教育委員会 1981a
美々4	BS3周堤墓8号墓	02		不明		北海道教育委員会 1981a
美々4	BS3周堤墓9号墓	02		不明		北海道教育委員会 1981a
美々4	BS3周堤墓10号墓	02		不明		北海道教育委員会 1981a
美々4	BS3周堤墓14号墓	02		伸展葬		北海道教育委員会 1981a
美々4	BS3周堤墓16号墓	02?		不明		北海道教育委員会 1981a
美々4	65号墓	02		不明		北海道教育委員会 1981a
美々4	75号墓	02?	堂林3式	不明	片側角礫	北海道教育委員会 1981a
美沢1	KX1周堤墓102号墓	I1		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	KX1周堤墓104号墓	I1		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	KX1周堤墓106号墓	I1		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	KX1周堤墓109号墓	01		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX2周堤墓104号墓	I1		伸展葬		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX3周堤墓102号墓	02		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX3周堤墓103号墓	02		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX3周堤墓107号墓	E2		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX3周堤墓109号墓	02		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX3周堤墓111号墓	01	堂林3式	伸展葬	両側柱状礫	北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX3周堤墓112号墓	02?		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX3周堤墓113号墓	02		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX3周堤墓115号墓	02		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX3周堤墓130号墓	02		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX4周堤墓101号墓	E2		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX4周堤墓102号墓	I1?		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX4周堤墓104号墓	I2		伸展葬		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX4周堤墓105号墓	I101		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX4周堤墓106号墓	I2		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX4周堤墓107号墓	I2	堂林3式	伸展葬	礫立石?	北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX4周堤墓108号墓	01?		不明		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX4周堤墓110号墓	I1		屈葬		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX4周堤墓112号墓	I2		伸展葬		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX4周堤墓113号墓	I2		伸展葬		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX4周堤墓114号墓	I2		伸展葬		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX4周堤墓116号墓	I1		伸展葬		北海道教育委員会 1979b
美沢1	JX4周堤墓117号墓	I2		伸展葬		北海道教育委員会 1979b
柏木B	1号墓周堤墓1101号墓	01	瘤付土器III段階	不明	片側立石	恵庭市教育委員会 1981
柏木B	1号墓周堤墓1102号墓	01		不明		恵庭市教育委員会 1981
柏木B	1号墓周堤墓1103号墓	01		不明		恵庭市教育委員会 1981
柏木B	1号周堤墓1105号墓	02		不明		恵庭市教育委員会 1981
柏木B	1号周堤墓1106号墓	01		不明		恵庭市教育委員会 1981
柏木B	1号墓周堤墓1110号墓	01		不明		恵庭市教育委員会 1981
柏木B	1号墓周堤墓1113号墓	02		不明		恵庭市教育委員会 1981
柏木B	2号墓周堤墓2001号墓	03		不明		恵庭市教育委員会 1981
柏木B	2号墓周堤墓2003号墓	02		不明		恵庭市教育委員会 1981
柏木B	2号周堤墓2005号墓	02		不明		恵庭市教育委員会 1981
柏木B	2号墓周堤墓2008号墓	02	堂林3式	不明	角柱礫	恵庭市教育委員会 1981
柏木B	441号墓	01		不明		恵庭市教育委員会 1981



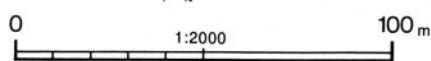
第Ⅲ-1図 キウス4遺跡、キウス周堤墓群、及びキウス1遺跡の位置
 (大場・石川(1967: 図23)、千歳市教育委員会(2019: 23図)、
 北海道埋蔵文化財センター(2000a: 図1-5、付図、2001: 図2)から作成)



第4号周堤墓外縁部墓出土品



第1号周堤墓トレンチ出土品

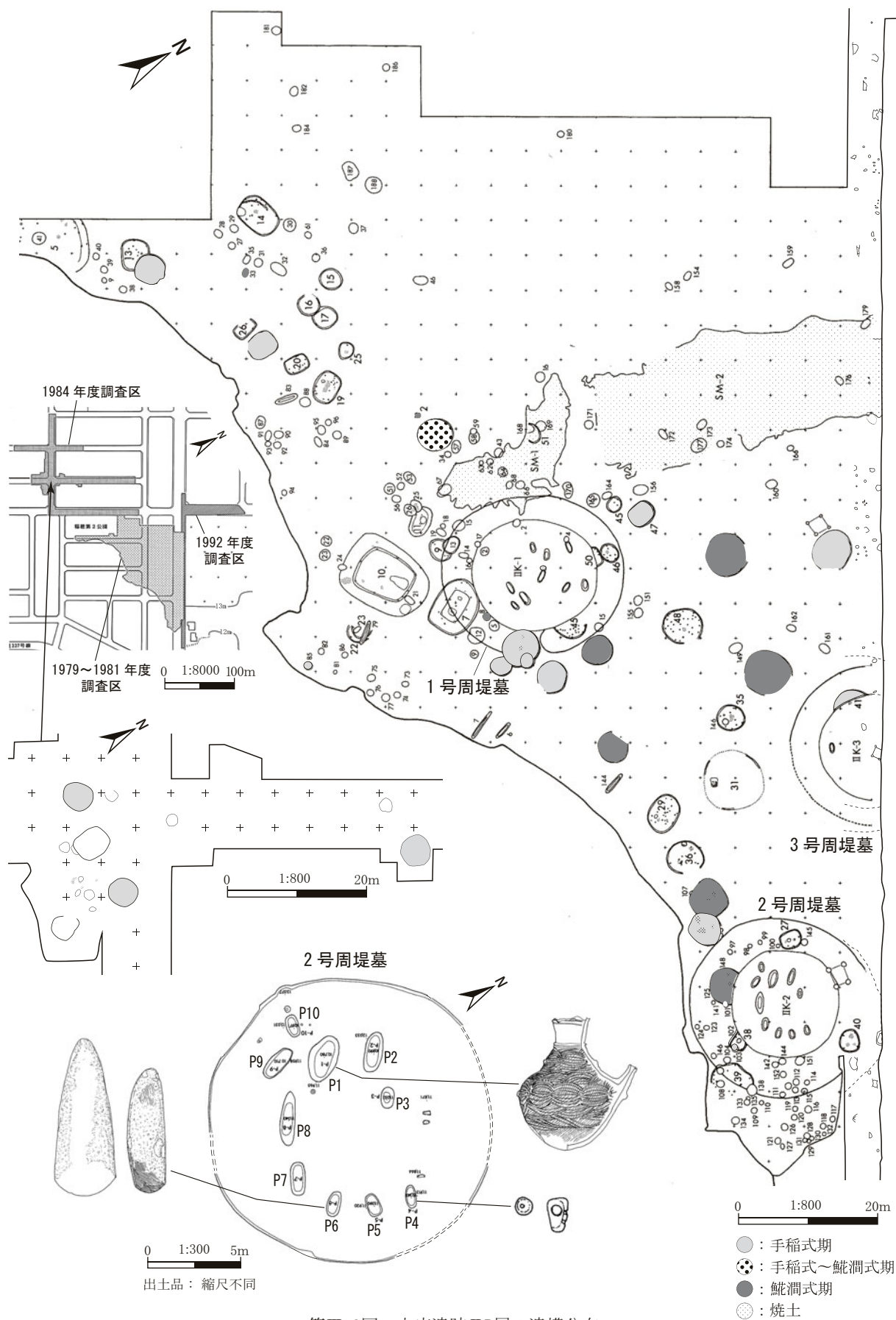


第2号周堤墓出土品

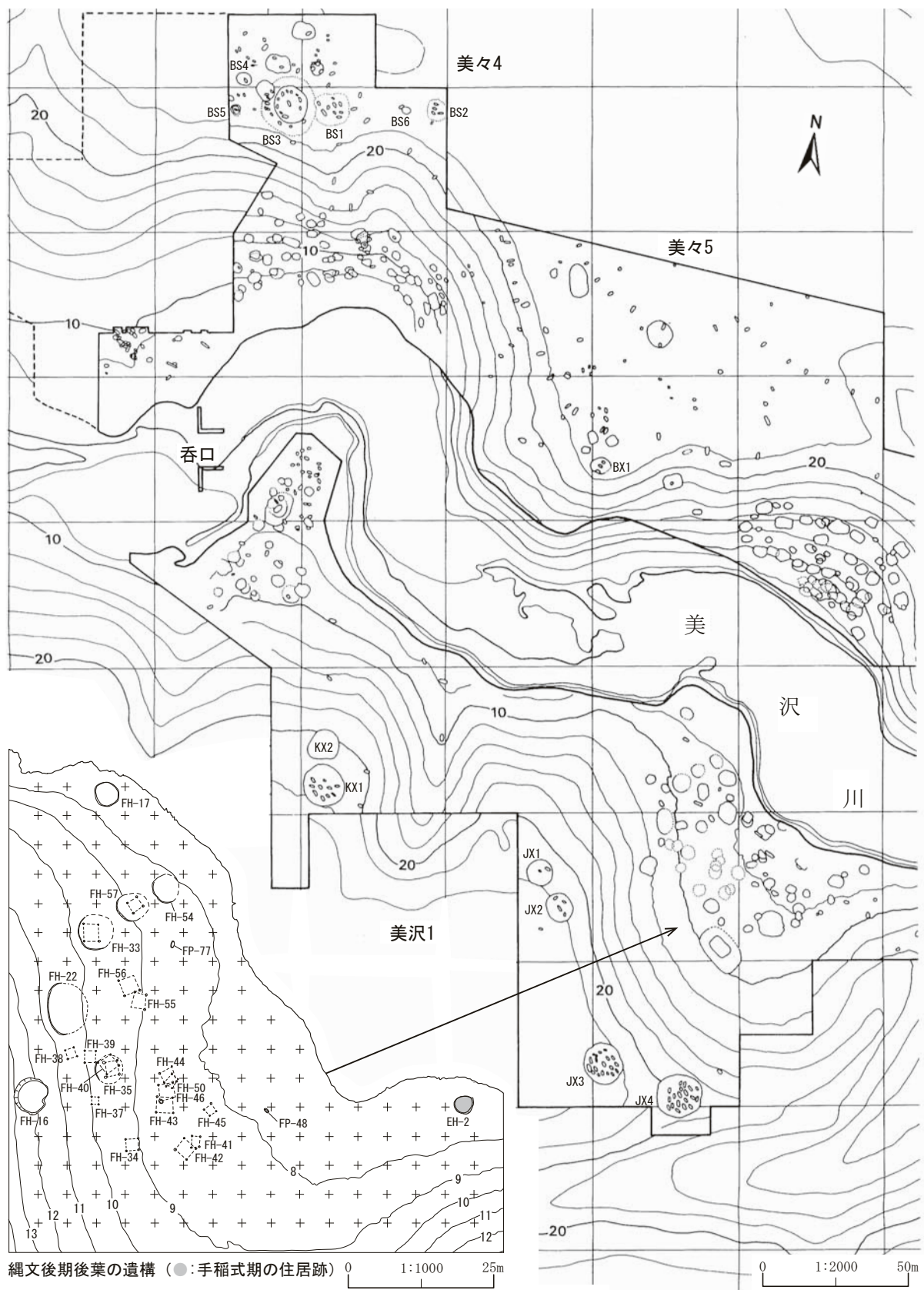


第Ⅲ-2図 キウス周堤墓群出土品

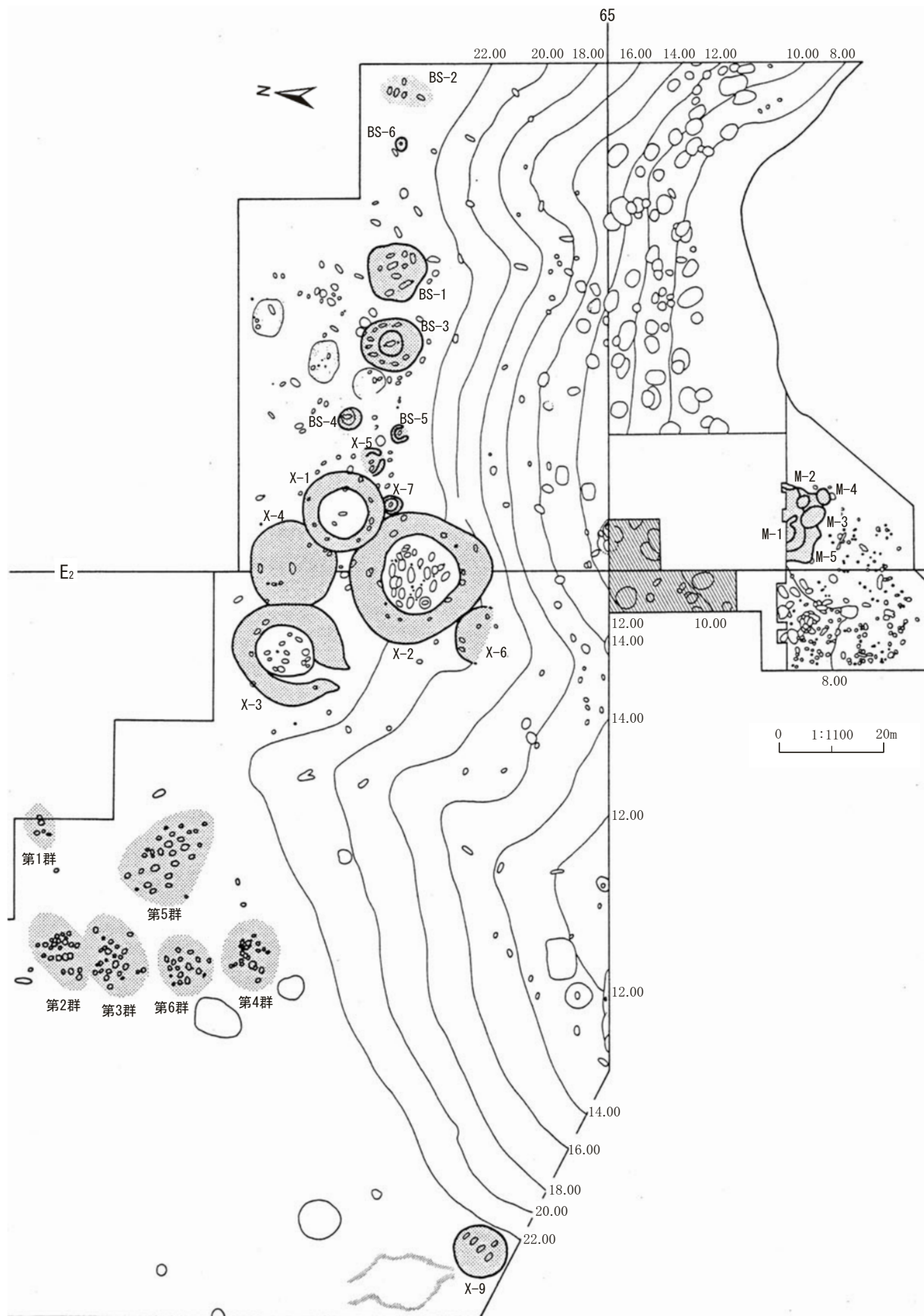
(石川(1969: 図6)、北海道埋蔵文化財センター (2000a: 図I-6)、筆者撮影写真から作成)



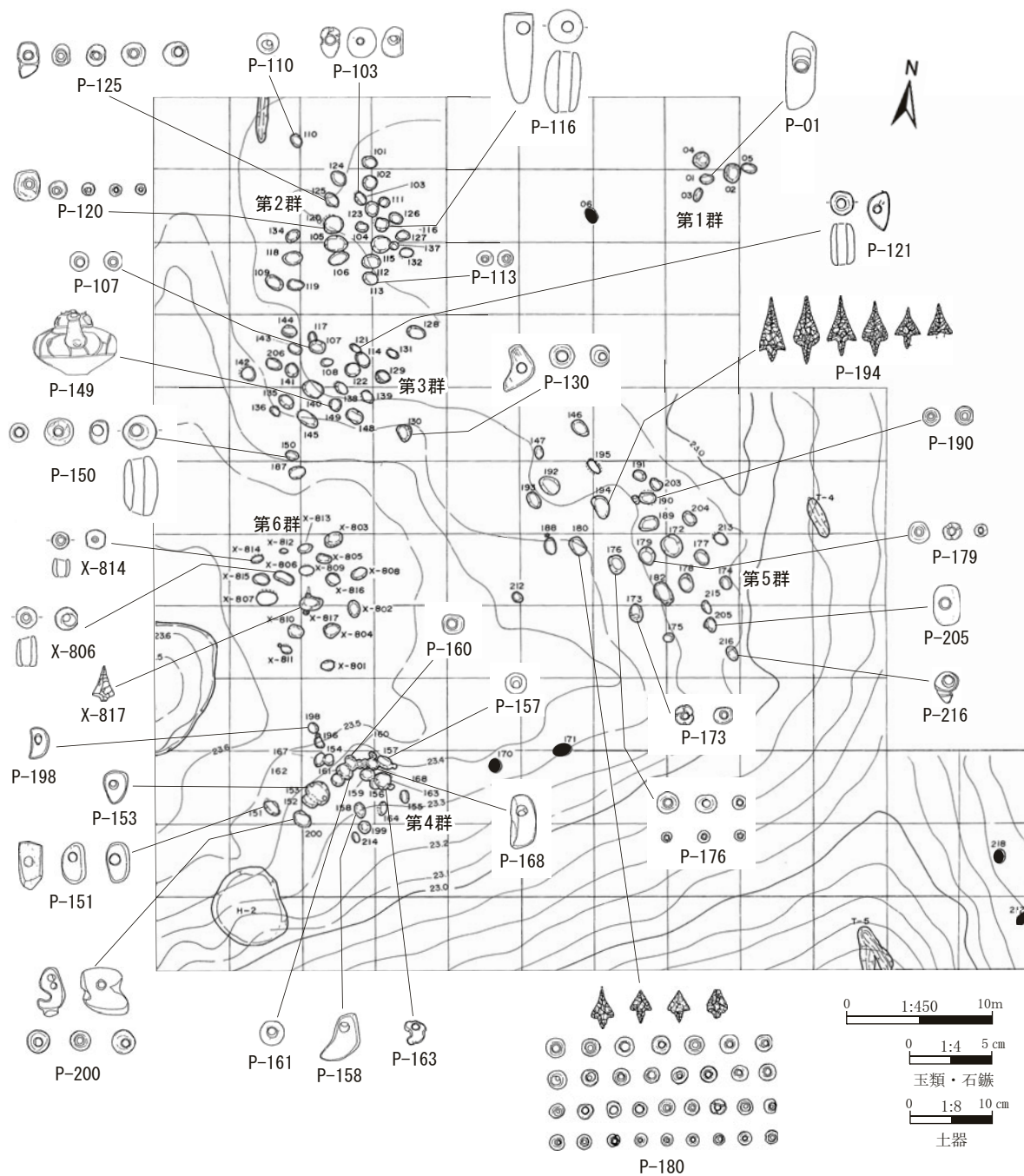
第Ⅲ-3図 末広遺跡ⅡB層の遺構分布
 (千歳市教育委員会(1981: 図102、104、106、1982: 図277、1985: 図85、1996: 図3、80)から作成)



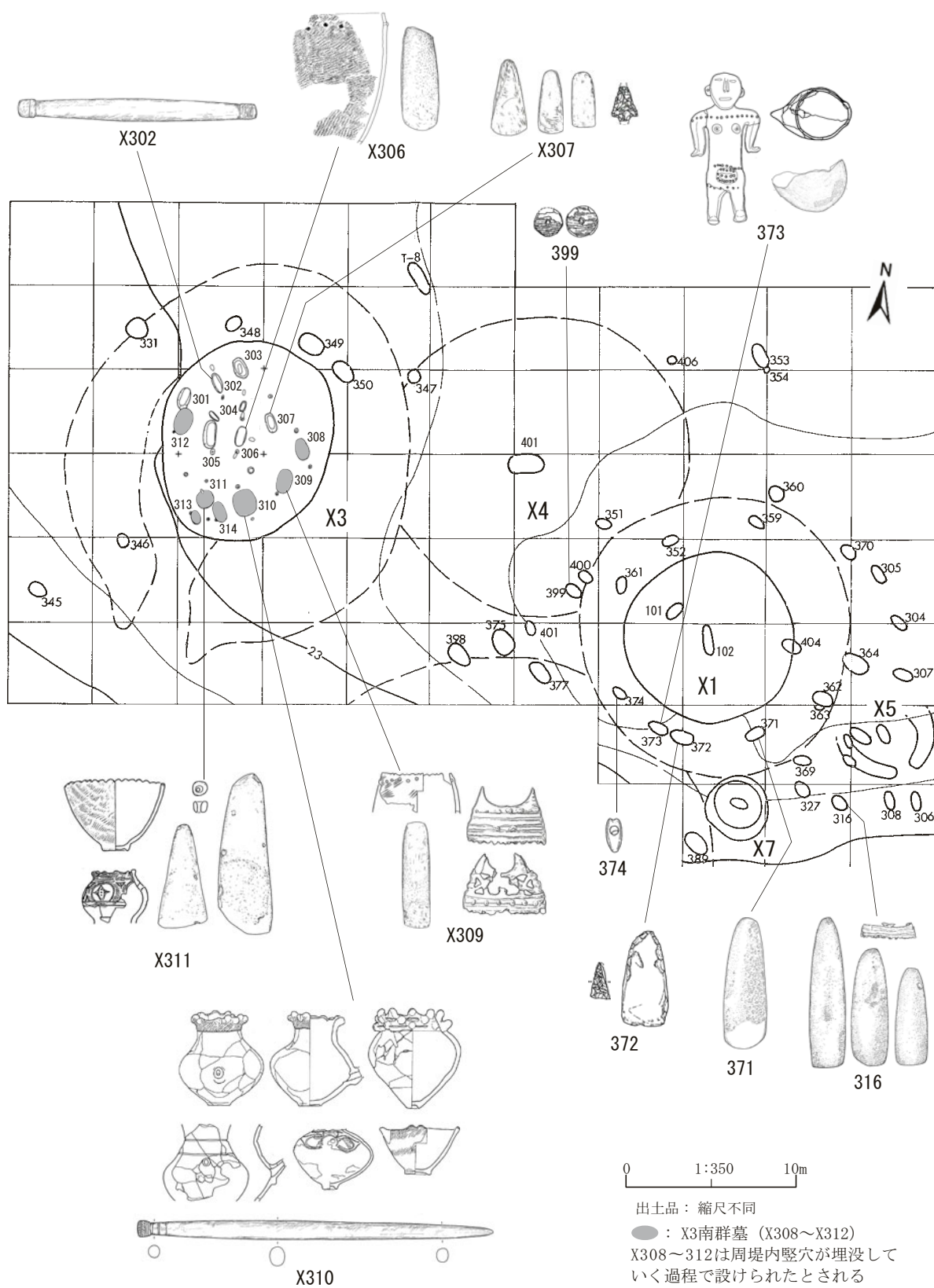
第Ⅲ-4図 美沢川流域における遺構分布概略
(北海道教育委員会 (1978a: 付図4)、北海道埋蔵文化財センター (1997e: 図17) から作成)



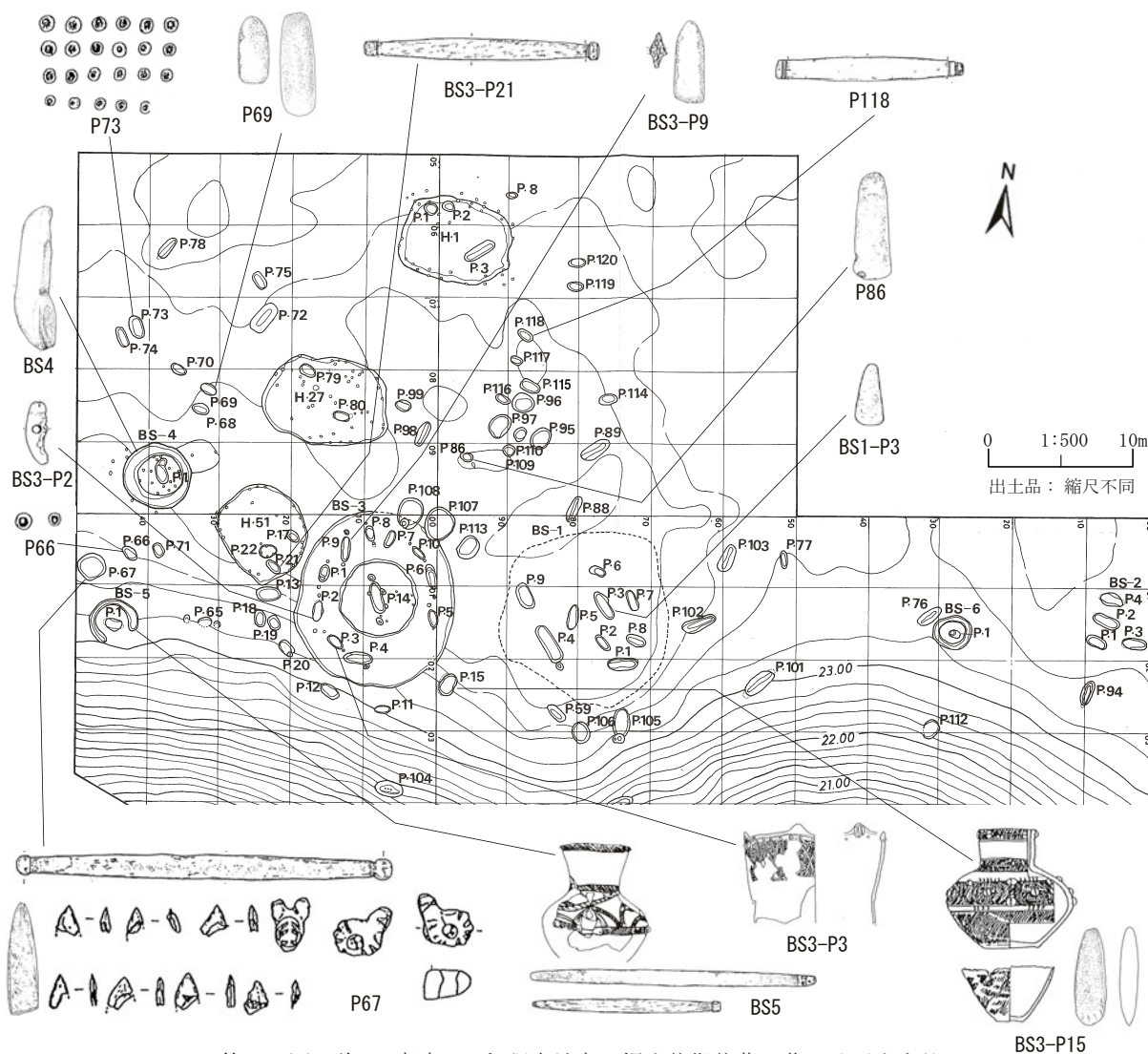
第Ⅲ-5図 美々4遺跡の遺構分布
(北海道埋蔵文化財センター(1998a: 図4-1)から作成)



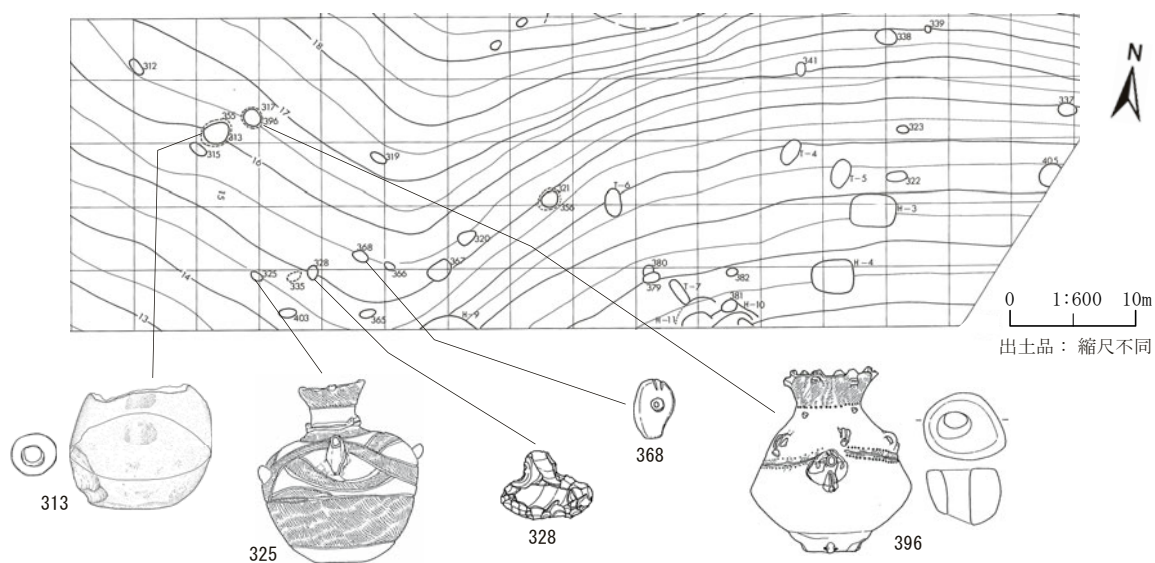
第Ⅲ-6図 美々4遺跡の縄文後期中葉の墓群
 (北海道埋蔵文化財センター (1985: 図22、32、35~40、43~45、48、52~57、61~68、72、74、75 から作成)
 ●: 群の外に位置し、副葬・供献品が出土しなかった墓



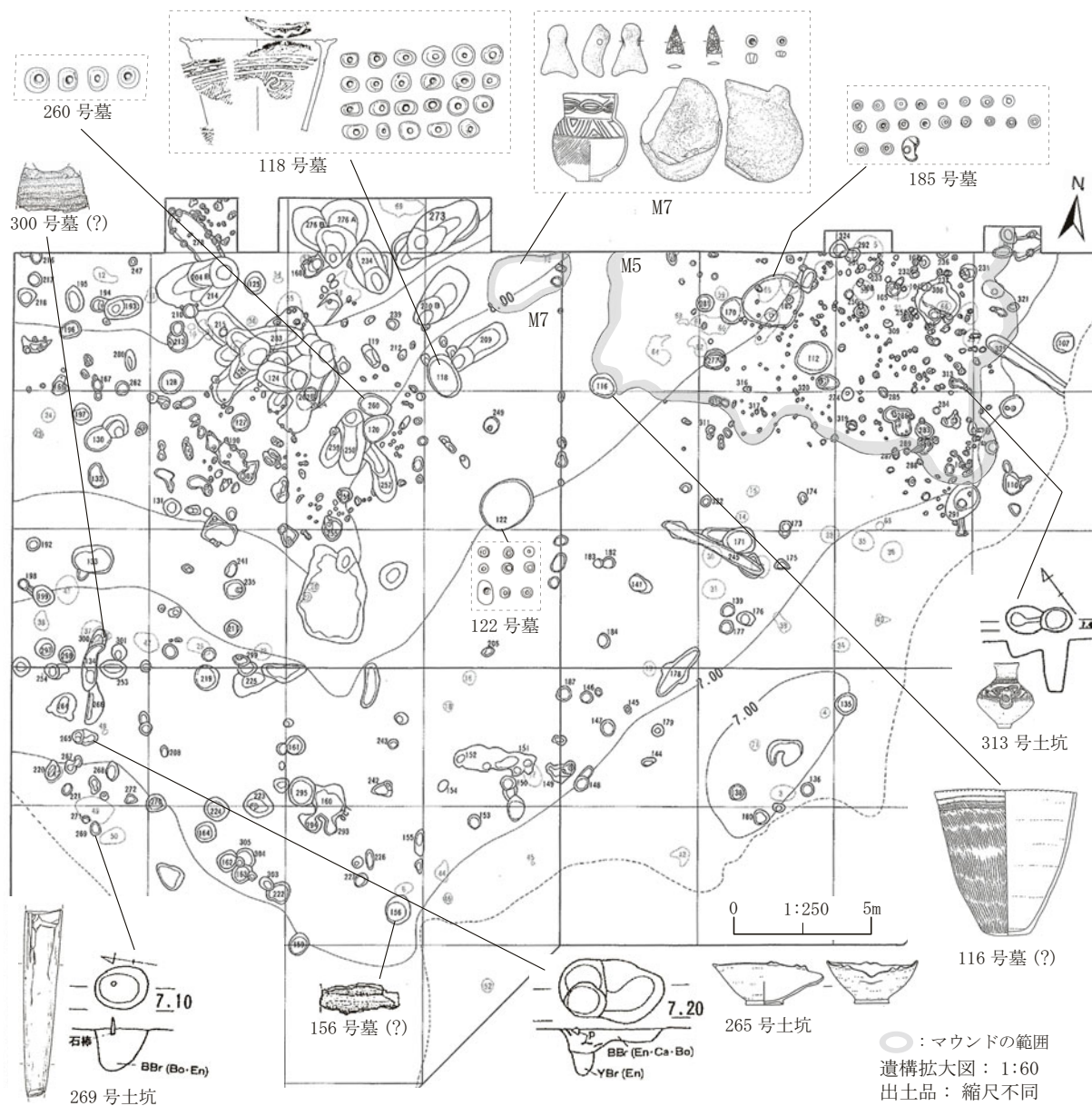
第Ⅲ-8図 美々4遺跡X1・3・4周堤墓と関連する墓からの出土品
(北海道埋蔵文化財センター (1984: 図120、122、124~126、156、167~170、186、228-2・4) から作成)



第Ⅲ-9図 美々4遺跡1980年調査地点の縄文後期後葉の墓、及び出土品
(北海道教育委員会 (1981a: 図65、74~76、78、80、84、85、88、89、91、93、94、付図1)から作成)



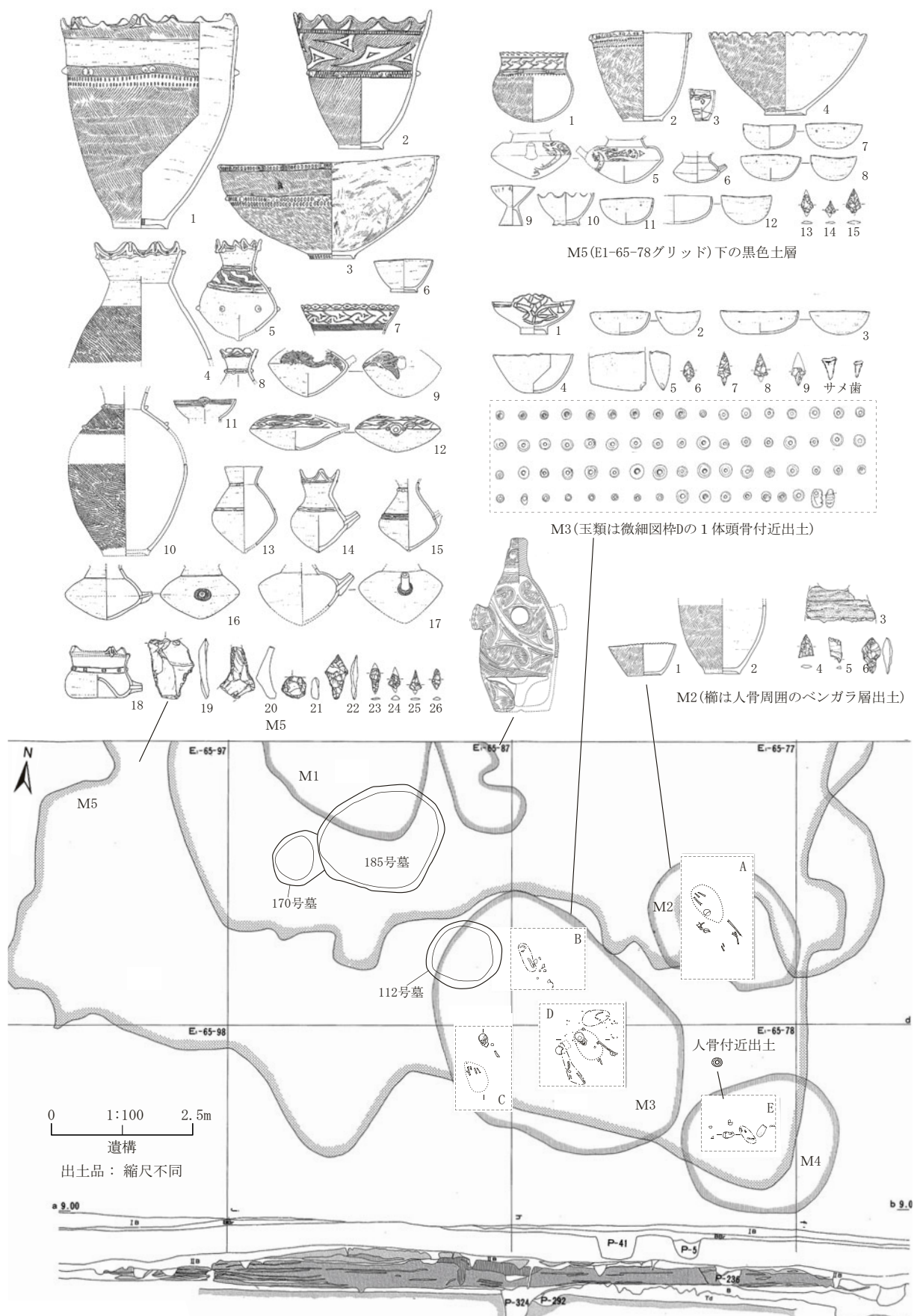
第Ⅲ-10図 美々4遺跡1983年調査地点、斜面の墓、及び出土品
(北海道埋蔵文化財センター (1984: 図143、149、159、160、166) から作成)



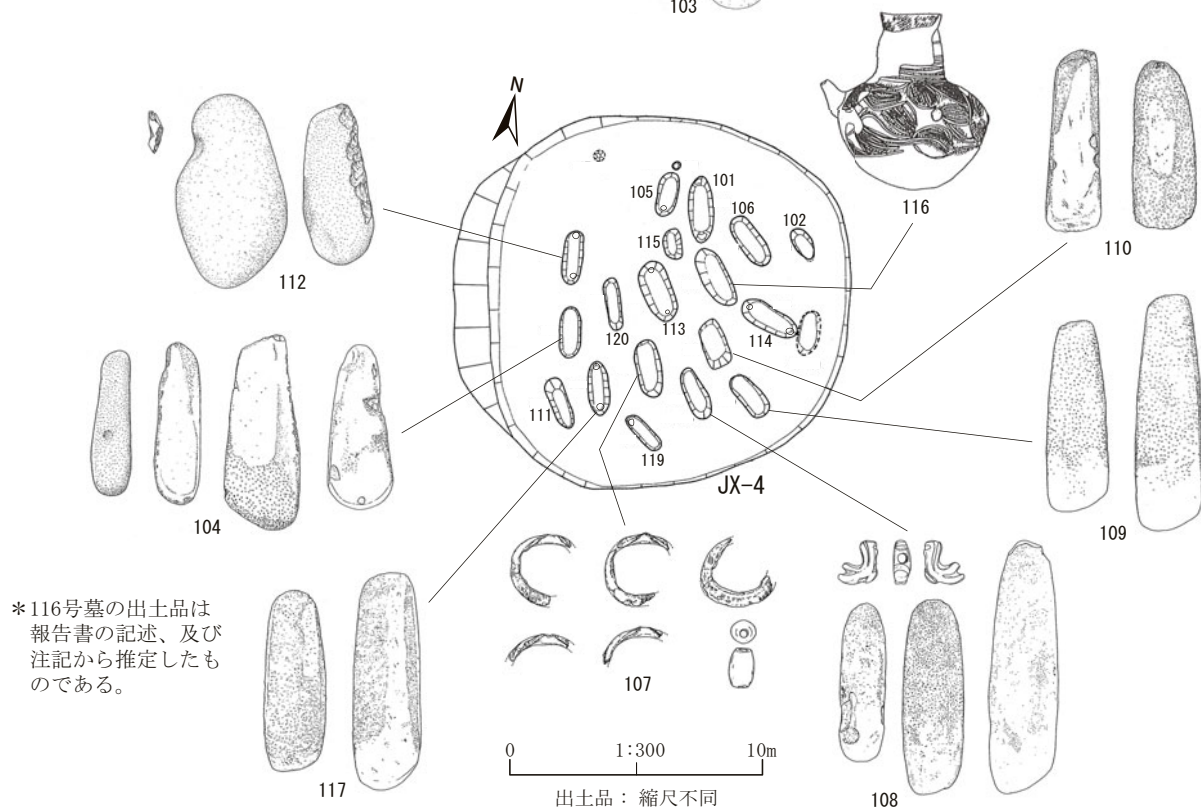
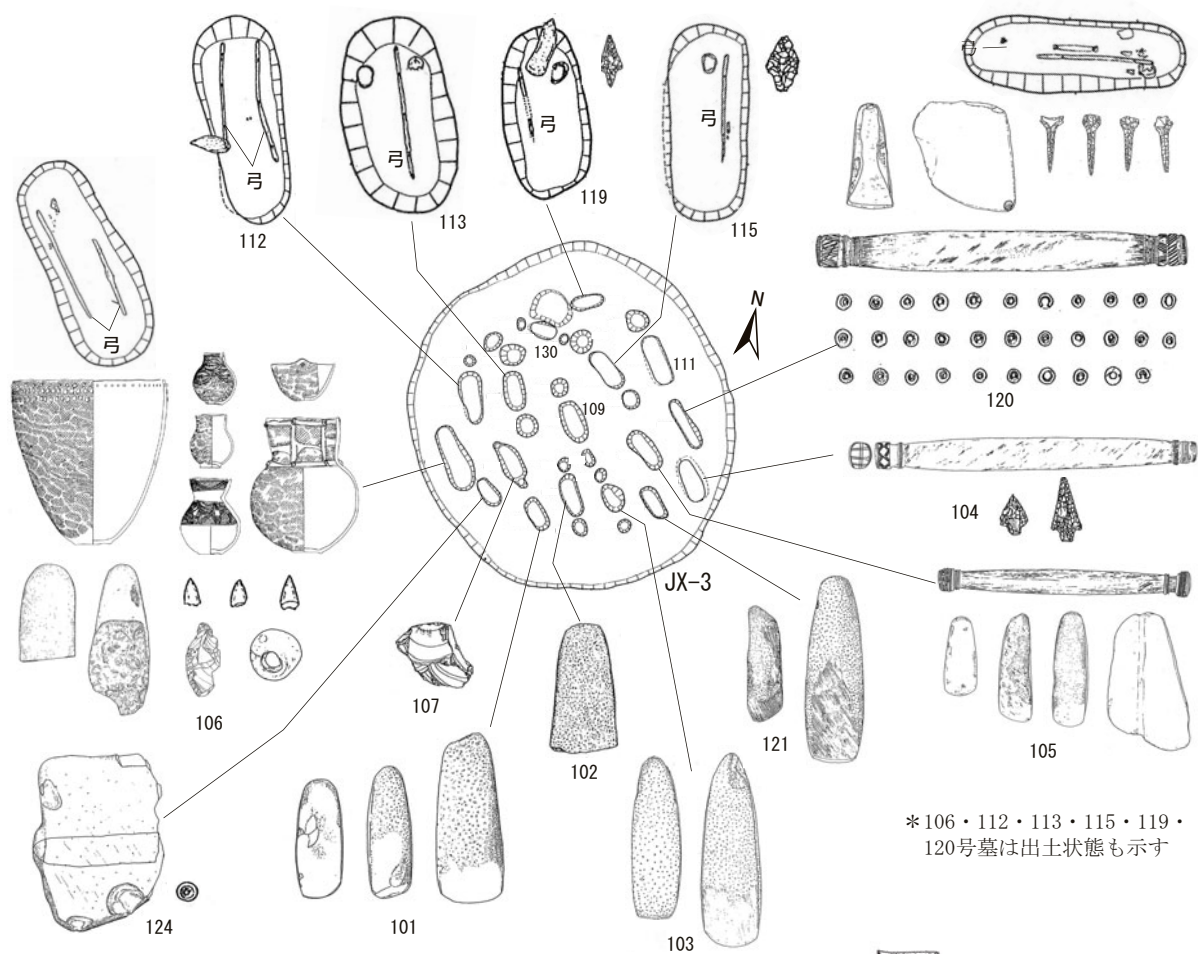
第Ⅲ-11図 美々4遺跡1976年度IIB層調査区全体図
(北海道教育委員会(1977c: 図67、79～82、84、89)から作成)

第Ⅲ-1表 美々4遺跡マウンド (M1～M7) の調査所見 (北海道教育委員会 1977bから作成)

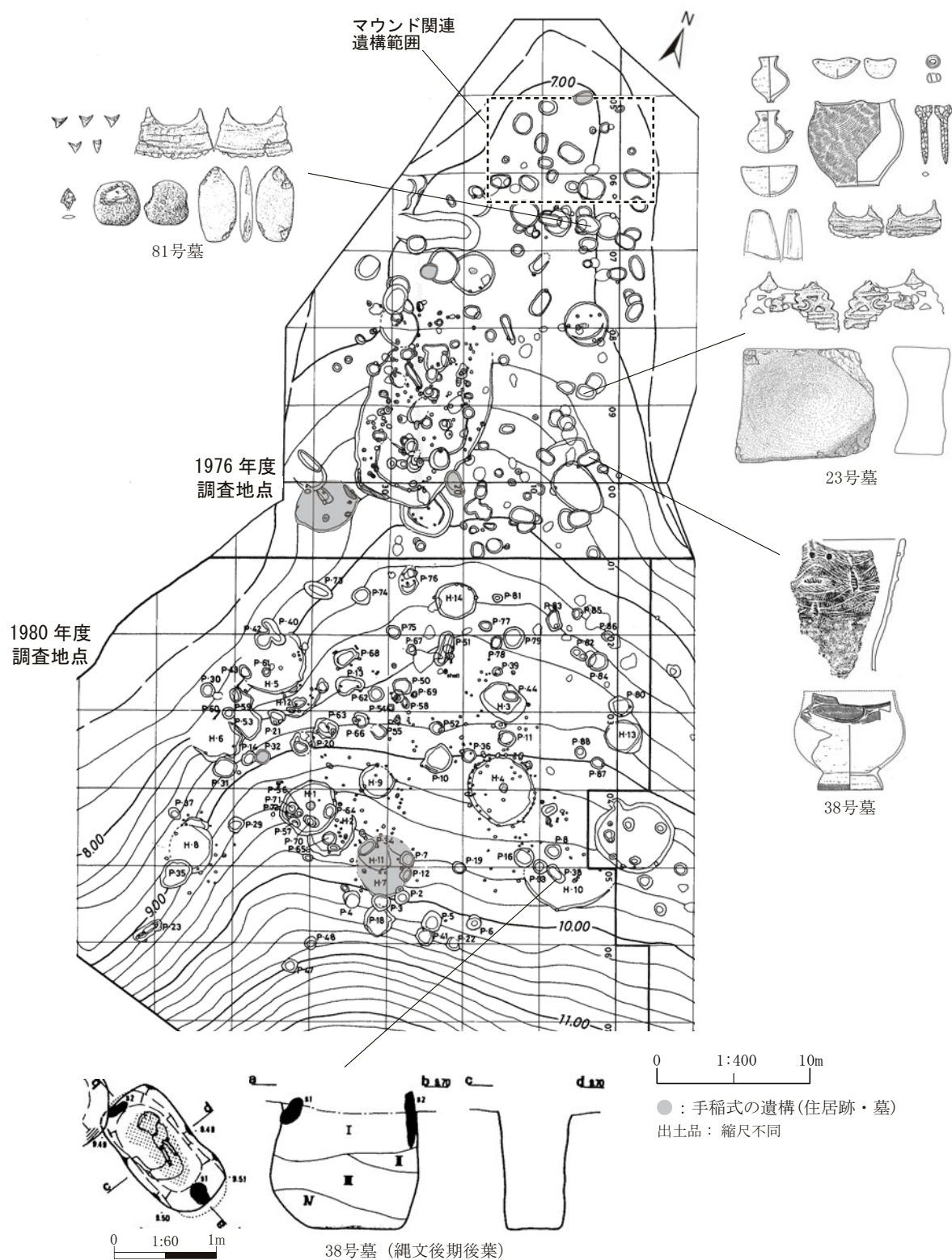
	調査所見	時期	備考
M1	中心部は調査区外で、人骨・遺物の出土なし	不明	下位にM5
M2	人骨1～2体分の痕跡確認	瘤付土器第IV段階並行期?	M5の真下
M3	M5中に挟在。頭骨で4体分の人骨確認。	瘤付土器第IV段階並行期	
M4	M5中に挟在。人骨の痕跡確認。	瘤付土器第IV段階～大洞B2式並行期?	椀状漆器片出土
M5	人骨の出土なし。112・170・185号墓などがマウンド上に設けられる	瘤付土器第IV段階～大洞B2式並行期	グリッドE1-65-87マウンド下面で動物形土製品出土
M6	複数遺体の埋葬	瘤付土器第IV段階～大洞B2式並行期?	グリッドE1-66-80に分布
M7	人骨の出土なし	瘤付土器第IV段階並行期	玉類はマウンド下の黒色土層から出土し、M7との共伴関係は不詳



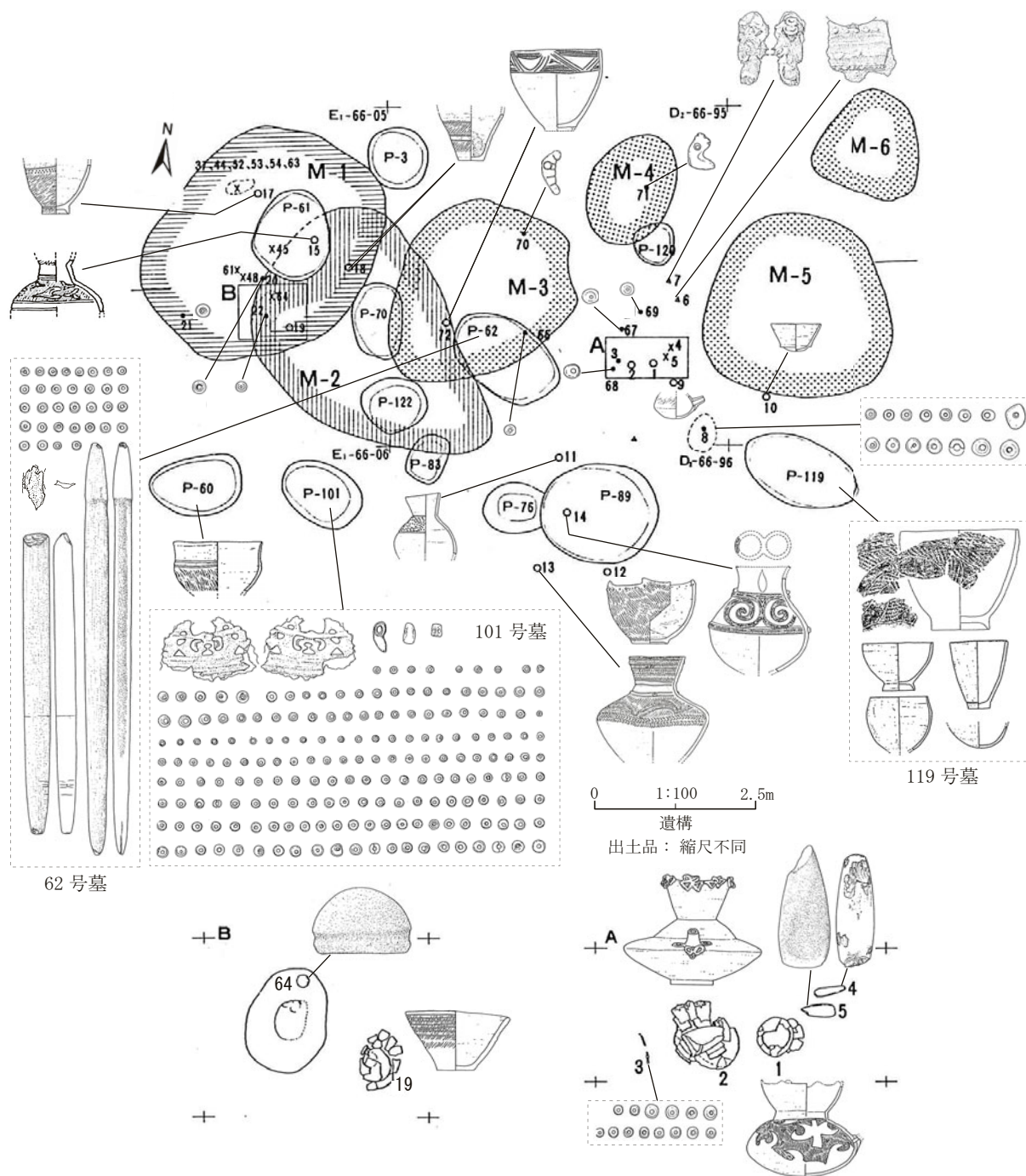
第Ⅲ-12図 美々4遺跡マウンド(M1~M5)と出土品(北海道教育委員会(1977c: 図98~100、103~105、109)から作成)※微細図枠B・Cは、平面図と位置合わせするとずれるため、おおよその位置に挿入している。



第Ⅲ-13図 美沢1遺跡JX3・4周堤墓、及び出土品
(北海道教育委員会 (1979b: 図7-17、20~27、30~36、38、39、42、45~48、50、55) から作成)



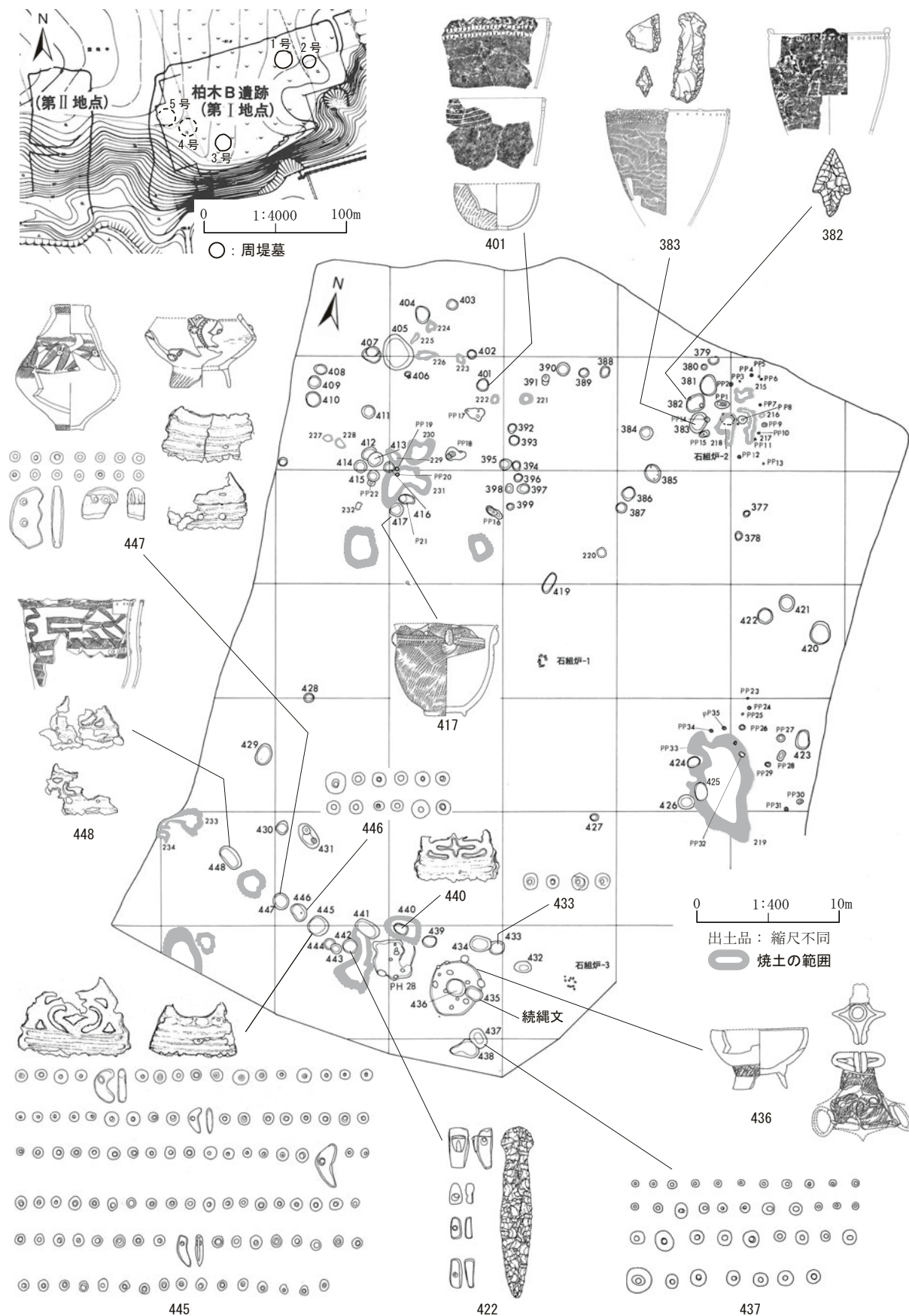
第Ⅲ-14図 美沢1遺跡1976・1980年度調査を中心とした遺構分布図、及び出土品（抜粋）
（北海道教育委員会（1977a：図25、26、30、1981b：図21、付図）から作成）



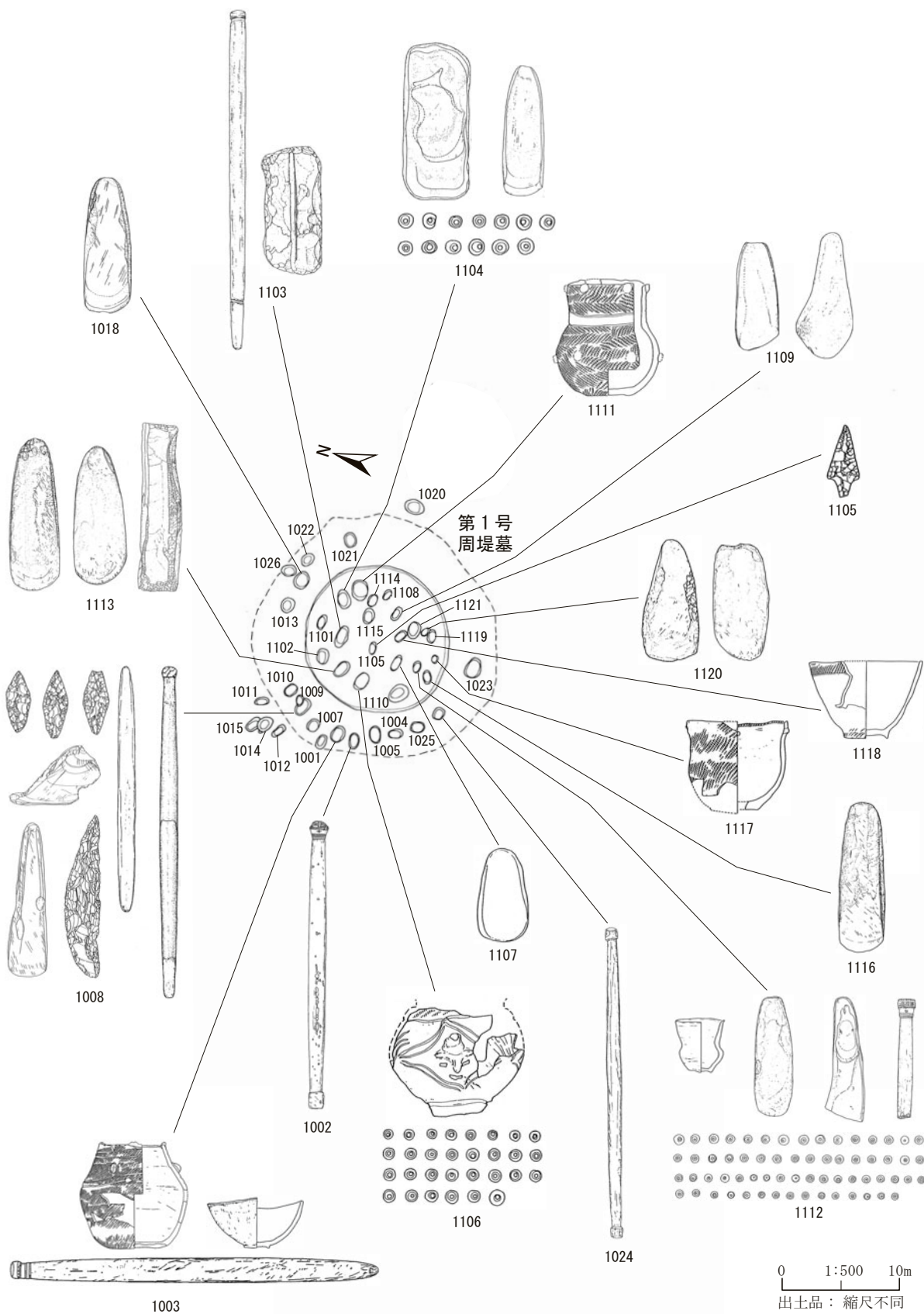
第Ⅲ-15図 美沢1遺跡マウンド関連遺構、及び出土品（抜粋）
（北海道教育委員会（1977b：図28、29、33、42～45）から作成）

第Ⅲ-2表 美沢1遺跡マウンド（M1～M6）の調査所見（北海道教育委員会 1977aから作成）

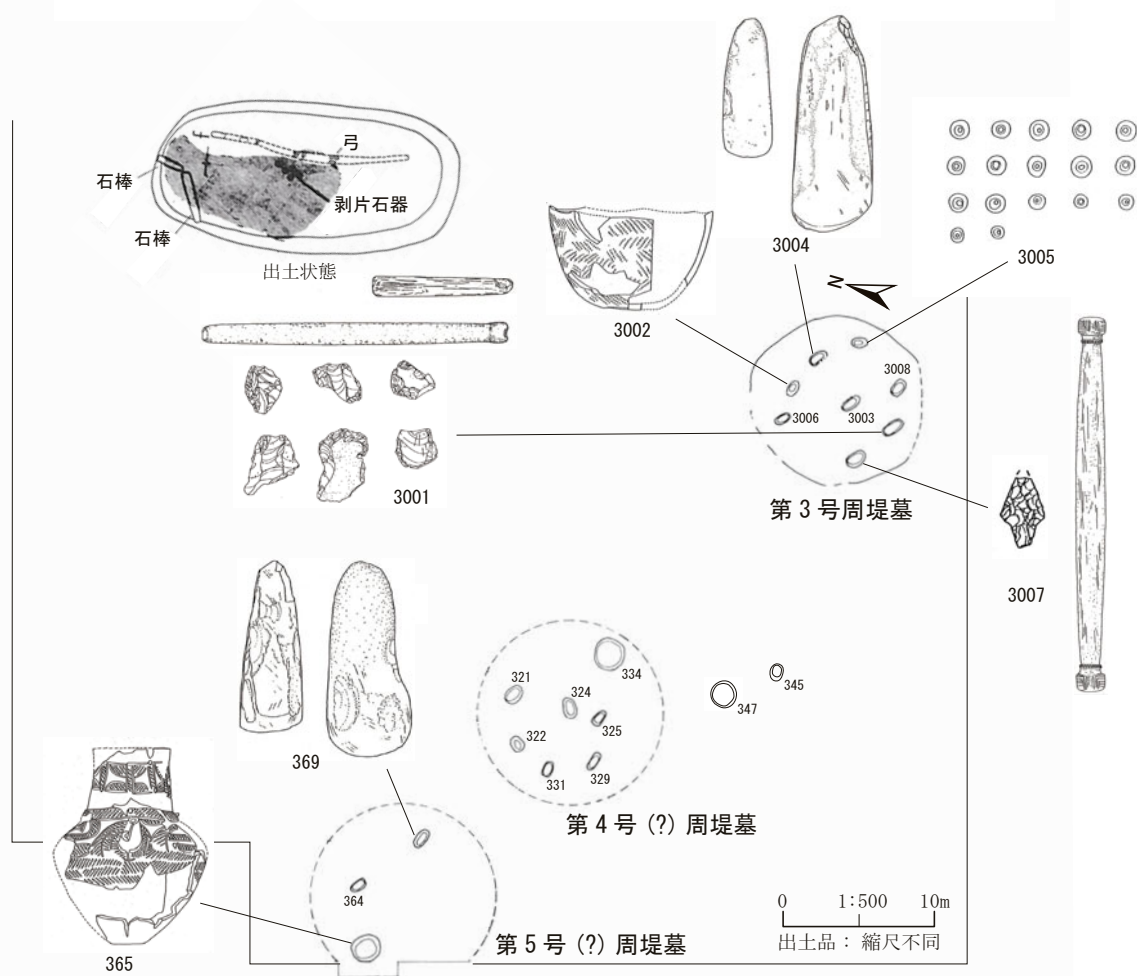
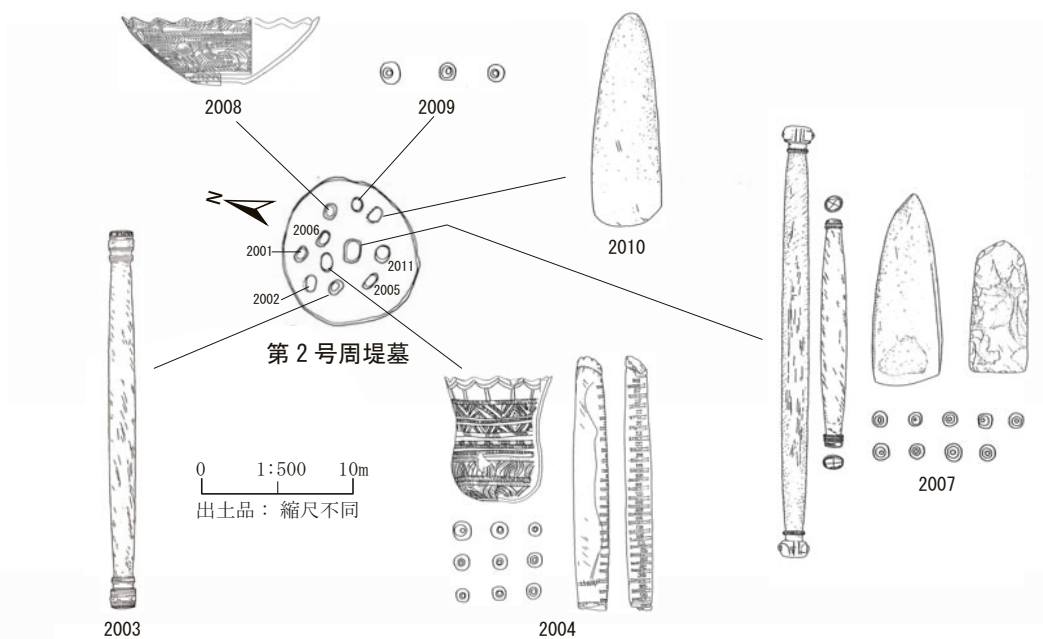
	調査所見	時期	備考
M1	61号墓周囲を覆う。61号墓の南側から頭骨出土。頭骨付近から玉類2点、鉢（No. 19）等出土	縄文後期後葉～晩期初頭？	
M2	70・122号墓覆う。遺物の出土なし。M1・3の下にもぐりこむ	不明	
M3	62号墓覆う。玉類2点、大洞B式高台付鉢（No. 72、62号墓への供献？）出土	大洞B式期	
M4	土坑・人骨なし。勾玉1点出土	不明	
M5	土坑・人骨なし。底部穿孔土器（No. 10）出土	不明	
M6	土坑・人骨なし	不明	水中埋没



第III-16図 柏木B遺跡の位置、及び第II地点の遺構配置図と出土品
(恵庭市教育委員会(1981: 図4、9、148、244、246、247、249、251、254～259、263、268)から作成)



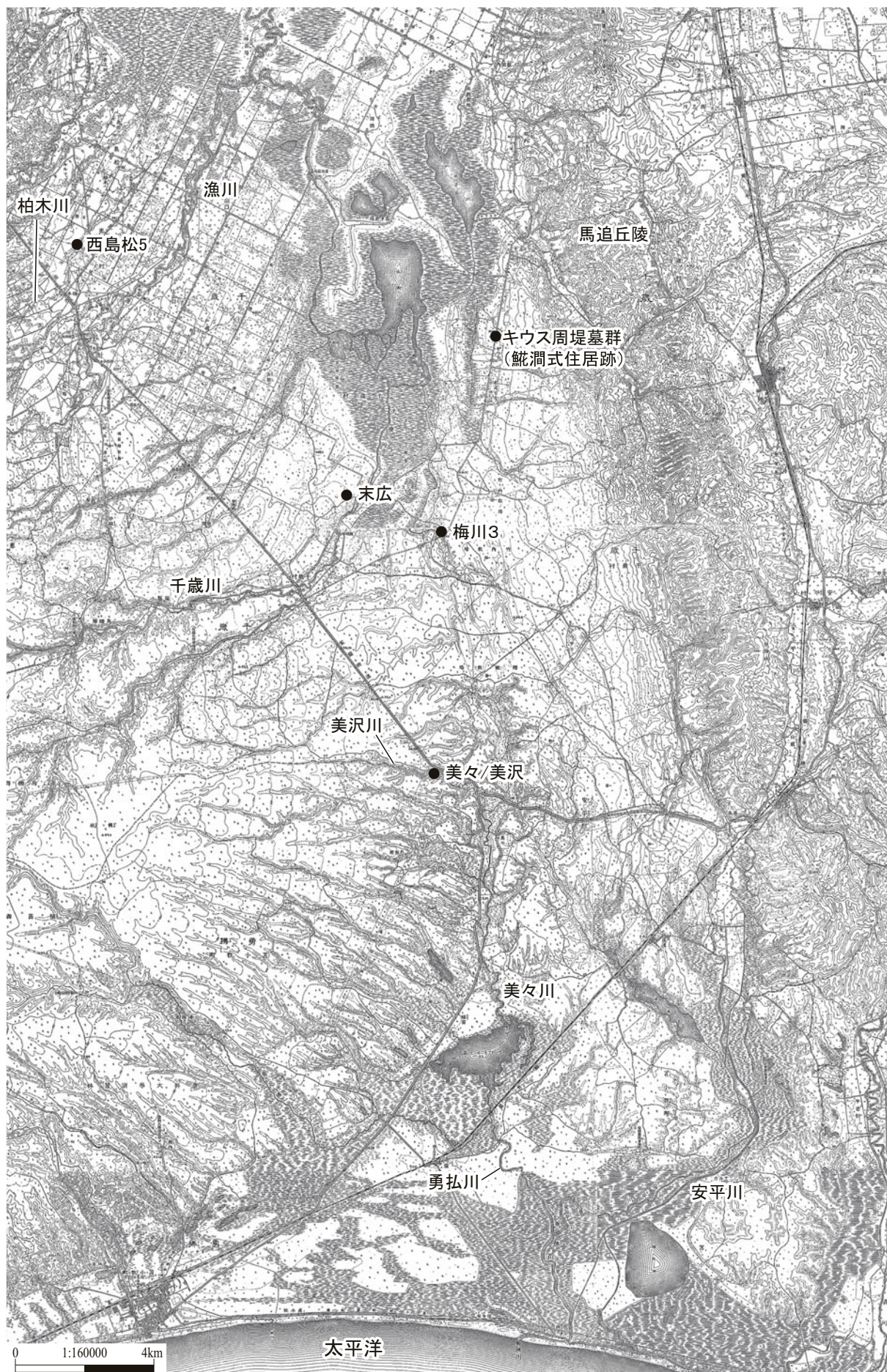
第Ⅲ-17図 柏木B遺跡第Ⅰ地点における縄文後期後葉の墓と出土品(1)
(恵庭市教育委員会 (1981: 図148、153、155、160、167、172、
177~181、183、185、187~189、192~194、197) から作成)



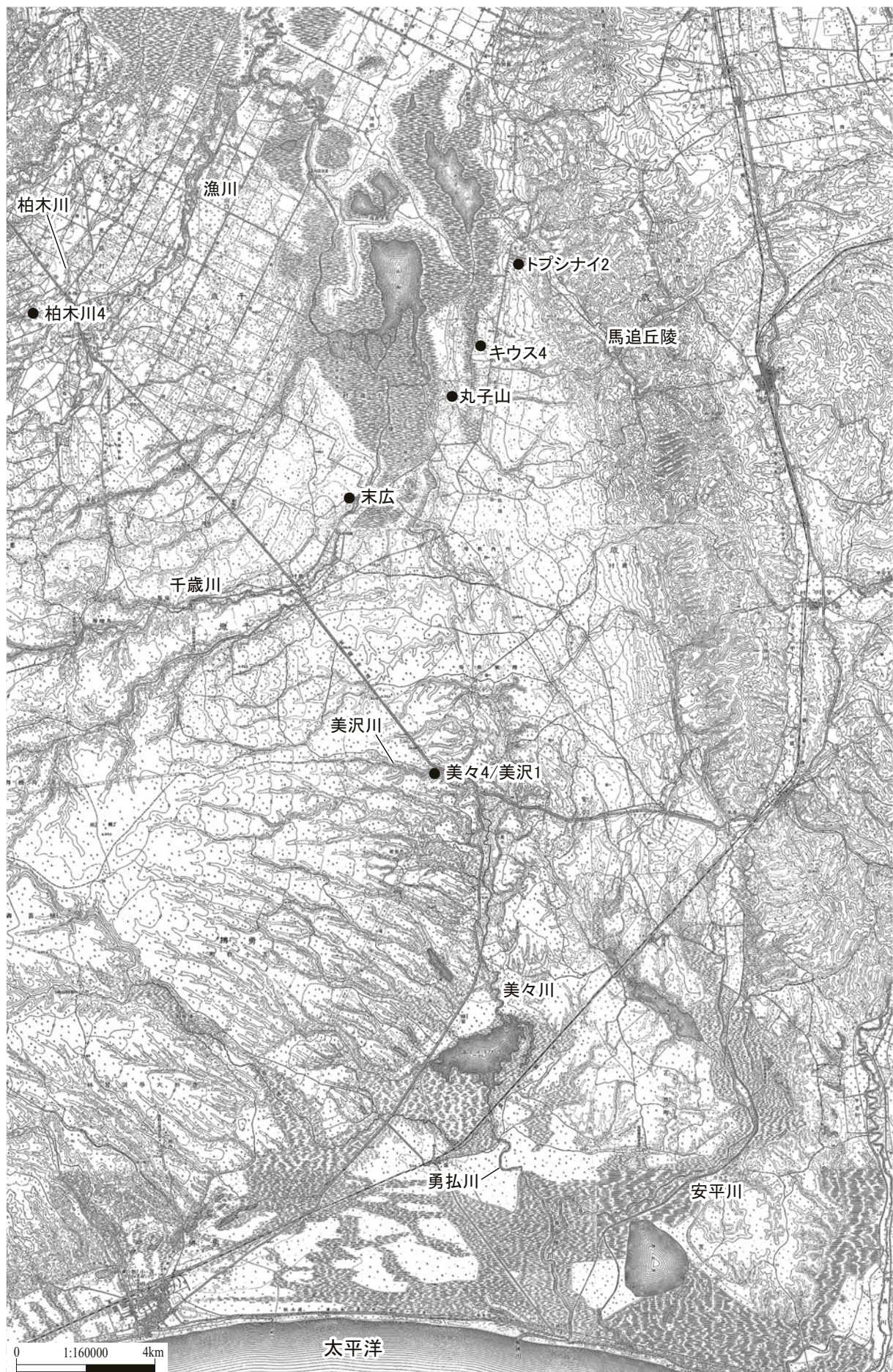
第Ⅲ-18図 柏木B遺跡第Ⅰ地点における縄文後期後葉の墓と出土品(2)
(恵庭市教育委員会 (1981: 図148、208、210、213、214、216、220、221、223、224、226、237、238) から作成)



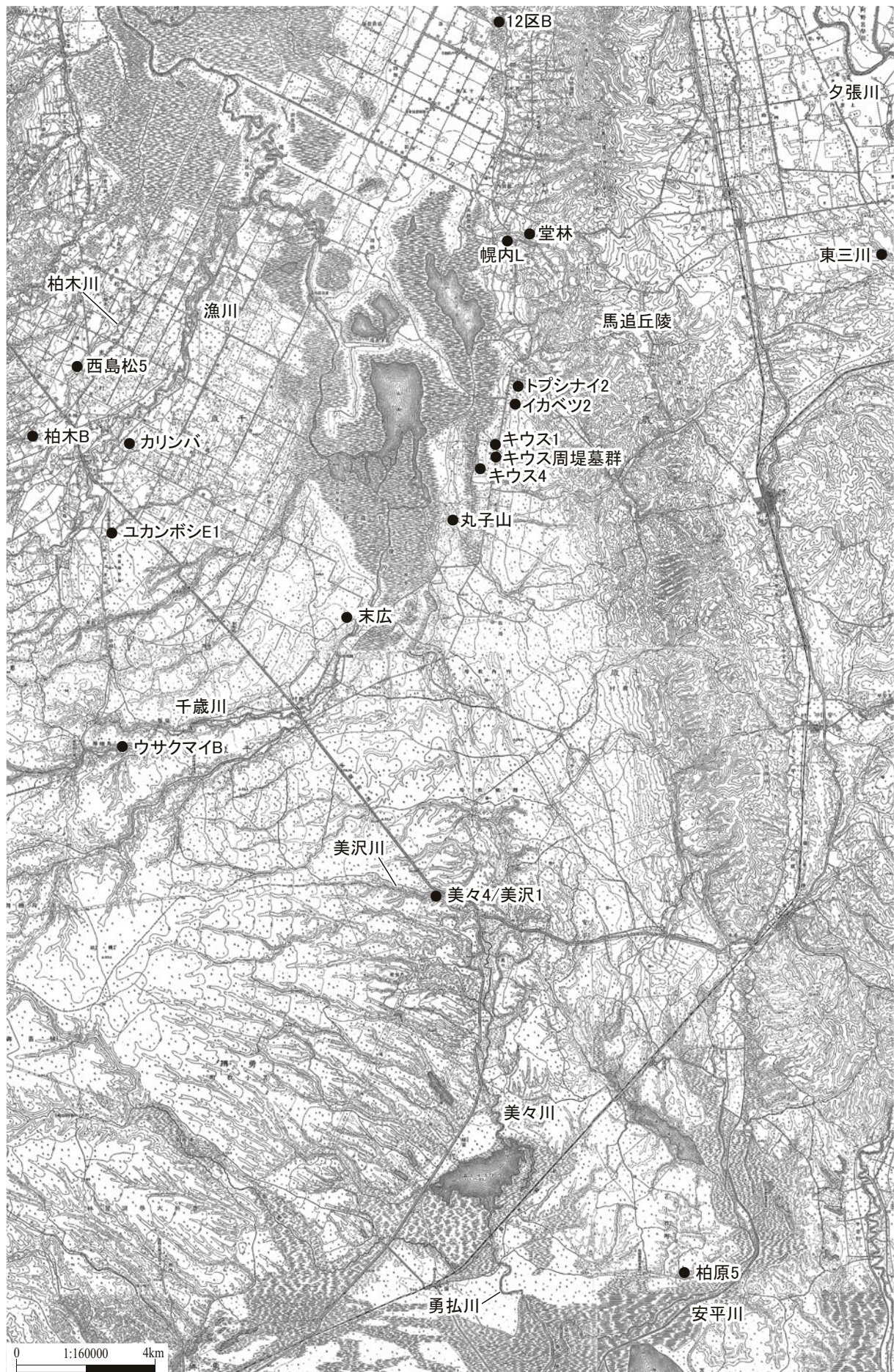
第IV-1図 手稲式期における主要遺跡分布（大日本帝国陸地測量部（1918a、b、c、d、1919、1920a、b、c、d、1921a、b、c、d、e；日本地図センター1994）から作成）



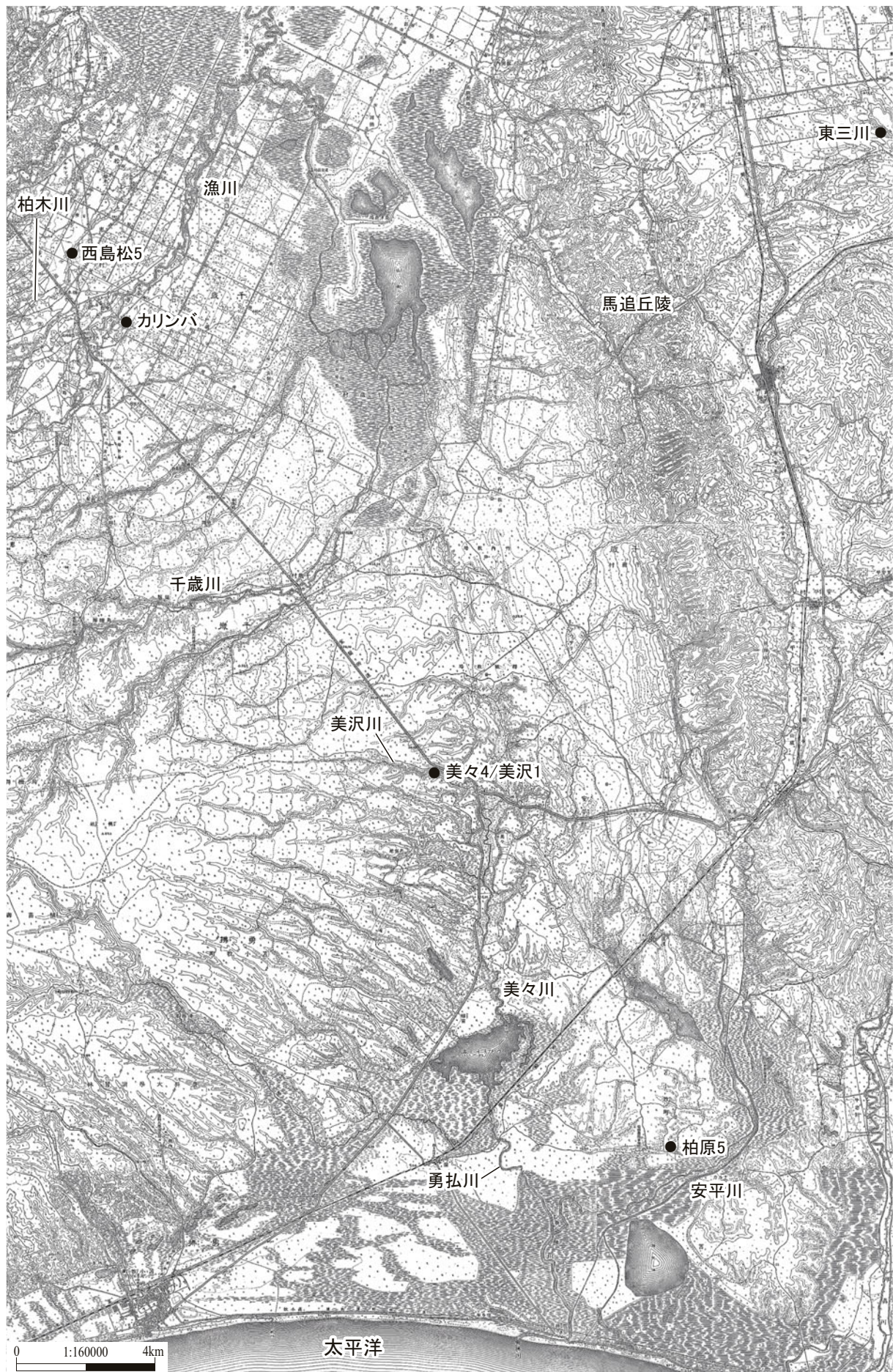
第IV-2図 鯰澗式期における主要遺跡分布
 (大日本帝国陸地測量部 (1918a、b、c、d、1919、1920a、b、c、d、1921a、b、c、d、e) から作成)



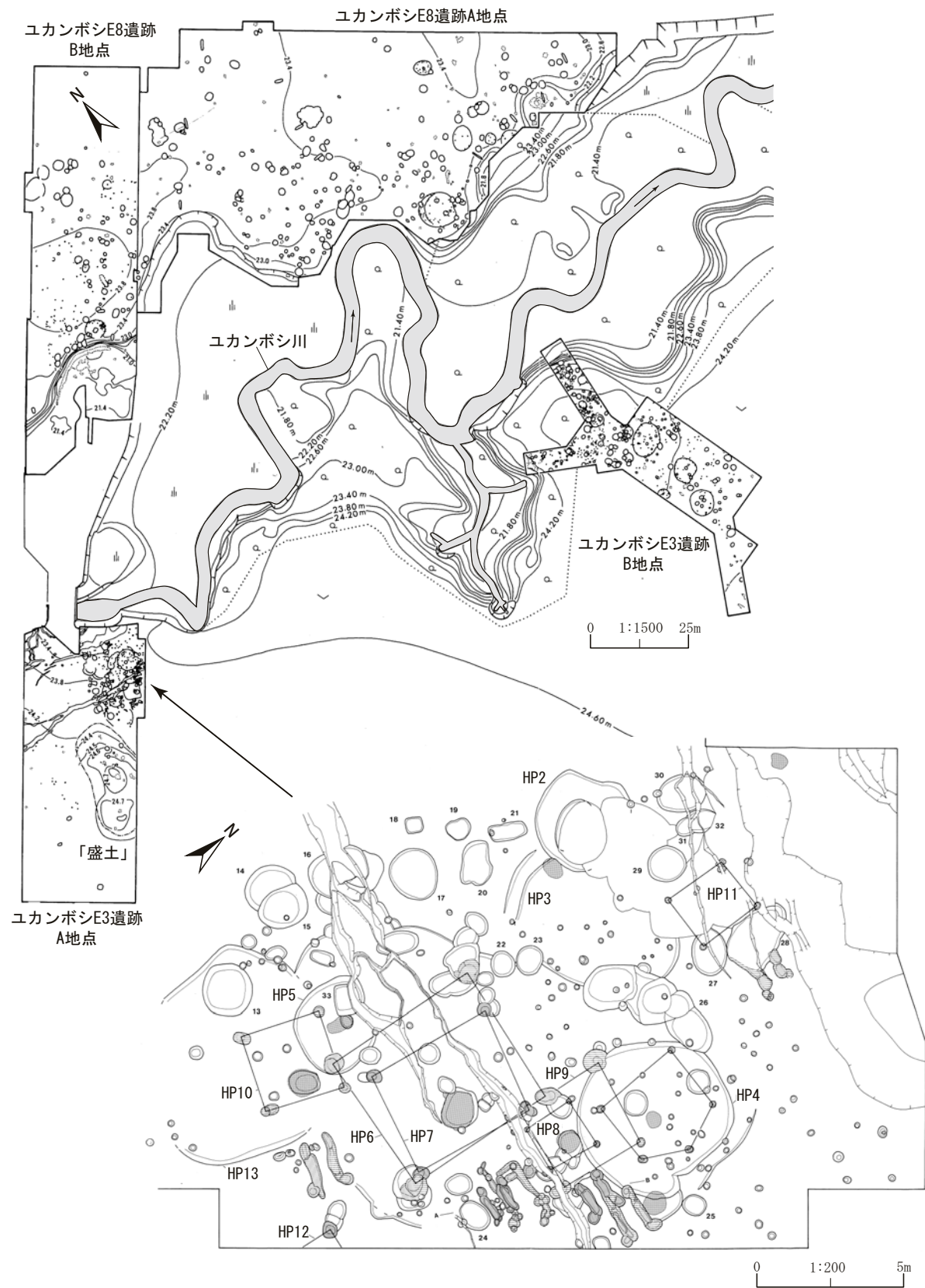
第IV-3図 堂林1・2式期における主要遺跡分布
 (大日本帝国陸地測量部 (1918a、b、c、d、1919、1920a、b、c、d、1921a、b、c、d、e) から作成)



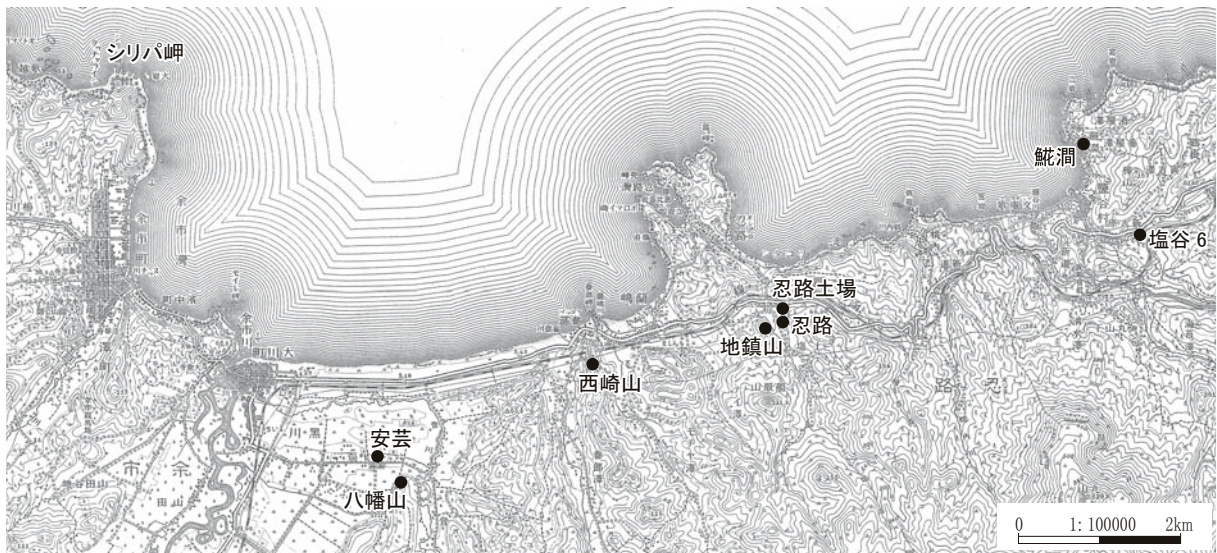
第IV-4図 堂林3式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期における主要遺跡分布
 (大日本帝国陸地測量部 (1918a、b、c、d、1919、1920a、b、c、d、1921a、b、c、d、e) から作成)



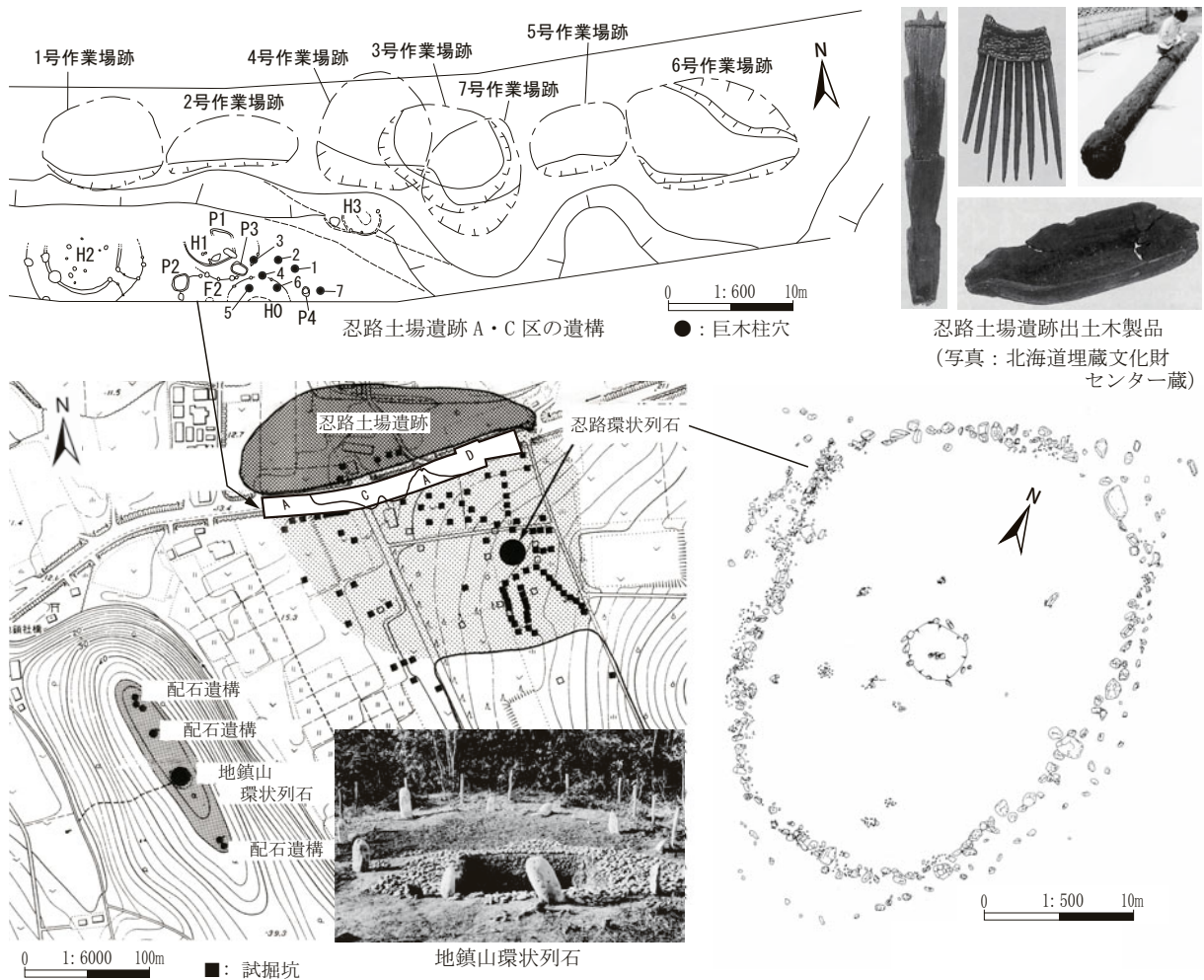
第IV-5図 瘤付土器第IV段階並行期における主要遺跡分布
 (大日本帝国陸地測量部 (1918a、b、c、d、1919、1920a、b、c、d、1921a、b、c、d、e) から作成)



第IV-6図 ユカンボシE3/E8遺跡全体図（恵庭市教育委員会（1992a：図3、1992b：図10）から作成）



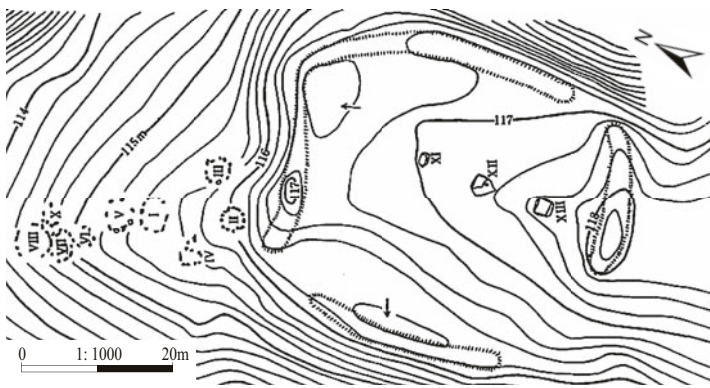
余市湾周囲における縄文後期中葉の主要遺跡分布



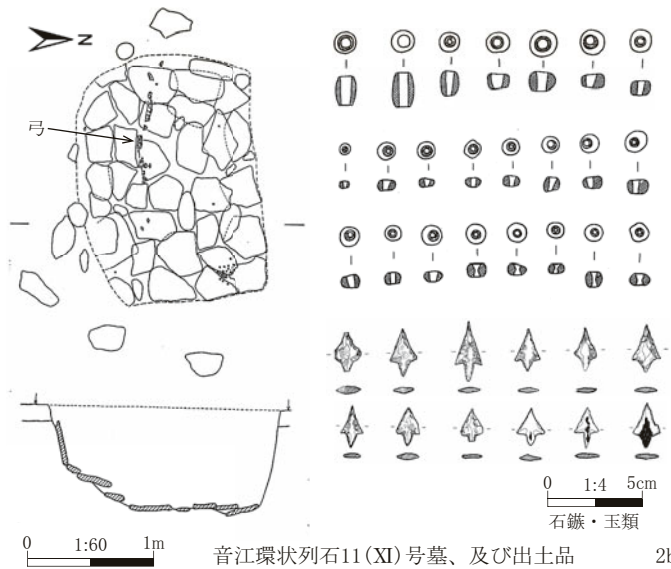
第IV-7図 余市湾周囲における縄文後期中葉の主要遺跡分布(上)、及び忍路土場遺跡周囲の遺構と出土品(下)
(小樽市教育委員会(2001: 図7、11)；駒井(1959: 図版29-2)；大日本帝国陸地測量部(1918)；
北海道埋蔵文化財センター(1989a: 図IV-2、V-1、V-13)、北海道埋蔵文化財センター(1989d: 図版8-41-349)、
三浦(2003: 写真16、25、46)から作成)



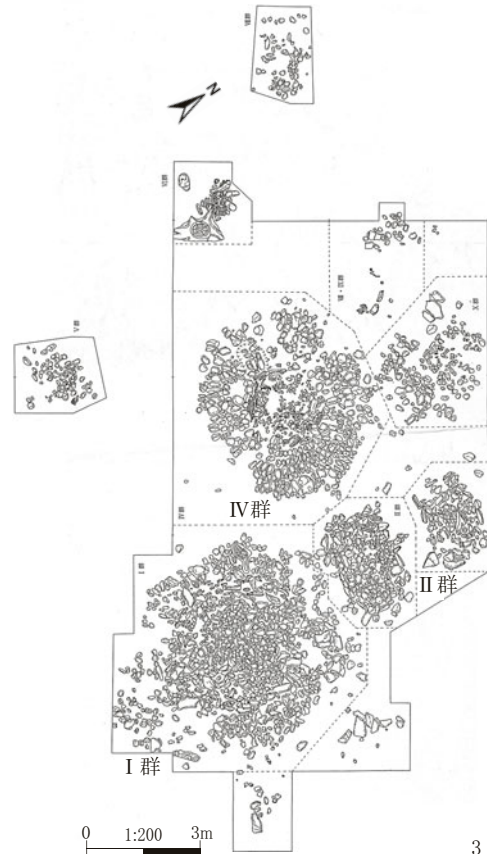
1



2a

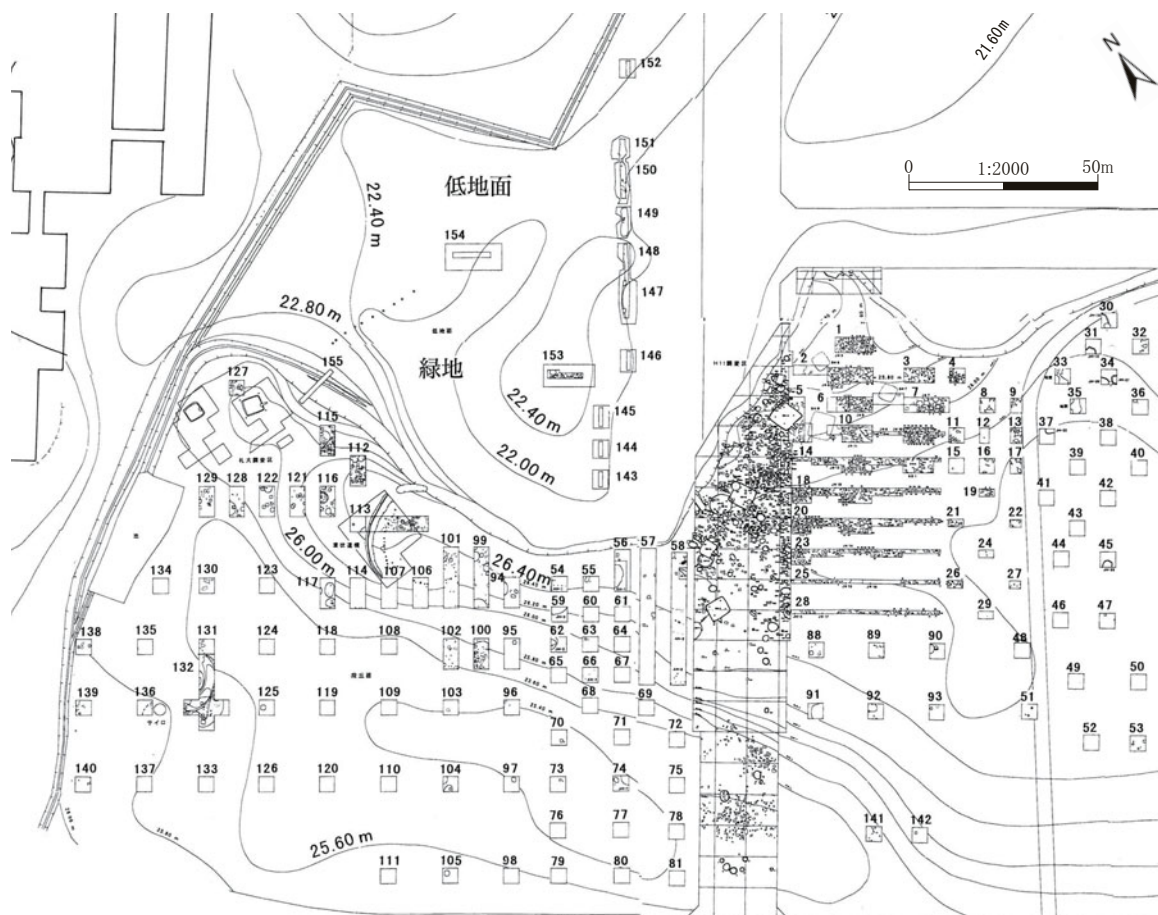


2b

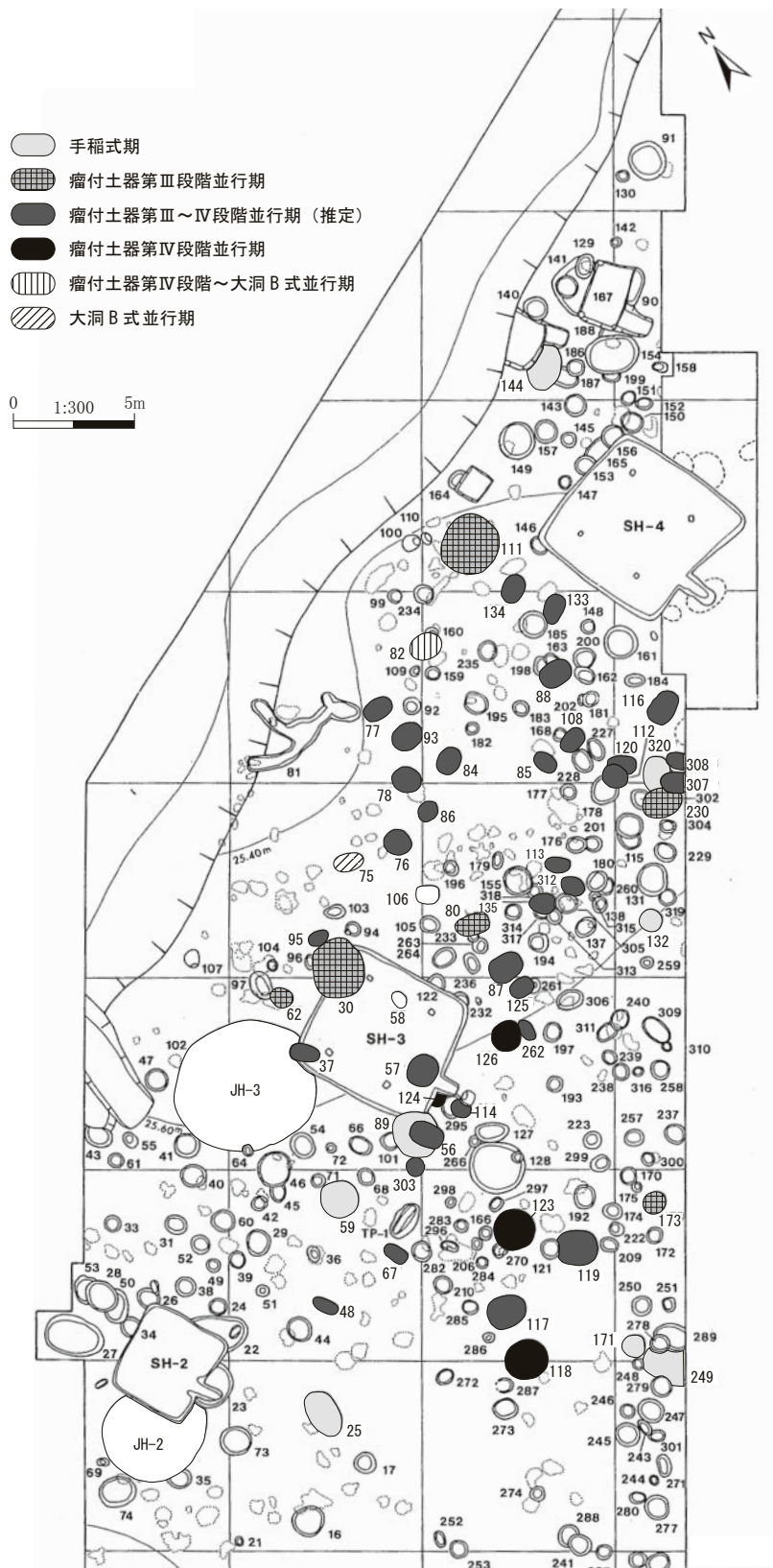


3

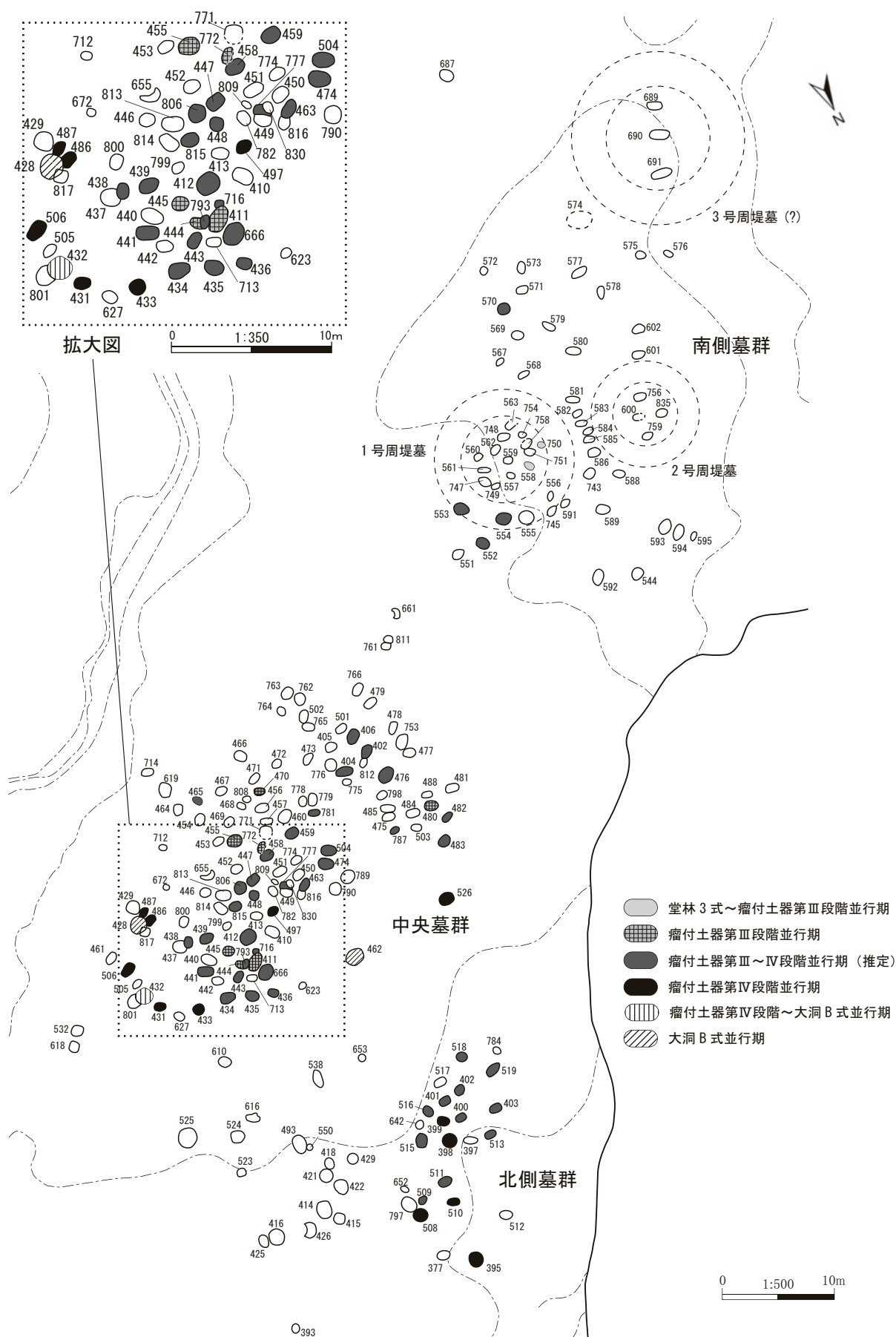
第IV-8図 石狩川上流域における縄文後期中葉の主要遺跡分布(1)と音江環状列石(2)、神居古潭5遺跡(3)
(旭川市教育委員会 (1990: 図 4)、駒井 (1959: 図 11、24、28)、内務省 (n. d.) から作成)



第IV-9図 カリンバ遺跡全体図
(恵庭市教育委員会(2004: 図5)から作成)



第IV-10図 カリンバ遺跡の墓を中心とする遺構
(恵庭市教育委員会(2003a: 図7)から作成)



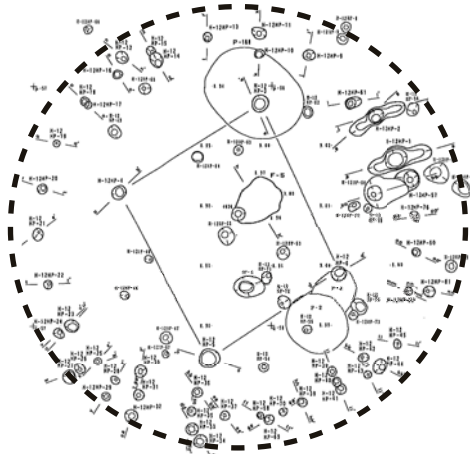
第IV-11図 西島松5遺跡における縄文後期後葉～晩期初頭の墓の分布
(北海道埋蔵文化財センター (2009b: 図379) から作成)



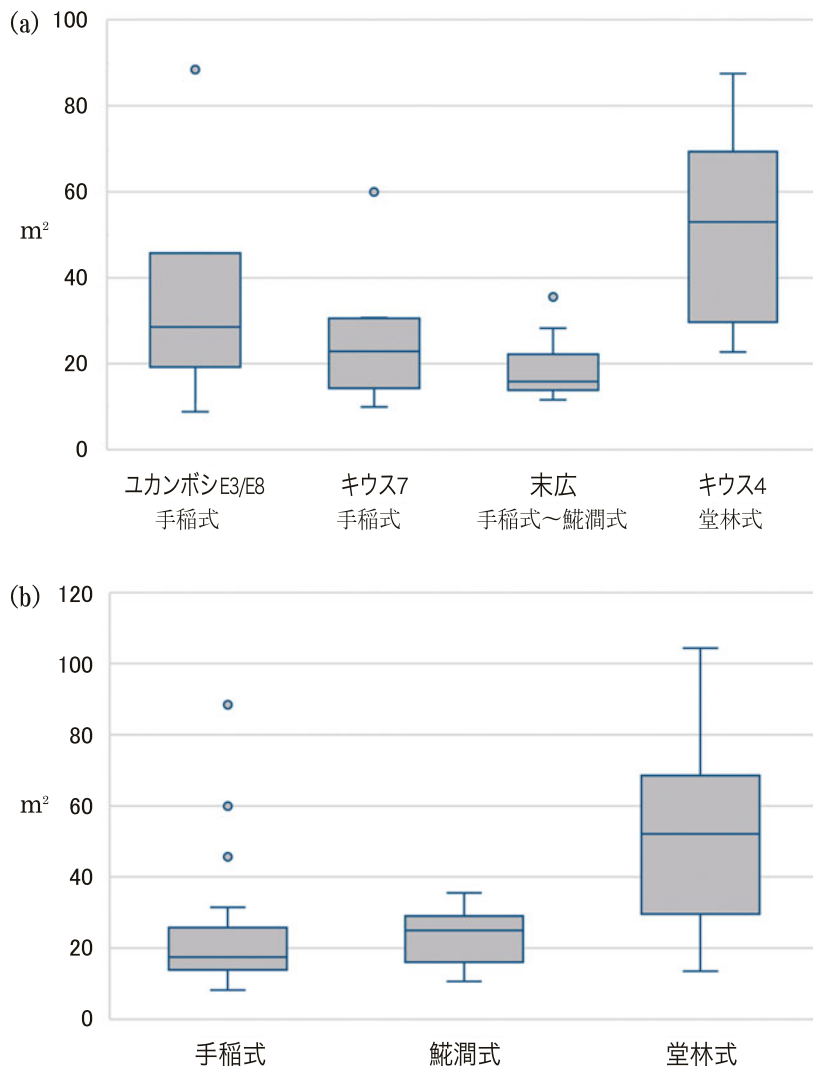
第IV-12図 空知川流域における縄文後期後葉の主要遺跡分布
(参謀本部 (n. d.) から作成)



第IV-13図 積丹半島周囲の縄文後期後葉の遺跡 (国土地理院電子国土Webから作成)



第V-1図 壁柱穴をもとに推定復元した住居跡輪郭（破線）からの住居跡面積計測方法（模式図）
（北海道埋蔵文化財センター（2001a：図V-9）から作成）



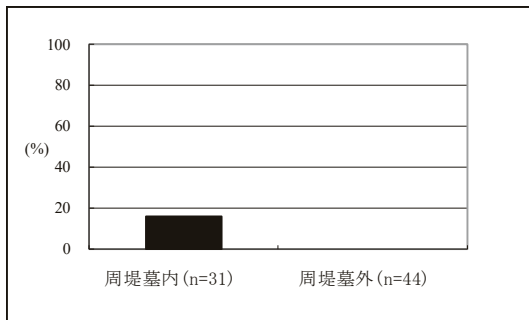
第V-2図 (a) 縄文後期の石狩低地帯における住居跡面積の遺跡間変異
（ユカンボシE3/E8: n = 7; キウス7: n = 8; 末広: n = 15; キウス4: n = 19）
(b) 縄文後期の石狩低地帯における住居跡面積の時期的変化
（手稲式: n = 35; 鯨潤式: n = 10; 堂林式: n = 27）

第V-1表 縄文後期中葉の住居跡面積データ一覧

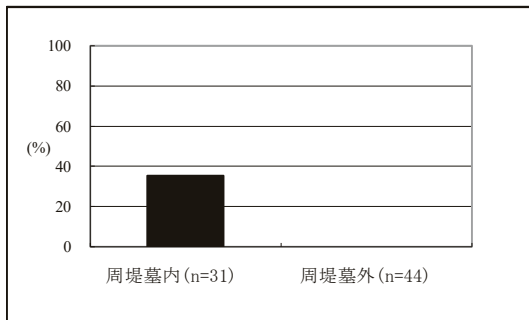
遺跡	遺構	面積 (m ²)	時期	時期詳細	出典
末広	H44	22.22	手稲式	手稲3式?	千歳市教育委員会 1981
末広	H1	18.01	手稲式～鯉潤式	細別不明	千歳市教育委員会 1982
末広	H6	24.34	手稲式	細別不明	千歳市教育委員会 1982
末広	H12	15.57	手稲式	細別不明	千歳市教育委員会 1982
末広	H21	14.0	手稲式	手稲2式?	千歳市教育委員会 1982
末広	H30	16.51	手稲式	手稲3式?	千歳市教育委員会 1982
末広	H32	22.0	鯉潤式	鯉潤式新	千歳市教育委員会 1982
末広	H33	15.84	手稲式	手稲2～3式	千歳市教育委員会 1982
末広	H34	15.17	鯉潤式?	鯉潤式古?	千歳市教育委員会 1982
末広	H37	35.49	鯉潤式	細別不明	千歳市教育委員会 1982
末広	H42	13.86	鯉潤式	細別不明	千歳市教育委員会 1982
末広	H47	11.6	手稲式	細別不明	千歳市教育委員会 1982
末広	H48	22.28	鯉潤式?	鯉潤式新?	千歳市教育委員会 1982
末広	H52	28.25	鯉潤式	鯉潤式新	千歳市教育委員会 1982
末広	H54	12.55	手稲式	細別不明	千歳市教育委員会 1985
末広	H56	13.49	手稲式	手稲2式	千歳市教育委員会 1985
末広	H57	15.28	手稲式	手稲3式?	千歳市教育委員会 1985
ユカンボシE3 B地点	H1	28.54	手稲式	手稲1式	恵庭市教育委員会編 1992a
ユカンボシE3 B地点	H2	31.49	手稲式	手稲1式	恵庭市教育委員会編 1992a
ユカンボシE3 B地点	H3	45.71	手稲式	手稲1式	恵庭市教育委員会編 1992a
ユカンボシE3 B地点	H9	8.87	手稲式	細別不明	恵庭市教育委員会編 1992a
ユカンボシE8 B地点	H1	19.25	手稲式	手稲1式?	恵庭市教育委員会編 1992b
ユカンボシE3 A地点	H4	21.85	手稲式	手稲1式?	恵庭市教育委員会編 1992b
ユカンボシE3 A地点	H6	推定88.4	手稲式	手稲1式?	恵庭市教育委員会編 1992b
梅川3	H2	15.08	手稲式	手稲1式?	千歳市教育委員会 1986
梅川3	H7	28.52	鯉潤式	鯉潤式	千歳市教育委員会 1986
祝梅川小野	VH16	12.24	手稲式	細別不明	北海道埋蔵文化財センター 2012a
富ヶ岡E	H1	18.89	手稲式	手稲1～2式	北海道住宅団地開発事務所 1971
西島松5	H39	35.07	手稲式～鯉潤式	手稲式～鯉潤式	北海道埋蔵文化財センター 2006
西島松5	H47	12.17	後期中葉	手稲式?	北海道埋蔵文化財センター 2006
西島松5	H55	13.26	手稲式～鯉潤式	手稲3式?	北海道埋蔵文化財センター 2006
西島松15	H21	17.5	手稲式	手稲1式	恵庭市教育委員会 1993
吉井の沢	H1	18.6	手稲式	手稲 2式	北海道埋蔵文化財センター 1982
N30	1号	15.93	手稲式?	手稲1式?	札幌市埋蔵文化財センター 1998
美々4	BH51	30.59	鯉潤式	鯉潤式古?	北海道教育委員会 1981a
美々4	H1	60.06	手稲式	細別不明	北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	H2	18.32	手稲式	手稲 2～3式	北海道埋蔵文化財センター 1984
美々4	IIIH7	14.31	手稲式	手稲1式	北海道埋蔵文化財センター 1998a
美沢1	H2	8.21	手稲式	手稲3式	北海道教育委員会 1978a
美沢2	H1	14.07	後期	鯉潤式?	北海道教育委員会 1978b
美沢3	H1	16.8	鯉潤式	鯉潤式	北海道教育委員会 1977a
美沢3	H2	10.64	鯉潤式	鯉潤式	北海道埋蔵文化財センター 1989e
美沢3	H3	17.13	鯉潤式	鯉潤式	北海道埋蔵文化財センター 1989e
美沢3	H18	30.1	手稲式?	細別不明	北海道埋蔵文化財センター 1990
キウス	IIH4	28.0	鯉潤式	鯉潤式古	千歳市教育委員会 2019
キウス7	H25	9.97	手稲式	手稲1式	北海道埋蔵文化財センター 1997c
キウス7	LH31	59.91	手稲式	細別不明	北海道埋蔵文化財センター 1998b
キウス7	H4	30.08	手稲式	手稲2式	北海道埋蔵文化財センター 1996
キウス7	H5	19.92	手稲式	手稲3式	北海道埋蔵文化財センター 1996
キウス7	H7	25.79	手稲式	細別不明	北海道埋蔵文化財センター 1996
キウス7	H11	13.87	手稲式	手稲1式	北海道埋蔵文化財センター 1996
キウス7	H12	10.41	後期中葉	詳細不明	北海道埋蔵文化財センター 1996
キウス7	H13	15.63	手稲式	細別不明	北海道埋蔵文化財センター 1996
キウス7	H14	30.7	手稲式	手稲2式	北海道埋蔵文化財センター 1996
キウス5	LH102	14.27	後期中葉	手稲式?	北海道埋蔵文化財センター 1997b
キウス5	LH103	10.35	後期中葉	詳細不明	北海道埋蔵文化財センター 1997b
キウス5	LH106	14.65	後期中葉	手稲式?	北海道埋蔵文化財センター 1997b
キウス5	LH107	10.62	手稲式	手稲2式?	北海道埋蔵文化財センター 1997b

第V-2表 縄文後期後葉の住居跡面積データ一覧

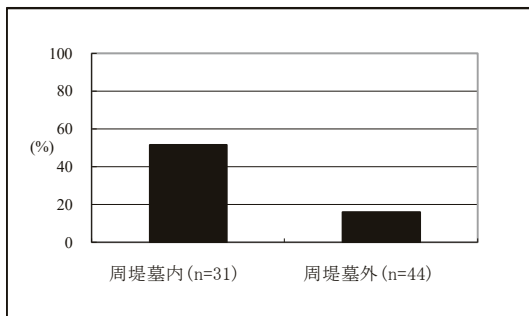
遺跡	遺構	面積 (m ²)	時期	出典
ユカンボシE8	H1	66.11	堂林2～3式	恵庭市教育委員会 1989
美沢1	FH16	27.06	堂林3～瘤付土器第III段階並行期	北海道教育委員会 1978a
美沢1	FH17	13.5	堂林3式	北海道教育委員会 1978a
美沢1	FH22	推定104.33	堂林3式	北海道教育委員会 1978a
美沢1	FH35	20.38	不明	北海道教育委員会 1978a
キウス1	平地住居	18.01	瘤付土器第III段階並行期	大場・石川 1967
キウス4	H1	87.42	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 1997d
キウス4	建物1	37.0	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001a
キウス4	建物2	55.42	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001a
キウス4	建物5	28.64	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001a
キウス4	建物15	58.87	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001a
キウス4	建物16	68.26	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001a
キウス4	建物17	75.91	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001a
キウス4	建物19	70.62	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001a
キウス4	建物24	69.32	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001a
キウス4	建物27	35.48	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001a
キウス4	建物29	29.32	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001a
キウス4	建物30	29.4	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001a
キウス4	建物33	45.98	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001a
キウス4	建物36	22.76	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001a
キウス4	建物65	48.64	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001a
キウス4	建物66	52.94	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001a
キウス4	建物8	65.87	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001b
キウス4	建物9	76.72	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001b
キウス4	建物16	29.66	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2001b
イカベツ2	H1	51.28	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2018
イカベツ2	H4	53.24	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2018
イカベツ2	H5	50.82	堂林式	北海道埋蔵文化財センター 2018



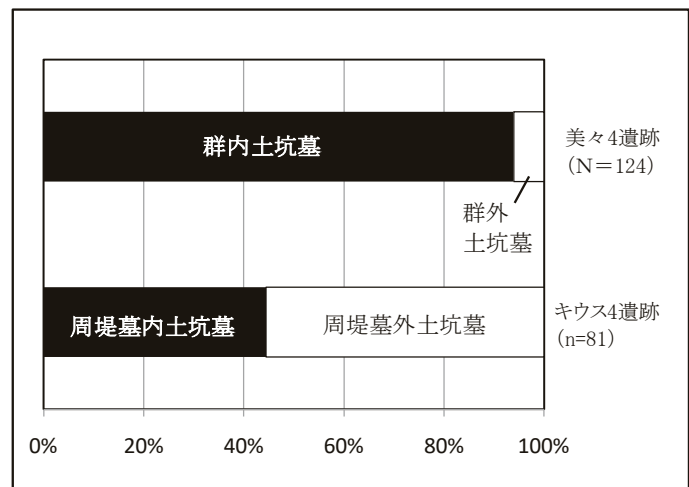
第VI-1図 キウス4遺跡の墓における副葬品の頻度



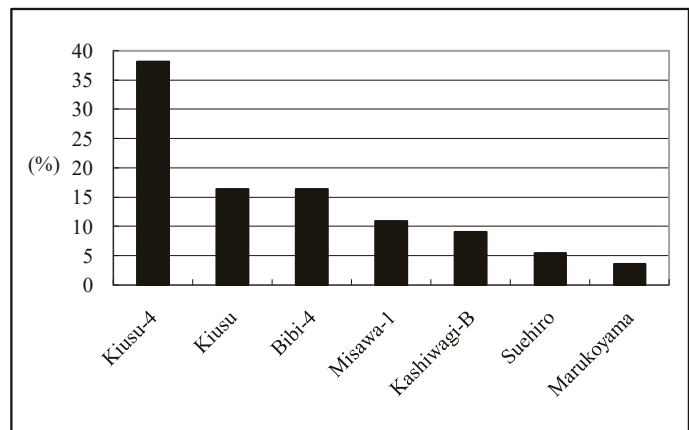
第VI-2図 キウス4遺跡の墓における墓標の頻度



第VI-3図 キウス4遺跡の墓における赤色顔料の頻度



第VI-4図 キウス4遺跡周堤墓内・外の土坑墓比率



第VI-5図 石狩低地帯における周堤墓の数
(n=55、データの出典：藤原 2003)

周堤墓の出現に関する考古学的研究

平成29年度～令和元年度 科学研究費助成事業
(基盤研究(C)) 研究成果報告書

2020年3月20日発行

著者 坂口 隆

発行 北海道大学アイヌ・先住民研究センター
〒060-0808 札幌市北区北8条西6丁目

印刷 北海道大学生生活協同組合印刷・情報サービス部
〒060-0808 札幌市北区北8条西8丁目